大学入試センター年報

昭和54年度

昭和55年11月

大学入試センター

大学入試センター年報

昭和54年度

昭和55年11月

各　位　殿

大学入試センター所長
加　藤　陸奥雄

大学入試センター年報（昭和54年度）の送付について

大学入試センターの昭和54年度事業の概要等を年報としてとりまとめましたので、ご参考までに送付します。

なお、お手数ですが、受領書を折り返し送付願います。

----------切り取り線----------

昭和　年　月　日

受　領　書

大学入試センター年報（昭和54年度）　　部

機関名

住　所

氏　名　　印

ま え が き

昭和55年度共通第１次学力試験（第２回）は、昭和55年１月に、各国公立大学と大学入試センターとが協力して実施し、無事に終了した。

この共通第１次学力試験の実施に当たり、大学入試センターは、試験問題の作成及び輸送、受験案内の作成、出願の受付け、受験票の発行、答案の採点・集計、成績の各大学あての提供等に関する業務を処理したが、その状況をとりまとめたので公表する。

当センターの研究部は、大学入学者選抜の改善充実に資するための調査研究を行っているが、その結果は別に発表したいと考えている。

この年報が、各大学における入学者選抜及び共通第１次学力試験の実施に関し、参考となれば幸いである。忌憚のない御意見と御叱正をお願いしたい。

目　　次

まえがき

Ⅰ　昭和54年度事業の概要 …… (1)

1　事業の概要 …… (1)

2　事業の経過 …… (3)

Ⅱ　昭和55年度共通第１次学力試験の実施状況 …… (7)

1　概　　況 …… (7)

2　前年度の実施結果の検討と昭和55年度の実施方法の決定 …… (8)

3　出願の受理 …… (10)

4　共通第１次学力試験の実施 …… (14)

5　共通第１次学力試験の結果 …… (18)

6　おわりに …… (22)

Ⅲ　昭和55年度共通第１次学力試験の試験問題に関する意見・評価 …… (27)

1　試験問題作成の方法等 …… (27)

2　試験問題に対する意見・評価 …… (27)

国　　語 …… (29)

社　　会 …… (54)

倫理・社会 …… (54)

政治・経済 …… (71)

日本史 …… (89)

世界史 …… (103)

地　　理 …… (117)

数　　学 …… (133)

理　　科 …… (147)

物　　理 …… (147)

化　　学……（163）
生　　物……（178）
地　　学……（196）
基礎理科……（212）
外国語……（225）
英　　語……（225）
ドイツ語……（238）
フランス語……（247）

Ⅳ　資　　料

1　大学入学者選抜実施要項……（257）
2　昭和55年度大学入学者選抜共通第１次学力試験実施要項……（282）
3　昭和55年度大学入学者選抜共通第１次学力試験受験案内（抄）……（288）
4　昭和55年度大学入学者選抜共通第１次学力試験志願票……（310）
5　共通第１次学力試験の検定料納付書・領収証書等……（312）
6　確認はがき、修正はがき……（313）
7　昭和55年度共通第１次学力試験受験票……（314）
8　昭和55年度大学入学者選抜共通第１次学力試験受験者心得……（316）
9　昭和55年度共通第１次学力試験都道府県別志願者数・受験者数・試験場数……（320）
10　昭和55年度共通第１次学力試験試験場一覧……（322）
11　昭和55年度共通第１次学力試験国公立大学別志望状況……（338）
12　昭和55年度国公立大学の入学者選抜実施状況……（356）

Ⅰ　昭和54年度事業の概要

Ⅰ　昭和54年度事業の概要

1　事業の概要

昭和54年度において大学入試センターは、各国公立大学と協力し、昭和55年度共通第１次学力試験の実施に関する業務を処理したほか、新たに高等学校の学習指導要領の改訂に伴う昭和60年度以降の共通第１次学力試験のあり方について調査研究をはじめた。

(1)　昭和55年度共通第１次学力試験の実施

この試験の実施の経過及びその結果は、次項Ⅱに記載するとおりである。

(2)　昭和60年度以降の共通第１次学力試験に関する検討

高等学校の学習指導要領が昭和57年度から改訂されることとなり、それにのっとって教育を受けた生徒が大学を志願する昭和60年度以降の大学入試のあり方について、検討を行う必要が生じてきた。特に共通第１次学力試験は、高等学校学習指導要領に準拠して行うことを趣旨としているので、この試験をどのように実施するかが大きな課題となっている。

国立大学協会は、昭和54年11月の総会で、共通第１次学力試験を含め昭和60年度以降の大学入学者選抜の方法等について、昭和57年秋までに最終的な結論を出すことを目途に検討を始めることとし、このため第２常置委員会に「入試教科目改訂専門委員会」を設置した。

また、同協会は、大学入試センターに対しても、専門的立場から共通第１次学力試験のあり方に関する事項等について調査研究を行うことを要請した。大学入試センターが行う調査研究は、国立大学協会の委員会に対し専門委員会としての立場から行われることが期待されるものであり、その調査研究の経過等については、国立大学協会の委員会に逐次報告すること、さらに、両者の連絡を緊密にするため、国立大学協会の委員会の委員の約半数は大学入試センターでの検討にも加わるものとされた。

この要請を受けて、大学入試センターは、「試験教科目等調査研究委員会」を設置し、昭和60年度以降の共通第１次学力試験の教科・科目に関する事項、実施方法の改訂の必要性に関する事項等について調査研究を行うこととした。

この委員会の構成等は、次のとおりである。

① 委員の数は、国立大学協会の入試教科目改訂専門委員会の約半数を加えて25人以内とする。

② 委員の任期は、国立大学協会側の委員と同様、昭和58年３月までとする（他の専門委員会では２年）。

③ 委員会の長は、大学入試センターの所長とする。

④ 委員には、大学入試センターの運営協議員、実施方法専門委員会委員及び教科専門委員会委員も各若干名加える。

⑤ 公立大学側の意思を反映させるため、公立大学協会の推薦する者２名を臨時委員として加える。

委員会は、昭和55年１月29日に第１回の会議を開き、年度内に３回の会議を開催した。委員会では、今後、高等学校の教育課程に関する学識経験者から意見を聞くなど、年間10～12回程度会議を開き、検討を進める予定としている。

(3) 昭和54年度の大学入試センターの定員及び予算

上記の事業を実施するため、昭和54年度においては、次の定員の措置及び予算の計上が行われた。

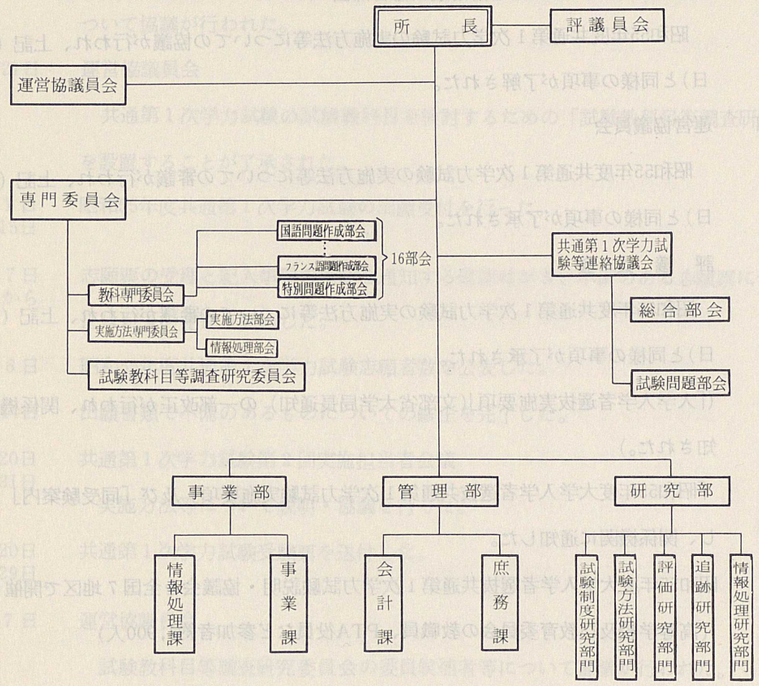
○ 教職員定員　78人（所長１人、教員８人、事務技術系職員69人、昭和54年度増員10人）

○ 予算（当初予算）　管理運営費　　８億84百万円

事　業　費　　28億35百万円（うち各大学分８億46百万円）

計　　37億19百万円

機　構　図



2　事業の経過

4月６日　（国立大学協会第２常置委員会）

昭和55年度共通第１次学力試験の実施方法について審議が行われ、

① 実施期日、試験教科目等基本的な事項については、前年度のとおりとする。

② 高等学校既卒業者の出願書類の提出方法を改める。

③ 追試験会場を16会場から７会場とする。

④ 正解の発表は、全試験終了後一括して行う。

⑤ 各大学の学部・学科等の内容、特色を紹介するガイドブックを大学入試センターが中心となって作成する。

ことなどが了解された。

4月17日　「昭和55年度大学進学希望者数調査」を各高等学校長に依頼した。

4月18日　共通第1次学力試験等連絡協議会総合部会

昭和55年度共通第1次学力試験の実施方法等についての協議が行われ、上記（4月6日）と同様の事項が了解された。

4月20日　運営協議員会

昭和55年度共通第1次学力試験の実施方法等についての審議が行われ、上記（4月6日）と同様の事項が了承された。

5月24日　評　議　員　会

昭和55年度共通第1次学力試験の実施方法等についての審議が行われ、上記（4月6日）と同様の事項が了承された。

6月11日　（「大学入学者選抜実施要項」（文部省大学局長通知）の一部改正が行われ、関係機関に通知された。）

6月13日　「昭和55年度大学入学者選抜共通第1次学力試験実施要項」及び「同受験案内」を公表し、関係機関に通知した。

6月15日～7月5日　昭和55年度大学入学者選抜共通第1次学力試験説明・協議会を全国7地区で開催した。（高等学校及び教育委員会の教職員、PTA役員など参加者約4,900人）

6月20日　各国公立大学が志願者に対し「受験案内」の交付を開始した。

7月10日～11日　共通第1次学力試験第1回実施担当者会議

昭和55年度共通第1次学力試験実施方法等について協議した。

7月25日～26日　教科専門委員会・実施方法専門委員会

高等学校学習指導要領の改訂の基本方針及び改訂の要点などについて協議が行われた。

7月31日まで　（各国公立大学が第2次試験の実施要項を発表した。）

8月21日　（文部省が昭和55年度国公立大学入学者選抜第2次試験の概況を公表した。）

9月8日～14日　昭和55年度共通第1次学力試験出願受付開始の政府広報を行った（総理府）。（中央紙5、ブロック紙3、地方紙50）

9月19日　国立大学協会、公立大学協会及び大学入試センターの編集による「昭和55年度版国公立大学ガイドブック」が刊行された。

9月19日　（国立大学協会第2常置委員会）

高等学校学習指導要領の改訂に伴う共通第1次学力試験のあり方等を検討することについて協議が行われた。

9月21日　運営協議員会

共通第1次学力試験の試験教科目を検討するための「試験教科目等調査研究委員会」を設置することが了承された。

10月1日～15日　昭和55年度共通第1次学力試験の出願受付を行った。

10月7日から　志願票の受理と記入事項の確認を通知する確認はがき、不備のある志願票についての修正はがきの発送を開始した。

11月6日　昭和55年度共通第1次学力試験志願者数を公表した。

11月14日　出願書類で不備のあるものについての修正を完了した。

11月20日～21日　共通第1次学力試験第2回実施担当者会議

実施方法等について説明・協議を行った。

11月20日～29日　共通第1次学力試験受験票を送付した。

12月7日　運営協議員会

試験教科目等調査研究委員会の委員候補者等について審議が行われた。

12月10日　昭和55年度国公立大学別志望状況を公表した。

昭和55年

1月7日　各大学との電話ファクスの交信テストを行った。

1月13日～14日　共通第1次学力試験本試験を実施し、全試験終了後、正解を公表した。

1月19日～20日　共通第1次学力試験追試験を実施した。

1月29日　試験教科目等調査研究委員会（第1回）

今後の調査研究の進め方等についての協議が行われた。

2月5日　本試験の科目別平均点、標準偏差、最高点、最低点及び得点分布概略図を公表した。

共通第1次学力試験試験問題についての意見等の提出方を各関係団体に依頼した。

2月9日～15日　（各国立大学及びほとんどの公立大学が第2次試験出願受付を開始した。）

2月12日 ～13日	共通第1次学力試験等連絡協議会試験問題部会 共通第1次学力試験試験問題の内容、程度等についての協議が行われた。
2月13日 から	各国立大学からの請求に基づき成績提供を開始した。
2月13日 ～15日	（文部省が昭和55年度国公立大学入学志願状況を公表した。）
2月27日	（文部省が昭和55年度国公立大学入学者選抜実施状況を公表した。）
3月4日～	（各国立大学及びほとんどの公立大学が第2次試験を実施した。）
3月5日	追試験の社会「政治・経済」の正解の訂正を行った。
3月13日	共通第1次学力試験等連絡協議会総合部会 昭和55年度共通第1次学力試験実施結果及び昭和56年度共通第1次学力試験の実施方法等についての協議が行われた。
3月20日	（各国立大学及びほとんどの公立大学が合格者を発表した。）
3月21日 ～29日	（一部の国公立大学が第2次募集出願受付を行った。）
3月26日 から	（一部の国公立大学が第2次募集を実施した。）
3月29日	（文部省が昭和55年度国公立大学入学者選抜第2次募集志願状況を公表した。）

Ⅱ　昭和55年度共通第一次学力試験の実施状況

Ⅱ　昭和55年度共通第１次学力試験の実施状況

昭和55年４月に国公立大学に入学を志願する者を対象とした第２回目の共通第１次学力試験（昭和55年度大学入学者選抜共通第１次学力試験）は、当初の計画のとおり、国立大学91校、公立大学33校及び大学入試センターの緊密な連携のもとに行われ、無事に終了した。その実施状況は次のとおりである。

１　概　　況

(1) 志 願 者　　349,566人（前年度 341,875人）

(2) 受 験 者　　333,212人（前年度 327,427人）

本 試 験　333,026人（前年度 327,140人）　272試験場

追 試 験　186人（前年度 287人）　7試験場

欠 席 者　16,354人（欠席率 4.68％）（前年度 14,448人 4.23％）

(3) 平 均 点（本試験）　617.36点（前年度 636.07点）

標準偏差（本試験）　128.11点（前年度 134.28点）

最 高 点（本試験）　965点（前年度 972点）

最 低 点（本試験）　0点（前年度 0点）

試験教科・科目　国語、社会（２科目）、数学、理科（１～２科目）、外国語の計５教科（６～７科目）　１教科200点　計1,000点満点

(4) 日　　程

昭和54年６月20日～　各国公立大学で志願者に受験案内（志願票）を交布

10月１日～15日　共通第１次学力試験の出願受付

11月６日　志願状況を公表

12月10日　国公立大学別の志望状況を公表

昭和55年１月12日・13日　共通第１次学力試験の本試験を実施。正解を公表（13日）。

１月19日・20日　追試験を実施

２月５日　本試験の総得点及び科目別の平均点等を公表

2月9日～15日　各国公立大学が第2次試験の出願受付
3月4日～　　各国公立大学が第2次試験を実施

2　前年度の実施結果の検討と昭和55年度の実施方法の決定

(1)　前年度の実施結果の検討

第1回の共通第1次学力試験を取り入れた昨年度の国公立大学の入学者選抜方法については、最初のことでもあり、高等学校側をはじめ各方面から種々の意見や要望が寄せられた。それらは大勢としてはこの新しい方法を評価し、今後、これに必要な改善を加えつつ、より良いものに発展させていくことに期待を寄せていると考えられるものであったが、高等学校側からは、試験科目数を減らすこと、試験期日を繰り下げること、より適切な試験問題の作成に努めること、高等学校を既に卒業した者の出願方法の見直しを行うこと等の意見が寄せられた。

これらの意見等については、この試験の終了後、昭和54年2月から5月にかけて、大学入試センターの各種の会議や高等学校側との連絡協議会をはじめとして、国立大学協会や公立大学協会、更に文部省の入試改善会議において審議が重ねられた結果、共通第1次学力試験の教科・科目数、実施日程等の基本的な事項については、1回の実施だけで変更するべきものでなく、今後さらに経験を積み重ねつつ検討を続けるものとされた。

しかし、出願方法等技術的な問題については、実施の経験を生かして、できるだけの是正を図るべきであるとされ、大学入試センターでは昭和55年度の実施方法について、次のような改善措置を講ずることとした。

① 高等学校を既に卒業した者は、出願書類を出身の高等学校を経由することなく直接大学入試センターへ提出する。

② 志願者が出願書類を作成する段階での誤りを防ぐため、受験案内の記述、志願票の様式を改める。また、受験票の発行を円滑に行うため、大学入試センターは出願書類を受理した段階でその記載事項をはがきで各志願者に通知し、確認を行う。

③ 解答用紙の受験番号欄のマーク誤り等を防ぐため、解答用紙の様式等を改める。

④ 志願者の進路選択の資料とするため、各国公立大学の学部・学科等の内容、特色を記載したガイドブックを大学入試センターが中心となり作成する。

以上の改正点のほかは、ほぼ前年度と同様の方法で行うこととした。

なお、前年度の共通第1次学力試験の試験問題については、高等学校の学習指導要領の範囲程度を超えていない、おおむね適切なものであるという大方の評価を得ていたが、大学入試センターは、試験後各教科・科目ごとに高等学校の教員や教育研究団体から意見を求めつつ分析、評価を行い、今後の試験問題作成に反映させることとした。(高等学校等からの意見及びこれらに対する問題作成側の見解等は前年度大学入試センター年報に掲載)

(2)　昭和55年度の実施方法の決定

以上の審議検討の結果を踏まえて、6月11日付けで文部省から昭和55年度の国公私立大学・短期大学の入学者選抜方法の大綱を規定した「大学入学者選抜実施要項」(資料1参照)が通知された。

大学入試センターにおいても、6月13日、昭和55年度の共通第1次学力試験の実施方法を定めた「昭和55年度大学入学者選抜共通第1次学力試験実施要項」(資料2参照)を決定公表するとともに、この実施要項に基づき、志願者のための「昭和55年度共通第1次学力試験受験案内」(志願票資料4参照)を作成し、これらを国公立大学及び全高等学校等に通知した。

(3)　説明・協議会の開催

この通知に引き続き、昭和55年度の共通第1次学力試験の実施方法の周知を図るとともに、これらに関し連絡協議するため、大学入試センターは高等学校、教育委員会、ＰＴＡ等の関係者を対象とした説明・協議会を全国7地区で開催した。この会議には約4,900人が出席した。

地　区	開催期日	会　場	参加者
北海道	昭和54年7月3日	札幌共済ホール	約250人
東北	7月5日	電力ホール	400人
関東・甲信越	6月15日	普門館	1,500人
東海・北陸	6月22日	名古屋大学	800人
近畿	6月23日	大阪大学	1,000人
中国・四国	6月25日	広島市公会堂	400人
九州・沖縄	6月27日	九州大学	550人

また、志願者及びその父兄を主な対象とし、共通第1次学力試験の趣旨、実施方法等を解説した広報資料「新しい大学入試——昭和55年度版」を作成し、関係各方面へ配布した。

(4) 受験案内の交付

大学入試センターは、共通第１次学力試験の出願者数推計に基づいて受験案内を作成し、各国公立大学へ合計約66万部を送付した。各大学は、６月20日から志願者に交付を始めた。

(5) 国公立大学ガイドブックの刊行

志願者の志望大学・学部の選択決定は、各大学・学部の目的や特色に応じ、それにふさわしい能力、適性、目的意識等を十分に見定めた上で行われることが期待されるものであるが、そのためには志願者に対し、各大学の学部・学科等の内容・特色についての情報が正確に提供される必要がある。このような考え方に基づき、各国公立大学の沿革・概要、学部・学科等の内容・特色、２次試験の内容等を紹介するガイドブックを国立大学協会、公立大学協会及び大学入試センターの３者が共同で編集し、昭和54年９月に刊行した。

3 出願の受理

(1) 出願の受付

出願の受付は10月１日から15日（当日消印有効）までの間、高等学校卒業見込みの者は前年度どおり出身高等学校を経由して、高等学校を卒業した者については高等学校側の意見も考慮して、第２回目から直接大学入試センターへ郵送することにより行われた。

出願受付期間に先だち、９月８日から14日までの間、受付が開始されることを政府広報により全国58新聞及びラジオ・テレビを通じ広報し、志願者への周知を図った。また、志願者のため、大学入試センターに問合せ専用電話を設けていたが（そのことは受験案内に記載）、これへの問合せは、受付け前までに約2,200件、受付け開始から試験前日までに約4,200件、試験日以降約900件あった。

(2) 志願状況

志願者は349,566人で、その内訳は次表のとおりであった。志願者は昨年度より7,691人増加したが、高等学校卒業見込みの者の志願率が昨年をやや下回り、既卒者のそれが高くなったことが特徴的であった。

また、出願の際志願者が申請していた大学・学部別の志望状況（資料11参照）をとりまとめ、12月10日に公表したが、第１志望の平均倍率は昨年度と同様3.7倍であった。

区分	志願者数	倍率	第１志望		第２志望	
			国立	公立	国立	公立
	人	倍	人	人	人	人
55年度	349,566	3.7	308,011	41,555	240,923	56,831
54年度	341,875	3.7	294,962	46,912	241,306	63,172

（内訳）

ア 出願資格別

（ ）内は前年度

資格	人数	比率	対前年度増減数	増減率
	人	%	人	%
① 高等学校卒業見込み者	224,314(228,987)	64.2(67.0)	4,673減	△ 2.0
② 高等学校卒業者	123,896(111,526)	35.4(32.6)	12,370増	11.1
③ 大学入学資格検定合格者	820(774)	0.4(0.4)	46増	5.9
④ 高等専門学校第３学年修了者	453(510)		57減	△ 11.2
⑤ 外国の学校(12年の課程終了者)	55(63)		8減	△ 12.7
⑥ 在外教育施設終了者	5(2)		3増	150.0
⑦ 国際バカロレア資格取得者	8(0)		8増	
⑧ 文部大臣の指定した者	15(13)		2増	15.4

イ 男女別

① 男　266,896人(259,925人)　比率76.4%（76.0%）

② 女　82,670人(81,950人)　〃 23.6%（24.0%）

ウ 高校出身者の課程別

① 普通科　336,281人(328,001人)　比率96.6%（96.3%）

② 農業科　573人(557人)　〃 0.1%（ 0.2%）

③ 工業科　3,026人(3,455人)　〃 0.9%（ 1.0%）

④ 商業科　1,018人(1,138人)　〃 0.3%（ 0.3%）

⑤ その他　7,312人(7,362人)　〃 2.1%（ 2.2%）

（参考）

届出選択科目の申出

数学一般　37人（前年度　119人）

基礎理科　127人（〃　195人）

英語A　3,998人（〃　4,623人）

(3) 確認はがきの発送と不備な出願書類の修正

本年度から、志願票記載事項をコンピュータに登録するについて正確を期すため、入力に当たってのパンチ作業を二重に行った。また、後日の受験票発行を確実に行うため、志願票を受理した日からおおよそ５日後に、コンピュータに登録した事項をそのままはがきに打ち出して志願者に

返送し、受理したことを通知するとともに、記載事項の確認を行った。

出願書類不備件数　7,075件　不備率 2.0%（前年度 3,351件 1.0%）
高校経由出願分　2,757件　〃　1.2%
直接出願分　4,318件　〃　3.4%

（内　訳）

事　項	高校経由出願分	直接出願分	計
高校コード誤記入	12	97	109
氏名誤記入・フリガナ未記入	78	59	137
性別未記入	41	27	68
生年月日未記入・誤記入	110	103	213
現住所誤記入	90	406	496
電話連絡先未記入・誤記入	1,538	1,055	2,593
出願資格・卒業年未記入・誤記入	408	467	875
選択科目誤記入	7	58	65
受験希望県誤記入	81	819	900
志望大学・学部コード未記入・誤記入	229	265	494
検定料領収証書未貼付	56	50	106
卒業証明書等未添付	4	866	870
その他（高校名未記入・出願経路誤り等）	103	46	149
合　計	2,757	4,318	7,075

出願書類不備の処理　7,075件
① 修正はがきによる修正　4,748件（高校経由出願分 2,278件、直接出願分 2,470件）
② 文書・電話による照会修正　1,549件（〃 167件、〃 1,382件）
③ 大学入試センターにおける修正　195件（〃 67件、〃 128件）
④ 受理通知はがき返送による修正　583件（〃 245件、〃 338件）

修正はがきによる主な修正項目
① 緊急の場合の連絡先未記入　3,346件
② 受験希望県の誤記入　800件
③ 志望大学・学部コード未記入、誤記入　670件
④ その他（現住所・生年月日の誤記入等）　32件
合　計　4,848件

さらに、不備のある志願票については、修正を求めるはがきを発送し修正を求めたが、この修正はがきの発送は4,748通に達した。その他不備のもののうち軽微なものについては電話照会等で修正を行ったが、修正件数は総数7,075件に達した。これらの修正のため全志願票の整理に、出願締切り後約30日間を要した。

(4) 試験場の設定

大学入試センターは、志願票の受理を行った後、志願者を都道府県別に算出し、これを該当の各国立大学に割り当て、各国立大学は公立大学と協力して志願者数に応じ試験会場を設定した。大学内試験場だけでは収容数に不足を生じる大学は、高等学校等を借用したが、本試験の会場は合計272か所に及んだ。

区　分		内　訳		
本試験場	272	一般試験場	268	大学内試験場　200 （試験場によっては、複数の分試験場を設定） 高校借用試験場　63 （大学附属高校5、公立高校56、私立高校2） その他の試験場　5（予備校）
		点字試験場	4	大学内試験場　2 盲学校試験場　2
追試験場	7	全国7地区に各1か所の国立大学試験場		

(5) 受験票の発行

共通第1次学力試験の受験票、写真票及び第2次試験出願用の成績請求票の発行と志願者あての発送は、11月20日から11月29日までの間に行った。受験票等が12月10日までに志願者に送付されなかったときは、その旨を大学入試センターへ申し出ることとなっていたが、この未着届は407通提出され、その後に送達されたものを除き368件について再発行を行った。また、紛失、破損による再発行が試験日までに285件、受験票記載事項の変更による再発行が54件あった。

(6) 検定料の納入

共通第1次学力試験の検定料は、円滑かつ確実な納入を図るために、志願者が日本銀行、その代理店及び郵便局に納付するものとしていた。志願者は、その納付済の領収証書を志願票にはりつけて出願することとなっていたが、大学入試センターはこの領収証書と検定料の納付を扱った銀行等から送付される領収控を照合し、本人名儀によるものか、二重に納入されていないかなどの確認を行った。納付件数は、349,904件あったが、納付後に出願を取りやめたもの、重復して

納付したもの計338件については、所定の手続きを経て検定料相当額を還付した。

4　共通第1次学力試験の実施

(1) 実施体制

昭和55年度共通第1次学力試験の本試験は、昭和55年1月12日及び13日に、全国272会場で一斉に行われた。また、病気等により本試験を受験できなかった者のために追試験が1月20日及び21日に7試験場で実施された。

これらの試験の実施に当たり、大学入試センターでは所長をはじめ、実施方法専門委員会及び教科専門委員会問題作成部会(科目別)の委員若干人で構成する試験実施本部を設け、電話ファクス等により各国公立大学との密接な連携を図るとともに、試験実施全般の調整に当たった。

各国立大学では、公立大学との協力の下に、試験実施委員会（学長が委員長、10人程度の委員で構成）を置き、当該大学が設定した試験場における試験の実施に当たった。各試験場では原則として受験生50人に2人の割合で試験監督を置いていたが、これに当たる教職員は延42,000人以上となった。なお、一部の大学では受験生数に対して当該大学の教職員が少なかったため、他地区の大学からの応援や公立高等学校の教員（約170人）に監督の補助を依頼するなどの措置をとった。

期　日	教　科	試　験　時　間
1月12日(土)	国　語	12：00 — 13：40 (100分)
	理　科	14：30 — 16：30 (120分)
1月13日(日)	社　会	9：00 — 11：00 (120分)
	数　学	12：20 — 14：00 (100分)
	外国語	14：50 — 16：30 (100分)

なお、試験の実施に先だち、試験問題の作成、印刷、各大学への輸送は、計画のとおり事故なく行われた。

(2) 受験者数

受験者は、本試験と追試験を合わせ333,212人で、欠席者は計16,354人（欠席率4.7％）であった。欠席者は昨年度より若干増加した（昨年度14,448人　4.2％）。

受験者数（所定の全教科目を受験した者）

本試験　333,026人（点字受験者10人を含む）　（前年度 327,140人）

追試験　186人　（〃　287人）

合　計　333,212人　（〃　327,427人）

欠席者数

全教科欠席者　15,359人（追試験欠席者16人を含む）（前年度　13,637人）

一部教科欠席者　995人（追試験欠席者1人を含む）（〃　811人）

合　計　16,354人　欠席率4.68％　（〃　14,448人　4.23％）

(3) 追試験

本試験の前日午後5時までに病気等により本試験を受験できないことを届け出、追試験の受験を許可された者は203人であったが、実際に受験した者は186人(欠席率8.4％）にとどまった（前年度受験許可者302人、受験者287人、欠席率5.0％)。

追試験場等		追試験受験許可者数	性別		事由				
					病気				事故等
地区	試験場名		男	女	感冒及び類似症	胃腸炎及び類似症	負傷	その他	
北海道	北海道教育大学	10	8	2	5	1	1	3	
東北	岩手大学	5	5	0	1	1	0	3	
関東・甲信越	東京外国語大学	90	73	17	54	15	6	15	
東海・北陸	岐阜大学	20	16	4	7	7	1	4	1
近畿	神戸大学	51	42	9	24	12	5	10	
中国・四国	岡山大学	18	15	3	9	6	1	2	
九州・沖縄	長崎大学	9	8	1	4	4	1	0	
合計		203	167	36	104	46	15	37	1

(4) 身体障害者に対する特別措置

身体に障害がある者については、共通第1次学力試験の受験に当たり、特別の措置をとるものとしていたが、申し出があった135人について次のとおり必要な措置を行った。

なお、点字の試験問題は、通常の試験問題を基本とし、説明文を補足し、また点訳に適しない

障害の種類			
受験の際にとった措置	視覚		45
	聴覚		44
	肢体不自由等		46
	視覚障害	点字問題を点字で解答	10
		点字問題を文字で解答	0
		一般問題を文字で解答	10
		拡大鏡等の持参使用	17
		照明器具の準備	8
		窓側の明るい席を指定	22
	聴覚障害	手話通訳者を付与	2
		座席を前列に設定	26
		補聴器の持参使用	33
	肢体不自由等	別室を設定	14
		特製机の使用	1
		車椅子等を使用	14
		一般問題を文字で解答	15
	その他		41

問題については代替問題を出題した。点字問題受験者は、国語を除きあらかじめ選択解答する科目を届け出るものとしており、試験時間は通常の者の1.5倍とした。

(5) 正解の公表

本試験の正解は、昨年度は各試験日毎に公表していたが、今回は2日目の全試験終了後に報道機関を通じ、一括して公表し、さらに後日高等学校等に通知した。追試験の正解は1月21日(月)正午に試験実施大学で公表するとともに、正解の郵送を希望していた120人について、直接通知した。

(6) 試験問題についての評価

今回の共通第1次学力試験の試験問題については、全般的には適切なものという評価を受けているが、一部については細かい知識を問うにとどまるものもあり、一層の工夫改善を要するという批判も寄せられた。大学入試センターでは、試験終了後から共通第1次学力試験等連絡協議会試験問題部会を2月12日及び13日に開催して高等学校側の試験問題に対する意見を聞くとともに、

全国的な教育研究団体にも意見を求めるなど、昨年と同様に分析、検討を行い、今後の問題作成にその結果を反映させることとした。(これらの意見、評価等は次項Ⅲに掲載)

なお、外部から文書及び電話で約150件の問合せや意見が寄せられたが、文書によるものについては、試験問題作成部会で検討を行い、文書で回答を行った。

(7) 事故に対する措置

本試験の第2日目に、広島大学及び広島女子大学の会場で、事故により列車の運行が遅延したため当日の全日程を1時間繰り下げる措置が、また岡山大学の会場で雨天による交通渋滞のため当日の全日程を15分繰り下げる措置がとられたが、その他は支障なく計画のとおり行われた。

なお、試験当日、受験票を携帯しなかった者が874人(前年度684人)あったが、各大学で仮受験票を発行し受験させた。

(8) 出題の訂正等

試験開始後、本試験で「世界史」に解答の指示の誤り、「数学Ⅰ」のごく一部の問題冊子に印刷の汚れ、点字問題に3件の点訳誤りが、また、追試験で「政治・経済」に出題の誤りが発見され、それぞれ電話ファクスにより訂正等の連絡を行った。このうち「世界史」については、訂正の連絡が各試験室に到達した時刻が試験終了の間際であったので、その後大学入試センターの実施本部で協議した結果、この問についてはいかなる解答に対しても得点を与えることとした。

訂正等の内容

世界史　問題Ⅴの設問文(76p上から2行目)に「また、誤りのない場合は⓪をマークせよ。」の文章を追加する。

数学Ⅰ　問題Ⅰの設問文(i)(6p上から2行目)の$f(g(x))=\frac{1}{x}$のfの前にマイナス符号と思われる印字のある問題冊子があるが、これはないことが正しい。

点字問題　国語、物理Ⅰ及び英語Bの問題の一部に点訳の誤り。

政治・経済(追試験)　問題Ⅱの設問文(26p上から7行目)の「西ドイツ」は誤りで、「イギリス」が正しい。

また、試験終了後、本試験の「地学Ⅰ」の問の一部(問題Ⅲの問2の問題文—解答番号 107 ～ 114)が特定の教科書の記述とよく似ているという外部からの指摘があり、実施本部で協議した結果、その教科書の履修によって有利・不利が生じないよう、採点に当たって小問間の配点比率

に配慮することとした。

(9) 正解の訂正

共通第１次学力試験の終了後、大学入試センターの問題作成部会では、使用した試験問題の精査を行っていたが、２月25日に至り、追試験の「政治・経済」の１問（問題Ⅳの問４、解答番号 51 ）について、出題と正解との照合が十分でなかったことが原因で、先きに公表した正解を訂正する必要があることが判明した。

大学入試センターでは、正解公表後相当の期間を経過し、各大学への出願も終了していた段階でもあったので、訂正後の正解⑤を解答した者とともに、先きに正解として公表した④を解答した者にも同様に得点を与えることとし、この措置と経過を該当の受験者が出願した大学に通知するとともに、受験者本人と各大学、関係各方面にも通知した。

5 共通第１次学力試験の結果

(1) 答案の読み取り

受験者の答案は、各試験実施大学で取りまとめられ、大学入試センターへ返送されてきたが、大学入試センターでは、１月14日からこの答案約166万８千枚を光学マーク読取装置で同一答案について３回の読み取りを行い、各回の読み取り結果をコンピュータで照合し、誤りがないことを確認してコンピュータに登録した。

(2) 答案のマークもれ等の状況

受験番号欄等にマークもれ、マーク誤りがある答案は採点せず、その科目は０点とすることとしている。これらの件数は昨年度は2,869件であったが、今回は問題冊子、解答用紙等に注意書きを加えたり、試験室での口頭による注意等で一層の留意を促したので1,203件に減少した。

		（前年度）
ア 受験番号欄のマークもれ等（本試験）	1,203件	（2,869件）
○延受験者数（受験者数×科目数）の総数	2,331,182人	（2,291,830人）
○延受験者数に対する「受験番号欄のマークもれ等」の発生率	0.05%	（0.13%）

イ 「受験番号のマークもれ等」の内訳

① 受験番号欄のマークもれ	150件(0.006%)	（543件(0.02%)）
② 受験番号欄のマーク誤り	460件(0.02%)	（1,271件(0.06%)）
③ 選択科目欄のマークもれ等及び同一科目をマーク	472件(0.02%)	（1,021件(0.04%)）
④ 指定された者以外が「数学一般」「基礎理科」「英語Ａ」を選択解答等	121件(0.005%)	（34件(0.001%)）

なお、追試験において、④の該当が１件あった。

ウ 教科別の「受験番号欄のマークもれ等」

国語	91件（7.6%）	（590件(20.6%)）
理科	266件(22.1%)	（507件(17.7%)）
社会	146件(12.1%)	（442件(15.4%)）
数学	232件(19.3%)	（609件(21.2%)）
外国語	468件(38.9%)	（721件(25.1%)）

(3) 平均点等の公表

光学マーク読取装置による読み取りに基づき、本試験の受験者についての総得点及び科目別の平均点、標準偏差、最高点、最低点を算出し、２月５日に報道機関を通じて公表した。なお、追試験については受験者数が少なく、指標として適当でないので公表しなかった。

教科・科目別平均点等（本試験）

教科名	科目名	受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差
		人	点	点	点	点
全教科	(1,000点満点)	333,026	617.36	965	0	128.11
国語（200点満点）	（国語）	333,026	138.74 (69.37)	200(100)	0 (0)	24.94 (12.47)
	国語	332,935	138.77 (69.39)	200(100)	0 (0)	24.83 (12.42)
	受験番号誤り等	91	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
社会（各科目とも100点満点。2科目選択）	（社会）	333,026	120.61 (60.31)	198 (99)	0 (0)	27.69 (13.85)
	倫理・社会	120,039	61.29	100	0	15.95
	政治・経済	178,394	73.42	100	0	13.33
	日本史	155,368	51.92	100	0	15.60
	世界史	128,729	53.73	97	1	14.26
	地理A	47,451	52.63	92	0	11.73
	地理B	35,925	62.08	100	0	16.50
	受験番号誤り等	146	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
数学（各科目とも200点満点。1科目選択）	（数学）	333,026	146.38 (73.19)	200(100)	0 (0)	47.24 (23.62)
	数学Ⅰ	332,766	146.49 (73.25)	200(100)	0 (0)	47.09 (23.55)
	数学一般	28	51.25 (25.63)	155 (78)	14 (7)	32.28 (16.14)
	受験番号誤り等	232	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
理科（基礎理科は200点満点。1科目選択。他の科目100点満点。2科目選択）	（理科）	333,026	117.85 (58.93)	200(100)	0 (0)	29.89 (14.95)
	物理Ⅰ	178,844	55.17	100	0	19.27
	化学Ⅰ	259,056	56.82	100	0	14.41
	生物Ⅰ	163,090	65.33	100	0	17.54
	地学Ⅰ	64,582	61.93	100	0	17.46
	基礎理科	107	62.21 (31.11)	129 (65)	18 (9)	22.51 (11.26)
	受験番号誤り等	266	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国語（各科目とも200点満点。1科目選択）	（外国語）	333,026	93.79 (46.90)	200(100)	0 (0)	33.60 (16.80)
	英語B	328,538	94.18 (47.09)	200(100)	0 (0)	33.31 (16.66)
	ドイツ語	331	112.55 (56.28)	200(100)	0 (0)	48.12 (24.06)
	フランス語	222	102.59 (51.30)	196 (98)	28 (14)	47.21 (23.61)
	英語A	3,467	66.68 (33.34)	196 (98)	14 (7)	30.93 (15.47)
	受験番号誤り等	468	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

（注）(1) 受験者数は、全教科の所定の科目を受験した者。(2) カッコ内は、100点満点に換算した点数。(3) 受験番号誤り等は、①受験番号欄にマークもれの者、②受験番号欄のマーク誤りの者、③選択科目欄にマークもれ等の者、④指定された者以外が「数学一般」「基礎理科」「英語A」を選択解答した者等をいい、いずれもその科目の得点を0点とした。

昭和55年度共通第1次学力試験本試験の得点分布概略図（全教科）

得点	人数	累積人数	
0	6	6	
1 - 10	2	8	
11 - 20	0	8	
21 - 30	1	9	
31 - 40	1	10	
41 - 50	0	10	
51 - 60	2	12	
61 - 70	2	14	
71 - 80	1	15	
81 - 90	3	18	
91 - 100	1	19	
101 - 110	0	19	
111 - 120	3	22	
121 - 130	3	25	
131 - 140	4	29	
141 - 150	6	35	
151 - 160	8	43	
161 - 170	9	52	
171 - 180	10	62	
181 - 190	20	82	
191 - 200	20	102	
201 - 210	38	140	
211 - 220	57	197	
221 - 230	101	298	
231 - 240	128	426	
241 - 250	190	616	*
251 - 260	263	879	*
261 - 270	314	1193	*
271 - 280	426	1619	*
281 - 290	523	2142	**
291 - 300	660	2802	**
301 - 310	797	3599	***
311 - 320	953	4552	***
321 - 330	1170	5722	****
331 - 340	1329	7051	****
341 - 350	1580	8631	*****
351 - 360	1743	10374	******
361 - 370	2042	12416	*******
371 - 380	2278	14694	********
381 - 390	2413	17107	********
391 - 400	2687	19794	*********
401 - 410	2932	22726	**********
411 - 420	3165	25891	**********
421 - 430	3411	29302	**********
431 - 440	3820	33122	**********
441 - 450	4005	37127	**********
451 - 460	4368	41495	**********
461 - 470	4730	46225	**********
471 - 480	5145	51370	**********
481 - 490	5461	56831	**********
491 - 500	5727	62558	**********
501 - 510	6201	68759	**********
511 - 520	6459	75218	**********
521 - 530	6936	82154	**********
531 - 540	7489	89643	**********
541 - 550	7624	97267	**********
551 - 560	8189	105456	**********
561 - 570	8578	114034	**********
571 - 580	8646	122680	**********
581 - 590	9154	131834	**********
591 - 600	9378	141212	**********
601 - 610	9495	150707	**********
611 - 620	9836	160543	**********
621 - 630	9867	170410	**********
631 - 640	10107	180517	**********
641 - 650	10159	190676	**********
651 - 660	10003	200679	**********
661 - 670	10015	210694	**********
671 - 680	9876	220570	**********
681 - 690	9746	230316	**********
691 - 700	9422	239738	**********
701 - 710	9219	248957	**********
711 - 720	8721	257678	**********
721 - 730	8328	266006	**********
731 - 740	7839	273845	**********
741 - 750	7500	281345	**********
751 - 760	6891	288236	**********
761 - 770	6502	294738	**********
771 - 780	6093	300831	**********
781 - 790	5432	306263	**********
791 - 800	4780	311043	**********
801 - 810	4249	315292	**********
811 - 820	3797	319089	**********
821 - 830	3277	322366	**********
831 - 840	2597	324963	**********
841 - 850	2201	327164	**********
851 - 860	1655	328819	**********
861 - 870	1303	330127	**********
871 - 880	994	331121	**********
881 - 890	738	331859	**********
891 - 900	481	332340	**********
901 - 910	299	332630	**********
911 - 920	216	332846	**********
921 - 930	97	332943	**********
931 - 940	45	332988	**********
941 - 950	27	333015	**********
951 - 960	8	333023	**********
961 - 970	3	333026	**********
971 - 980	0	333026	**********
981 - 990	0	333026	**********
991 - 1000	0	333026	**********

- 全教科受験者数
  333,026人
- 平均点
  617.36 点
  (1,000点満点)
- 最高点
  965 点
- 最低点
  0 点
- 標準偏差
  128.11 点

(4) 平均点の差

今回の総得点の平均は、617.36点で昨年度より約20点下回ったが、一応当初の目標の範囲内に収ったものと考えている。しかし、本年度は教科間あるいは科目間で、平均点にかなりの差が生じた。特に社会では科目間に21.50点（政治・経済—日本史）の差があり、科目選択の仕方で不公平が生じるのではないかという意見もあった。大学入試センターとしては、得点の調整について現時点では適切な方法が得られていないこともあり、今後、問題そのものの難易度や当該科目を選択した受験者集団の学力レベルに関する要素等について、詳細な分析、研究を行うこととし、各大学へ共通第１次学力試験の成績を提供する時点での統一的な調整を行うことを控えた。

しかし、各大学において共通第１次学力試験の成績のほか、第２次試験の結果や高等学校からの調査書の内容等を総合して判定するとき、この点について考慮することも考えられるので、そのための資料として受験生の得点のほか、全受験者の総得点及び各科目について得点の分布等の資料（得点１点ごとの人数〈度数分布〉）、パーセンタル順位（最高点、最低点の間を百等分し、その百等分間隔上の順位を示す）を各大学へ提供した。

(5) 成績の提供

共通第１次学力試験を課さない推薦入学志願者を除き、各国公立大学の第２次試験の志願者についての共通第１次学力試験の成績を、各大学の請求に基き、磁気テープ、パンチカード等を媒体として提供した。成績提供件数は314,151件であったが、このうち第２次募集に係るものは9,313件であった。

6 おわりに

昨年度行われた第１回の共通第１次学力試験については、初回ということもあり、とかくこれが１人歩きをするかのような見方をされる傾向もあったが、第２回実施の本年度に至って、共通第１次学力試験と各大学が行う第２次試験との組み合わせにより、適切な選抜を行うというこの制度の趣旨が、広く一般に理解されるようになってきた。

受験生や高等学校側も昨年度の第１回の実施を見て、共通第１次学力試験の試験問題の内容、程度にかなりの見通しをもつことができるようになってきたため、全般的には昨年度よりも平静に対応するようになったと考えられる。

このような新しい大学入試の制度に対する理解が深まるにつれて、各大学が行う第２次試験のあり方や、合否決定に当たり共通第１次学力試験と第２次試験との成績をどのようなかたちで総合するのが適切かなどについて関心が高まってきた。共通第１次学力試験と第２次試験の比率の問題については、全般的に前者の結果をやや重視し過ぎているのではないかという意見も目立った。これを公表している大学の状況を見ると指摘されるような傾向も一部には見られるが、比重の置き方はその学部・学科の特性に係わる面もあり、今後、実施の経験を重ねつつ、また、第２次試験そのものについての改善とあいまって、順次適切な形態に落ち着いていくものと思われる。

各大学が行う第２次試験の内容、方法については、昨年度の第１回から小論文や面接、実技検査等を課する大学・学部が多くみられたが、その数がさらに増加した。また、二段階選抜を実施する大学は昨年度より減少し、推薦入学、２次募集を行う大学が若干増えた。学力検査においても、全般的に論述式解答を求めるものが多くなるなど多様な形式、方法により、受験者の総合的な思考力、表現力などや専攻への適正、意欲等を評価しようとする傾向が目立ってきた。

共通第１次学力試験による入試改善は、学力検査だけのいわゆる一発勝負を避け、多様な資料により総合的な判定を行うところにその狙いがあったが、２回の経験を経て、共通第１次学力試験で全般的、客観的な評価が可能となったことを前提とし、第２次試験ではそれとは別の観点から評価を行おうという方式が、一般化してきつつあると見ることができると考える。しかし、なおその定着を図るためには、今後とも、大学入試センター及び各大学の一層の努力が引き続き必要とされよう。

（第２次試験の方法等の概要は資料12参照）

(1) 実施方法について

昭和55年度共通第１次学力試験の実施結果を概観すると、まず実施方法の面では、志願者の志願票作成、解答の際のマークシートへの記入等に当たっての事故は、昨年より減少した。また、大学入試センターが行った受験票の発行、送付も円滑に進行した。このことは、受験生や高等学校側も２年目となって適切に対応したことにもよるものであろうが、実施方法について大学入試センター及び各大学が昨年度の経験を踏まえて、種々の改善を行ったことが実を結んだものと見ることができよう。

実施方法については、実施期日、教科・科目数、試験場等に関する問題が、昨年度に引き続き高等学校側から提起されている。これらは共通第１次学力試験の基本にも係る重要な問題であり、今後さらに経験をつみ重ね、その結果を十分に検討して対処すべきことがらであると考えている。

なお、追試験の受験者は、今回も予想よりかなり少ない数にとどまった。追試験の実施については種々の論議があるが、2回の経験のみで廃止する等のことは時期尚早であり、当面その実施個所の縮小等で対応することが適当であると考える。

(2) 試験問題について

試験問題については、概括的には、高等学校の教育に即し、かなり工夫された適切な問題であるという評価を多く受けているが、一部の科目については「細かい知識を問うもので、事柄の本質を問うていない。」等の指摘も受けている。また、一部の科目では出題に誤り等があったため、試験開始後に訂正等を通知したり、さらに公表した正解を事後に訂正するという事態も生じた。これらは、試験の実施そのものに大きな支障をもたらすものではなかったが、昨年度に引き続き大学入試センター側にこのような不手際があったことは、真に遺憾なことと考えている。今後は、試験問題作成に当たり、各方面からの意見を十分に聞きつつ一層の調査研究を行い、試験問題としての妥当性と信頼性を高めるよう努力を続ける所存であるが、特に出題の誤り等を無くすため、問題作成の段階での点検照合に万全を期すこととし、そのための組織と運用について改善を加えたいと考える。

なお、正解の訂正の件については、この試験の終了後にこの点について外部からの指摘を受けながらこれを見過し、相当の期間を経過した後に措置をとることとなったことは、大きな手落ちといわざるをえない。再びこのようなことがないよう十分に留意をしたい。

(3) 得点の調整について

今回の試験の結果では、教科間あるいは科目間の平均点にかなりのバラツキがあった。大学入試センターは、共通第1次学力試験の問題作成に当たって、高等学校の教育課程に即し、一般的、基礎的な学習の達成の程度を測定するとともに、選抜資料としての有効性を確保するという観点から、各教科・科目ごとに平均点の目安を6割程度に置き、教科間、科目間で著しく難易度に差が生じないよう均質の問題を作るように努めている。今回の総得点の平均617.36点は、一応6割の目標は達したものと考えている。教科・科目間の平均点に結果として差が生じることは、本来ある程度やむをえないことであるが、社会の科目間で差が大きかったことについては、科目選択の如何により有利不利の問題が生じるので、統一的に得点の調整を行うべきではないかという強い意見も寄せられた。

大学入試センターは、従来から得点の調整の方法について研究を行ってきているが、本年度については未だ適切な方法が見出されていないため、統一的な調整は行わず、各大学が第2次試験の結果等と合わせて、必要に応じて考慮することができるよう関係資料をあわせて提供したことは、先に述べたとおりである。

大学入試センターとしては、このような結果が生じたことについて、今後は、まず問題作成の段階で教科・科目間の調整をより一層行い、できるだけ均質な問題を作るため一層の努力をしたいと考えている。問題の難易度の推定は、過去の出題に対する受験生の反応から類推されることが多い。過去2回の試験結果の資料もあるので、それらを詳細に分析し、問題作成部会へ提供することとしている。

科目間の平均点の差異という問題の解決を図ろうとする場合には、このような問題の作成過程における難易度の調整を図る努力がまずなければならないことはいうまでもないが、試験実施後に行う得点の調整の方法は、

① すべての受験生にとって公平でなければならないこと。

② 自己採点の方式に支障があってはならないこと。

③ 限られた期間内に処理可能なものでなければならないこと。

という諸条件を満たしているものでなければならない。

平均点の調整を図ることによって、成績の分布範囲が狭くなることや、得点のいわゆる頭打ち、足切りがおこることは選抜のための試験としての性格上避けなければならないし、また、選択科目の成績については明らかに選択者集団に異質性のあることをも考慮に入れておかなければならない。

なお、得点の調整を行うことに関して、偏差値による処理という提案もあるが、この方法は上記の諸条件にも関連して、この種の調整にはなじまないものと考えている。

大学入試センターにおいては、前に述べた3項目を満足できる方策について、研究部において鋭意研究を進めているところである。

(4) 社会の科目選択のあり方について

社会6科目については、地理A、地理Bを併せて選択することを禁止しているほかは、随意2科目選択制がとられている。しかし、倫理・社会と政治・経済は、高等学校教育においてはそれぞれ2単位であるのに対し、他の科目はそれぞれ3単位、実質的には4単位分もあること、さらに

各科目の性質も関係していると思われるが、今回の実施における志願者の科目選択の動向に著しい偏りが見られるようになった。すなわち、倫理・社会、政治・経済の選択者が、第１回から第２回に進むとともに急激に増加し、反面、世界史、日本史の選択者が激減した。この傾向は、今後益々助長されることが予測されるが、このことは、高等学校における社会科の教育に好ましくない影響を及ぼすことが考えられる。すでに高等学校側からもこの点についての指摘もなされている。大学入試センターは、高等学校側の意向を踏まえつつ、国立大学協会と協議し、適切に対処したいと考えている。

（参考）　社会の科目選択状況（本試験）

区　　分	55　年　度		54　年　度	
	受　験　者	平均点	受　験　者	平均点
	人	点	人	点
倫　理　・　社　会	120,039 (36.0%)	61.29	72,350 (22.1%)	61.83
政　治　・　経　済	178,394 (53.6%)	73.42	142,710 (43.6%)	58.09
日　　本　　史	155,368 (46.7%)	51.92	92,039 (58.7%)	54.01
世　　界　　史	128,729 (38.7%)	53.73	159,531 (48.8%)	57.21
地　　理　　A	47,451 (14.2%)	52.63	51,714 (15.8%)	65.62
地　　理　　B	35,925 (10.8%)	62.08	35,494 (10.8%)	62.18
計	333,026 (100.0%)	120.61	327,140 (100.0%)	115.74
うち　倫理・社会及び政治・経済の同時選択者	59,241 (17.8%)	—	29,268 (8.9%)	—

Ⅲ　昭和55年度共通第１次学力試験の試験問題に関する意見・評価

Ⅲ　昭和55年度共通第１次学力試験の試験問題に関する意見・評価

1　試験問題作成の方法等

共通第１次学力試験の試験問題は、高等学校学習指導要領に準拠し、主として高等学校においてすべての生徒が履修する教科・科目から出題することとしている。試験問題作成に当たっては、平均的な結果が60％程度の正解になることを目標とし、現在使用されている教科書の内容についても十分調査研究を行うとともに、教育課程に即した実際の学習の進度にも留意するよう努めている。

試験問題の作成に当たっては、衆知を集めて適切なものを作るという観点から、広く全国の国立大学の教官約200人を教科専門委員として委嘱している。これらの委員は15の科目別の問題作成部会及び点字試験問題作成の特別部会に分属し、部会や部会間で協議・検討を重ねて問題の作成を行っている。委員の任期は、出題傾向が固定化することを避けるため２年とし、毎年、半数が交替している。

出題した問題については、選択肢ごとの正答率等を算出し、その結果を参考にするなど科学的な分析評価も加え、適切な良い問題を作成することに努力している。

共通第１次学力試験の実施後、試験問題（本試験及び追試験）について高等学校側の意見を聞き、以後の問題作成にそれらを反映させるため、大学入試センターに共通第１次学力試験等連絡協議会試験問題部会（１科目当たり、高等学校教科担当教員委員３人計45人、大学入試センター問題作成責任者１人計15人、合計約60人で構成）を設置している。また、全国的な教科・科目別の16教育研究団体にも意見・評価を求めている。

2　試験問題に対する意見・評価

昭和55年度共通第１次学力試験の試験問題については、平均点（617.36点）が示したとおり「高等学校において、まじめに学習に努めていれば60％程度の解答が得られる試験問題を出題する。」という当初の目標を一応達成したものと考えているが、しかし、個々の試験問題の適否や教科・科目間の平均点の差については、各方面から多くの意見が寄せられた。

大学入試センターでは、試験実施後の２月12日及び13日に共通第１次学力試験等連絡協議会試験問題部会を開催し、本試験及び追試験の試験問題について協議を行ったが、高等学校教員委員からはその協議案を基礎として評価報告書（共通第１次学力試験試験問題協議報告書）が提出された。

また、意見・評価を求めた16教育研究団体のうち、12団体からも回答があった。

各問題作成部会では、これらの意見・評価のほか、国公立大学からの意見・評価をも考慮し、試験問題作成者としての見解(教科専門委員会問題作成部会報告書)を取りまとめた。以下、教科目別に掲載する。

(1) 高等学校教科担当教員の意見・評価

（共通第１次学力試験等連絡協議会試験問題部会の報告書）

(2) 教育研究団体の意見・評価

(3) 教科専門委員会問題作成部会の見解

国　　語

(1) 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 「国語」問題の概観

共通第１次学力試験は、全国公立大学入学志願者の高等学校における一般的・基礎的な学習の到達度を判定することを目的とした試験であるから、建て前上高等学校における教育にもとづいて出題されなければならないわけで、当然、現行の高等学校学習指導要領に準拠した問題作成が求められよう。そこで、昭和55年度の共通第１次学力試験「国語」問題について、学習指導要領との関連において概観してみたい。

(1) 問題の構成・配点

「国語」の問題構成・配点は、昨年の形をそのまま踏襲して、本試験・追試験ともに現代国語３題（計140点)、古文１題(30点)、漢文１題(30点)、合計５題（200点)で、この形を定着させていこうという構えが窺われる。この構成・配点は指導要領解説国語編（以下〝解説〟と略称する）第１章、３節、１国語科の各科目の項に表示されている標準単位数「現代国語」７、「古典Ⅰ甲」２、及び第２章１節４の(1)と、第２章２節４の(1)を根拠としている（それによれば、「現代国語」の「読むこと」・「古典Ⅰ甲」の「古文」・同じく「漢文」の比率はほぼ4.9：１：１の割合になり、200点満点に換算すれば、大体142：29：29となる）と思われる。このことは古典の出題は「古典Ⅰ甲」の範囲からという建て前からすれば妥当であるということになる。(配点についての考えは後述する)

次に、出題された５題の問題文を学習指導要領との関連でみるならば、本試験のⅠ「哲学の現在」、追試験のⅠ「歴史主義と反歴史主義」は現代国語、読むことの学習活動を大きく３つに分けてあるうちのイ「論説・評論など」に該当する。本試験Ⅲ「鳥寄せ」、追試験Ⅲ「白文鳥」は、同じくウの項目の中の「小説」にあたる。本試験Ⅱ「ロン先生の虫眼鏡」、追試験Ⅱ「草木の憂い」はⅠとⅢの中間的な文章で、同じくア「記録・報告、説明など」に該当しよう。こうしてみると「現代国語」の「読むこと」の学習活動の３項目は今回の共通第１次学力試験問題の中に一応網

羅されているといえる。

古典の方はどうであろうか。解説第2章、2節「古典Ⅰ甲」3内容、(2)学習活動のところで古文・漢文を分けて、それぞれ次のように分類されている。

（古文）　ア　和歌、俳句類　　イ　物語類　　ウ　随筆・評論類

（漢文）　ア　経子類　　イ　史伝類　　ウ　詩文類

本試験のⅣ「源家長日記」は（古文）ウの解説「『随筆・評論類』には日記、紀行、随筆、評論などが含まれる。」とあるうちに一応属するとみなしてよいであろう。追試験Ⅳ「夜の寝覚」は同じくイ　物語類に属する。本試験Ⅴ「法蔵砕金録」は一応（漢文）のウ　詩文類、追試験のⅤ「荘子」は同じくア　経子類に一応は属するが、前者は扱われている話題は唐の詩人白居易ではあるが、出典が極めて特殊であり、後者も「論語、孟子などが中心となろう」という「古典Ⅰ甲、漢文」の範囲を逸脱しており、出典についての適切な説明がなされるべきであろう。

こうしてみると、現代文が「現代国語」の学習活動の3項目を一応網羅しているのに対し、古典の方は配点の関係上当然のことながら、「古典Ⅰ甲」のそれぞれ各1項目をとり上げているにすぎず、問題の構成、素材、内容の面でバランスを欠いているといわなければならない。

以上、国語の問題構成を考える場合、「現代国語」と「古典Ⅰ甲」それぞれの配当標準単位に配点を案分することに気を配り過ぎると、それぞれの科目の学習活動の項目の到達度をバランスよく判定する問題が作りにくくなるのではないか。

(2)　問題文と設問の程度と傾向

個々の問題について細かい論評は次の「2　範囲と程度、設問数等」に譲ることにして、ここでは全体的にみて特徴的な点についてみてゆきたい。

ア　本　試　験

Ⅰ　「哲学の現在」は論説文として格調も比較的高く、論旨も明確な良い文章である。

Ⅱ　「ロン先生の虫眼鏡」は筆者の執筆態度がやや情緒的で、論理の対応が明断さを欠く個所があったり、比喩が不的確と思われる個所があるなど、問題としてあまり適当とはいえず、しかも問3、問5など、この文章の欠陥と思われる部分が設問個所になっているところに問題がある。

Ⅲ　「鳥寄せ」は文学作品として無難な出題である。ただ、入学試験が高等学校の現場や受験生に与える影響の大きさを考えるとき、特に文学作品の場合、格調の高い規範的な文を読ませるという観点から、鑑賞に堪えうるすぐれた文章を広く求めるべきで、いたずらに素材を新しい作品のみに求めるべきではないと思う。

Ⅳ　「源家長日記」は問題文としてよくまとめられている。

Ⅴ　「法蔵砕金録」は高等学校の教師にも出典を知る者は少ないと思われ、漢文に関しては試験問題の種本は無尽蔵の感を深くした。

以上5題を並べてみると現代文にくらべ、古文、漢文は出典にも、問題文、設問のたて方にも手慣れた手際のよさが感じられる。現代文は3題並べてみると、偶然ではあろうが3題とも自然賛美の文であり、そういう意味で問題文に一つの傾向性がみられるのは、やはり注意した方がよいのではないか。

イ　追　試　験

Ⅰ　「歴史主義と反歴史主義」は文章に独特の癖があって読みづらく、あまり問題文として適切だとは言い難い。

Ⅱ　「草木の憂い」は叙情的な文章だが、本試験に比べてしっかりしていて質の高い、きめの細かい文章である。

Ⅲ　「白文鳥」は本試験同様文学作品として無難な問題である。

Ⅳ　「夜の寝覚」は人物関係がやや込み入っていて、最初は面喰うかもしれないが、落ち着いて読めば本試験に比べてそれほど難解ではないのではないか。文体は王朝日記、物語などを読んでいる受験生にはむしろ見馴れたものに属する。

Ⅴ　「荘子」は「古典Ⅱ」の教材として採られることが多く、「古典Ⅰ乙」でも参考文として載っているので、それほど目新しい文章ではないと思われるが、「古典Ⅰ甲」という建て前からすると相当な難問である。

ウ　比　　較

問題群として本試験と追試験を比較した場合、出題者の方で多少本試験より追試験が易しくなっては困るという意識が働いたのだろうが、それにしても難易の差が出すぎたようである。5題とも程度の差こそあれ追試験の方がむずかしく、特にⅡは相当難易差があると思われる。

現代文と古典を比較した場合、問題の難易、設問の疎密という点で明らかにバランスを欠いている。その主たる原因は全体の構想そのものにあると思われる。すなわち、(1)で述べたように、解説に示されている「現代国語」「古典Ⅰ甲」の標準配当単位数に従って点数を配分し、更にいざという時にはスムーズに問題が差し替えられるように問題別の配点を決めるというやり

方である。これは技術的にやむをえない面もあると思われるが、そのためにバランスのとれた正当な国語力の判定が阻害されるということになっては大変である。

(3) 問題の出題方法

ア　設問の種類別の配点について（この項は解答番号を使用する。）

本試験の現代文の配点についてまず考察したい。1～5は客観テスト用に考え出された書き取り問題であるが、1問解くために6個の語彙の意味と文字の知識を必要とする。そういう意味では語彙力テストであり、現代国語の基礎的な能力を問う重要な問題で、豊かな表現力とも関連を持つと考えられる。そういう意味からも13、14の各7点に比し、1～5に各2点しか与えないのは配点が少なすぎるのでないか。次に、9～12に均等に配点がなされているが、文全体の論旨に関する設問と部分の設問を同列に扱うことに問題がある。その意味で、10と12の配点は違うべきでないか。さらに選択肢の問題で1設問に7点、8点という配点をした場合は次善の解答をしたものに適当な中間点を与えるとか、見当違いな解答をした者にマイナスの点を与えるなど、きめの細かい配慮をしないと、正確な能力差が得点に現われてこない恐れがある。また、7とか8とかいう点数にあまり必然性がないようにも思われ、その意味で現代文の配点に緻密さをやや欠いているという印象をうける。

古文、漢文の配点には現代文に比べてきめの細かい配慮が感じられ、ほぼ納得がいくのである。しかも、現代文と古文、漢文の個々の設問の配点のバランスを考えた場合、前項の終りで述べた危惧の念と割り切れない思いが残るのである。

この納得しにくい配点のアンバランスを生じた理由は、少なくとも7～8単位の古典学習を必要とするような古典の問題を出題しておきながら、「古典Ⅰ甲」の標準単位に見合った配点しか与えなかったことにあると思われる。

イ　解答方法について

本試験の6―7―8は、配点表によればまとめて8点とあり、中間点を認めるのかどうか不明確である。配点をもっと明確にしてほしい。なお、この部分は1つ1つに配点した方がよいのではないか。セットにする場合は27のような選択肢を作って答えさせる方法があるのではないか。

(4) 素材としての問題文について

現代文、古文、漢文ともに「古典Ⅰ甲」という範囲に一応目をつぶって、現在の受験生を対象とした問題、という観点から見た場合、本年は本試験、追試験を通じてほぼ無難な出題であったと思われる。昨年の「古典文学入門」、「世間胸算用」のような問題がなく、現在の高校生にオーソドックスな問題として受け止められるような問題が揃えられたのは結構なことであった。

2　範囲と程度、設問数等

(1) 本試験問題の範囲と程度、設問数等

ア　問　題　Ⅰ

評論であり、論旨展開の把握、内容の理解、語彙力等を試すもので、試行テスト以来毎回出題されているものである。問題文はしっかりした論理構造と主張を有し、展開も明快、問題として取り上げうる深い内容を持った語も適当にある、という具合で、素材としてはうってつけのものである。また難易の点、設問の内容（類別）からいっても妥当である。

問1　試行テストからほぼ一貫して出されている形で、よく言えば定着、わるく言えば固定した感じだが、やはり漢字の問題ではよい形式であり、出題の字、選択肢もよいというのが大方の見方だろう。問題番号2はまず誤る者はなかろうが、5字全体で見ては誤りやすい字も含んでいて、適当だと言える。ただ、欲を言うならその語ないし字についての習熟度が低から高へとうまい傾斜をもって取り上げられないかということで、それが果たされたなら一層精度を増すはずである。

問2　6―7―8組み合わせ採点というのはいささか冒険の感じがする。この問題では空所が接近していること、素材が厳密な論理の組み立てになっているという点で納得できるのだが、こういう採点をする場合は、よほど緊密な展開を有するものを選んでいかないと危険であろう。もし組み合わせにするならⅣの問3のように解答の型を用意して選択させるようにした方がすっきりすると思う。更にいかに関連が強いとは言っても2箇所できても0点というのは率直なところ疑問を覚えるので、中間点という考え方を導入してみてはどうだろう。（1の(3)のイ参照）

問3　選択肢中①②③と④⑤とではあまりに差がある。前者はかけはなれてだめな文で存在の意味がないし、④と⑤は逆に接近が甚だし過ぎるのである。こういう場合、8点という高配

点をも考慮に入れて、やはり中間的配点も考えてほしい。

問4　「織物」という比喩の中身のとらえ方が種々あって一つに限定できるかという点では問題なしとしないが、内容の理解・表現方法の適不適の判断を試すという点ではよい問題であり、ふさわしい取り上げ方だと言える。

問5　「逆説」という語意の要素と筆者の意図の読み取りとが問われる形で、論の中心にもかかわるものであって、良問である。

問6　「要旨を問うもの」全体をカバーする問題でしめくくっているのは共感を呼ぶ。ただ、かなり明白であるのが難点と言えば難点である。

まとめ　問3、4で得点差がつく感じなので、それよりはまとめと言うべき問6で差のつく方が望ましいのではないか。またこの問題文の量や配点の多さからだと、設問はもう1問あってもよかったのではないかという気がする。

イ　問　題　Ⅱ

記録・報告の類なのだろうが、感情への傾斜が大きく、特に後半は情緒的表現に流れ、かなり軟らかいものとなっている。従って指導要領の「内容、Bの(2)」では同じ「ウ」内の小説と重なる面が多く、現代文の問題全体としてかなりな軟化という印象が強い。文質からいってもまことに軽く密度の薄い文であると言わざるを得ない。設問数はこの問題文では出題のしようがなかろうというのが正直な感想だ。

問1・2　語彙力の問題と言えようが、あまりに簡単過ぎて紛れようがない。問1の場合は選択肢がばらばらで、用語を吟味するところまで行かない段階で答えが決まってしまうし、問2の場合はなぜこの箇所を問題とするのか合点がいかない。言葉の問題とはならないものだろうし、国語力とはまず無縁と言うべき問題である。

問3　気持ちを聞く問題としてはよいのだが、「免罪符」という比喩が正確な意味で用いられているかどうかがひっかかる。厳密な内容をわきまえた受験者もいるだろうから、そうした確認があって後の出題であることが必要なのではあるまいか。

問4　明確はいいのだが、これではあまりに明確過ぎる。選択肢に工夫がほしい。

問5　問題のある箇所だ。このような厳密さを欠く組み立ての、情緒的な文章にあって指示語の問題というのはどんなものだろう。つまりは指示語をきくような文章ではなく、解答を導く判断のより所が定まらないということである。

問6　要約でしめくくり。平易だが、そのかわり無理がなく、良問と言ってよい。

まとめ　問題文の前半と後半とでは飛躍があり、文章の密度に欠けるなど、素材としてまず問題がある。極言すれば、いくら工夫をこらしても適切な出題はかなわないものであったということになりはしないか。

ウ　問　題　Ⅲ

小説であるが、非常に新しい材料で、驚きに近い新鮮さで迎えられたのではないか。昨年の古文の問題の件もあって、こういう配慮がなされたのだろう。その意図は大いに買うが、しかし必ずしもこだわることはないと考える。むしろそうした用心深さから次第に片寄りが出て来はしまいかということが心配される。規範的な日本文、素材としてしっかり耐え得る文章ということを重く見る姿勢が大事なのではないか。本問題文の場合は、読み取りや鑑賞の力を問うという文学教材の扱いからいってそう外れた選定ではなかったと言えるが、かなり軽いという感じは否めない。

問1　やや易に寄ると思うが、選択肢の文章もそれぞれしっかりした内容をもっており、よい問題である。

問2　前のⅡと合わせて比喩の問題が多いが、この問題は適切であり、「爺っちゃ」の心理の分析から解答に至るということをも兼ねた出題はさすがである。

問3・問4　よい問題である。穴あけはこの程度が望ましく、また初めの方にはもって行かないという配慮もなされていて親切。ただ問4がかなり平易である。

問5　これもかなり易しいが、気持ちをくみ取るという小説読解の基本を行くもので、うなずける。

問6　選択肢の中に1つだけまるで突飛なものがあるが、答えの散らばりも予想されて、よい問題と言える。

まとめ　良問が多いが、易し過ぎる。また、いくら鑑賞教材とは言え〝気持ち〟を問う問題に片寄り過ぎるきらいもある。もっと問題の内容に変化なり幅なりを持たせるべきだろう。(Ⅱでも、またⅣ・Ⅴでも気持ちの問題がかなりある)どうも国語力と言うより、感覚・人間理解の度合いがものを言う問題が多過ぎるようだ。

エ　問　題　Ⅳ

「源家長日記」は教科書に載ることはまず考えられず、受験者にはせいぜいその名が知られている(「徒然草」に出て来る)程度のものではないか。しかし用語や内容の点では決して難解なものとは言えず、更に問題文としているものは部分部分をつないだり、多量の歌を抜き去っ

たりして、筋がよく通るようにまとめており、問題文としてふさわしい形に仕立て得ている。前書き、注ともに適切であり、設問数もよいと思われる。

問1　「この道」(内容)「ありがたし」(古語としての意味)をおさえることを見ようとの問題で、好適である。ただ、選択肢では「来し方行く末」の解釈で正答が決定されてしまう点がやや問題である。

問2　「させむ」に文法的なものを見、「きはめはて」に語彙力を見ようということで、Ⅰ甲的な出題としてはこの程度のものが適当であろう。

問3　内容を理解し、流れを正しくたどるということを見る、よい問題である。ⓒの前の部分を正しく読み取らないと誤るということもあってさらによくなっている。

問4　前問ⓐもそうだが、前書きや注を活用できるという要素もあり、また文脈を正確にたどることが必要な点、誤答をも呼び得る点等なかなかの好問と言える。

問5　問題文中から29の解答が導ける面があったりして、まず妥当というところ。ただ、文学史の問題は出し易いだけに安易な出題とならないよう注意が必要であろう。

問6　古語の理解が中心で、古文の本道を行く問題。選択肢もよくこなされている。

まとめ　妥当な問題文、設問だと言ってよい。基礎的な古文の力を見ることができる点、出題にも多種にわたるようにとの心くばりが見られる点などからである。

オ　問　題　Ⅴ

出典という点ではきわめて特殊なものだが、内容・程度からすればそう難解でもなく、妥当な問題文となるだろう。古文や漢文の問題文はこうなることが当然のなり行きと納得されるし、今後もこうした路線を取ってほしいというのが大方の心情であろう。ただ、出典が出典なので、前書きに解題的な説明があってもよかったと思う。

問1　漢字のよみだが、語彙力も見ていて、漢文の問題として好ましい傾向だ。

問2　「行」を〝人生〟と取るのには本文全体の理解が必要で、難問ながらよい問題である。〝業績〟とまちがえる者が相当数に上ると予想される。

問3　選択肢もよくねられており、良問である。難易度からいっても妥当。

問4　次の語句との関係（対）に気づかせるということ、句法要素たる「雖」があることで、そう難しくはないながら、漢文らしい確かな問題となり得ている。

問5　正答の「死生命有り」が問題文からたどれず、惑わせるもととなっている。問題文べったりでない思考をという意図はわかるが、かなりの難問である。

問6　「安」がすべて同じ選択肢では、出題の意図がぼやけてしまわないか。

まとめ　正統的漢文で、昨年の問題に比し素材選定の冴えが見られる。選択肢の数が6ということも併せて、問題はやや難でなかったかと思われる。

(2)　追試験問題の範囲と程度、設問等

ア　問題Ⅰ　達意の文章とは言い難い。同義の語句を注意深く読み取らねば理解できない点、又「実用と美」の関係を「矛盾」とする作者の常識を理解することが困難な点等、問題文としては不適当である。

問1　出題形式は妥当だが、本試験に比べるとずいぶんやさしくなっている。

問2　空欄は中程からが適当であろう。出題形式としては問題がある。

問3　「実用と美」の関係を「矛盾しあいながら、むすばれあっている概念」とする作者の判断を読み取れる受験生は少ないであろう。また、選択肢は③だけが異質でうきあがっており、逆に問題文ぬきで正解の出る可能性もある。

問4　頻出する同義語にまどわされてむずかしい。言い換えられた語句をしっかり理解しているかどうかが鍵になる出題である。問5、問6も全く同様である。

まとめ　作者の意図が同義語の頻出によってとらえにくい、生硬な文章である。問題作成には便利であろうが、「共通第1次学力試験」の現代国語としては感心しない。

イ　問題Ⅱ　本試験に比べると格段にむずかしい。良くできた問題ではあるが、Ⅲの文学鑑賞問題と性格が似ており、「記録・報告文」の要素が少ない点、登場人物の心理測定にかたよりすぎている点に問題がある。

問1　語彙力をためす問としては、今の受験生には難問ではなかろうか。

問2　Ⅰの問3と同傾向の出題である。現代の若者の気質を測定する問題として興味深い設問といえる。

問3　適切な問だが、④に集中するのではないか。この種の問題は、国語力をみるというより、人間としての成熟の度合いを見るといった性格が強い。受験生としては対応に苦慮する問題といえよう。

問4　これも意外にむずかしい問題になるのではないか。「あの人」のイメージが強すぎるのである。また、Ⅰの問3と同様に選択肢②だけが「あの人」を含まぬのも、気にかかるところである。

問5　これも難問であろう。②と④に誘導されやすく、問6へのひろがりを持って読み取らなければ、正解はおぼつかない。

問6　問5でつまずくとまず⑤にかたよってしまう。問5同様適切な出題である。

まとめ　現代国語3題中最もむつかしい。問題文自体の密度も高く、設問のきめも細かい。難点を言えば、本試験とあまりにも問題文の質がちがいすぎる点である。

ウ　問題Ⅲ　本試験のⅢに比べると、全文段落が無いという点、登場人物が年配者であって、微妙な言葉のやりとりをしている点、きわだってむつかしくなっている。ある程度はそろえて欲しいものである。

問1　語彙力の問題といえばそれまでだが、クイズのような気がする。もっと基本的な国語力測定問題は作れないものか。

問2　慣用句の知識を問う設問として適切。しかし選択肢がⅠの問3、Ⅱの問4のように正答、誤答差のありすぎるのが難点である。

問3　先生の口調やエピソードから人柄を判断するには、ある程度の人生経験を必要とする。本試験に比べるとむずかしいであろう。

問4　「この小鳥はS先生にあげよう」が意外に強く文章の底に流れていることを多くの受験生は見落してしまうであろう。

問5　問3と同様にむずかしいのではないか。

問6　選択肢の文章も適切であり良問である。

まとめ　難易の差のはげしい設問がならんでいる。1、2、6が容易であるのに対し、3、4、5がむつかしい。本試験とのバランスも考慮していただきたいし心理分析にかたよらぬ出題も希望したい。

エ　問題Ⅳ　解題と注が欲しい問題である。問1の成果が、後の問すべてに及ぶのも問題があるし、また配点の指示があいまいである。自己採点によらざるを得ない以上、当然のことではなかろうか。

問1　人間関係をつかませる目的で、解題、注等一切省略したのであろうが、この問題はすでに「古典Ⅰ甲」の範囲を超えている。ある程度の手掛かりは与えるべきである。ここでつまずいた場合、後の設問への影響が大きい。

問2　語彙力と内容の理解を見る問題である。学力差が明確になるという点では妥当な出題といえよう。

問3　結婚話であることに気づかなければできない。その点を読みとる事が要求されているのであろうが、問題文だけでは一般に無理なようだ。

問4　良い問題だがむずかしい。このあたりの心理については、まず文章全体の正しい解題が前提となる。古典Ⅱクラスであろう。

問5　「我まま」の解釈をめぐって解釈のわかれるところ。選択肢が②～④と①、⑤の2グループにわかれすぎるというのが難点か。

問6　これも問Ⅰのわからぬ受験生には難問。

まとめ　文法力、語彙力等を総合した上で選択させるといった工夫のこらされている出題だ。しかし、古典Ⅰ甲の範囲では無理な出題ではなかろうか。また問1の理解がかなめとなっていて、全部良いか、または悪いか式の出題となっている点に問題がある。

オ　問題Ⅴ　解説、注共に適切である。しかし、荘子という書物自体が、「古典Ⅰ甲」漢文の中では参考程度のあつかいであり、又その思想も異質なので、本試験に比べると、その分だけむずかしくなっている。

問1　本試験と同じ問題になってしまった。偶然であろうが、避けた方がよい。

問2　荘子の理解をためす設問として良問である。

問3　「応」の解釈を見る問題の選択肢にも工夫がうかがわれて良問である。

問4　対句になっている点に気づくだけでもできる問題だが、荘子の主題になじまない受験生は、でたらめに解答する以外にない。基礎的な修辞力を見る問として良い。

問5　主題をつかんだものだけが、ゴールに到達できるようよく工夫されている。良問である。

問6　要旨を問う問題である。読解力のみならず、思索力も要求している良問である。

まとめ　問題文のレベルも高く、設問も念入りに作られているので、かなりむずかしい出題となった。本試験との差をあまり感じさせない良い問題であるが、古文でふれた如く、「古典Ⅰ甲」の範囲を越えているように思われる。

以上、追試験は本試験に比較して、かなりむずかしくなっている点に特徴がある。特に条件の悪い受験生を対象とする以上、バランスの取れた出題を考えるべきではなかろうか。

3 そ の 他

(1) 「国語」の問題の形について

すでに本報告書の随所で述べてきたことであるが、現在の大学受験生の実態からいって、学習指導要領で規定されているところの「古典Ⅰ甲」は、はたして入試問題たりうるのかということである。わたくしは、ここで古典の問題を難しくすることを提案しているのではない。むしろ、本年の問題などは少し難しすぎると思っているくらいである。ただ、受験生の大部分が「古典Ⅰ乙」を履修し、さらには「古典Ⅱ」を履修してきているのである。むしろ「古典Ⅰ乙」を試験科目とし、英語、理科、数学のように特別措置として「古典Ⅰ甲」でも受験できる、といったような方法をとることはできないものであろうか。今後の検討を望みたい。

(2) 共通第1次学力試験の性格について

今更らしくこういう問題をとり上げるのは、大学入試センター側のたいへんなご努力とP・Rにもかかわらず、今一つ不明確であり、わかりにくい面があるからである。

昭和55年度版の「新しい大学入試」3ページには、次のようにある。

「共通第1次学力試験では、生徒として必要な基礎的、一般的な学力を全国公立大学が共通の問題で見定めようとするのであり、第2次試験では、各大学、学部・学科にふさわしい適性資質をみるため、それぞれの大学が独自のかたちで、いろいろな角度からそれを行なうこととしています。そして、共通第1次学力試験と第2次試験との結果を総合して合格者を判定するのですが、両者をどのような比重で総合するか、更に前者の各教科・科目の比重をどうするか、また、後者のそれぞれのテストの比重をどうするかなどは、すべて各大学がその個性に従って、独自に定めることになっています。」

実は、ここのところが1次試験の性格をあいまいなものにしているのである。資格試験なのか、選抜試験なのか。上の文は、1次試験が両方、いずれにも使われうることを示している。そして、このことが「国語」の科目選定にも微妙に影を落していると思われるのである。

資格試験ならば、受験者の平均点をそれほど気にする必要はないのである。一定のレベルに達しているかどうかをみればよいのである。そのかわり、総合得点の高いものがそれより低いものより学力的に優っているということには必ずしもならないのである。

しかし、選抜試験ならば、入試センターがいわれるように平均点がどの教科、科目も大体60点あたりに揃っていることが理想であり、そうでなければ総合得点で学力を正当に判定することはできないであろう。

前者ならば、「国語科」の試験科目は現行どおりでもよいであろう。各大学の個性に従って2次試験をすればよいからである。しかし、後者ならば、古典に関する科目の選定が、現在の高校の現場の実態にそぐわないものになっていると思われるのである。したがって建て前上「現代国語」7、「古典Ⅰ甲」3、という配点に縛られる一方で、平均点60点の問題を作成しなければならぬ必要上、「古典Ⅰ乙」あるいは「古典Ⅱ」程度のレベルの問題を出しておきながら、これを「古典Ⅰ甲」の問題だと強弁しなければならなくなるのである。そのために、実際は「現代国語」と同じか、それ以上の時間をかけた古典に関する科目の学習活動項目については、これをほぼ網羅するような出題は配点上不可能になり、現代文との間に、設問数、設問ごとの配点、問題の難易その他の点でアンバランスを生ずるという矛盾を冒すことになるのである。

(2) 教育研究団体の意見・評価

① 日本国語教育学会

国語（本試験）は、おおむね妥当な、素直な問題であると考えられる。特に前年度の問題に比べて、出典の選定、問題文の長さ、設問の量と質などの面に工夫・改良を加えた跡がうかがわれる。作題委員会の委員諸氏に、まず敬意を表しておきたい。

全般的に見て、教科書を中心にした学習を徹底し、授業を通して基本的な知識や応用しうる実力を身につけていれば、十分に対応できる問題であると思われる。

以下、各問題についての所感を記したい。

Ⅰ　評論文の読解力を見る問題である。

キイ・ワードをしっかりおさえ、論理の展開に注意して読んでゆけば、解ける問題である。空所補入の箇所も、この程度ならば無難であろう。全体的な設問と部分的な設問との調和もとれており、論理的な文章の読解力を見る問題としては、大体適当であると言える。特に、問5・問6のような、文章全体の正しい把握を求める設問は、ぜひとも必要である。

Ⅱ　随筆的な文章の読解力を見る問題である。

問１・問２は選択肢に、やや無理なものが目立ちすぎはしないか。例えば、問１の④⑤、問２の④⑤などである。問３・問６のような、文章全体の正しい把握を求める設問は望ましい。

Ⅲ　小説の読解力を見る問題である。

設問も全体的に練られているように思う。なお、Ⅰ～Ⅲを通じて言えることであるが、出典が高等学校の国語の教科書や参考書・問題集などに、ほとんど（あるいは全く）とられていないものなので、その点で公平だと言えよう。

Ⅳ　古文の読解力を見る問題である。

高校生としてはまず読むことのない出典からの問題であるが、設問は適当であり、前書きによって理解もし易くなっている。問３のような、文脈の展開に即した設問は、工夫の跡がうかがわれる。

ただ、前年度の「意見」にも書いたが、建て前としての「古典Ⅰ甲」という出題範囲からは、どう考えてもはみ出している。「古典Ⅰ乙」ならば全く妥当な出題といえよう。

小さなことで恐縮であるが、問６の設問にのみ「解釈としては」の「は」があり、問１・問２にはない。なぜであろうか。また、文法的な設問がないが、読解と関連するような箇所で設けてもよかったのではないか。

なお、本文は書陵部蔵粘葉本を底本とし、後藤氏蔵阿波国文庫本、神宮文庫本で校合したのであろうが、読本とも「花山の僧正」は「はなの山の僧正」、「給ひけるを」は「たまはられるを」であり、「よろづにくからぬかたは」の前には「おりたち」がある。改変の意図が分らない。

Ⅴ　漢文の読解力を見る問題である。

前年度とほぼ同程度の問題であり、適当であったように思う。設問もオーソドックスであり、特に難問・奇問はない。中でも、問４・問５などは文脈の展開に即した設問であり、工夫のあとがうかがわれる。

②　全国高等学校国語教育研究連合会

1　本試験について

〔総　評〕

現代国語、古文とも一部を除いてほぼよい問題であり、とくに古文は昨年度よりよい。現代国語はあまり文学的にかたよっていない点がよいが、問題Ⅱ・Ⅲはすこし軽すぎないか。今回のⅡ・Ⅲはもうすこしコクのある問題文がほしかった。この点、Ⅱは追試の伊藤整の文章のほうがよかったのではないか。

次に現代国語・古典の配点であるが、同じような程度、むしろ古典のほうがむずかしい設問を解いて、古典が現代国語の半分という配点はもうすこし考慮していただけないか。たしかに文部省の指導の古典Ⅰ甲の範囲ということになれば、単位上140点対60点ということになるのかもしれないが、問題自身は古典Ⅰ甲の学習では多分解きえないものであり、大多数の高校では総単位の半分内外を古典に割いている現状、及び日本語及び日本の伝統文化を考えるための基礎になる学習という見地からみて、ぜひとも配点を120点対80点に改めていただくよう希望する。

〔各問題について〕

問題Ⅰ　問題文は適切だと思う。ただしこの出典は頻出作品としてすでに多くの大学に出題されている。今回は既出の部分ではなかったからよかったが、このように各受験出版社や予備校で注目されている作品からとる場合は充分注意してほしい、というよりは注目の頻出作品からは出題しないほうが無難ではなかろうか。

問１　書取。出題形式はよし。しかし選択なのだからもうすこし難しくしてはどうか。

問２　接続詞・副詞の補入は、思いがけない形が出、それも一理あることがあって、学力を測ることは無理な場合が多い。やめてほしい。

問３～６　妥当。よい問題である。

問題Ⅱ　問題文が平易すぎる。

問１～３　このような、ことばに関する問題は大変よいと思う。

問４～６　選択肢がやさしすぎる。誰でもできるのではないか。とくに問４は公立高校入試級。

問題Ⅲ　受験技術ばかり学んでいる受験生に、常識と感性を試す……といった面ではいい問題なのかもしれないが、大学受験の国語力を試す問題とは思えない。かなり感性的面の強い問題文であり、設問のように思える。文学作品といっても、やはり知性と感性及び国語力が試せるような問題文及び設問がほしい。たとえばこの文章でも、文体や作者及び語り手の態度などが設問になるのでは？

問題Ⅳ　古典Ⅰ甲の学習では少々無理、という点を除けばまことによい問題である。なお、日本の古典の伝統及び鑑賞という面から、和歌に関する設問が一つほしい。

問題Ⅴ　内容、長さともほぼ妥当な問題文かと思われるが、設問で、問1、問6は余り内容上と関係なく解ける問題であり、もう一工夫ほしいと思われる。

問1～2　語句の意味だけを問う設問。

問4　選択肢に工夫はあるが、余り良問とは言えない。

問5　古典Ⅰ甲の者にはむずかしいのではないか。

問6　意味が問題ではないか。

2　追試験について

〔総　評〕

古文が少し難しすぎ、Ⅰの評論が本試験よりやさしい。またⅡ・Ⅲが本試験と違って戦前の作家の名文なので、全体として本試験よりも文系の生徒に有利の観がある。本試験と追試験は、なるべく公平になるように出題していただきたい。その他の点については、古文が難しすぎる点を除けば、なかなかよい問題であったと思う。

〔各問題について〕

問題Ⅰ　問題文は、本試験よりやさしいが、非常によいと思う。このていどの問題文のほうが、共通1次としてはよいのではなかろうか。

問1　書取。本試験5問なのに追試験4問はなぜか？5問はほしいところ。

問2～6　無理なく、考えさせる良問。

問題Ⅱ　問題文がすこし長いが、よい文章だと思う。ただし、設問のいくつかは上乗とはいえない。

問1～3　よい設問だと思う。

問4　高校入試ていどの設問。大体、問うても問わなくてもよいところなのではないか。

問5　⑤がほんとうに正解なのか。

出典の題名によればそうなのかもしれないが、この部分は⑤のようなつもりで書いたのかどうか、疑問が残る。

問題Ⅲ　文章も設問もよいと思う。

問題Ⅳ　古典Ⅰ甲の学習程度の範囲をかなり超えていると思う。どういう話の内容かは、多分古典Ⅱまでしっかり学習した生徒でなくては、つかめなかったのではなかろうか。多分、予備テストを含めて、最高の難問であったろう。筋さえつかめれば、すべての設問は解けていくので、本質的にはなかなかの良問なのである。

もうすこしやさしく内容がつかめた上で、部分的にでも（たとえば語釈・文法・文学史）学習の成果が点になるような問題が望ましい。

問題Ⅴ　論理性が有るだけに本試験よりややむずかしいと思われる。設問は本試験より内容の理解度をみるという点ですぐれている。

問1　意味が理解できなくても読める訓読の問題は、良問とは言えないと思う。

問2～6　よい問題だと思う。

(3)　問題作成部会の見解

1　試験問題の構成と配点の基準

昭和55年度の共通第1次学力試験の問題構成並びに配点基準は、本試験、追試験ともに54年度の共通第1次学力試験における方針を全面的に踏襲した。つまり、5問題で200点の配点中、現代国語3問題140点、古文1問題30点、漢文1問題30点とした。これは、前年度の報告書でもふれているとおり、高等学校学習指導要領に示される現代国語と古典Ⅰ甲の標準単位をもとに配分したものである。

すでに、前年度から、現代国語への比重がおもすぎるという意見が出ており、本部会でも現代国語の小問1問の配点と、古典の小問1問の配点との間の不均衡が目立ちすぎるとの意見もあったが、

指導要領に準拠するという原則を破るには至らず、前年度からの検討課題をそのまま来年度に持ちこすことになってしまった。この問題は、ひとえに高等学校の学習の実態をどう把握するかにかかっており、指導要領という条文化された基本方針を、部分的調査に基づく意見によって変更するのがいかに困難かということをもの語っている。こうした現代国語偏重は、国公立大学を志望する受験生の高等学校における学習の実態にそぐわないという評も、一理あるものと思われる。

2　問題の素材と配列

現代国語の3問題の素材は、文脈のはっきりした論理的な評論文、感性的な色調の濃い文学作品、それにその中間的性格を持つ随想ふうの文章に求めるのがもっとも自然だと考えた。今年度は、素材として、本試験には、Ⅰに中村雄二郎「哲学の現在」、Ⅱに光瀬龍「ロン先生の虫眼鏡」、Ⅲに三浦哲郎「鳥寄せ」を、追試験には、Ⅰに久野収「歴史主義と反歴史主義」、Ⅱに伊藤整「草木の憂い」、Ⅲに網野菊「白文鳥」を、それぞれ採用した。本試験、追試験ともに、Ⅰは評論文、Ⅱは随想文、Ⅲは小説という組み合わせで、前述の三傾向の文章を網羅したつもりである。詩など韻文に素材を求める案も出たが、問題数に限りがあるために実現に至らなかった。

本試験のⅡの素材については、いささか論理的な対応に曖昧なところがあり、問題文として不適当であるとの評が出たが、前述の中間的性格がわざわいしたものとも考えられる。問自体に欠陥はないが、一考を要する問題ではあろう。ただ、光瀬龍の文章は高校生が慣れ親しんでいるものであり、楽な気持ちで問題に取り組めた功は認められるべきであろう。さらに、本試験のⅡとⅢとが現在的文章であるため、新鮮だという好評を得た反面、新奇を追わずにすでに評価の定まった正統的な文章に材を取るべきだとの批評もあった。問題作成の技術的な面からすれば、新しい文章の方が、教科書収録済みの文章や他の試験問題文と重複する可能性が少ないという利点もあり、既成の知識を問うことに重点をおかず、読解力を試す立場からすれば、文章の新旧より、文章の確かさに議論の的をしぼるべきであろう。重複を避け、高等学校の学習の実態を離れず、しかも内容表現ともに適切・的確な文章を選定するのは想像以上に困難な作業であるが、素材選択の適否がただちに問題の良否にかかわることを考えると、今後ともよりよい素材の選定に努力を重ねなければならない。ただ、いたずらに新奇をてらったものではないことを申し添えておく。

古文は、本試験は「源家長日記」から、追試験は「夜の寝覚」から、また、漢文は、本試験は「法蔵砕金録」から、追試験は「荘子」からそれぞれ問題文を採用した。これらは必ずしも教科書

等で受験生になじみ深い作品とは言い難いが、古典の基礎的学力があれば、十分理解し得る程度のもので、いずれもきわめて好評であった。限りある古典のなか、しかも先行問題との重複を避けながらの出題は、試行錯誤の連続であったが、今回はその苦労がいささか実を結んだもののように思われる。ただ、高等学校側から、配点ばかりでなく、問題の難易度も現代文と古典とではバランスを欠き、「古典Ⅰ甲」の範囲を逸脱した疑いのある難問もあるとの指摘を受けているのは気がかりである。周知のとおり、古典に限らず国語は発展段階の区分が必ずしも明瞭でなく、試験問題の難易度も平均点などの結果として把握される場合が多い。作問技術上の問題もあって、結果的には高等学校側の指摘するとおりのものとなってしまった。経験を積み重ねて解消していかなければならない課題であろう。

また、全体的に本試験より追試験の方が難かしかったという批評もあったが、問題作成の手順は、各問題をそれぞれ作成したのちに、難易の差のないように組み合わせているつもりであり、そんなに大きな差はないはずである。追試験は受験生の数も少なく、その平均点を本試験のそれと対比してみることはほとんど意味がないのではないか。追試験の方を難かしくする意図など毛頭なかったことだけは、明らかにしておく必要があろう。

3　出題意図・設問形式及び解答結果

(1)　本試験について

問　題　Ⅰ

問1　文意把握との関連を考慮に入れて、漢字の習熟度・応用力を問うもので、選択肢は音訓両様をもって構成した。正答率は(イ)、(エ)がきわめて高く、(ア)、(ウ)は低かった。漢字の字形は知っていても、意味の理解に問題のあることを示している。なお、高等学校側から、「語ないし字についての習熟度が低から高へとうまい傾斜をもって取り上げられないか」との意見も出ているが、限られた分量で切らざるを得ない問題文のなかで、そうした出題をすること自体、至難のわざである。その点を重視するとすれば、文脈のなかで漢字を理解するという形式を捨てざるを得ないだろう。

問2　文脈に沿った論旨の把握度を、接続詞による空欄補充の形で問うものである。とくに当該段落は、第二文以下がすべて接続詞または指示語で始まる文から成り、それらの語によって論の展開する方向が示 されている。正答率が予想を下回ったのは、3つとも正解でなければ得

点にならないという解答形式に原因があり、配点については再考の余地があるかもしれない。

問３　論旨の展開について、空欄に一文に近い内容の句を補充する形式で問うものである。受験生の多くが論旨を的確に把握しながら文脈をたどることができたため、正答率は高かった。

問４　比喩の内容を論旨に即して正確に把握できたかどうかを問うものである。部分的ではあるが、表現の内容に深くかかわる設問であったが、正答率は予想を下回った。選択肢の文意に一見紛らわしいものがあったためであろうか。

問５　文中に示された筆者の考え方を把握できるかどうかを問うものである。事柄自体が今日的な問題であるだけに、「逆説」の語意を正当に理解していれば、さほど難解ではあるまい。正当率は比較的高かった。

問６　全体の趣意の十全なる把握を前提として、論旨を問うものである。正答率はきわめて高く、正答の選択肢の文章には、いますこし工夫が必要だったかもしれない。

問　題　Ⅱ

問１　語句の意味、用法についての基礎的な能力が身についているかどうかを、空欄補充の形式で問うものである。正答率はきわめて高かった。大学に必要な基礎学力を知る上に必要な問いであろう。

問２　前問同様の形式であるが、修飾語と被修飾語が意味の上で矛盾しないかどうかを問うものである。これも正答率はきわめて高かった。

問３　「免罪符」「踏み絵」という比喩的な表現を、文脈の展開に即して解釈し得るかどうかを問うものである。原文の「免罪符」の用い方が史実に照らして不的確 ではないかとの疑問も出ているが、それは免罪符が売買されたという点に拘泥しすぎるためであろう。正答率はかなり高かった。なお、誤答に⑤が多かったのは、この段落が「私」の気持ちの追求であることを離れ、倫理的な解釈を加えたためであろう。

問４　抽象的な表現の意味を、具体的に問うものである。かなり慣習的な表現であったためか、正答率はきわめて高く、誤答の選択肢に一工夫あってしかるべきだったかもしれない。

問５　指示語の指示する内容を、文脈の展開を分析的に確認しながら、正確に把握する力を問うものである。正答の当否をめぐって一部に批判がでて いるが、以下正答(ウ)が導き出される理由を述べてみる。一般には大自然は「きびしく、覇王のようにおそろしい」存在である。それが「優しい」存在になる条件は、何に気づく時かという問いなのである。(ア)は大自然が優しくなった結果である。すなわち、(ア)の文は、以下の段落が終わるまでの文脈の論旨と到

叙的関係にある。つまり、「大自然はいい」という命題が成立する理由を、以下に分析的に述べていて、自然がその様相を変えるほどの条件としては不足である。問題文の10ページ７～８行目にも「それらで示される万化の生命の様相」を知りたかったのだとある。「万化の生命の様相」を知るとは、(ウ)の「それらの生命の交響を見聞し、かれらのみずみずしい心に触れること」である。したがって、当然(ウ)が正答となる。ただ指示語の曖昧さは、随想的な文章に多く認められる傾向であって、出題に多少無理があったのかもしれない。正当率は、Ⅱの問いの中ではもっとも低かった。

問６　筆者の表現しようとする内容を、文章全体の展開から理解する力があるかどうかを問うものである。正答率はかなり高く、出題の意図は十分に理解されたと思われるが、この問いは後半の文章の総括として設けられたものであることにも注意しなければならない。

問　題　Ⅲ

問１　作中人物のその場の心情を問うものである。正答率はきわめて高かったが、誤答の選択肢に一工夫必要だったかもしれない。

問２　小説中のその場面を正確に理解した上で、比喩の内容を問うものである。文学作品を問題文とする以上、修辞に関する設問が必要だと考えた。この問題中ではもっとも正答率は低かった。

問３　空欄補充の形式により、作中人物の心理を問うものである。こうした設問形式については従来から批判もあるが、適当な配慮のもとに出題されるならば、必ずしも不適切な形式とはいえないと考える。ほぼ予想どおりの正答率を得た。

問４　前問同様の形式により、作中人物の心情を問うものである。前後関係から、ここの空欄に入り得る言葉が限定されていたため、すこぶる平易な問いになってしまった。もちろん、正答率もきわめて高かった。

問５　父が鳥になり、その鳥を笛で呼び寄せ、笛がなくなったときに鳥を捕まえるために霞網を借りるというこの小説の重要な趣向を問うものである。小説読解の本道に拠った問いであるが、正答率はかなり高かった。

問６　問題文全体の鑑賞をふまえて、主人公の心情を問うものである。各選択肢の表現上の工夫が実ってか、解答が分散し、解答率はほぼ期待どおりであった。問題Ⅲ全体としては、正答率が予想をはるかに上まわってしまった。文学作品の鑑賞を中心とした問題は、深い読みを要求すればきわめて難かしいものになってしまうおそれがある。だが、客観的におさえら

れるところだけを問えば、今回のように平易にすぎることになる。なお、「気持ち」を問う問題に片寄りすぎているという批判は傾聴に価するもので、今後の参考にしていく必要があろう。

問　題　Ⅳ

問１　傍線部の解釈を問うものである。正答率はきわめて高かった。

問２　前問同様の問いである。これも正答率はかなり高かった。

問３　文脈の展開に即して内容の把握力を問うものである。あらかじめ主語の組み合わせを提示する方法と合わせて、好評であったが、正答率は高いとはいえない。誤答では⑥が多かった。

問４　作中人物の「気持ち」を問うものだが、問題文の正確な理解が前提となっている。誤答では②と答えたものが多かったが、「勅判」に対する理解が不十分なためだろう。注も問題のうちであることを忘れてはならない。正答率は予想外に低かった。

問５　問題文に即して、文学史の知識を問うものである。昨年度の反省点でもあったが、単なる知識を問うことにわずかながら批判もあった。ただ、いわば常識に近い知識は要求されてしかるべきではないか。(ア)と(イ)との正答率にかなりのへだたりがあったのは、定家―新古今の常識さえいまだ身につけていないことを示している。

問６　傍線部の解釈を問うものである。正答率が低いのは、「ものし」「いかさまに」といった基本的な言葉の用法に習熟していないことをもの語っている。

問　題　Ⅴ

問１　「易」の字音と意味の関連を問うものである。イ―やすし、エキ―かえる。かわるの相違を明確に理解しているかどうかをたずねた。正答率が期待どおりだったのは、平易な熟語の組み合わせが妥当であったためだろう。語彙力を試す好ましい問いと好評であった。

問２　「名行」の「行」の意味内容、並びに「相副」の語意を問うものである。正答率はきわめて低く、「行」→行動→人生という解釈の筋道が少し難かしかったようだ。だが、本文全体の趣旨を正確に捉えれば、「生き方」がポイントであることに気づくはずである。

問３　詩中の２句にこめられた作者の感慨を問うものである。詩全体の読みが浅く、正答率はきわめて低かった。誤答では③が多かったが、「不覚」「忽」の語から、知らぬ間にとしをとってしまったことに気づいた「驚き」ととるのがもっとも自然である。

問４　空欄補充の形式で、文脈の読みとりの正確さと対句に対する基礎知識を問うものである。

誤答は②と③が多く、白髪を嘆くという漢詩の先入観が強く働いて、まったく内容を理解していない。正答率は予想どおりであった。

問５　文「詩句」の趣旨を、他の成語・短文の意味と同定することを問うものである。正答率は問題Ⅴの中でもっとも低かった。二重否定の働き、本文全体の内容を正しく捉えないと正答が出ない。

問６　漢文の基本的な訓読法を問うもので、正答率は予想どおり高かった。

(2)　追試験について

問　題　Ⅰ

問１　本試験問題Ⅰ問１と形式もねらいも同様の設問。(ア)を除いて、正答率はきわめて高かった。

問２・問３・問４　文脈の把握を空欄補充の形式で問うもの。接続詞補充の場合とはやや異なり、細心の注意が要求される。正答率はほぼ期待どおりであったが、こうした曲折の多い文章の場合、空欄はできるだけ問題文の後半に設けた方が穏当かもしれない。

問５　論の対象に直接かかわる語句の内容を正確に理解しているかどうかを問うもの。この種の問いとしては、正答率はきわめて高かった。

問６　全体の趣旨を問うもの。正答率は比較的高かった。

問　題　Ⅱ

問１　文の構成の基本的理解力を問うもの。逆接の接続助詞の用法に注意し、対応している文中の表現の一方を推測すれば、正答は容易に得られるはずであるが、正答率は意外に低かった。

問２　文脈の展開上、必然的に要求される表現を問うもの。正答率は予想どおりであった。

問３　文脈の展開に即して、筆者の表現の意図をより深く問うもの。正答率はかなり高かった。

問４　文中の表現の根拠を問うもの。正答の選択肢だけに「あの人」が含まれていなかった点、工夫が足りなかったかもしれない。正答率はやや低かった。

問５　筆者の表現の意図を問うもの。出題の意図が設問の文に十分に表現しきれなかったうらみが残る。

問６　問題文全体の趣旨が理解できているかどうかを問うもの。正答率はかなり高かった。

問　題　Ⅲ

問１　空欄補充の形式で、比喩の理解度を問うもの。予想どおりの正答率である。

問２　前問と同形式で、慣用句の知識を問うもの。文学作品を材料とした場合、前問とともに基本的で適切な設問であったと思われる。

問３　文脈に即した適切な表現のよりどころを、空欄補充の形式で問うもの。登場人物相互の人間関係が理解できていないと正答は得られない。

問４　主人公の気持ちを問うもの。常套的な設問だが、やはり重要だろう。

問５　同じく登場人物の気持ちを問うもの。正答があまり平凡だったため、逆に答えにくかったかもしれない。

問６　この小説の文章の特色を問うもの。正答率はかなり高かった。

問　題　Ⅳ

問１　文脈を正しく把握できるかどうかを問うもの。登場人物の関係、状況の理解を助けようとする意図もあった。新しい形式だったが、好評であった。

問２　古文読解の上で基本的な語彙を、空欄補充の形式で問うもの。

問３　全文の理解度を問うものだが、正答率は低かった。

問４　傍線部の解釈を問うもの。本文全体を正しく理解していなければ正答は得られず、問題Ⅳ中、もっとも正答率は低かった。

問５　傍線部の内容を問うものだが、やはり全文の読みが正確でないと解答できない。正答率は比較的高かった。

問６　傍線部の心理を問うもの。正答率は予想外に低かった。誤答は①を除いて、③、④、⑤にわたっていたが、これは文脈のなかで答を捉えなかったためだろうか。全体として、登場人物すべてを対象とするよう、また設問形式も単なる文章解釈のみに偏らないよう配慮したつもりであるが、結果的に本試験Ⅳより難問だったようである。

問　題　Ⅴ

問１　漢文訓読のきまりを問うもの。正答率が意外に低いのは、「安得」の読みが正しく理解されていないためであろう。また、偶然のことながら、「安得」の訓を問う問題が本試験Ⅴ問６にも出ており、今後こうしたことの起こらぬよう注意すべきであろう。

問２　本文全体を読みとり、この寓話の中心的な事柄を問うもの。正答率は予想どおりで、妥当な問いであったことを示している。

問３　やや抽象的な文章の解釈を問うもの。選択肢に工夫があって良問との評があり、期待どおりの正答率を得た。

問４　空欄補充の形式で、対偶法の基礎知識を応用しながら文脈の正確な読みとりを問うもの。正答率は、この問いがやや難問に属することを示しており、結局輪扁の比喩を理解し得ない者がかなりいたことをもの語っている。

問５　前問同様に内容把握の問題。正答率は、この問いの妥当性を示している。

問６　本文全体の趣旨を問うもの。比較的長文の選択肢から正答を選ばせているが、問題Ⅴ中で正答率がもっとも高く、この「荘子」の寓話が受験生の理解の範囲を超えるものでないことをもの語っている。

社　　会

倫 理 ・ 社 会

(1)　高等学校教科担当教員の意見・評価

1　構 成 と 内 容

(1)　本試験問題の構成と内容

ア　構　　成

a　本試験問題は、各分野にわたって出題されようとした意図は伺えるが、「現代社会の特質」「日本における近代思想の展開」「現代日本人の課題」といった倫・社学習上重要と考えられる部分が欠けている。倫・社の目標をふまえて問題の作成をするように考慮してもらいたい。

b　「現代と人間」と「人生観・世界観」の分野の出題比率は33対67、配点比率は30対70となっていておおむね適当である。

c　倫・社の科目は、単なる事実の追求や知識の記憶だけに終わるものではなく、『ものの考え方の基本的問題』の指導がいちばん問われるのである。この点を生かした出題が随所にみられおおむね適当であり、好ましい方向として評価できる。

d　問題作成に当たっては、学習指導要領で示している「さまざまなとり上げ方」を取り入れる工夫を今後とも考慮してもらいたい。

e　記憶中心にならないために、学習指導要領で示している「ものの考え方の基本的問題」を取り上げて出題することは、今後とも続けてもらいたい。

f　「現代と人間」においては、心理学とか社会学プロパーの問題でなく、さらに、倫・社的傾斜への発展的出題としてほしい。

g　「高等学校の教育を乱すことのないよう配慮しなければならない」という考えから、教科書を尊重し、一般的・基礎的な学習の達成度を判定するよう努力してほしい。

イ　内　　容

a　全般的にみれば、難問・奇問は少なく、倫・社の基本的問題に忠実に出題されており、素

直な易しい問題で適切である。

b　選択肢の中には、教科書にない語句や、倫・社の学習では判定が困難と思われる文章がみられる。たとえ正答でなくとも適切でない。推理を要求する場合といえども、当て推量にならないようにしてもらいたい。

c　以下各問題について感想と要望を記す。

○　本問題「Ⅰ」について

「青年期と人間形成」に関する問題であるが、心理学的内容にとどまっている。現行の学習指導要領では、精選の必要が強調され、簡略化された部分である。教科書でも軽く扱っているだけであるので、青年期の自覚にもふれ、人生の意義について考えさせるような問題とした方がよい。

1 の解答12・13歳については、一般的な区分ではあるが学説的に諸説がある。2 の③の語句「臨界期」は教科書や資料にでていない。正解ではないが、むりに取って付けたようなものであり、このような語句はできるだけ排すべきである。

○　本問題「Ⅱ」について

「現代社会と人間」に関する部分である。やはり、問題の内容が社会学的な内容にとどまっており、「現代社会の特質」についての問題が皆無であるのは、倫・社の教科上の性格から考えて一考を要する。

「現代社会と人間」では現代社会の生き生きとした問題をも取り上げてもらいたい。

6 の「目的」は、問題としては安易すぎたきらいがある。10 で、「共同体」と「コミュニティ」の両語句は全く同義語であり、たとえ誤答であっても適切さを欠いている。11 は、国語的解釈を要求する問題であり、正解とされている「定款」という語句は、授業では全然ふれないし、学ぶ側の生徒にとっては全く腑に落ちない出題である。

○　本問題「Ⅲ」について

「思想の源流」に関するこの問題は、『ものの考え方の基本的問題』としての「愛」について問うものであるが、このことは倫・社の学習指導要領の目的に添った好ましいものといえる。ただし、先哲が人生や社会に対した問いかけは、現代においても新しい意味を探れる人類の永遠の問いかけでもある。ただ単に先哲の思想に関する知識を問うだけでなく、現代の人間とのかかわりにまで及ぶ問題にすることがのぞましいと考える。

問1の語句「兼愛」「アヒンサー」などについては、高校における精選の立場を軽視する

おそれがある。

問２のイデア論について、②の説明にある「……魂とは、一種のイデア……」については、文章のあいまいさもあり、受験生の誤答を引き出そうとする意図があるように受けとられるおそれもあるため、表現上の工夫がほしい。

○　本問題「Ⅳ」について

「思想の展開」に関する問題で、現代民主主義の基礎にある思想について問うものである。倫・社の問題としては適切なものといえる。ただし、思考させる問題としては単純すぎ一考を要す。たとえば、Ｂの「抵抗の権利」、Ｃの「一般意志」、Ｄの「目的の王国」、Ｆの「単独者」などは、それぞれの先哲独自の用語であり、文章を吟味しなくても短絡的に正解でき、あまり適切な問題とはいえない。

問３は、もう１つ問題をセットし、考えさせた上で、解答にみちびく工夫がほしい。

○　本問題「Ⅴ」について

「日本の思想」に関する問題であり、儒学（国学・神道も含む）を中心とした江戸時代の思想史を扱っている。一部に倫・社学習の範囲を逸脱したと思われる点や、文章のあいまいなところがあり、本試験の中では最も難解な問題となっている。

日本史を学んだものに比較的有利な問題といえる。

37の山崎闇斎は、精選上教科書ではごく少数しか扱っていない。このような人物が取り上げられるようになると、現行の学習指導要領の立場はなくなり、高校教育が知識偏重の従来のつめ込み主義に帰るおそれがある。

また、『……この学派の思想家として、江戸時代の初めごろ、武士階級から支持されたのは……』という問題文で、山崎闇斎を答えさせるのは、いささかむりと思われる。問題文のままであると、江戸時代の初めごろ、朱子学派であり、士道を大成させたことから山鹿素行を入れても間違いといえないのではないか。

問７について、「誤っているもの」にアンダーラインが引いてあるのは親切で適切な措置といえる。ただし、③④⑤の中から誤りを判定するについては、日本史を履習している生徒には有利であるが、倫・社の学習のみでは困難である。特に③の水戸学、⑤の「おかげ参り」は、教科書はもちろん資料でも扱っていない。これを推理で答えさせようとするのは適切さを欠いている。

(2)　追試験問題の構成と内容

ア　構　　成

a　全体として本試験にくらべ、ややむずかしくなっているが、問題の形式は倫・社の問題らしくなっており、考えさせる問題となっている。

b　問題量は適量であるが、配点の面から考えると「現代の思想」の比率が４対６と小さくなっている。３対７の比率に近づけるよう努力してほしい。

イ　内　　容

a　本試験に比し、全体に技術的工夫もあり、形式的にはすぐれた問題となっている。

b　「現代と人間」では、努力された面もうかがえるが、まだ、心理学・社会学といった学問的な傾向がつよい。

c　「人生観・世界観」では、考える問題として工夫されているが、部分的には倫・社の学習範囲を越えた答えを要求しているものや、生徒が知らないと思われる語句などがでているので注意してほしい。

また、「日本の思想」では、日本仏教という狭い範囲の問題にとどまっている。本試験では儒学、追試験では仏教というように、そのつど日本の思想の一部を扱うだけでなく、幅をもたせ、また、今後の思想的課題について考えさせるような問題を工夫してほしい。

d　以下各問題について感想と要望を記す。

○　追試験「Ⅰ」について

「青年期と人間形成」に関する問題であるが、心理学的問題に終始しており発展がない。青年期の問題や課題にもふれる問題としてもらいたい。

6の①葛藤（かっとう）について、問題の文章があいまいである。たとえば『二つ以上の欲求がせり合って（山川出版）』『二つの相反するものが、ゆずることなく対立すること（三省堂）』といった文章にするほうがよいのではないかと考える。

7の②フロムは、ごく少数の教科書に載っているだけで、あまり適切とはいえない。

○　追試験「Ⅱ」について

「現代社会の特質」に関する問題であり、現代社会の問題点と、その問題点解決の方向を示したもので、倫・社の問題として適切である。特に、問２で問題文の主題を問うた設問は、この問題を倫・社の問題として印象づけるにふさわしく適切である。

○　追試験「Ⅲ」について

「思想の源流」に関する問題であるが、東西における思想を対比させて扱い、設問にも考えさせるものがあり、倫・社の問題らしい問題といえる。

ただし、23の自尊心や、24のアリストテレスの政治論は教科書ではほとんど扱われていない。また、25のバラモン教については、教科書であまりくわしく扱われていない（くわしく扱う必要のない部分である）。特に正解の①についての学習を期待することはむりである。したがって③が落し穴となっている。高校の学習では、輪廻・業を中心とした見方をするにとどまっている。以上のような点を考慮して問題作成をしてもらいたい。

○　追試験「Ⅳ」について

「思想の展開」で、『ものの考え方の基本的問題』自由を扱った問題で、しかも主要人物を取りあげ、問2、問3は考えさせる問題となっており適切である。

サルトルのことば39の④は、特定の教科書を学習しているものに有利である。このことは今後注意してもらいたい。

○　追試験「Ⅴ」について

「日本の思想」に関するものである。問題形式としては、考えさせる問題として適切である。ただし、内容的にみて、問題が仏教に終始し、しかも歴史的なものに終っており、その後の発展がない。また、「日本の儒教」「西洋思想と日本」などは全く考慮されていない。なかには高校倫・社の学習範囲を越えたものもあり適切さを欠いている。

問2の42は、最澄の思想、問4の46は空海の思想、問6の48は栄西の思想をそれぞれ問うものであるが、高校倫・社でそこまで要求することはむずかしく、教科書でもほとんど扱われていない。高校倫・社で学習する内容を十分理解して出題してほしい。

また、問3の語句⑤王法即仏法、問8の語句①三教指帰（さんごうしいき）、④護国正法義はいずれも高校倫・社の学習範囲を越えて不適当なものである。

2　範囲と程度、設問数等

(1)　本試験問題の範囲と程度、設問数等

ア　範囲と程度

a　全体的にみて難易の程度は、おおむね適当である。

b　問題文や選択肢にあげる人名や事項は、教科書から逸脱しないようにし、しかも内容を深

く考えさせる問題の作成を考えてもらいたい。たとえ正解でなくとも生徒の知らない語句は不適当である。

c　問題「Ⅰ」は、「青年と人間形成」に関する問題であるが、心理学の領域にとどまらず、青年の人間形成の課題を自覚させることがねらいであるので、その面にまで及んでもらいたい。

d　問題「Ⅱ」は、「現代社会と人間関係」であり、社会学的領域にとどまらず、現代社会の特質、大衆社会、情報化社会といわれる現代社会の諸問題をとりあげ、人間関係の望ましいあり方について考えさせる問題にしてもらいたい。

6の如き問いは、平易すぎて試験としての意味がない。

e　問題「Ⅲ」の「思想の源流」では主要人物が取りあげられているが、これらの先哲の言行は、人生の指標として、今日のわれわれの身近かに生きていることにまでふれられるとよい。

教科書を理解していれば十分できるはずである。

f　問題「Ⅳ」は、出題にルネッサンス、宗教改革、経験論、合理論などへの配慮がほしい。

g　問題「Ⅴ」「日本の思想」では、日本の伝統思想の理解に基づいて、自己の思想形成の課題を考えるようになることに、基本的なねらいがあるので、その面にまで及ぶ問題の作成を考えてもらいたい。

また、明治以後の思想への配慮もほしい。

問2の山崎闇斎や問7は、倫・社の学習範囲を越えたものといえる。

イ　設問数等

a　設問数は、難易度と併せ考え、46というのは少なく50程度は必要であり、同時に考えさせる問題を多くしてもらいたい。

(2)　追試験問題の範囲と程度、設問数等

ア　範囲と程度

a　難易度は、全体的にみて本試験に比しややむずかしくなっている。学習範囲においてむずかしくなっているのであればよいが、学習範囲を逸脱してむずかしくなっている点注意してもらいたい。

b　問題「Ⅰ」は、本試験と同様心理学的領域にとどまっている。倫・社という観点から問題の作成をお願いしたい。

語群の中に学習の範囲を逸脱したものがみられる。

c　問題「Ⅱ」は、範囲、程度おおむね適当である。

d　問題「Ⅲ」、生徒の学習範囲を越えたものが問２（アリストテレスの政治論）でみられる。

e　問題「Ⅳ」、問３の40は難解である。

f　問題「Ⅴ」、「日本の思想」の範囲が仏教のみに限定されている。その発展的展開がみられない。倫・社が日本の思想で何をめざしているかを考えて出題してほしい。

問２、問３、問４、問６、問８①と④に倫・社の学習範囲を逸脱したとみられるものがある。

難解である。

イ　設問数等

a　設問数は50と本試験より多くなっており、おおむね適当である。

3　出題方法（試験時間、配点、問題文の表記、解答方法）

(1)　本試験問題の出題方法

ア　試験時間

おおむね適当である。

イ　配　　点

Ⅰ青年と人間形成、Ⅱ現代社会と人間関係で30点、Ⅲ思想の源流、Ⅳ現代と思想、Ⅴ日本の思想で70点となっており、「現代と人間」と「人生観・世界観」の割合は３対７となっており適切である。この割合を今後とも維持してほしい。

また、配点については、昨年度のような１問５点はなく、２～３点でおおむね適当である。

ウ　問題文の表記

○　おおむね適当であるが、高校現場での指導内容を十分に考慮した表現（選択肢についても）に努めてほしい。

○　選択肢が語句よりなるものが多い。考える問題とするためには、文章化することが全般的に、もう少し工夫されてよいのではないかと思う。

○　問題の形式は、完成法、選択法、正誤法、組み合わせ法などをとりまぜた出題としてほしい。

○　特定の教科書を使用したものが有利になるようなことは避けてもらいたい。

○　「Ⅴ」の問７で、「誤っているもの」の下にアンダーラインが施されているのは、適切である。

エ　解答方法

特になし。

(2)　追試験問題の出題方法

ア　試験時間

本試験に比しややむずかしくなっているが、おおむね適当である。

イ　配　　点

Ⅰ青年と人間形成、Ⅱ現代社会と人間関係で40点、Ⅲ思想の源流、Ⅳ現代と思想、Ⅴ日本の思想で60点となっており、「現代と人間」と「人生観・世界観」の割合は４対６と前者の比重が大きくなっている。倫・社の特殊性から、両者の割合は３対７を基本とし、それに近づける方向で考えてもらいたい。

ウ　問題文の表記

○　本試験に比し、選択肢が文章化され、考えさせる問題が多くなっているのは適切である。

○　可能なかぎり教科書的表記を用い、語句は教科書の中にみられるものをできるだけ使用するようにしてもらいたい。

○　問題作成者の学問的立場を強調すると、倫・社的立場を損うことになるおそれがある。たとえば、作問があまりに心理学的になったり、社会学的になったり、また、自己の主張が表面化し思想史にとらわれすぎる結果を生みだすなど、倫・社の本来の目標を失ってしまうことにならないよう注意してもらいたい。

エ　解答方法

おおむね適当である。

4　そ　の　他

(1)　現在の解答用紙は目が疲れるので改善してほしい。たとえば、４組になっている解答欄の各組を２ミリくらいの間隔であける。さらに、解答番号の５きざみの太線をもう少し濃くするか、太くするような配慮がほしい。

(2) 何枚かの下書き用紙が何箇所かみられるが、このような箇所には（次ページに続く）を、また倫・社試験問題の最後に白紙がでた場合には（ここで終り）と標示するのが親切である。

(3) 心理学・社会学・思想史といった学問的立場ではなく、高校倫・社という観点からの問題作成をお願いしたい。

(4) 各問題の出題範囲が狭い。倫・社の目的に沿う方向で出題範囲を広げることも試みてほしい。

(5) 倫・社学習範囲から断片的に出題するのもやむをえない点もあるが、倫・社の期待する方向に従い、『ものの考え方』に関する総合試験問題なども工夫してもらいたい。

(6) 追試験「Ⅴ」の問題は、高校倫・社の範疇からはずれると思われるものがあり、倫・社の指導を混乱させる危険性が感じられる。学習指導要領・教科書を十分研究されるよう要望したい。

(7) なじみのない語句の使用はできるだけ排除してもらいたい。

(8) 誤答へみちびくために、むりして選択肢を５つ作ることは不必要だと思う。

最 後 に

現在、高等学校教育の方向は、「ゆとりある教育」をめざし、内容の精選を量的、質的両面から計ろうとしております。しかし、共通第１次学力試験が始まるや高等学校の対応は、精選より知識のつめ込みの方向へ、利用する資料も、より多くの思想家を扱い、より詳細に扱ったものを求める方向へと逆行しております。

各委員におかれましては、高等学校学習指導要領を尊重され、広く現行教科書を参照されて試験問題を作成していただき、その範囲は高等学校における学習を阻害しないよう、また、平常の授業を真面目に受けていれば、十分な点数がとれるよう、深いご配慮をお願い致します。

(2) 教育研究団体の意見・評価

全国高等学校「倫理・社会」研究会

1 形式について

(1) 設問数は、追試験のように、１問２点で50問位がよい。

１問に対する配点が高いと、学校ごとの倫・社指導の差があらわれる。倫・社は科目の特質から網羅的に授業をやっている学校と、テーマ学習的に進めている学校がある。

(2) 本試験は語句選択が43で文章選択が３の割合である。語句選択は思想家の思想のキーワードを探すだけで容易に解答できる。倫・社のねらいをふまえて、追試験（語句選択28、文章選択22）位の文章選択の問題を作成すべきである。

(3) 追試験は全領域から20点ごとの配点割合で出題されている。その意味で「現代と人間」の単元の出題割合が高い。しかし、倫・社の教科書構成は「現代と人間」１に対して「人生観・世界観」は３になっており、したがって授業もほぼこうした割合で進められている。

実際多くの学校では、倫・社のねらいを生かすべく「人生観・世界観」の学習に重点をおいて授業を進めているのであるから、追試験位の配点割合にすべきである。

(4) 倫・社の授業は原典資料を使用する場合が多いので、たとえば追試験Ⅲ 27 やⅤ 41 ~ 44 のような問題が本試験の場合にも入れるべきであり、追試験の方は少し多いといえる。

2 内容について

(1) **本 試 験**

ア 内容的にいえば、今年度の出題はほぼ妥当なものといえる。昨年度の共通第１次学力試験の反省をよくふまえ検討されたものといえよう。

イ しかし、現場において比較的重点をおいて指導されている。「源流思想」や「現代思想」の分野の配点や出題数が少ないのが気がかりである。

ウ 後にもふれるが、「現代と人間」あるいは「日本の思想」の分野は今後もよく検討されなければならない。前者では、保健体育や日本史との関係、また問題作成の観点、など配慮しなけれ

ばならない点が多い。Ⅱの問題など、まるで現国のような問題で（あるいは政・経……内容的に）、必ずしもよい問題とはいえない。後者では、どうしても日本史との関係が問題になる。倫・社は日本史ではないので、できるだけ日本史との重複をさけ、日本史選択者に有利な出題としない。倫・社の平均点が高いので、他の科目とのバランスが問題になるが、しかし、これは日本史や保健など他の科目の内容を取り入れることによって他科目との平均点の調和を計るのではなく、倫・社独自の領域、学習事項、科目の特質などを考慮に入れて、工夫すべきである。

エ　適当ではない問題例

a　出題、選択肢に工夫を要すべき問題

Ⅰ1、Ⅱ11、Ⅳ35

b　教科書共通にみられない事項

ゲマインシャフトとゲゼルシャフト、五蘊（うん）、山崎闇斎

c　倫・社の領域外

水戸学、おかげ参り

d　記述が妥当とはいえない部分（傍線部）

Ⅴ37……武士階級から支持されたのは37である。

(2) 追　試　験

ア　(1)～(3)は本試験と同様である。

イ　適当ではない問題例

a　出題、選択肢に工夫を要すべき問題

Ⅱ19

b　教科書共通にみられない事項

Ⅲ26、僧伽（さんが）、六波羅密、Ⅴ43

c　倫・社の領域外

Ⅰ7～10、防衛機制は保健との関連をよくふまえること。

d　記述が妥当とはいえない部分

Ⅰ4、性欲、食欲、集団欲を三大本能とする説も有力である。

ウ　以上、相対的に言って追試験の問題の方がよい。昨年度もこの傾向があった。

いずれにしても、倫・社の特質、現場の授業などをふまえた、練られた問題作成を期待する。

(3) 問題作成部会の見解

1　試験問題の構成

試験問題の作成にあたっては、可能なかぎり倫・社の各分野にわたって出題するようにと努めた。

そのさい、「現代と人間」と「人生観・世界観」の出題比率は、教科書の配分比に準じて、30対70を原則とした。ただし、じっさいに出来あがった問題の難易度や設問数に応じて、配点に関し若干の再調整が必要となり、追試験においては40対60となってしまったが、今後は原則にいっそう近づけるよう配慮しなくてはならないであろう。

「現代と人間」では、心理学的アプローチからのものと社会学的アプローチからのものと、それぞれに１問を配した。

「人生観・世界観」では、洋の東西にわたる「思想の源流」と、近代から現代にかけての、ヨーロッパを中心とした「思想の展開」と、「日本の思想」に関するものと、それぞれに１問を配した。

2　各問題の出題意図

(1) 本　試　験

Ⅰは、人間の発達段階の一つとしての青年期を選び、この段階の年齢的輪郭、心理的特徴、独自の課題などについての理解度を測ろうとしている。青年期の自覚を深めるためには、このような科学的条件に対する理解が不可欠であろう、と考えたからである。

Ⅱは、さまざまな社会集団の分類原理、およびそのような集団をささえている社会規範の種々相に関して、その理解度を測ろうとしている。このような基礎的事項についての理解は、人間生活が具体的にはいずれかの社会集団の一員として営まれている以上、現代社会の特質を理解して生きていくための前提となるであろう、と考えたからである。

Ⅲは、ギリシア哲学・キリスト教・仏教・儒教における愛の思想を、相互に比較してその異同に気づかせたり、また、先哲それぞれの思想の内部において、愛がどのように位置づけられているのかを考えさせたりすることをねらっている。このようにして先哲の思想を正確に把握してこそ、それらが人類の永遠の問いかけとして、現代の人間にも生きるための指針となりうるであろう、と期待したからである。

Ⅳは、現代の民主主義を思想的に理解するために、その政治的基礎理論として社会契約論を、その道徳的基礎理論として自律論を、さらにそれがはらんでいる現代的な問題点を衝くものとして疎外論を、どこまで活用しうるか、その応用能力をみることをねらっている。このように、なにか一定の具体例の思想史的な展開を考えさせることによって、近代思想と現代の思想的課題とのつながりに眼を開かせることになるであろう、を期待したからである。

Ⅴは、思想史一般の観点からではなく、とくに倫理思想の観点からみた江戸時代の基本的な流れに関する理解度を測ろうとしている。したがって、人間の情を重んずる考え方と古代を理想とする態度とが大きくクローズ・アップされることになったが、両者は明治維新以後にも大きい精神的影響を与えたものであり、現代に生きるわれわれの思想的自己反省にも、不可欠の視点となるものである。

(2) 追 試 験

Ⅰは、人間の欲求と適応の基本的過程について問う心理学的な問題であるが、後半においては、欲求が阻止されて緊張の高まった危機的場面に対する適応の仕組みを扱っている。とくに青年期に多いこのような問題に対して、客観的な理解を深めることは、青年の人格形成に対して、好ましい影響を与えることになるであろう、と考えたからである。

Ⅱは、都市化、地域社会の解体、集団や社会関係の変化、および意識構造の変化という過程のなかで、地域社会の崩壊現象と新しいコミュニティ形成の胎動という全体的な動向に対する理解力をみようとしている。現代社会のはらんでいる問題点を客観的に分析することが、問題解決の方向を暗示することにもなる、ということの一つの実例を提供するであろう、と期待したからである。

Ⅲは、中庸が、たとえばアリストテレス、シャカ、孔子など、いずれの先哲においても主張されていることからも明らかなように、西洋においても東洋においても深い伝統的な考え方となっていることに、気づかせようとしている。一般に青年には中庸思想などなじみがたいとされているが、そうであればこそいっそう、中庸の大切さに眼を開かせたい、と期待したわけである。

Ⅳは、近代ヨーロッパで主張された自由の理念が、けっして自分勝手を意味するのではなく、むしろ法や責任と表裏一体になっていたことを理解させようとしている。そのさい、個々の思想家たちに対する理解と、思想史的な流れ全体に対する理解とが、相互にヒントを与えあうようにと、設問にはとくにくふうした。条件反射的に応答するのではなく、じっくり考えながら答

える態度を養いたい、と願ったからである。

Ⅴは、日本における仏教思想の受容とその展開のあとを、聖徳太子からはじめて、奈良、平安、鎌倉の各時代に現われた仏教者の教説について、思想史的に概観しようとしている。そのさい、外来思想としての仏教が、渡来以前の日本人の伝統的な考え方といかに結合したか、その後どのようにして日本人の生き方の指針となり、救済の原理として受容されるようになったかなど、とくに日本に土着してゆく歴史的過程に注目することが期待されている。

3 解答結果（批評と反省をふくめて）

(1) 本 試 験

全般的にみれば、難問・奇問がすくなく、ものの考え方を指導するという倫・社の基本に忠実に出題されており、適切であった、との批評をうけている。正答率が努力目標とされた60％にきわめて近かったこともまた、好評の一原因であった。しかし以下においては、各問題ごとに、とくに指摘された点のみをクローズアップして、それに対する出題者の見解をも述べていくこととする。

Ⅰ 1に関し、青年期の年齢的区分については、日常的常識と専門的規定との間にずれがあるようである。しかし、青年期が思春期に始まることは広く認められているのみならず、解答結果をみても、この問いに正解した者と本試験全体での高得点者とがほぼ合致していることなどからも判断して、青年期についての正しい理解が正解に反映している、と考えてもよいのではなかろうか。

Ⅱ 11の正解は「定款」であるが、このような語句は高校の授業では全然触れられていない、という批評があったし、じっさい、正答率もきわめて低かった。一般に試験においては、当然一定以上の国語力を前提とせざるをえないのであるが、それにしても、出題者が予想した高校生の国語的常識と、彼らが現に身につけている国語的常識との間にあったギャップの一例として、この種の設問は、今後いっそう配慮されなくてはならないであろう。

Ⅲ 19や24など、アリストテレスに関する設問の正答率が、他と比較して低いことが目立っている。そこで正解として要求されている「友愛」や「正義」は、アリストテレスの倫理思想において重要な意味をもつものであるばかりでなく、高校生が関心をもたざるをえないような事柄であり、現行教科書でも多く触れられている。高校現場における今後の取扱い方の改善を期

待したい。ただし、問1の選択肢「兼愛」「アヒンサー」が高校教育における内容精選の立場を軽視している、という批評については、今後、問題作成上留意すべき点と考えられよう。

Ⅳ　問1のなかで、とくに28と31の正解である「ルソー」と「キルケゴール」の正答率は、努力目標の60％をわずか越す程度であったが、その他のものは、いずれもすこしやさしすぎたようである。また、問3では、選択肢のなかに無理な語句まで挙げられている、との批評があるが、それのみならず、選択肢が語句の場合には文章全体を吟味しなくても短絡的に正解できる、というような欠点を避けるためにも、選択肢を文章化したほうがよかったであろう、と考えられる。

Ⅴ　37については、朱子学者であり、保科正之らが師事したことなどから、「山崎闇斎」が正解である。しかし彼は少数の教科書しか扱っていない、という批評があり、そのことは、正答率の低さからも裏づけられた。また、問7について、日本史を履修している生徒には有利であるが、倫・社の学習のみでは困難であり、とくに「水戸学」や「おかげ参り」はそうである、との批評があり、そのこともまた、正答率の低さから裏づけられた。したがって、このような点は、今後いっそう配慮されなくてはならないであろう。（なお、この種の問題点一般に関する見解は、「4 問題点と要望」の項で後述する。）

(2) 追試験

本試験にくらべ、全体としてややむつかしくなっているが、問題の形式は倫・社の問題らしく、考えさせるものとなっている、との批評を受けている。以下においては、各問題ごとに、とくに指摘された点のみをクローズアップして、それに対する出題者の見解をも述べていくこととする。

Ⅰ　7の選択肢として「フロム」があるが、これはごく少数の教科書に載っているだけで、あまり適切とはいえない、との批評がある。この場合、ⅰ）フロムを挙げるか、ⅱ）精神分析学とはまったく無縁の教科書記載人名を挙げるか、ⅲ）選択肢を4個に減らすか、ⅳ）設問そのものを撤回するかは、議論のわかれるところであろう。出題者は、ⅲ）とⅳ）とは問題外と考え、ⅰ）とⅱ）との間では、あえてⅰ）を選んだのであるが、精選を目指す高校教育に混乱を与えすぎるというのなら、今後はやはり再検討しなくてはならないであろう。

Ⅱ　14の正解は「生産と消費」であるが、その正答率はかなり低く、むしろ「農村と都市」と誤答した者の割合が過半数を占めていた。これは文脈に注意さえすれば避けられることではなかろうか。設問は地域社会の分類を問うているわけではなく、都市化の影響と地域社会の特質と

いうことになると、どうしても「生産と消費」にならざるをえないからである。

Ⅲ　23の「自尊心」や、24のアリストテレスの政治論や、25のバラモン教は、教科書ではあまり扱われていない、との批評を受けている。しかしながら出題者は、中庸や中道の意味を的確に理解していれば、おのずから正しい推理ができるであろう、と考えたのであった。解答結果をみると、23と25に関しては、出題者の予想があたっていたが、正答率の低かった24については、かならずしもそうはいえないかに思われる。（もっとも、受験者がきわめて少数であったので、正答率はかならずしも問題の適否判定の規準とはなりえないのではあるが……。）

Ⅳ　サルトルの言葉39の選択肢④は、特定の教科書を学習しているものに有利である、との批評がある。出題者の意図は、自由の意識と表裏一体となっているサルトルの責任概念を推理させることにあったのだが、正答率をみるかぎり、いくらか無理な要求でもあった、と思われる。ただし、上位の者がそれ相当の正答率を示しているのをみると、かならずしも受験者がどの教科書を使用したか、ということと相関しているとも思われない。

Ⅴ　42は最澄の思想、46は空海の思想、48は栄西の思想をそれぞれ問うものであるが、高校倫・社でそこまで要求することはむつかしい、との批評がある。たしかに、栄西に関しては道元でも代表させうるであろうが、最澄や空海に関しては、われわれの生き方に与えた影響力の大きさからみて、議論のわかれるところであろう。また、問3の選択肢「王法即仏法」、問8の選択肢「三教指帰（さんごうしいき）」「護国正法義」など、高校倫・社の学習範囲を越えている、との批評もあった。これらに関しては、たとえ「追試験Ⅰ」で述べたような考え方があったにしても、今後はいっそう配慮しなくてはならないであろう。

4　問題点と要望

(1)　選択肢は、原則として、多くの教科書に記載されているものにかぎる。とくに正解となるものについては、そのことを厳守しなくてはならないであろう。しかしながら、正解でないものならば、少数の教科書にしか記載されていないものでも、また、高校生としての常識に属すべきものならば、教科書にまったく記載されていないものでも、それらを使用するのはやむをえないことなのではなかろうか。

もちろんこれに対しては、高校が「ゆとりある教育」をめざして内容の精選をはかってきたのに、共通第1次学力試験がはじまるや、精選よりも知識のつめこみの方向へと逆行し、利用する

資料も、より多くの思想家を、よりくわしく扱うものになりつつある、という事実を挙げての反論がありうるであろう。出題者の立場からは、比較にならないような選択肢は並べたくないのであるが、高校側からは、まぎらわしいものならばいっそう教えておく必要があり、したがって教えるべき事柄が増えてしまう、というわけであろう。

したがって、出題者としては、はじめに述べた原則を守ることに最大限の努力を払うから、そしてそのためには、たとえば選択肢を語句によって構成するよりも、内容を文章化して並べるなどのくふうもするから、それだけにいっそう高校側もまた、基本さえ正確に押えておけばだいじょうぶだというぐあいに、たえず精選への主体的な努力をつづけてほしい、と要望しておく。

(2) たとえば、これは日本史を学んだ者に比較的有利な問題である、というような批評がある。しかしながら、倫・社のような総合的な科目は、国語をはじめ、とくに日本史、世界史、政治・経済など社会科の他の領域をよく学んだ者には、比較的有利とならざるをえないであろうし、それが当然のことなのである。倫・社は、それらの諸学力を基礎として、それらをみずからの生き方を考えるという観点から総合していく科目だからである。

そして、このように独自の観点から総合した考え方を問題とするかぎり、かならずしも、たとえば日本史の学力即倫・社の学力というようなことにはならないであろう。したがって、もし倫・社の問題が日本史の問題とまったく同様なものと感じられたとするならば、そのことに関しては、出題者は、今後いっそう配慮しなくてはならないが、逆に、高校側は、倫・社的なアプローチをしようとしている出題者の意図がどこにあるかを、なるべく洞察するようにしてほしい、と要望しておく。

政　治・経　済

(1)　高等学校教科担当教員の意見・評価

1　構成と内容

(1)　構　　成

本試験・追試験共に各大問Ⅰ～Ⅳで構成されている。学習指導要領に準拠して分類すると「日本の政治」「日本の経済と国民福祉」「国際関係と国際政治」に分けられ、各々の分野から前年度と同様に、幅広く、歴史的発展をふまえて総合的に構成せられ、設問にも思考態度を要求する傾向がみられるなど工夫のあとがうかがわれ適切な問題である。このような方向は、高校教育の正常化を学習内容の面から促すものとして、のぞましい傾向であるといえよう。

しかし、その反面問題構成が前年度と同様に単元別横割構成である点、今後に問題を残しているのではあるまいか。例えば、

		昭和54年度	昭和55年度
「日本の政治」	本試験	「近代裁判原理」	「現代の政治形態」と「基本的人権」
	追試験	「国家の特質と機能」	「憲法上の国会の権限」
「日本経済と国民福祉」	本試験	「労働問題」	「経済活動と公害」「経済発展と貿易構造」
	追試験	「社会保障」	「経済成長と条件」

のように、政治・経済の領域をそれぞれ単元別にまとめているが、このような問題構成の方法は、この両年度については偶然、前年度出題の単元を避けているともいえるが、構成がやや平面的になり易い傾向になることは否めない。さらに単元領域が一巡二巡すると、再び難問奇問のおそれなしとしない。むしろ、問題の構成を総合的な設問方法によって、学習の成果が多角的に評価しうるような融合問題になるような配慮がのぞましい。

例えば、貿易構造の問題文から国際政治へ設問を展開したり、基本的人権の問題文から、設問を政治領域に限らず、社会権、環境権へと展開するなどの工夫があれば、政治・経済という科目の総合的な評価となるのではあるまいか。

(2) 内　　容

本試験・追試験ともに、全般的には学習指導要領のそれぞれの目標をふまえ、基礎的・基本的な内容について出題されており適切である。

とくに、学習指導要領の指向する政治のたてまえだけを扱わず、政治の現実の動きをとらえようとする点、現代政治へアプローチする姿勢が問題のなかに認められる点は、高く評価されてよい。また、論理的思考をみる問題や、グラフや指標を読み取り、計算や推論をみる問題内容等適切である。

ア　本試験問題

a　大問Ⅰの「権力分立の原理」の問題は、現代政治制度のうち、アメリカの大統領制と、わが国の議院内閣制との比較において、権力の相互抑制と政党の関係を総合的に問う基本的な問題であり、適切な設問といえる。ただ、設問の内容を、主権者としての権利を、政治権力から守るという側面からの設問が含まれておれば、問題の全体がより深まりをみせたのではあるまいか。

b　大問Ⅱ「基本的人権」のうち、自由権に関して、明治憲法と日本国憲法の比較において、設問を構成し基本的事項を中心に据えた適切な問題であるといえよう。ただ一部に、例えば、問1の16や問3などは、教科書等にはあまりふれていない内容である点、今後の配慮をのぞみたい。

c　大問Ⅲは公害防除問題に関連づけた、生産費と価格についての均衡モデルのグラフから設問するという、判断力や思考力をみる適切な問題であり、問題の構成・内容ともに工夫のあとがうかがわれ、高く評価される。ただ、問4はやや蛇足に過ぎるきらいがあり一考を要する。

d　大問Ⅳ「日本の経済発展」と「貿易の現状と問題点」を問う基本的な問題であり、そのねらいは適切であるが、設問の内容が「地理A」の科目での学習領域ともいえるものであり検討を要するのではあるまいか。

イ　追試験問題

a　大問Ⅱ「経済成長とその条件」について、景気変動との関連からその推移を統計資料などを提示して思考力をみる内容構成がなされて、適切な問題である。しかし、その表示方法や設問に今一つの工夫があればより高い評価がなされるのではあるまいか。

b　大問Ⅲは戦後農家経済の変化を問う形であるが、農村、都市の受験生のいずれもが設問を解

しうる配慮がなされ、単純ではあるが数処理を要する設問を組み合わせたり、工夫のあとがうかがわれる適切な内容である。

c　大問Ⅳは全般的に基本的な適切なものであるが、問4の正解はＩＭＦとなっているが、ＵＮＣＴＡＤが正解ではないかと考えられる。また問3の「植民地独立付与宣言」もほとんどの教科書には記載されていないもので、出題に当たって一考を要するのではないかと思われる。

2　範囲と程度、設問数等

(1) 範囲と程度

本試験、追試験共に、基本的事項が精選出題され、全般的に出題の範囲、難易度を含めて妥当なものであり、適切な問題である。ただ、後の解答方法の項で詳述するが、解答を導き出す選択肢の内容等について、部分的に一考を要すると思われる点があり、そのことが問題の難度をやや低下させる結果になったのではあるまいか。

なお、出題の範囲と程度について、次の事項に配慮されると、高等学校における政治・経済の学習の到達度評価として一体化がはかられ、出題に当たって適切な結果を期待できるのではあるまいか。

ア　政治・経済は現代史を学習する科目であるといわれている。現代社会に提起される新しい事象を、基本的な原理と絡ませて、総合的、多角的に判断する内容について配慮することがのぞましい。

イ　福祉と人権、経済変動と労働問題、資源問題と国際政治、というように幅広く、国の内外に関する諸問題を現実に即して判断させるような問題について検討することがのぞましい。

ウ　ただし、「国際関係と国際政治」については、政治・経済が第3学年において履修し、しかもそれが大多数の教科書では最終の単元に設定せられているので、日本史の戦後史に対するのと同様の配慮がのぞましい。

(2) 設問の数

本試験が51問、追試験が59問は、問題の構成、内容、難易度等からみて、本試験の51程度が妥当であろう。したがって追試験の59という設問の数は、やや多く今後の配慮がのぞましい。

3　出題方法（試験時間、配点、問題文の表記、解答方法）

(1) 本試験問題の出題方法

ア　試　験　時　間

設問数、難易度からみて60分の試験時間はおおむね適切である。

イ　配　　点

学習指導要領に基づく政治・経済・国際関係の各領域が、それぞれ大問毎に25点に配分せられ適切である。

ウ　問題文の表記

問題文は全般的によく整理せられ、具体的かつ平明な表現で適切である。また、大問Ⅲの均衡モデルのグラフの読み取りと理解度をみる設問は、工夫のあとがうかがわれ、今後の高等学校における学習の幅を拡げるものとして適切である。しかし、設問に際して、例えば、価格（P、P′）・数量（Q、Q′）のように表示して、設問に変化をもたせるなどの工夫を加えると、さらに適切なものとなろう。

エ　解　答　方　法

選択肢を５～４として、二者択一の形式を避けた点のぞましいものであるが、選択肢の語句、表現等がやや安易になっているのではなかろうか。その点、今年度の政治・経済の平均点を押し上げた一因とも考えられる。例えば、大問Ⅰの問１～５、９の５肢選択の語句構成は、いずれも容易に正答語句がひき出せるし、問６～８、10にしても、設問にある下線部ⓐ～ⓒⓔを読まずに解答できる点など、解答方法に多少の工夫を要するのではなかろうか。大問Ⅱの問１18の違憲判決の年代を問う選択肢は、むしろ、年そのものを年号併記の形式で問う形のように、重要事項については今一つ、突っこんだ解答方法を配慮されたい。さらに、大問Ⅳの問題表記、解答方法においても、地理Ａの学習領域ともとれ、とくに貿易品目や国、地域別の輸出入状況等については検討を要する。

(2) 追試験問題の出題方法

ア　試　験　時　間

設問数が59という点から、受験生にとってはやや時間不足のきらいがあったのではないだろうか。

イ　配　　点

おおむね適切である。

ウ　問題文の表記

文章表現については全般的に適切であり、学習指導要領に基づく知識・理解度をみる問題文として高く評価し得る。また大問Ⅲの統計指標を提示して、考えさせる問題を構成するなど工夫のあとがうかがわれる。

エ　解　答　方　法

大問Ⅱの問５のグラフについては、公定歩合のグラフの形に特異性があるため一考を要する。むしろ、５種類のグラフを全部重ねて表示し、それぞれの特徴時点の項目説明を併記するなどして、多面的な設問構成ができるのではないか。グラフの種類名称を問うだけでは平面的な設問に流れ、少し惜しい気がする。

大問Ⅲの指標の計算処理の問題などよく工夫せられている。ただ、計算が単純で容易に解答できるが、その基本には問題文の理解を要する点を考慮すると、新しい傾向を示すものとして評価できる。

解答方法の問題として大問Ⅱの問３の年代順の選択肢については、部分点等の配慮がのぞましい。また大問Ⅳの問４ 51 の選択肢については、正答を④としているが、問題文からはむしろ⑤を正答と扱う方が正しいのではないだろうか。また④を正答と扱うのであれば①を正答の範囲に入るものと考えられるので、結果処理上適切な配慮がのぞましい。

4　そ　の　他

(1) 今年度の平均点が他の科目に比して高かったことから、次年度反動的に問題の難易度を高めることのないよう配慮せられたい。

(2) 問題の難易度について社会科の科目内でのバラツキを是正する方途について配慮せられたい。例えば、問題作成の過程で、高校生の学力実態をよく把握している者（例、教委の指導主事等）の意見を聴取するなどが考えられる。

(3) 新学習指導要領に基づく移行措置と、「現代社会」（新科目）の取り扱いについて。

ア　移行措置について

当面の間、移行措置年次（昭和55年～56年、したがって共通第１次学力試験では昭和58年～

59年）については、新学習指導要領に基づき、倫理・社会、政治・経済のなかで、現代社会の学習内容を加味しつつ、問題構成、内容、出題方法等について適切な配慮をなされることがのぞましい。

イ　現代社会の取り扱いについて

昭和57年度から全面的に新学習指導要領の実施による「現代社会」については、昭和60年度からの共通第１次学力試験の科目のなかに設定すべきである。その理由として、

a　必修科目であること。

b　社会科における他の科目の履修と、中学校における社会科学習の接点としての基本事項の履修が網羅的に組み込まれている点から、社会科の教科目標の修得状況について総合的判定が可能であると思われる。

c　ただ、「現代社会」の単元内容から、共通第１次学力試験になじまないのではないかという点の指摘も一部にはあるようであるが、その点については、問題の構成、内容、出題方法等についての適切な配慮があれば、試験科目の設定も可能であると思われる。

(2)　教育研究団体の意見・評価

社会科教育全国協議会

1　本試験問題

(1)　出題方法等について

ア　２科目120分の試験時間の中で、大問４、小問（解答番号数）51は妥当であると考えられる。内容レベルから判断すれば60問ぐらいあってもよいと考えられる。

イ　配点は小問１の点数が３点以下であり、これも受験生にとり、少々のミスも大勢に響かなかったのではないかと考えられ、妥当なものと思われる。

ただし、大問Ⅱの問１については、９問で16点という配点であり、受験生が自己採点において混乱を生じさせたことは、今後の課題として検討してもらいたい。

ウ　マークシート方式のため、出題方法は適語選択による文章完成法・選択法・正誤法等に限定

されるのはやむをえないと考えられる。また、小問ごとの選択肢の数も４～６個であることは望ましいと考える。

この立場から判断すると、大問Ⅲの問２（解答番号28～30）の３問題は、読解力や推考判断力を求めるよい設問形式ではあるが、二者択一で正解を求めているのは偶然性の働く余地も多分にあり問題である。

エ　昨年同様に、単なる知識的な暗記物だけの出題でなく、大問Ⅲ・Ⅳのような資料解読型の判断力を求める出題があったのは大変よいことであり、出題者の努力を認めたい。

しかし、大問Ⅲの問題において、昨年の大問Ⅲに引き続いて、同じような需要、供給曲線の判読問題が２年続いて出題されたことは感心できない。

(2)　出題程度について

ア　４問を通して、全般的には素直で平易な問題が多く、通常の学習で相当の問題を解答できる程度の出題であったと判断できる。このことは、この科目の平均点の高さが示している。

イ　昨年よりも選択受験生が大幅に増加しているが、これは高校３年生の選択受験者の増加であると考えられる。それは、昨年の出題内容やレベルからの判断の結果であり、教育現場での指導の成果であるといえる。この立場からも、上記アのことは、今後も継続していくべきものと考え、この態度を保持して欲しい。

ウ　出題内容の程度から考えても、昨年の大問Ⅳのようなやや難解な問題（高校指導レベルを越えた出題）がなくなっていることは、出題者の努力を評価したい。

エ　上記ア～ウのことより、来年度も平均点が60～70点程度の出題レベルを維持してもらいたいと強く要望する。

オ　とくに、マスコミ等で報じられているように、政治・経済や倫理・社会選択者に有利、歴史や地理選択者に不利という、受験生をまどわし混乱させることのないように考慮してもらうことを強調したい。

政治・経済の出題レベルがやさしく低く、歴史や地理のそれが難しく高かったのではなく、歴史や地理の出題内容に問題があったといえる。政治・経済の出題レベルこそ、上記の理由から高校の教育現場に適切に対応した出題レベルであったと考えてもらいたい。

カ　個別的には次の設問に問題がある。

a　大問Ⅱの問１の設問マーク18、刑法の尊属殺重罰の違憲判決についての年次を問う問題は、

高校指導レベルを越えた出題である。この年次の記述は、若干の教科書では脚注で示されている程度であり、また市販の参考書や資料集の中には採録されていないものもある。

b　大問Ⅲの問４の解答番号32、33、この問題は、はじめから正解がすぐわかる程度の設問であり、つけ加え的な得点（平均点）を高めるような問題であり、その出題目的を疑問とする内容である。

(3)　内容について

ア　昨年は政治１と経済３であったが、本年は政治２・経済２という大問の配分となり、領域的には適切であるといえる。

イ　政治領域からの出題は、「民主政治の機構」から議院内閣制と大統領制に関する出題、「日本の民主政治」からは新旧両憲法の人権保障比較の出題と、分野的に均衡がとれていて適切であると判断できる。

ウ　経済領域からの出題は、大問が公害問題と日本の貿易の変遷と課題の２問であり、前者には理論的内容が含まれ後者には世界経済との関連があるとはいえ、日本の経済の分野に偏りすぎていると考えられる。資本主義の理論や経済体制的な諸問題、とくに現下の日本経済をとりまく諸問題や諸現象、また、社会保障の分野や労働関係の分野などからの出題が考慮されてもよいのではないかと思う。

エ　経済の領域においても、政治の出題と同様に、大問のなかに２～３の分野からの出題が可能であると考えられるので、出題者側における今後の努力を期待したい。

しかし、本年度の大問Ⅲのように、ひとつのテーマ課題を深く突込んでの分析を行う出題形式は、それはそれなりに意義を認めることはできるが、すくなくとも共通第１次学力試験であるかぎりにおいては、もっと幅広い出題の方が望ましいものと考えられる。

オ　個別的には次のように評価できる。

a　大問Ⅰは、基本的事項を問題としており、出題内容やレベルともに適切である。

b　大問Ⅱも、基本的事項を中心に時事的問題をも加味しており、出題内容やレベルともに適当であると考えられる。

ただし、前記のように、設問18における高校指導レベルを越えた出題と、配点のあいまいさの問題は、今後の改善を期待したい。

また、問１の16・17について、この部分の文章表現があいまいであり、またすっきりし

ていないこと、また特別裁判所としての憲法裁判所の制度と成立要因については、高校の指導レベルを越えていることを付記したい。しかし、違憲審査権から逆に類推していけば、西ドイツやイタリアの司法制度を理解していなくても、正解を選択できる可能性もあり、このことは解答番号17についてもいえることである。ここに、理解力テストとは矛盾した現象の発生することも指摘しておきたい。

c　大問Ⅲは、経済理論の基本原理をふまえた応用問題であり、さらに需要、供給曲線の判読問題は、昨年の出題に続いての出題を別にすれば、問題自体がこれまでの入試問題にないユニークな良問であると評価できる。

また、公害問題を市場機構との関連において考察させるという出題目的も、高校教育の盲点をついたものであり、また、これまでの入試問題には見い出せない斬新な着想であり、出題者の努力は高く評価したい。

ただし、前述のように、２年連続しての需要、供給曲線を用いての出題形式と、問４の付け加え的な出題には疑問がある。

さらに、問４と同じことが、問３についてもいえることを追加したい。

d　大問Ⅳは、日本経済の発展を貿易の側面から分析させるという、その出題目的は大いに認め評価はできる問題であると考えられる。

しかし、日本の貿易の市場別、商品別構成表の判読問題（問２と問３を中心として全体的に）は、政治・経済の学習知識の応用力を求める出題としては評価できるが、これらの問題は高校現場では直接的に深くは扱わないテーマであり、地理的感覚が強すぎて政治・経済の問題としては馴染みにくい出題であり、受験生がまごついたところと思う。その意味からこの種の統計を扱う問題は、今後において考慮してもらいたいものである。

2　追試験問題

(1)　出題方法等について

ア　大問４、小問（解答番号数）59は本試験と同様に妥当であると考えられる。

イ　大問Ⅲに、５つほどの計算問題が出題されたが、それを考慮しても、時間内で解答できると思われる。それ故に、この程度の簡単な計算の出題は差し支えないと思う。また、その出題の意義を評価し認めたい。

ウ　小問の選択肢の数は４つ以上は必要と考えられる。この点から、大問Ⅱの問５（解答番号22～25）は、５つの図から４つを選ばせるもので、選択肢の幅が狭すぎる。設問を２つぐらいにする方が、より評価的な出題であると考えられる。

同様のことは、大問Ⅲの問１・問２（解答番号26～44）においてもいえる。選択肢が３つであり、これでは少なすぎる。

エ　上記ウと同様のことは、イでその出題の意義を評価はしたが、大問Ⅲの問１のＢの計算問題であるが、表２の指数を順次使用しての計算は余りにも単純な出題でありすぎる。この場合も計算は２つ程度の方がより望ましいと考えられる。

それ故に、解答番号43、44の問題は、すぐに解答が導かれる問題で、計算問題の出題意義を半減するものと考えられる。

オ　本試験と同様に、知識的な暗記物のほかに、資料解読の判断力を求める問題を採用したことは評価したい。その意味からは、大問Ⅱの問５のグラフ判読や、大問Ⅲの問１のＢの計算問題の出題は、上述の問題点を含んでいるとはいえ、よい問題であると評価したい。

(2)　出題程度について

ア　４問を通して、全般的に極めて平易な問題が多く、通常の学習能力で十分に解答できる程度の出題であると判断できる。この追試験の受験者数が多ければ、その平均点は本試験と大差ないものと予想される。

イ　大問Ⅱの問５や大問Ⅲの問１のＢの問題は、高校生の弱点をついたよい問題ではあるが、判断力を求める問題として、上述したように、もう少し出題を考慮してほしかったと思う。

(3)　内容について

ア　大問４問が、本試験と同様に、政治２と経済２であり、領域的には適切であるといえる。

イ　政治領域からの出題は、新旧憲法下の立法機関、大戦後の国際社会と国際法の２問で、日本の政治、国際政治の両分野からの出題で、均衡がとれていて適切であると考えられる。

ウ　経済領域は、大きくは戦後日本の経済成長と日本の貿易の２問で、日本経済の分野に偏しているが、前者には経済成長や景気変動の理論が含まれた総合問題であるので、政治領域と同様に適切であると考えられる。

エ　しかし、本試験と同様に、経済領域では、社会保障分野や労働分野に関連した出題や設問がない

ことは、今後の問題として考慮してもらいたい事項である。

オ　個別的には、次のように評価できる。また、問題点を分析できる。

a　大問Ⅰ、基本的事項を問題としており、出題内容やレベルともに適切である。

b　大問Ⅱ、理論的要素と時事的性格をも加重した出題で、出題内容やレベルともに、前述において指摘した選択肢のことを除いては、出題内容やレベルともに適切である。

ただし、問１の解答番号15の選択肢の語句であるが、④の大量生産と⑤の拡大再生産について、文の前後関係からは⑤を用語との関連からも正解としなくてはならないが、④でも誤りとはいえないと考えられる。この意味から、どちらが正しいか迷いやすい語句の並語は一考を要すると思われる。

c　大問Ⅲ、前述した選択肢のことと単純な計算問題の件に関係することを除けば、日本経済の発展を農業の立場から分析させる問題として、統計表の読解力の問題をも含めて、出題内容やレベルともに妥当であると考えられる。

ただし、問３（解答番号45）に若干の疑問点がある。①の文章であるが、この説明文そのものが農業所得の増大要因を説明していると考えられる。しかも、日本においては、戦前から1975年までに、どれだけの耕地面積の拡大がみられたかということ、また、説明文の後段の農業生産の増大要因は、耕地面積の拡大とは全く別のところにあったと考えるのが一般的であろう。それゆえに、設問の「誤っているものを選べ」という条件から考えた場合に、誤解をまねきやすい表現であり一考を要すると考えられる。

d　大問Ⅳ、時事的要素をも含めた国際関係をめぐる諸問題で、歴史的変遷をもふまえた基礎的事項を主体としており、出題内容やレベル等も妥当であると考えられる。

ただし、問９（解答番号58）については、疑問点がある。⑤が正解とされているが、①の文章は⑤と同趣旨のものであり、①でも正解であると考えられる。すなわち、①の「裁判の有用性が認識されていない」からこそ、⑤の「裁判所が常設されていない」のではないだろうか。①は原因や理由であり、⑤は結果であり現象であると考えた場合には、どちらを正解とするかは判定が難しいと考えられる。それゆえに、大問Ⅲの問３と同様に、この選択肢の表現は誤解を招きやすい表現であり一考を要すると考えられる。

(4)　発表された正解の誤りについて

大問Ⅳの問４（解答番号 51 ）の正解は④であると発表されたが、これは誤りで正しくは⑤で

なくてはいけない。受験生は少ないとはいえ、重大なことであるので、誤りを認めたうえで、正式な方法によって公表して欲しいことを強く要望する次第である。

○発表された正解が誤りである理由

問４の設問「国家の経済的自立の促進をめざす」ために、「国連総会決議で設置された機関」に、正解の「国際通貨基金（ＩＭＦ）」は該当していない。該当しているのは、⑤の「国連貿易開発会議（ＵＮＣＴＡＤ）」である。

国連の結成となった〝サンフランシスコ会議〟は、1944年４月から６月にわたって開かれ、国連憲章の発効は同年10月である。これに対して、国際通貨基金を取り決めた〝ブレトンウッズ会議〟は、同年７月に開かれたものである。それ故に、『総会決議』でＩＭＦが設置されたとするのは完全な誤りである。

また、上記の会議の日時の前後関係が不確実であっても、ＩＭＦはブレトンウッズ体制の成果であり、結果として国連、経済社会理事会に属する〝専門機関〟である、ということは社会人一般の常識である。この判断には、「国連総会決議で設置された機関」ということは含まれていない。

さらに、①から④までに記録されている国際経済機関が、設問のように「総会決議で設置された機関」でないことは、社会人一般の、もちろん平均以上の受験生のほとんどは理解していることであると考えられる。加えて、この追試験を受けた生徒の大半は、「総会決議」の限定詞に気づけば、無条件で⑤を選んでいると思われる。反面、この条件に気づかなかった受験生は、本文の文脈の前後から判断して、正しい正解⑤を選んでいると思われる。この両方の立場から受験生の答案の検討もなされてほしいものと思う。

以上の分析により、発表された正解の誤りを指摘し、併せて受験生の判断の仕方をも加えてみた次第である。今後のためにも善処してもらいたく重ねて要望する。

注　「発表された正解の誤りについて」に関し、大学入試センターのとった措置及び見解については、前章Ⅱ、４の(9)の「正解の訂正」及び同６の「試験問題について」に記述してあるとおりである。

(3)　問題作成部会の見解

1　問題作成の方針

「政治・経済」の共通第１次学力試験の問題作成に当たって考慮しておかなければならない点が２つある。その第１は、全国の国公立大学の大部分において「社会」を第２次学力試験で課しておらず、共通第１次学力試験だけでその能力を判定しようとしている大学・学部が多いこと、第２は、「政治・経済」は高等学校での単位数が「日本史」「世界史」と比べて少なく、したがってそこで使われている教科書のページ数もかなり少なくなっていることである。このことは、高等学校のすべての教科書に共通して記載されている事項を、仮りにまんべんなく広く出題したとしても、かなり平易な問題しか作れず、それでは、「高等学校学習指導要領」に示されているような能力の達成度を判定することはできないように思われる。昨年度の「政治・経済」問題作成部会の見解にも明記されているように、この科目は、単に制度や事実を暗記することでもって足りる科目ではなく、基礎的な概念や考え方の理解の上に立って、客観的な資料をも利用しながら、論理的思考を展開し、現実の社会の諸現象について的確な判断を下しうる能力を養うことを目的とするものである。

このような理解のもとで、本年度の問題作成も前年度と同じように、まずはじめにかなりまとまった文章を読むなり、グラフや資料について読みとらせた上で、その文章やグラフをもとに、それをさらに掘り下げて質問していくというタイプの様式を中心に組み立てることにした。そしてⅠ～Ⅳの大問を構成した。それぞれの大問が、高等学校における特定の単元に含まれる問題だけに限定されず、できうればいくつかの単元にまたがる問題、あるいは政治と経済の両方にかかわり合うような問題を併せて構成されるように、問題作成方針検討の段階では強く意識していたが、結果としてみて、この点は必らずしもその意図に沿うことに成功しなかったように思われる。これは、言うは易く行うは難い問題点であって、今後の検討の課題の一つとしたい。

2　出題意図と解答結果

(1)　本　試　験

大問Ⅰは「権力分立の原理」をとりあげ、わが国のような議院内閣制と米国のような大統領制

とを対比させながら、権力の相互抑制機能や政党組織との関係を論じた長い文章を読ませ、その上で日本国憲法および米国大統領の権限について問うている。正答率は予想した以上に高く、受験生にとってこの種の問題は十分にこなされているという感じを受けた。しかし一方、問6で、大平内閣での大来外相の任用という問題作成時には予期していなかった事態の出現で、これが全く平易で陳腐問題となってしまったことを悔んだのであるが、結果についてみると、この問いに対する正答率は、大問Ⅰの10題のうち最低であった。受験者が現実の政治には無関心なのか、理解に苦しむところである。

大問Ⅱは「基本的人権」のうち、とくに自由権について、明治憲法と日本国憲法との比較において、その差を際立たせようと試みたもので、ごく基本的な問題である。教科書であまりふれられていない問題が問われているという指摘もあったが、奇問という程のものではなく、高校での授業でも一番よく学習されているはずのテーマであり、教科書を十分理解していればかなり高い得点がとれると思われる問題と考えていた。しかし解答結果は4つの大問中で最も悪く、また特に正答率が低かったのは、14 18 21であった。後2者は教科書では扱われていないかもしれないが、現代の政治を少し深く知ろうとする者にとっては、むしろ常識を問うているものであり、最初の14の正答率が低いのはむしろ意外であった。

大問Ⅲでは、公害防除設備が設置された場合に、市場経済の中で需要・供給の調整を通じて防除設備の費用負担が、企業、消費者、納税者などのどこにかかってくるか、そして汚染量がどのように変化するかを考えさせ、さらにその思考プロセスを総合した結果、導き出されると考えられる命題を見つけ出す能力をみることを試みている。公害規制に関する議論は、単に公害が市民生活を破壊することや、汚染者をきびしく取り締まらなければならないことを抽象的に主張するという段階を過ぎ、具体的にどのような規制を行えばどのような効果があるかという点に問題が移ってきている、本問はそのような問題にますます多くの注意が向けられることを期待して作られたものである。問1、2が理論的な側面に重点を置いているのに対して、問3、4は公害問題の実際的な側面を問うている。このような常識的な事実も知らずに公害を論じても単なる空論に終わるおそれがあるので、平易すぎるとは思われたが、あえて出題した。全体として平均点はあまりよくないと予想していたが、4つの大問中では最高の出来で、「政治・経済」全体の平均点を大きく押し上げる結果となってしまった。そのなかでは、23 25の正答率が比較的低く、論理的な問題は点がとり易いように見えるものの、それが需給曲線の考え方がまだ十分に理解された結果であるとはいい難いようである。

戦後の日本経済の発展を支えたのが貿易であることは言うまでもないが、大問Ⅳは、わが国の戦前、戦後の貿易の市場別、商品別構成を比較し、世界貿易のなかでのわが国の地位の変化を論じた出題である。設問の内容が「地理」に近いという批判が寄せられているが、扱っている内容はあくまでも「日本の経済発展」と「貿易の現状と問題点」の立場からのものであり、日本の資本主義発展の現状分析の上から基本的事項について問うたものである。解答結果は、大問Ⅰとほぼ同程度の出来であったが、問3の正答率が際立って悪かった。問2は受験生にとってむずかしくなかったようである。

(2) 追 試 験

大問Ⅰは日本国憲法下での国会を中心に、その行政府との関連、帝国議会との比較などを問う政治の基本的問題である。

大問Ⅱは、わが国の戦後の経済成長を中心とする設題であり、成長率やその要因分析、景気対策、経済変動についての観測資料などについての理解を問うている。問1、問2のようなタイプの出題形式については、一般にかなり高い正答率が得られているが、逆に問3、問4のようにより正確な理解を選択肢の組み合わせによって求めるタイプの出題形式については、正答率が低くなっている。

大問Ⅲは、日本経済を農業、とくに農家経済の立場から視ることをねらった出題である。戦前、戦後の農家の暮らしを、かなり大胆な比較ではあるが、統計数字に基づいて簡単な計算をし、その変化を明らかにしようという設問となっている。4つの大問中では平均点が最も高く、問1、問2において、全体としての解答番号数が多いことを勘案して選択肢の数を3つずつと少なくしたことが影響しているようである。選択肢の数が少なすぎるという批判が各方面から寄せられているが、問題作成部会として今後検討を要する課題の1つであろう。

大問Ⅳは、変動期にある現代国際社会について、その歴史的展開と今日の課題を述べたかなり長い文章を読ませ、関連する基礎的問題についての知識と理解力を試すものである。そこでの狙いは、国際関係の平面的理解や部分的または現象的な事項の知識を問うよりも、国際社会を全体として、かつ構造的に理解する能力をみるところにある。そのため、今日における国家主権の意義と限界や国際社会における法の支配など、やや高度な問題をとりあげているが、設問はさほど難解ではなく、受験生に基礎的知識と一般的判断力をこえるものは要求していない。ただこの大問Ⅳの正答率は、全般的に平均点の高かった「政治・経済」のなかで、予想以上に低かった。こ

の結果は、「国際関係と国際政治」の分野について、高等学校での学習がおくれていることにも一つの原因があろうが、現代の日本の「政治・経済」を学ぶ上では、それは決してなおざりにしてよい問題ではなく、むしろ一層の学習の強化を期待するものである。なお設問4、解答番号51の正答につき単純ミスがあり、その訂正がおくれたことを深く反省している。

3　出題形式および出題範囲

マークシート方式による客観的検査方法として利用しうる文章完成法、選択法、正誤法のすべてを組み合わせ出題するように心掛けた。設問数については前年同様かなり少なくしたが、そのことが平均点をかなり高いものとする結果を招いた一因であると考えている。本年度も追試験において生起順序を問う設問があったが、このような形式は歴史的なものの考え方の流れについての理解を試す意味で、かなり有効であるように思われる。

「国際関係と国際政治」の分野の取り扱いについては、本年度もまた高等学校側から、「日本史」における戦後史に対してと同様の配慮がほしいとの要望が出ているが、これについては本部会は、試行テスト以来常に一貫した態度をとりつづけてきており、昨年度、一昨年度の当部会の見解のなかで、それはくりかえし述べられている。日本の政治、経済を正しく理解するためにも、今日の国際化された社会の出来事を的確に把えておくことは不可欠であり、また「世界史」や「日本史」にくらべて内容も少ない「政治・経済」のなかで、三本柱の一つを除外してしまうことは、極めて不適切である。高等学校側の深い理解を願うものである。

4　問題についての反響意見

(1)　平均点について

試験実施直後から、「政治・経済」の問題は、「社会」の他の科目にくらべて易しすぎる、不公平だという意見が受験生はじめ各方面から出され、また事実、採点の上公表された平均点も、これらの当初の報道ほどではなかったにしても、73.42点と70点をオーバーし、昨年の結果を大きく上廻った。問題作成部会として、本年度の問題が昨年度、あるいは試行テストのそれにくらべてより平易であったとは考えておらず、このような結果は、むしろ受験生の受験対策の結果であろうと推定している。前述したように、「政治・経済」は「社会」の科目中、「倫理・社会」と並んで高

等学校での単位数も少なく、使われている教科書も他の科目よりかなり薄いものとなっている。受験対策上は、「世界史」や「日本史」を勉強するよりかなり楽なように思われる。「社会」のなかで「政治・経済」と「倫理・社会」を併せて選択することが禁止される措置がとられることも、むしろ当然といえよう。「政治・経済」の選択受験者数が昨年にくらべていちじるしく増加したことも、この事実を物語っている。しかしだからといって、この平均点の差が容認されるものではないことも、またたしかである。このような可能性について予見することは困難ではあったが、今後の問題作成に当たって、大いに留意すべきであろう。

「共通第1次学力試験等連絡協議会試験問題部会」の政治・経済分科会の席上、高等学校側の委員から、本試験の大問Ⅱは高等学校で力を入れて学習しているテーマであり、大問Ⅲは論理の展開を必要とする応用問題となっている。したがってⅡのほうがⅢより平均点がかなり高かったと思う、という感想が出されたが、事実はまったく逆で、大問Ⅲの平均は極めて高く、大問Ⅱはかなり悪い点数であった。これを見ると、考えさせるタイプの問題は、前提とされる概念の枠組みをしっかり把えさえすれば、比較的容易に正解を導きうるので、受験生にとってはかえって点の取り易い問題であり、一方知識を問うタイプの問題は事前準備を多く必要とするので、扱いにくくなっているようにも思われる。平均点を下げようとして大問Ⅱのタイプの問題をふやしていくことは、しかしながら、いわゆる難問、奇問といった批判がなされるような設問にもおちいり易い。次年度以降、これらの事実を参考にし、問題作成に工夫を加えねばならないことは当然であるが、本年度の問題が平易すぎ、不適切であったとは考えていない。「社会」全体としてのバランスの問題である。

(2)　本試験大問Ⅲなどについて

本試験の大問Ⅲについては、高等学校関係者から多くのおほめの言葉を頂いたが、一方、またいくつもの大学の経済専門家からの批判も頂いているので、ここにわれわれの見解を述べておきたい。問1を正確に扱うには、厳密な定義を示し、さまざまな場合を区別した上で分析することが望ましいのは当然であるが、そのようなことは紙幅の制約上不可能であり、また高等学校の教科書にある需要曲線のかなり概略的な扱い方を考えれば、むずかしすぎると思われる。そのために、供給曲線に関して、財の供給者がまったく価格支配力をもたない完全競争のケースではなく、いく分かの価格支配力をもつ供給者の供給価格を表わすものと考えざるを得なかった。完全競争仮定に基づく厳密な分析を考えた大学関係者から疑問が出されてくるのは十分に予想されたところ

である。理論的な問題を、その正確な形で出題することが極めて困難となれば、共通第１次学力試験からそのような問題ははずしてしまうか、それともある程度の厳密性の犠牲の下に出題するか、いずれかの選択を迫られる。解答形式からどちらかといえば知識を試すことに重点がおかれやすい共通第１次学力試験の性格を考慮するとき、後者の途を選ぶのが適当と思われる。

5　追試験の正解発表の誤りについて

追試験について当初公表された発表に誤りがあり、その訂正がかなりおくれてしまった。単純ミスを見過してしまい、試験実施後何回かそれに気づくチャンスがあったにもかかわらず、再度これを見逃し、受験生はじめ各方面に多大の迷惑をかけたことを深く反省している。

日　本　史

(1)　高等学校教科担当教員の意見・評価

1　構　成　と　内　容

(1)　本試験問題の構成と内容

本試験問題の構成を大問題ごとに見ると、Ⅰは古代の文化と政治の基礎的事項に関して、問題文中の下線をほどこした語句について正誤を判断させる問題、Ⅱは原始時代から近代までの範囲で、10のテーマにつきそれぞれ４つの短文を置き、その正誤を判断させ、各時代の政治・社会・外交・経済・文化などの問題についての総合的な理解力を問う問題、Ⅲは近世の政治史に関する基本的事項の理解を試す問題、Ⅳは近・現代史に関する重要事項についての基礎的知識を、５つの選択肢から一語を選ぶ形式で問う問題のあわせて４問題で構成されている。

全体的には下表の通り、教科書の記述量に比べて問題数、配点ともやや近世にかたよりが見られるが、近世、近・現代史に重点をおく高校日本史教育の目標に合致している。また、内容的にも一部をのぞいて、各時代の基礎的・基本的事項について時代別に作問し、古代から現代にかけてほぼ時代順に問題が配列されており、受験生にとって問題にとり組み易い構成である。しかし、こうした構成を重視したためか、問題文の量が多く難度の高いⅡの問題が、初めの方に配置されたため、受験生の中には解答時間の配分を誤るものもあった。Ⅱは中世史を主として作問されてはいるが、全時代にわたる問題でもあるので、難易度、出題のねらいから見ても、４問題の最後に配置するのが適当であろう。

	原始・古代	中　世	近　世	近・現代
問題数（割合）	11（23％）	6（13％）	17（36％）	13（28％）
配点	23点	18点	31点	28点
教科書記述の割合	26％	16％	25％	33％

次に、54年度も出題され、本年度も追試験では出題された史料問題が本試験には出題されていない。史料・地図・年表・図表などにもとづいて、歴史をできるだけ具体的に考察させ、歴史的

思考力を養うことを目的とする高校日本史教育の立場から見て史料問題などの出題がなかったことはおしまれる。

(2) 追試験問題の構成と内容

追試験問題の構成は、Ⅰは原始時代と古代の文化・政治の基礎的事項に関する問題、Ⅱは古代末期から中世にかけての雑題、Ⅲは近世の社会体制に関する基本的な事項についての理解を試す問題、Ⅳは明治・大正・昭和の政治に関する基本的史料にもとづいて、近代政治の展開過程についての総合的判断力・思考力を問う問題である。本試験問題に比して、いくぶん高度の知識・理解力を要求される高水準の問題が多いが、本試験問題と同様に時代順に問題を配列し、しかも難易のバランスもよく配慮された良い問題構成である。しかし、全体に本試験問題と類似の構成であり、内容にも同種の問題が数多く見られたのは好ましくない。また、Ⅳ－Cの問題は、高校での学習進度と生徒の理解、習熟の程度から見て難問である。特に昭和史の出題にあたってはこの点に留意し、慎重に作問されたい。

2 範囲と程度、設問数等

(1) 本試験問題の範囲と程度、設問数等

時代＼部門	本試験問題					追試験問題				
	政治	外交	社会・経済	文化	計	政治	外交	社会・経済	文化	計
原始・古代	4		2	5	11	4		1	7	12
中世		1	4	1	6	1		3	4	8
近世	10	4	2	1	17	2		6		8
近・現代	10		1	2	13	16	2	2	1	21
計	24	5	9	9	47	23	2	12	12	49

本試験問題の出題範囲を設問数によって分類すると上表の通りである。まず時代別にみると、原始時代から現代に至るまで幅広く出題されているが、㋐古代後半から中世前半の部分が全くなく、㋑教科書の記述の割合に比べ、近世からの出題量が多いことが注目される。学問的に問題の多い原始時代から5世紀代の問題が少いことは一応うなずけるとしても、大学入試が高校教育に

およぼす影響等を考慮すると、出題のバランスについては一考をお願いしたい。次に部門別に見ると、㋐政治史に関する出題が問題数で50％以上あること。㋑社会経済史や文化史の出題が少く、しかも文化史は特定の時代にかたよっていることが指摘できる。文化史の出題については、高校現場の授業と教科書の扱いに最も幅があり、問題作成に当たっても、他の領域とは異り平板化するおそれがあるなど多くの困難点が予測されるが、高等学校学習指導要領に示されている目標にもてらして、今後とも十分意を用いてもらいたい。

次に程度について記したい。

大問別でいえば、最も難問であったのはⅡであり、他は難易を適宜にまぜた、中間的な出題であった。大問Ⅱは全ての小問が本質的に高等で難解である上に、㋐解答方法が2種類あること。㋑解答に際して文の精読が求められているわけだが、文の選択肢が長いことなどが加わり、一層むつかしい問題となったと云えよう。

解答方法については今後、問題作成に際して㋐解答方法を1つに統一する。㋑選択肢の文章を3つにへらす。㋒各文を2行程度に短縮する、などの創意をこらして適切な難度の問題となるよう留意してもらいたい。

また解答番号 13 はⅡの各問題が歴史の内容理解、歴史的思考力にかかわる問題であるのに対して、③の文の人名という基礎的事項が決め手となっているのはいささか物足らない気がする。

解答番号別にいえば 7 11 19 23 24 25 38 42 43 は高等学校の一般的基礎的学習の達成度からみて、これを越えていると考える。2、3例示をすると、23 24 では①の100俵→100石の誤りに気づかせる発問は歴史的事項の正確な知識を求めているというよりは、むしろ注意力を問う発問となった感が深く、②の後半の町人請負新田を享保の改革と結びつけさせる発問は程度を越えた問題であり、学習成果を適確にとらえる配慮が不足しているといえよう。 42 に関して。近・現代に関しては学習事項も多く、領域も広いので、学習指導要領によれば特に、学習の観点の明確化と内容の精選の必要が強調されている。政党政治家としての犬養毅については、立憲政友会（5・15事件）、立憲国民党（第一次護憲運動）、革新倶楽部（第二次護憲運動）の程度が適切であろう。立憲改進党についてはとまどいを感じたのではなかろうか。

Ⅲの問10は意欲的な出題であり、問題文もよく配慮されている。歴史事象の典型化には、個々の史実と必ずしも合致しないものもあり、批判も出るかと思われるが、高校歴史教育の目標にてらし望ましい出題であり、今後もこうした傾向の問題を積極的に出題してほしい。

(2) 追試験問題の範囲と程度、設問数等

追試験問題の出題領域を時代別、部門別に分類した上表について見ると、時代別、部門別ともに本試験と同様の傾向が見られる。特に全問題数の43％が近代史であることは、やや異常である。全体に基礎的事項についての正確な理解を要する問題が多く、程度はやや高度であるが、Ⅱ－G（17）、Ⅲ－B（23 24 25）、Ⅳ－A（35）などを除いておおむね妥当な出題である。

3 出題方法

(1) 本試験問題の出題方法

日本史問題の頁数は20頁で、社会科6科目の中では、世界史の22頁についで、二番目に多い。配当時間との関係では、3分間につき1頁の割となり、Ⅱをはじめとして、指定箇所がない相当の長文について、その全体的な内容について正誤を判別する、そのため、一言・一文字たりともゆるがせにできない問題もあり、60分の試験時間で満足な答案を作成することは著しく困難であろう。大部分の受験生にとって、時間不足のため、問題を残したということはなかったとしても、解答の見直しの余裕はなかったに違いない。日程や、他教科・科目との関係で、試験時間を延長するということは、多分不可能と考えるが、後記のように、問題によっては、解答に直接関係ない記述も相当に認められるので、こうした部分を削減し、更に記述を簡潔に要領よくまとめて、問題文が長すぎるということがないようにすべきである。また、社会科では6科目から2科目を選択するので、その2科目の選びかたによっては、たとえば、日本史・世界史の場合、その合計頁数は42頁、倫社・地理Bでは29頁となり、2科目を合計した場合の量的な差についても考慮して頂きたいと思う。

配点は、正答からみた時代別で、原始・古代―23点、中世―18点、近世―31点、近・現代―28点となり、教科書の記述の割合に比し、近世にやや多く、その分、近・現代が少なくなっているが、おおむね妥当であり、また、問題の難易・重要度の観点からも適切であったといえよう。

この種の試験にあっては、試験時間その他の制約もあるので、正確な知識・理解がありながら、結果的には誤るということがないように、とくに、問題文の表記や解答方法については、適確で受験生の立場を理解した配慮が望まれるが、この観点から、一考を要すると思われる事項を問題ごとに列挙する。

Ⅰ　Aの(b)「僧正」、選択肢中の「法王」・「座主」は大部分の教科書に記述がない語句である。

Bの(e)「巡察使」についても同様である。

Bは8世紀の政治史についての出題であるが、この世紀で最も重要な時期である奈良中期をはずして、その初期と末期についてのみ設問が集中しているのは、的をはずすようなもの。(b)の作問のねらいは理解できるが、高校生の学習程度では、とまどいがあるのではないか。

Ⅱ　出題意図、内容ともすぐれた問題であるが、解答方法が二種類で、問題文が長く、指定箇所もないので、一語・一文字たりといえど正誤判断の対象となるわけで、問題文の表現には、とくに細心の注意が望まれるが、この点、やゝ適確さに欠けたと思われる表記があったのは残念である。

A③の「祭器」は、範時・定義が不明確な用語ではなかったか。

F①は、異なる主語をもつ文節が三つ連なって、奇妙な文形となっている。

③、Fは応仁の乱とその前後の世相を題材とする問題であるが、③だけが、「足軽」の姿が、特定の絵巻物に描かれているかどうかという文章になっている。

Ⅰ③で、「日本はロシヤに対し満州からの撤兵と……を要求し、」とあるが、日露開戦直前の要求は「満・韓国境の両側に幅50kmの中立地帯の設定」である。

④で、「日露戦争に勝った日本は、」とあるが、「勝った」という語を、ポーツマス条約調印と考えれば、桂・タフト協定、日英同盟改定との間に、明らかに、時間的順序に矛盾が生ずる。

知識・理解が深ければ、③・④とも誤りの文章と考え、正しい一つの文を指摘する問題と考えて、①を正答とする可能性がある。

J①は、文章主題の大部分と関係のない所に、「誤り」が作られている。

④は、「国体明徴声明」と「天皇機関説」という語句の位置関係が不自然で正確な理解があっても誤った受験生がいたのではないか。

Ⅲ　A～Dの問題文は不必要ではなかったか。設問の各文を工夫すれば、それぞれの問題は、いずれも解答可能と思われる。

問1　正答は、天和令にもあてはまる事項であるにもかかわらず、問題文で、「将軍家光の時に、改定発布された武家諸法度」とするのは、不必要な混乱をおこさせる。

問2　解答には直接影響しないとは思うが、この問題文は、正答である「京都所司代」が、「禁中並公家諸法度」を「直接に監視する」という、奇妙な文形になるのではないか。

Ⅳ　A・B問題文が、何の前置もなしに、「幕府は」と始まるのは不自然である。

H　この問題にだけ、「来日」と「東京大学で教鞭を取る」という二つの条件があって、不必要な困惑があったのではなかろうか。「東京大学で教鞭を取る」は不要であったと思う。

N　選択肢中の①岡田啓介は、実際には、負傷もしくは死亡もしていないのだから、問題文の「襲撃された」という表現は、より慎重に扱うべきだったと思う。

最後に、同一の事項・人物が、大問を変えて、重複して出題されているが、(「第一次山本内閣」・「浜口雄幸」・「岡田啓介」) 観点を変えた出題であり、正答も異るわけだが、さけるにこしたことはない。

(2) 追試験問題の出題方法

追試験問題も本試験と同様に20頁であり、受験生が読解に手間どる史料問題が3題21問出題されており、試験時間が不足したと思われる。配点については妥当である。

問題文の表記や解答方法については、短文の正誤を判別する問題がやはり多く、とくに、Ⅲは各問ごとに「誤っているもの」、「正しいもの」の選択が交互にくりかえされるなど、解答方法が煩瑣で、いたずらに混乱をまねくおそれがあるので、出題上の工夫（たとえば、注意すべき点をゴシック体にする等）が望まれる。

4　そ　の　他

(1) 社会科科目間の平均点の差について

今回の共通第1次学力試験における社会科科目間の平均点の差については、種々論議のあるところであるが、この点について意見を述べたい。

平均点の差は、政治・経済と日本史の間で特に大であったが、全般的に見ると、政治・経済、倫理・社会が高く、日本史、世界史、地理Aが低い傾向にあることに注目する必要がある。この傾向が出て来た理由はいろいろあろうが、次の点もその原因の一つであると思われる。㋐標準単位数の差――政治・経済、倫理・社会は2単位科目、日本史、世界史、地理は3単位科目（現実には4単位、5単位で行われる場合が多い）である。したがって学習内容量の差が大きく、教科書の分量もそれに応じており、生徒の学習負担の差も大である。㋑従来の国公立大入試、現在の私大入試科目との関連――共通第1次学力試験がはじまるまで、国公立大では政治・経済、倫理・社会を入試科目の指定からはずしていたところが多く、また、両者をあわせて一科目として出題

する大学もあった。現在の私大入試においても同じである。したがって、日本史、世界史、地理などの教科書は、こうした大学入試を配慮して記述を詳しく、内容を高度にする傾向があった。特に採択数の多い教科書ほどその傾向が強いといえる。上述のような事情があるので、共通第1次学力試験の出題にあたって、学習指導要領に準拠し、かつ採択数の多い教科書にてらして出題されると、日本史などの出題内容は高度化し、政治・経済などとの間に平均点の差が生じるのは当然である。

5教科7科目という高負担の中で、受験生は学習負担が少く、高得点が期待できる受験科目を選択するようになり、理科とちがい、2次試験科目に社会科を出題する大学が少数であることから、共通第1次学力試験の平均点の科目間格差は、放置すれば高校社会科教育を混乱させるだけでなく、共通第1次学力試験の信用にもかかわると思われる。上述のような制度的な問題を含むものとして早急に善処されることを望む。

(2) 下書き用紙について

問題の冊子中に、各科目とも1～3ページの下書き用紙が入っている。その必要性の有無は別にして、また、表紙の注意事項に科目ごとのページ数も記載されているので間違いは起らないであろうが、特に下書きを要さない社会科においては、受験生の立場を配慮して、「次ページにも日本史問題がある」など注意書きを加えていただきたい。

(2) 教育研究団体の意見・評価

全国歴史教育研究協議会

(本　試　験)

〈概　評〉

全国平均点51点という結果や、社会科の他科目との比較から考えれば本年度の問題は平均的な受験生にとってむずかしかったと考えられる。共通第1次学力試験の趣旨からすれば、通常の授業と教科書の学習によって6割程度の得点が可能であるべきである。3年次に3単位の授業（しかも実

質的には約８カ月間）という標準的高校における日本史学習の現状からすれば、今年度の問題を授業だけで５割得点することすらむずかしかったはずである。しかもすでに多く指摘があるように社会科内で20点にも及ぶ科目間格差が生ずることは、受験生間に不公平を生じる結果をもたらす。現に昨年度とくらべてさえ日本史受験者数の減少、政経・倫社への移動がめだったが、この傾向は来年度は更に顕著になることが予想される。共通第１次学力試験実施の趣旨にたちもどって問題作成にあたられるよう望みたい。

〈内　容〉

時代別では近世・近現代で65％程度を占めているが近代にややむずかしい問題がめだった。たとえば、Ⅳ－Ｆ、Ｊ、Ｋ、Ｌなど。これらは教科書を通じた授業にもとづく学習のスタイルでは記憶しにくく、部門史的な〝２度目の学習〟を必要とするものである。ところで高校日本史学習の窮極の目標をどこにおくかは意見の別れるところであろうが、少なくとも各時代の特色・歴史の全体的な流れを把握することは最低限必要であろう。この意味で難易という点では問題はないにしても問いの内容が断片的知識である場合が多いのはいささか気になる。すなわち年次順を問うような内容の設問が少なすぎる点である。Ⅲ－問７は例外的に年次順を問うているがしかし問いそのものに歴史理解上の必然性が感じられない。大学入試問題が年々細部にわたるようになり受験生に厖大な知識を要求する傾向が強まっているが、いわゆる難問・奇問を排除するだけでなく断片的知識の集積量が問われるような傾向を封ずることを共通第１次学力試験に期待したい。この点は問題形式についていえば単純な正誤を選ばせる形式をもっと少なくすべきではないかという感想にもつながるのである。昨年度の問題Ⅱ（記された事がらの世紀を問う）は内容上問題も残ったようだが、のぞましい傾向であると思われる。また、本年度のⅡも受験生にはむずかしかったようだが形式としてはのぞましいものであった。

最後に、史料問題が全くなかったのはどのような理由からであろうか。「材料を与えて考えさせる」ことは日本史学習に不可欠で、多くの高校では史料を通じた授業は行われていると思われるのであるが。また、分野でいえば政治史の比重が大きすぎる印象も強い。これに反して社会経済史は余りに少ないのではないか。昨年と逆の傾向だが、分野のアンバランスが毎年続くとすればこれも問題であろう。

（追　試　験）

〈概　評〉

受験者数がごく少ない点からみて、本試験問題との比較はあまり重要ではないかもしれないが、受験者個々人にとっての有利不利、得点（平均点）の大幅なちがいなどが生ずることはやはりさけるべきであろう。その意味でまず時代別出題数のちがい――ことに古代と近世――は許容範囲をこえているのではなかろうか。また、史料問題が近代のみに集中し、しかも30点という比重の大きさを持っている点もあわせて、本試験との差異が大きすぎるのではなかろうか。史料問題については本試験の方でもふれたように出題そのものはのぞましいし、３つの出題史料がいずれもいわゆる著名な史料（頻出史料）でないのも一つの見識を示すものではあろう。しかし追試験のみに出題されるという意図はどこにあるのか理解しかねる。昨年度も同様な出題があったので、疑問を述べたのであるが、２年続けてこのような形となった事情が知りたいところである。

〈内　容〉

全体として原始～近世が比較的やさしく、近代がむずかしい点、本試験と同様である。また、分野別に見たとき、本試験と同様、政治史の比重の大きさはやや気になるが、他の分野（社会経済、文化、外交）は本試験よりもバランスがとれていると思う。近代は史料の読解そのものがむずかしい上に設問がやや細部にわたるため一回の通常授業とその復習程度では平均的受験生には相当むずかしいと思われる。高校の現場では近世史後半から近代はスピードをあげないと太平洋戦争まで終えることができないという現状にあることは否定できない。近代史重視は一つの日本史学習についての見解として納得できるにしても単位数との関係では現場としてはやや苦しいところである。

一方、比較的やさしい原始～近世についても問題はある。まず問題文がやや生硬で研究論文の一節を読んでいる感があること。高校生の国語の能力との関係も問題となろう。また、直接解答とかかわる部分ではないにしても、歴史事項・用語として少数の教科書にしか登場しないものがいくつか見られる。（たとえばⅡ－Ｃ「守護領国制」Ｈ『喫茶養生記』、「闘茶」「茶寄合」など）

なお最後にやや気になる点１つ。Ⅳ－Ｂは蘇峰による第一次護憲運動論であるが、問６－②の文章はこの史料の立場からは正しいかもしれないが、一般的評価とはいえない。そもそも蘇峰の立場自体、教科書的護憲運動論とは全く異なるのだから、わざわざそのような史料をとりあげた意図が設問中に示されるべきではないだろうか。

(3) 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

本年度の問題作成の方針は、高等学校段階での日本史学習の達成度を評価することを基本的な方針としている。従って、出題範囲は、原始・古代から近現代までの各時代にまたがり、政治史・社会経済史・文化史などの各分野にわたるよう配慮した。その場合、それぞれの時代の基本的事項や歴史の流れをどのように把握しているかを判定する問題を多くし、単純な暗記によって解答するものはできるだけ少なくした。また、受験生が使用している教科書や居住地域などによって有利・不利が生じるようなことがないよう注意をはらった。

2 各問題の出題意図

〈本試験について〉 問題ⅠのAは、7世紀前後の飛鳥・白鳳期の文化と、その世界性を示す特色について基本的事項を問うたものであり、Bは、8世紀の律令時代の変遷を、前期と後期に問題をしぼって、それぞれの基本的事項をどの程度理解しているかを求めたものである。

問題Ⅱは、原始社会から近代にいたる政治・経済・文化についての基礎的な事実を歴史の流れに即して正しく理解しているかどうかを問うたものである。一つの問題の中に正文摘出と誤文摘出を含めたことによって受験生が、選択肢の各文章中に誤りがあるかないかを確実に指摘しなければならなくし、単語の結びつけだけで日本史を理解することがないことをねらいとした。

問題Ⅲは、近世の政治史に関する系統的な理解とその基本的事項に関する知識を問うことを意図して作題した。内容は、幕府だけでなく藩に関する問題をも加え、近世の政治史についての総合的な理解ができているかどうかを問うたものである。

問題Ⅳは、幕末から戦後までの政治・経済・文化について基本的事項の理解があるかどうか試問したものである。

〈追試験について〉 問題ⅠのAは、原始時代の基本的な生産用具についての設問であり、Bは、弥生時代から古墳時代までを対象に墳墓を通じて文化の伝播の実態を正しく捉えているかを問うものであり、Cは、10世紀後半から11世紀前半にかけての摂関政治の主要な性格と武士の発生にかかわる基本的事項について設問した。

問題Ⅱは、中世を中心に平安時代から江戸時代初期にかけての政治・経済・文化の基礎的事項が正確に理解されているかどうかを問うている。

問題Ⅲは、近世の身分制に関する基本的事項についての知識と理解を求め、同時に近世社会の形成・展開・解体という大きな歴史の流れについての認識を試問したものである。

問題Ⅳは、明治14年の政変、大正政変、近衛新体制など、近現代史の転換点をなす時期の理解について史料を提示し関連問題を含めて多角的な設問をしたものである。

3 解答結果

〈本試験について〉 平均得点51.92は、社会の全科目中で最低であり、政経・倫社などとの差が目だつ結果になった。しかし、得点分布の曲線は正常な形になっており、学習の達成度を評価する上では妥当な問題であったといえよう。大問別にみると、Ⅰは平均以上にできており、Ⅲがそれにつぎ、Ⅳは平均に近く、Ⅱがもっとも低い結果になっている。

小問ごとに正答率の高いものをあげてみると、Ⅰの 1 2 4 5 6 9 10、Ⅲの 22 27 Ⅳの 33 34 35 37 45 47 などであり、そのほとんどが単純な語句を選択させた設問である。これに対して正答率の低いものは、Ⅰの 7、Ⅱの 11 12 14 16 17 18 19 20、Ⅲの 21 23・24 29 30・31 Ⅳの 40 42 43 などである。

ここで、正答率の低いものについて検討してみると、Ⅰの 7 は、養老年間を前後として選択肢の諸事項がそれぞれどういう関連でおこったのかを正確に知っていれば、各事項の絶対年代を覚えていなくともできる問題であり、正答率の低さはやや意外である。

Ⅱの問題は正答率の低いものが多かったが、その理由は、一つの問題に①～④の四つの文章があり、その中から正文摘出と誤文摘出との二つの場合を想定して、正文ないし誤文を一つ指摘させるという新しい問題形式によるものであろう。それぞれの文章がかなり長文であり、しかもその文章全体について正文か誤文かを判定するためには、それぞれの記述内容について正確な認識が要求された。その結果は、本年度の日本史の問題の中で最低の成績となり、平均点を大きく引き下げる要因となった。しかし、歴史についての理解を問う問題としてこの形式が有効であることは高校側からも評価されており、今後さらに検討すれば適切な問題形式として定着することになろう。

Ⅲの 21 については、①を正答としたものがかなりあり、これは文章をよく読めば、大名の妻子

を国もとにおくという記述が明らかな誤りであることが分ったはずである。高校側からの批判の中で指摘しているように問題文の中には「改定発布された武家法度」とあるため、正答②の内容が最初の武家諸法度の中にすでにあることを知っている受験生は多少の混乱を招いたかも知れない。

Ⅲの 23・24 、 30・31 は、2つを選ばせる形式をとったが、結果は正答率を大変低くすることになった。問3（ 23・24 ）は、②－④が正答であるが、①－④と答えた者が多かった。①の文章には「石高1万石につき米100俵を上納」とあり、米100石の誤りであるが、かなりの受験生がこれを読み落したものと考えられる。また、問9（ 30・31 ）の場合も、正答の①－④は多かったが、①－②、①－③と答えた者もかなりあり、天保改革の株仲間解散や江戸・大坂10里四方の幕領化が何のために行れたかという点の理解を欠いていることが分る。

Ⅲの 29 は、この時期の政治批判にかかわる条件について正確な理解があるかどうかを問うたものであるが、その結果は意外に低い正答率となった。内容的には多少細かな知識を要求する点があったにしても難問というには当たらないと考える。

Ⅳの 40 では、明治前期に来日した外国人学者について設問したものである。正答は憲法調査のため渡欧した伊藤博文が教えをうけたシュタインが来日していないので、これを除くことを求めたが、結果は必ずしも良くなかった。高校側の指摘するように「東京大学で教鞭を取る」という記述が問題をより難しくしたという面があったかも知れない。しかし、これら外国人と日本との関係を正確に知っていれば容易に解答できる問題であると考えられ、実際に成績上位者の正答率は低くない。

42 については、犬養毅が明治以降の政治史の中でどのような局面で登場しているかをしっかりとおさえていればできる問題であると考えていたが、正答率は意外に低かった。とくに、犬養と立憲改進党との関係を問うた点が難しかったようである。立憲改進党を結成した人々の中に明治14年の政変で下野した大隈重信派の官僚グループがあることを知り、立憲改進党―進歩党―憲政党―憲政本党―立憲国民党と連なる、代表的な政党の系統的理解があれば解けると考えていた出題者側の意図と受験生の認識との間にかなりのズレがあったようである。

43 は、立憲政友会の明治後半期以降における政治史上の位置づけを問うたものであるが、下に列挙された各内閣がどういう事情を背景に成立したかについて政友会との関係を併せ考えてみれば容易に解ける問題である。ただ、第1次加藤高明内閣が、いわゆる護憲三派の内閣であることを理解できないで、加藤高明を憲政会の指導者であるという知識からこれを正答としたものが多かった。

これらのことは、近現代史の学習では事項と事項あるいは人名を結びつけて記憶し、それらの関

係を内容的に理解していないことに基づいていると考えられる。

〈追試験について〉　受験生がきわめて少数であるため、平均点や各問題別の分析結果はあまり意味はない。全体的にみれば、本試験よりやや易しかったといえよう。その中では、Ⅰの原始時代の設問と、Ⅳの近代史料問題とがやや難問であったようである。

4　出題形式についての今回の試み

本試験のⅡの、四つの文章中から三つあるいは一つの正文か誤文かを指摘させる形式は、今回初めての試みである。文章を注意深く読むという点では有効な出題方法であるが、受験生の負担を考えると、文章の量を減らすとか、問題を少なくするとかの工夫をする必要があると考えられる。

5　本年度の出題に対する反響意見について

概して好評であり、昨年度よりも改善されたと評価する意見もあった。しかし、問題の各部分については、かなりきびしい意見もあったが、それらの主要な点について若干の見解を述べておきたい。

(1)　問題量が多いという指摘については、今回はⅡの文章群選択の問題がかなりの量をしめ、しかも、文章全体をかなり精密に読むことが要求される問題であったため、受験生に相当の負担をかける結果になった。こうした形式については、内容的な理解を問う問題として好評であった。

(2)　出題分野が、本年度は政治史に偏ったという指摘については、前年度の出題では社会経済史・文化史に偏ったとの批判があり、分野・時代ともに過不足なく出題することの困難さが痛感される。とくに文化史については、倫理社会と重複する面があって出題範囲が制約されるなども難点の一つである。

(3)　細かい知識を要求する難問があったとする指摘も多少あった。たとえば、Ⅳの 42 などが、高等学校の一般的学習の達成度からみて不適切であるとする意見が多かった。とくに近現代史については、学習の進度との関係で現役での受験生にとってかなりきびしい条件があることも考慮にいれなければならない。

(4)　本試験で史料問題の出題がなかったことについての指摘もあった。史料問題を出題する場合、教科書によって様々な史料が使われ、また、新しい史料を使う場合もそれを有効に利用した作問

をし、しかも、広範囲の設問が可能な史料は必ずしも多くなく、毎回出題することは困難な面がある。

(5) 問題の中の文章上の表記にあいまいなものがあり、とくに正誤判定の設問では細心の注意が必要であるとの指摘があった。それは、当然の配慮であり、今後の出題に当たって重々注意すべき問題であろう。

6 今後の出題に留意すべき点

試験の結果からみて正答を二つ選ばせる問題は、かなり正答率を低くするということが分る。出題例では、問題が易しいと判断した場合や一つだけを選ばせる設問をすることが難かしい場合に使用する問題形式であるが、この場合、二つのうち一つが正答であっても他が間違いの場合は0点となり、二つ間違ったのと同じ結果になる。この形式は、正答率を低くするばかりでなく、一つについては正答しても評価されないという問題があり、できればこうした設問は避けた方がよいと考えられる。

7 その他

社会科についての意見の中でもっとも多かったのは、社会の諸科目相互間にある平均点のかなりの格差を少なくする必要があるというものである。政経・倫社は2単位で、その他が3単位以上となっている教科内容の分量上の違いが基本的な問題としてあり、さらに科目間で難易度を事前に調整するということも実際上不可能であることから、この問題を解決することは大変困難である。しかし、日本史の平均点は最低であり、少なくとも60点近い線まで引きあげるための努力は必要である。そのためには問題の分量を減らすことや、出題形式を改めることなどによって得点をかなり向上させることは可能であろう。

世 界 史

(1) 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 構成と内容

(1) 構 成

社会科の試験は1科目60分、2科目計120分という時間で実施されたが、本試験は大問5問、追試験は大問4問から成り妥当な構成といえよう。大問の数については、各地域、各時代の偏りをなくすためには増加することも止むを得ないのではないかという意見もあるが、マークシート方式で60分という短い解答時間を考えると、これ以上の増加は不要であろう。また解答番号数は本試験が昨年度57に対し67、追試験が昨年度54に対し62と増加しており、60分の出題量としてはやや多かったといえる。このことは受験生や高校教師に対するアンケートによっても確認された。また頁数、活字の大きさ、行間のゆとり、解答用紙については、全般的に良好といえるが、ただ今回の本試験で良心的な配慮から下書き用紙が3枚挿入されていたため途中で問題終了と誤解した者が出ており、今後の改善を要望したい。

(2) 内 容

世界史は地域的にも時代的にも広い範囲を包含しており、そこから地域的、時代的に万遍なく出題するのは非常に困難なことであり、この点出題者のご労苦に対して深く敬意を表する。

今回の出題を概観すると次のような内容であった。

ア 本 試 験

Ⅰ 胡椒を主題とした東西交渉史（古代～近代）

Ⅱ ギリシア・ローマ史及びキリスト教史（古代～中世）

Ⅲ 産業革命を中心とした近代ヨーロッパ史（近代）

Ⅳ 19世紀末以降のロシア・ソ連邦史（現代）

Ⅴ 中国を中心とした東アジア史雑題（古代～現代）

イ 追 試 験

Ⅰ　中国と北アジアとの関係史（古代～近代）

Ⅱ　18世紀以降の重要な国際会議と国際条約に関する問題（近代～現代）

Ⅲ　アジアを中心とした雑題（先史～現代）

Ⅳ　ヨーロッパ史を中心とした雑題（古代～近代）

本試験についてみると、東洋史関係２題、西洋史関係３題でバランスはとれている。ただ昨年同様、本年度も古代史の比率が大きく近現代史が少なかった。特に世界史において重要な位置を占める帝国主義、全体主義部門からの出題がみられなかったのは残念であった。次に分野別にみると、政治史60％、社会・経済史25％、文化史15％であり今回は社会・経済史が増加した点注目される。出題にあたって教科書における分野別の記述が考慮されているといえよう。追試験についてみると、西洋史関係２題、東洋史関係２題で時代別には先史から現代までむらなく出題されている。分野別にみると政治史が多く、本試験にみられた社会・経済の分野からの出題は極めて少なかった。

2　試験問題の範囲と程度

(1) 範　　囲

出題範囲の下限は受験生、高校教師にとって最大の関心事である。今年の本試験では中華人民共和国とバンドン会議、追試験では第３次中東戦争まで出題されており、第２次世界大戦後の戦後史からの出題が徐々に増えてきている。高校の授業の進度から考えて、出題範囲の下限は第２次世界大戦までにとどめてもらいたい。もしそれ以降を出題する場合でも、より基本的事項を出題されるよう配慮願いたい。

(2) 程　　度

共通第１次学力試験は、高校生が基礎的学習をしておれば十分に解答できる出題がなされるということであるが、本年度の本試験、追試験においては、高校の学習程度をこえた問題が若干出題されている。以下問題点を解答番号で具体的に述べてみたい。

ア　本試験の問題点

1　選択肢に問題がある。選択肢を列挙する場合、高校生の知識として妥当なものをあげるべきである。

9　正解のマラッカ王国は極一部の教科書に記載されているにすぎない。

23　パウロを正解として選ばすのは専門的すぎる。

26　教科書では11世紀中頃といった記述のものが多い。年号を選ばせる問題については、より基本的なものにしてほしい。

27　ファーティマ朝が首都カイロを建設した世紀を記憶さすことは難問である。

30　ウォルムス協約の内容については、教科書記載がないうえに、授業ではそこまで取り扱っていないのが実情である。

33　ペトラルカを選出さす出題は、高校生用の参考書、辞書にもほとんど記載がなく、全く奇問に属するものといえよう。

35　良問で正解は得られるものの、多少レベルの高い問題である。

40　「国富論」刊行の年号を記憶させるのは難問である。

43・44　選択肢中の男子普通選挙の実施は、高校段階で取り扱わない事項である。

47・51・53　あまりにも専門的な問題で悪問といえよう。

62　正解は直ちに推察できるが、教科書に記載されていない重慶会談は、設問とすべきでなかった。

67　日本の参加をとり上げている教科書は極一部しかなく、細かい問題である。

イ　追試験の問題点

2　五胡を問う問題以外はほとんど取り扱わず、専門的な問題である。

3　選択肢中の儀同府は教科書の記載もなく、細かすぎる。

21　国際連盟の加盟国を全て記憶さすことは困難である。「加入しなかった国を２つ選べ」という設問にしてほしかった。

26　選択肢中のクテシフォンを求める問題は細かすぎる。

32　ロココを求める問題は、18世紀のヨーロッパ芸術ということで推定できるが、教科書に記載もなく難問である。

35　カンバリクを求める問題は細かすぎる。

42　三武一宗のうち後周の世宗を求める問題は悪問に属する。

43・44　「五体清文鑑」は特定の一部の教科書にしか記載されておらず、五種の言語を要求するのは極めて専門的である。藩部を要求するものであれば、設問の中で明示すべきであった。

57　アムステルダムでなく、アントワープを選ばせるのは専門的である。

3　試験問題の出題方法（試験時間、配点、問題文の表現、解答方法等）

(1)　試験時間

試験時間は設問数とも密接に関連するが、本年度は本試験・追試験ともに昨年と比較して、設問数が８～10と増加した関係で時間の不足をうったえた生徒が多かった。せめて受験生に問題を見直す程度の時間的余裕を与えて欲しかった。やはり解答番号数は50～60程度が妥当なところであろう。

(2)　配　　点

本試験の大問Ⅳの配点10点は時代的、地域的にみて多かった。東洋史と西洋史の配点比率、１解答番号当たり１点ないし２点という配点は妥当である。

(3)　問題文の表現

全体的には細部までよく検討され妥当な表現であった。ただいくつかの問題点があったので例示する。

ア　人名、地名の表現について、種々の読み方・表記の仕方があり、複雑で全員が満足できる解決法はむずかしいと思うが、この点に関し大体、現地音主義に従っていることは理解される。それにしても一部の受験生が不利にならないようカッコづけや、カナづけをして欲しい。そういう意味で本試験のⅤ 65 のホラズムを（フワーリズム）とし、Ⅲ 45 のヴィルヘルムを（ウィリアム）としたことは高く評価できる。同じ見方に立てばⅡ 28 のインノケンティウスや、Ⅴ 64 の慶州はそれぞれ（インノセント）、（金城）のようにカッコ書きが必要である。また追試験のⅢ 45 ・ 46 ・ 47 の芝罘、牛荘、澳門、扈門などの地名にはカナづけをして欲しい。

イ　本試験のⅠ 11 の問題文、「中国最大の貿易港」という表現において、泉州が正解で、杭州が誤まりであるとするのは問題がある。

ウ　本試験のⅡ 20 の問題で、「ローマの平和」という表現に問題がある。ローマの平和は漠然とした表現であり、この時期を五賢帝時代までとすれば、カラカラ帝時代のローマ市民権の一般化も関連しない事項となり、正解となる。

エ　追試験のⅠ 6 の「揚子江の一部」という表現法にも問題がある。淮水を求める問題で正解は明確であるが、揚子江の支流の一部も関係しているのではないかと考えられないこともなく、

「一部」というまぎらわしい表現は削除して欲しい。

オ　本試験のⅤ 63 は、16世紀中ごろ、一条鞭法が出現したとあるが、出現という表現があいまいである。教科書では万暦帝時代（在位1572～1620）に実施されたと記述されているものが多く、70年代が中ごろかどうかという問題もおこってくる。また追試験のⅠ 8 で「16世紀後半」という表現には問題がある。アルタン＝ハンの北京包囲は50年であり、教科書には「16世紀中ごろ」と記述されているものもある。

今後、「中ごろ」、「前半」、「後半」という言葉の使い方にも十分に注意して欲しい。

(4)　解答方法

解答方法については特に問題はないと思う。

4　要　　望

(1)　本試験のⅠは胡椒、香料をとりあげ、古代から近世初頭までの東西交渉をテーマとした主題学習的なとらえ方での出題方法で、良問であり好ましい傾向である。Ⅱも一部の難点を除けば高校教育の基本に即したものであり、特に 15 ・ 16 などは基本的事項をふまえ、時代の流れをおさえさせる良問で今後このような出題を望む。追試験のⅠは中国と北アジアの関係をテーマに設定した主題学習的な良問で、Ⅱも国際会議、国際条約をテーマによく考えられており、程度もⅠ・Ⅱとも適切であった。Ⅲは問いの方法に工夫の跡が見られ、特に 27 のような出題方法は好ましいものであり、今後も期待したい。

ただ本試験のⅣの問題では、国際婦人デーの食糧デモをめぐって専門的な論議が行われたが、この問題自体その論議以前の高校教育の内容を甚だしく逸脱したものであるといわざるを得ない。細かな知識量を求めるだけのものであり、しかも大問として10点の配点には問題があり、この種の問題の取り扱いは大問でなく小問として数点以内にとどめるべきである。また、年代を細部にわたって出題する傾向が強まっているのが多少気になる点である。追試験におけるⅣ 51 のコンスタンティヌス帝の遷都の年号を記憶さす問題や、Ⅳ 50 のカイロネイアの年号を記憶さす問題などである。なお、本試験のⅤ 59 、追試験のⅢ 28 ・ 29 の「牡丹亭還魂記」「西遊記」「水滸伝」「儒林外史」などは、昨年度本試験、本年度本試験、追試験において形こそ変っているが重複して出題されているものである。受験生の立場からみてこのようなことは妥当なのか一考を要する

ところであろう。

(2) 本年度の世界史試験では、試験開始後に問題ミスが見つかり現場に混乱が生じたが、受験生に与える心理的影響は決して少なくない。慎重に検討を重ね、今後は混乱を招くような単純ミスは絶対に避けて欲しい。

(3) 出題に当たっては、使用されている教科書のすべてに当たってよく検討されておられるご努力は認められ、敬意を表するが、それでもなおかつ一部の出題において、既に指摘したように極少数の教科書にしか記載のないものがあることも事実である。例えば、本試験のⅠ[9]、Ⅳの[51]・[53]や、追試験のⅣ[54]⑧などは一例であるが極めて一部の教科書にしかなく、本試験のⅣ[55]や、追試験のⅣ[56]などは約半数の教科書に記載があるだけであり、一部の受験生にとって有利不利の差が生じないよう、公平を期して一層のご努力をお願いしたい。

(4) 本年度の社会科の試験で科目間の平均点に大きな格差があるのは問題である。世界史と政経の差が約20点、日本史と政経の差が約22点、日本史と倫社の差が約10点もあることはあまりにも開きすぎる。少なくとも数点以内にとどめるべきで、受験者群に質の差等の要素はあるにしても、今後の受験生に与える影響は大きいものがある。政経受験者群に質の良い生徒が集まっているかの如くに見えるが、現実的には世界史受験者はほとんど質の良い生徒で占められており、世界史・政経、世界史・倫社の組み合わせで受験した者が、例外なく世界史の方がむずかしかったとの報告をし、実際の得点でもはっきりとその事実を裏付けていることは、受験生に対する詳細なアンケート調査で指摘されている。以上のことから、統計的には世界史と他の科目との組み合わせの合計が、他の組み合わせのものより高いからといって、世界史の平均点が低くてもよいということにはならないはずである。このような現象がさらに続くとすれば、今後の共通第１次学力試験の科目選択において、全国的規模で大きな変動をもたらすことになり、歴史ばなれの現象が定着し、高校における世界史教育の危機を招くものといわざるを得ない。本年度の世界史受験者は、昨年に比し３万人以上も減少している。出題に当たって、科目間の連携を密にし、総合的な検討を加えられんことを強く要望する。

以上、いろいろと意見、感想を述べたが、私達としても大学入試センターならびに出題委員の諸先生方の日頃のご労苦は十分わかっているものであり、そのご労苦に心から敬意を表するものである。今後とも高校における世界史教育に即した妥当で適切な出題をお願いし、本年度の報告とする。

(2) 教育研究団体の意見・評価

全国歴史教育研究協議会

（本　試　験）

はじめに

問題の内容ではなくて共通第１次学力試験全体のことについて当然大学入試センターとしては考えておられることとは思うが敢えて一言述べておきたい。それは高校における必修科目及びその単位数と１次試験における選択科目と配点との関係である。共通第１次学力試験が１つには高校教育課程の修得程度を見究めること、もう１つには大学教育に対する適応性を試験するというところに目標があると考えるのであるが、そうであれば前者からしては出来るだけ必修科目は共通第１次学力試験でも必修としその際、配点はその必修科目の単位数に比例させるようにするのが望ましいということである。次に後者からして英語はどうしても試験科目に入れなくてはならないが体育、芸術、家庭などは除いてもよいと思われる。

ここでこうした考え方を社会科について適用すればどうであろうか。倫社、政経のうち１つを必修受験科目とし、日本史、世界史、地理Ａ、地理Ｂのうち１つを選択必修受験科目とすること。さらに前者の配点と後者の配点の比率は１：２とするのがよい。大体週２時間で普通３学年で履習している政経と２、３学年で一般には履習していて実際にはほとんどの高校でと言っていい位、週に最低４時間授業しなくては絶対に終らない日本史、世界史が同じ配点でしかも結果として全国平均点が政経で70点余、歴史の方は50点余という状況では生徒が歴史を避けることは当然ではないか。それはやがては大学教育への適応性に相当な疑問を抱かせるものである。

このことは卒業生の感想としてしばしばきくことであり、大学教授自身が痛感するところではなかろうかと推察する。歴史で60点とるための受験生の努力と政経で70点とるための努力とでは何れが大変であるかは言うまでもなく明白である。こうしたことを配慮しない入試なんていうものは一体何を目指しているのか理解に苦しむ。ただ我々から意見を求めるというのでなく即刻に対策を考えられたい。

1　問題の内容について

全般的傾向――時代別配分、文化圏別配分、政治、経済、文化などの分野別配分はほぼ穏当なところである。ただ昨年度もそうであり意見を述べておいたことなのであるが、イスラム圏が少し軽すぎるように思う。それから中国が今年はやや少ないように感じられる。尚昨年もそうであったが第2次大戦後は3学年で履習する生徒も大分いる現状からして無理ではないかと思う。

2　各問題について

Ⅰ　1世紀頃から15世紀の東西交流を海上貿易路を主にして問題にしているのは良い着眼であり、そのことについての概略の歴史の流れを把握しているかをテストするという意味で昨年の断片的な羅列問題と較べてはるかによい。しかし部分的に文章に曖昧なところ、また解答するのに無理な知識を要求しているところがある。 1 のペパーは何語から出ているかというのについてウルドゥとヒンディーは除かれようがシンハラとサンスクリットのどちらをとるかは古代インドにシンハラという国がセイロン島にあったことを知っている生徒には却って迷わせるもので好ましくない。

Bの問題文で「インド洋から紅海に入ってエジプトへ出る道を取ることが多くなった。このため通商路にあたる 6 の商人たちは大きな利益を占めた。」とあるが、これはどのような道なのか分かり難い。

11 の選択肢のうち泉州、福州のいずれを選ぶかはやや無理の感がする。

Ⅱ　20 のローマの平和に関連しないものを選べという問題の意味が不明確である。ローマの平和を実現するのに何等かの関係があったという意味か、それともローマの平和の時期に起った事象又は生存した人という意味か。 33 は時代からしてペトラルカ、ボッカチョの何れかであることは考えられるが、ペトラルカが教皇庁で過したというような細かいことは全く無理である。

Ⅲ　35 は①と④いずれを選んでよいか迷うであろう。 36 の年代順でｅニューファンドランド獲得の年代をスペイン継承戦争後のユトレヒト条約との関連で知っていることを望むのも細かすぎる。 41 で産業革命に関係するという表現がやはり曖昧で産業革命の進行自体のことか、あるいは産業革命が起る前提、背景というような意味にとるか、さらには農業部門の一部機械化までも産業革命という言葉に含ませるかで解答は違って来る。

Ⅳ　これは非常に無理な問題である。国際婦人デーの食糧デモを三月革命前とするか否かは大体、

三月革命の始まりをどこに設定するか自体不明確に思われるし、その食糧デモなど到底取り上げることは授業でもできないし教科書にはまして述べられていないであろう。露暦の廃止もそうである。このように微細な知識を学ばなくてはならないとしたら一体どの位の学習時間が必要であろうか。そうでなくても膨大な知識を吸収しなくてはならない世界史において。

Ⅴ　同じく部分的に細かすぎるところがある。 56 の五銖銭を選ぶところ、 59 の牡丹亭還魂記を挙げてあるところなどがそうである。また 64 は試験時間中に訂正がなされたが郡県支配と州県制とを出題者はもともと区別して問題文を作ったのだと思うがお粗末なことである。 67 と 62 は初めに書いたように第2次大戦後の事項でやや無理だと思う。

昨年度も書いたのであるが依然として個々の知識をテストするもので歴史的思考力をテストする問題が少ないのは情けないことである。1年に1回の問題作成、もっと慎重に歴史教育がどうあればよいかということを考えて出題されたい。

（追　試　験）

1　全体的問題点

社会科の他科目に比して問題数が多すぎると思われる。問題文を読み、正しいものを選んでその記号をぬりつぶすという作業に要する時間を考慮すると、問題数に10以上の差があるのは、問題の難易にかかわらず不公平の感をまぬがれない。科目間における問題数の調整があってよいのではないか。

次に、試験期日の関係もあって高校の世界史授業では第2次大戦以後を取り上げることはほとんど不可能であるのに、この点に関する考慮が全く払われていない。 23 ・ 24 ・ 25 ・ 30 ・ 31 ・ 36 ・ 37 ・ 38 ・ 39 の9題がこれにあたるが、不公平になる可能性の大きい部分からこれだけの数の問題をつくる理由がどのような点にあるのか理解できない。これは歴史的価値感の問題ではなく、現実に高校授業で取り上げ得ないという時間的制約に基づくものである。

最後に、設問内容についていえば、あまりにも暗記的知識を要求するものが多すぎる。マークシート的制約があるにしても、歴史的思考という点にウエートをおいた問題作成に工夫をこらして欲しい。「考える」ことの少ない現代において、当然真剣に取り組む価値のあることではないかと思う。一考をわずらわしたい。

2　各設問について

3 選択肢のなかに「儀同府」が含まれているが、これは全く無意味である。ほとんどの受験生はそれを知らないから、それを無視して答を選ぶことになる。もし「儀同府」が正解になるとすれば、他の選択肢を消去するという作業を必要とするから、無意味にはならないが、本題ではただ数をそろえるだけのことになっている。

13 マルタ島とミノルカ島との区別にどれほどの意味があるか疑問である。ジブラルタル割譲という程度の知識をもっているだけで十分ではないか。19 「最も顕著……」という表現で1つだけ選ばせようとしているが、その判断には主観的要素が加わる危険がある。人によっては「イギリスのキプロス獲得」を「最も顕著な事例」とするものもあるかもしれない。選択肢に主観的判断の相違が入り込む余地のあるようなものを並べるのは避けるべきではないか。

22 常識的には「賠償支払い」を肯定するが、「植民地喪失」「アルザス・ロレーヌの割譲」「ライン左岸の占領」も原因としてあげることは可能。「最大」という言葉で他のものを排除するやり方には問題があると思う。35 消去的手法でも答えられるが、大都＝カンバリクという知識を要求するのは、やや細かすぎるのではないか。42 三武一宗の諸皇帝名を記憶しておくことを要求する問題となっているが、そこまで要求するのが妥当か否かは問題のあるところであろう。もっとも王朝名で判断させる意図であれば、話は別である。56 がリレイの代わりにブルーノを選ばせるのは、問題としてやや細かすぎるのではないか。もっともⅣの設問は全体的に妥当なものといってよいと思う。

(3)　問題作成部会の見解

1　各問題の出題意図

基本的には、高等学校学習指導要領の線に沿い、教科書に準拠して、生徒たちが、(1) それぞれの時代の特徴をおさえ、如何に世界史の大きな流れを把握しているか。さらに、その上に立って、(2) 基本的な事項や事実を、どの程度、正確に理解しているか。それらを試すことに主眼をおいた。そして、いわゆる東洋史と西洋史の比率を、おおむね4：6ぐらいに考えてゆくこと、できるだけ時代及び地域を広くとっていこう、文化史面にも、充分配慮していきたい、という点では、前年の

申し合わせの線をおおむね踏襲した。

今年出題したところを、概略示せば、

(1)　本　試　験

大問Ⅰは、胡椒を媒介とした紀元1世紀から、15世紀におよぶ東西交易史である。

大問Ⅱは、古代から中世におよぶ西洋史の大きな流れを追ったもので、Aでは古代ギリシアの政治史、Bではローマ帝政期の諸問題を問い、Cでは中世キリスト教の発展を扱い、Dではカール（大帝）の戴冠から、いわゆる教会分裂までの諸問題を問おうとするものであった。

大問Ⅲは、16・17世紀から、19世紀にいたるヨーロッパ資本主義の発展に関連した問題で、極めて正統な大筋を追いかけた問題であった。

大問Ⅳは、ロシア革命史をどの程度に理解しているか、問うものである。

大問Ⅴは、東洋史の大問Ⅰが、東西交易史を主として問うているところから、そこで取り上げられなかった地域及び分野などを補うことを目指して、出来るだけ幅広く、内容的にも各分野を網羅するようにした。

(2)　追　試　験

大問Ⅰは、前3世紀から、18世紀にいたる中国と北アジアとの関係を中心にすえて、その基礎的な事柄を問うている。

大問Ⅱは、18～20世紀の重要国際会議もしくは国際条約に関連した諸問題であった。

大問Ⅲは、東洋史分野の大問Ⅰが、中国と北アジアの関係史なので浮かび上ってこなかったその他地域に関する問題を、幅広く網羅しようとした。しかし、単なる記憶ではなく、内容の理解度をはかる問題である。

大問Ⅳは、西洋史分野の大問Ⅱが、主として、近・現代の国際会議に関連していたため、取り上げることの出来なかったその他の時代、ないし地域の問題を、文化史の面にも目くばりしながら、幅広くとり上げようとした。

いずれの場合でも、出題者としては、できるだけ広汎に、各方面をとりあげて、ある種の問題への山カケ勉強を防ぐよう配慮したつもりである。

2　出題形式及び範囲について

出題形式については、「穴埋」、「短文の選択」、「正誤の指摘」など各種の形式を、場合によっては適当に組み合せて、あまり画一的にならないように配慮した。

結果はおおむね適当であったとみえて、出題の意図が理解しにくかったという非難はなかった。しかし、問題文も、選択肢の文章も、明確で、いささかの疑義も、曖昧さも残さないようなものでなければならないことはいうまでもないことであるので、この点については、今後も自戒の１つにしていきたいものと考えている。

出題範囲については、特に偏っていたという指摘は少なかった。しかし、一部の意見に、東洋史関係、特にアフリカ、西アジア関係が少ないのではないか、という指摘はあるが、現行教科書並びに現場の授業に即していえば、この点は必ずしも偏ったことにはならないのではないかと思っている。

一般に、雑問形式とよばれるものは、概して個々の記憶をためすものとして、軽く見すごされるような傾きも無くはないが、一概に排撃されるべきものでもないであろう。全体として、幅広い多様性をもった問題にするためには、形式などについて、もう少し工夫して、それを活用する方向で検討してもいいように思われる。

3　解答結果と、それに対するコメント

今年の世界史の問題は、全般的に昨年より若干難しかったようである。本試験の解答結果は、我我の当初の予想を下廻って、総平均で、昨年度の成績より約４点下ったことは、意外であったと同時に遺憾であった。設問別にみて、本試験では、ロシア革命を扱った大問Ⅳと、東洋史雑問の大問Ⅴが、特に難しかったといわれ、実際にも平均点を下げる役割を担ったようにみえることは、残念なことであった。

しかし、受験生諸君も、単に記憶にあるか、ないかだけで、難しい、わからない、ときめてしまわないで、その周辺のことを柔軟に考えるように習慣づけた勉強をしておくべきだろう。誰れもがいうように、歴史は単なる暗記科目ではないのである。例えば、本試験、大問ⅠのＡ 1 のところで、胡椒（ペパー）の語源を聞かれたと思って、どぎまぎするのは、早計である。「古代インドの言語は何か」が問われているのに気がつけば、すぐに正解のサンスクリットに結びつくはずであったし、大問Ⅲの問６ 40 のところで、『国富論』刊行の年までは覚えておれないと非難する前に、

アダム・スミスは18世紀後半に活躍した人だと気づけば、充分に解答できるわけなのだから、平生そうした勉強をしておくことが、肝腎なのである。

大問Ⅳに関連していえば、ロシア革命史のところは、高校のすべての教科書にかなり詳しく書いてある。暦のことも、レーニンやトロツキーらが亡命先から帰国したことも、知らないでは通れないことであろう。47国際婦人デーの食糧デモ、51政治犯大赦令、53露暦の廃止、などについては教科書に書かれていないという非難を一部からうけた。

4　反響と反省

試験実施中及び終了直後、受験生諸君からも、また高校の先生や大学の教官からも、世界史の問題に関して、幾つかの疑義や質問が寄せられた。また高校側を代表した協議報告書や、日教組からの意見書なども、後日頂いた。我々出題者側としては、責任の重大さを一層痛感させられるとともに、多数の方々からかなりきびしい、しかし傾聴すべき批判を頂いたことに対しては、深く感謝の意を表したい。

指摘された箇所については、充分に内容検討の上、その都度、口頭なり、文書なりでお答えして、御理解を頂くよう努めた一方、今後の出題に当たっての反省の材料にしたいと思っている。

我々としては、試験開始直後発見して、全国受験場に訂正の連絡をとった本試験、大問ⅤのⅠ64のミスは、弁解の余地のない誤りだった。しかも、この時間中の訂正のやり方がまずく、新しい別の混乱をひき起すことになろうとは、その時点では気がつかなかった。それで、結果的には、採点除外にせざるをえなかった。まことに軽卒のいたりであった。この点では、誤まりを再びくり返えさないよう、今後十分に気をつける所存だが、この紙面を借りて、深くお詫びをしたい。

また、前年度にまさる良問をという出題者側に若干の気負いがあって、受験生にはやや難しいものになったことを、反省したい。

本試験の大問Ⅱは、問12 26 、問17 33 などを別として、一般には、年代、人名、地名などについて、細かい記憶を強制することを考えず、むしろ、ソロンの改革（問１ 15 ）、ローマ貴族と平民の法的平等化（問２ 16 ）、ローマの元首政（問５ 19 ）、カトリック正統派の教義（問10 24 ）などのように、内容を問うものであり、また、問６ 20 、問７ 21 、問13 27 などは、雑多にみえる歴史的事実を、ある内容規準、もしくは時間的同時性で、まとめてみると、どうなるか、考えさせることをねらったもので、いずれも正確な史実の理解がなければならず、難解の部に入るかもしれない。

また、大問Ⅲの、18世紀半ばのイギリス経済の状況を問う問2 35 、フランス革命期の政策を問う問8 42 、フランス第2帝政の政策を問う問9 43 、 44 などは、史実をよく勉強していないと、いささか難解ということになるかもしれない。

各方面からの質問が集中した大問Ⅱの、問9 23 のローマ教皇の首位権についての問いは、本来ならば当然知っていて然るべきはずと思われる中世ヨーロッパの最重要事項に関するものでありながら、実際には多くの受験生の意表をつく結果になったことは、我々としては意外なことと受けとめざるをえないが、今後は、十分に心すべきことだと思われる。

試験が終って、しばらく時間が経過した今は、世界史の問題を全体的に反省してみると、本試験の大問Ⅰや、追試験の大問Ⅱなどは、一般に好評だったと考えられるが、それにしても、設問数が、本試験で67問、追試験で62問であったことは、やはり多すぎた。今後は、設問形式が今年のようなものであれば、60問以内に抑制することが望ましいように思われる。

ところで、共通第1次学力試験問題が、多くの人々の関心のまとになるのは、その問題に、受験生が、どう対応できるかということだけではなく、高校教育の学習内容にかかわりをもち、したがってその内容の程度が問われ、ひいては大学の入学者の資質に関連するからである。したがって共通第1次学力試験問題は、全体的にはこのような意味からも適切で、妥当な線の枠内に入るものでなければならないことは、我々出題者側としては、今後も厳格に踏襲すべきものだと思っている。

しかしまた、それと同時に、共通第1次学力試験によって、教科書のもつ意味と役割が、一段と高くなったことも否定できない。もし、そうだとすれば、我々は、高校教育の正常な維持と、一層の充実のために、教科書についても、強い関心を寄せなければならないことになるであろう。

地　理

(1) 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 構成と内容

(1) 本試験問題の構成と内容

ア　地理A・Bの共通問題2問40点、A・B分野別60点の構成は、来年度も続けてほしい。

イ　A・Bともに設問マーク数が昨年度（A54問、B55問）より減少して、A46問、B51問となったが、解答時間に無理がなくなり、ゆとりが感じられる。

ウ　問題冊子のページ数がAで13ページ、Bで11ページとなっており、このアンバランスは気になることである。

エ　出題内容を「高等学校学習指導要領」の中で位置づけると次のようになる。

	大項目	中項目	
共通Ⅰ	(4) 国家と世界	(ウ) 世界の結合 (エ) 世界と日本	（アジアの国々）
共通Ⅱ	(1) 生活と地理	(イ) 地図とその利用	（地形図）
A Ⅲ	(2) 居住と環境	(ウ) 世界の人口	（産業別就業者数）
A Ⅳ	(3) 資源と産業	(ア) 農牧・林・水産業	（水産業）
A Ⅴ	(3) 資源と産業	(ア) 農牧・林・水産業	（林業）
A Ⅵ	(2) 居住と環境	(エ) 村落と都市	（都市機能）
B Ⅲ	(2) 世界の諸地域		（東欧5ケ国）
B Ⅳ	(2) 世界の諸地域		（アメリカ合衆国）
B Ⅴ	(2) 世界の諸地域		（中国）

以上のように、大項目別にみると一応全分野から出題されているとみてよいが、中項目別にみると、地理Aでは、地形図、人口、貿易が昨年に続いて今年も出題され、昨年度の工業地域に変って、今年は、水産業、林業、都市機能などが出題された。人間と自然環境、農牧業、商工業、国土の開発と保全などが今年は姿を消しているが、昨年度の報告を尊重してこの様になったと推察する。

出題範囲は、2～3年のサイクルを考えてでも、学習指導要領全分野からの出題を今後とも

考慮していただきたい。

オ　地理Ｂでは、アジアの貿易、地形図（共通）など基礎的な問題であり、地域的には、アジア、東欧、国別では、中国、アメリカの地誌が等分に出題されている。欲をいえば、南半球が今年は欠けているが、特にわが国と関係の深い国の地誌が多いことから、全般的にみて妥当な問題と考える。

(2)　追試験問題の構成と内容

本試験問題にくらべて、高校教育現場で努力し続けてきた指導の重点と、出題者の力点との大きなズレもなく、出題範囲からみても、鉱工業、南米の気候、地形、地理Ａでの人口動態、農林水産業、交通、地理Ｂでのオーストラリア、ニュージーランドの地誌、ソ連、東南アジアの地誌など、出題内容も妥当と考える。

問題用紙のページ数が、Ａで12ページ、Ｂで15ページとアンバランスになっているのは、本試験同様気になることである。

2　範囲と程度、設問数等

(1)　本試験問題の範囲と程度、設問数等

ア　共通問題Ⅰ

統計資料の活用、読みとりは大切であり、また、日本と関係の深いアジアの国々についての出題は良い問題といえるが、統計の使用で貿易品目などを列記する場合には、上位３品目のみとせず、４～５品目は並べてほしいし、年度別変化の激しいものは出来るだけ避けて欲しいものである。

Ⅰの問３のように、設問相互に関連しており、問１を間違えると問３も誤答になるので出題形式に一考をおねがいしたい。

イ　共通問題Ⅱ

地理学習にとって地形図の読図や作業は不可欠であり、従来のような地図記号を答えさせるという単純な設問でなく、等高線を主体とした地形図での作業を通して、生徒の基礎的な学習能力をみる問題は、地理Ａ・Ｂの共通問題として取りあげた点も含めて、大変に妥当な問題といえよう。

ウ　地　理Ａ　Ⅲ

日本の都道府県別の地域的特色を示そうとする出題意図は理解出来るが、産業別就業者数構成比を、それも各問ごとに与えられた６都道府県内のみで最高のものを答えさせることに、どの様な意味があるのか疑問である。とくに、高等学校の地理授業では、世界主要国の国別産業人口構成の指導は出来るが、日本の県別産業人口構成比のみで地域的特色を出す学習が出来る余裕はないと考えられる。

同じ産業別就業者数構成比の問題にしても、問１～問３にくらべて、問４の形式の方が、地域的特色を出す意図からは、妥当と考えるが、それにしても基準として山形県を出したことは一考を要するのではないか。日本についての出題は、受験生の出身地による有利・不利があらわれやすいので出題にあたり十分留意していただきたい。

エ　地　理Ａ　Ⅳ

世界の主要漁場の特色を平易に説明してあり、基礎的な判断力があれば解答出来、海洋汚染の問題にまで言及して妥当な設問といえよう。強いて難をいえば、問５の漁場範囲を固定したものとしてとらえ、その上で高緯度までの広がりを問うたのは疑問が残る。

オ　地　理Ａ　Ⅴ

林業を通して地域的特色を問う問題であり、さらに、パルプや製紙工業などに及ぶ広範囲な理解力をみるものとして適当ですが、それにしても樹種別利用を地方別に高等学校の授業時間内で取り扱う余裕はほとんどないと考えられ、その意味から受験生にとっては、かなり難問であったのではなかろうか。

カ　地　理Ａ　Ⅵ

従来のような固定的な都市機能を問うものではなく、都市のダイナミックな機能を求める問題であり、高等学校の授業で直接取り扱わなくても、都市機能を注意深く勉強した生徒にとっては、解答し得る良い問題といえよう。

問１の外国都市の行政区域まで考慮せねばならぬ設問は、受験生にとって難問といえよう。

キ　地　理Ｂ　Ⅲ

東欧５ケ国の地誌であるが、説明文の中に地誌的な諸問題を巾広く取りあげており、その中に適当なヒントもあり、無理のない問題である。

ク　地　理Ｂ　Ⅳ

都市の特色、気候、農業地域などについての設問であるが、地理学習の際、絶えず地図を参

照しつつ学習しているかどうかをみるのには、大変良い問題であり、全般に無理のない良問である。今後も、地図と結びつけた問題は是非出題してほしいものである。

ケ　地　理Ｂ　Ⅴ

中国の河川流域を中心にした地域的特色を問う問題として評価されるが、受験生が、注意深く正確に勉強したか否かを判定出来る良問といえよう。

(2) 追試験問題の範囲と程度、設問数等

Ⅱ問６のように、アタカマ砂漠の対蹠点を問うたような難問も含まれてはいるが、地理Ａ、Ｂどちらも妥当な問題と考える。

3　出　題　方　法（本試験、追試験）

(1) 試 験 時 間

問題によっては、いくらか解答時間を要するものもあるが、昨年度よりマーク数も減少したことでもあり、全般的にみて60分で妥当といえよう。

(2) 配　　点

大設問ごとに配点が明示されていて親切であるが、例えば本試験の共通問題Ⅱは、マーク数６問に対して配点が20点となっており、受験生が細かく自己採点をすることが困難になっている。できうるならば細かく配点を表示していただけないものだろうか。

(3) 問題文の表現

問題文の語尾も統一され整っているが、特に次のような点に留意していただきたい。

ア　共通Ⅰの問１、地理ＡⅣの問４などの、中華人民共和国、大韓民国、連合王国などのように正式国名のものと、インドネシアのような一般的国名を併用しているが、統一してよいのではないだろうか。

イ　共通Ⅱの問４、「ダムＱから上流側の流域における最高地点」の表現から、受験生がその題意を認識し、さらにこの地形図上でその地点がどこかを確認するまでには、かなり手間どるのではなかろうか。

ウ　共通Ⅱ、問５、６で、集水面積という用語が使われているが、受験生にとって耳なれない語ではなかったろうか。

エ　地理Ａ、ⅤのＢ、問題文２行目、「これを地方別にみた場合」のこれとは何を指すか、とっさには迷う表現である。つまり、わが国の天然林分布を指すのか、それとも素林生産量に占める針葉樹の割合をいうのか迷うことになり、解答番号33の解答をする場合、前述の文章の意味に疑問が残らないであろうか。

オ　地理Ｂ、ⅢのＡ、Ｂ、Ｄにおいて、「……の産出に恵まれ、」とか「……が盛んである。」というやや主観的な表現をしているが、もっと客観的で厳密な表現がなされないものだろうか。

カ　短時間に多くの問題を解かねばならぬ状況の中では、受験生にとってわかりやすい文章や用語なり地形図を使用するよう特に配慮していただきたい。

(4) 問題文の配置

ほとんどの問題が見開き２ページに納められており、その点では受験生にとってやり易かったのではないか。

(5) 解 答 方 法

解答用紙の紙質もよく、印刷も鮮明であり問題点がないが、強いて挙げると、解答用紙には、出来るだけ必要なもののみを印刷するよう努めていただきたい。

4　そ　の　他

今回の本試験において、地理Ａを学習しそれを選択して受験しようとした生徒の中に、地理Ａの問題が難しかったとして受験場において地理Ｂを選択、解答した者がかなりあったと聞いている。今回の本試験問題を見て、高校の教科書を中心に着実に学習を重ねてきた生徒は、地理Ａの問題が難しくというよりは、学習範囲にない問題が含まれていたが、地理Ｂの問題は気候、農業、工業等の学習内容をアメリカ合衆国、中国あるいは東欧についてまとめたものであり、正しく解答できたか否かは別として、とりくみやすい問題と感じたにちがいない。私達は本来、地理Ａ（系統地理）、地理Ｂ（地誌）の区別は地理学習上全くの別ものではなく、まとめ方の相違にすぎず、両者相まって地理学習が完成すると思っており、今回のような受験生の動向をいけないことであるとか困った

ことであるとは考えていない。むしろ、地理を学習し選択した生徒が彼らの学習成果を発揮できる場を得てほっとしたのではないかと想像する。

(2) 教育研究団体の意見・評価

全国地理教育研究会

(本試験・追試験について、全体としての問題点)

出題の意図としては、統計・グラフ・地図・文章を組み合わせ、総合的判断力と思考力をみようとする努力はよくわかる。また工夫された良い問題も多かった。

しかし、今年度の「地理」特に「地理A」の出題については、内容や設問などについて、教科書・文部省の指導要領・高等学校の授業内容からみて、適正を欠く問題がみられたのは非常に残念であった。以下の諸点について特に考慮され、改善されるよう要望する。

1 高等学校の教科書の内容・事項・程度をよく分析し理解してほしい。そして、高等学校の授業内容と程度を正しくふまえた出題として頂きたい。授業の正常化と入学試験の改善をはかることが、「共通1次の精神であり使命」であると思う。

この面からみると、特に「地理A」の出題については、この点の配慮が欠けているので、今後は特に留意して頂きたい。

2 今年度の「地理A」の平均点が他教科にくらべ、特に低いのは問題である。それは昨年度の高得点を意識しすぎているふしが見られるとともに、上記の「1」の配慮に欠ける点が多くみられることが原因と思われる。教科書と授業内容を正しくふまえた問題であるならば、ある程度平均点が高くてもよいと思われる。今年度の問題と平均点からみて、地理での受験生数が著しく減少するものと思われるが、これは「共通第1次学力試験の精神」に逆行するものであり、遺憾である。大学入試センターから発表された「教科書の着実学習で、60点はとれる出題」の線を守ってほしい。

3 科目選択による運・不運の悲哀を味わう結果にならぬよう、特に配意を望みたい。この点からみると「地理A」は非常に不利であり、生徒の不信をまねくおそれがでている。

4 統計の内容と扱い方については、高等学校の学習内容と程度から逸脱しないよう、必要以上の程

度や種類のものを扱うことのないように特に配慮を望みたい。今年度は、この点やや配慮を欠いた出題もみられた。今後とも、エスカレートのなきよう切望する。

5 「地理B」は良問が多かった。また、追試験は、出題意図、内容とも良問が多かったが、統計の種類と内容、出題方法にやや問題があったが、前記「4」に留意してほしい。

6 地図類・図表などは、微妙な位置関係や分布が正解に影響するので、作図・印刷などには正確を期し、見やすく判断しやすいものにして頂きたい。

7 出題の範囲や地域が、全般に万遍なく出題されるよう、そして、各地域を比較させるような出題もあってよいと思われる。しかし、今年度「地理A」のV番のような、かなり専門的で突込みすぎ、さらに教科書から逸脱した出題はさけてほしい。

8 一部の教科書には詳しく出ているが、他社にはない内容や資料の扱いには特に慎重にしてほしい。例えば特定の州名、地名、事項、図表などがそれである。

9 必要以上の複雑な組み合わせ法の出題はさけてほしい。この点、今年度の出題形式は単純化され、内容・形式上も工夫されているのは好ましい。

10 全体の小問数が減少し、時間配分からみても適正となったことは望ましい傾向である。

11 大きな問題が、見開き2頁ごとにおさまっているのは、昨年も申し入れたことであり、それが生かされたことは大変望ましく、好ましいことである。今後も続けてほしい。

12 良問・一考を要する問題の例として文部省の「大学入試問題作成の参考資料」をも一読してほしい。

(本試験・地理A)についての問題点と要望

今年度の出題については、内容・事項・統計の扱い方などについて問題点が多く、教科書や文部省の指導要領を理解せず、相当に専門的、または授業内容から逸脱した出題が多くみられた。以下それを記し、今後の改善を切に望みたい。

Ⅰ (A・B共通)統計に地域性を読ませる意図はよいが、出題する統計の年次や内容については特に留意し配慮してほしい。

例. インドの輸出品の場合、1975年は砂糖・茶・鉄鉱石であるが、1976年は、鉄鋼・衣類・茶・砂糖・綿織物の順である。また貿易統計年鑑の分類は繊維と織物となっていることがある。

この場合、選択肢の中に④綿織物・茶・鉄鋼、⑤砂糖・茶・鉄鋼石とがある。このどれをと

るかが問題である。表の注には、輸出額上位３品目とあり、額順に並べてあるとも記していないので、生徒からみれば迷うことになる。

新しい1976年の資料で学習した生徒が失敗した例も多い。この場合は、1976年にするか、もし1975年を用いるなら、④の表現をかえるか、選択肢からこのような類似のものを除く配慮は当然なされるべきである。

また、インドのように年次ごとに変動が大きい場合は、上位３品目で理解するのは無理がありはすまいか。品目数を増すことも一方法である。本問は特に配慮が欠けている。

Ⅱ （Ａ・Ｂ共通）地形図の読図は必要であり、出題の意図もよく、内容も基本的であるが、出題の等高線は見にくかった。もう少し「実物に近いもの」にしてほしかった。むしろ、２万5000分の１などを用いるのも一方法である。拡大して見やすくする意図はわかるが、かえって見にくく、主曲線はもう少し細くするなど、また問４も最も奥の谷と続いていることがもう少しわかるような配慮がほしかった。

また、今後は地形と土地利用などをも含めた基本的な読図問題も留意されたい。

本問題において、尾根筋が正しくたどれない受験生でも、ある程度得点できるのは問題である。

○ 問１や問５は選択肢が３つしかないのも問題である。

○ 問４の文章がわかりにくい。そして、さらに原図で奥の谷と続いていることがわかりにくいのは問題である。

○ 問５の集水面積を、ダムの湖面面積と誤解しても正解が得られるような問題はよくない。

○ 問６に於いて、Ｚダムの集水面積を、Ｚダムの湖面面積と誤解し、１×１＝１km²として、誤解で正解を得た受験生もいる。出題の配慮が望まれる。

○ なお、本問題を某高校生に実施してみたところ、全く尾根筋がたどれないか、一部しかたどれない生徒でありながらも、設問中５問正解者が0.５％、４問正解者11.4％、３問正解20％に達している。

このように、誤解で正解となったり、選択肢が少なく、偶然性により正解が得られるような問題にならぬよう、今後とも特に配慮を切望する。

Ⅲ （Ａ）産業の特色と地域性を考えさせる意図はよいが、出題の内容と方法を誤ると、意図とは逆の効果を生み、丸暗記を助長する結果となる。

問１から問４の場合、産業別人口構成比について、類似のものをもつとセレクトして出題してほしかった。特に問４の場合、兵庫と神奈川など類似がならびすぎている。また例として商工業地域

の県の例などを、もう一つくらい入れておくのも一方法である。

高校の日常授業の実態をふまえ、高校生の段階で分析できる程度とし、丸暗記の助長にならぬよう、あまりエスカレートしすぎないよう今後とも配慮を望みたい。

また、三角グラフの出題意図はよいが、ほとんどの教科書に出ていないことをも考慮して、出題については無理のないよう留意してほしい。

Ⅳ （Ａ）教科書をふまえた内容も当を得ていて望ましい問題の一つである。

ただし、問題文の文章表現が不統一である。問１・問２・問４・問５では、「文章Ａ～Ｄに示された～」であるのに、問３のみ「文章Ｃに出てくる～」とあるが統一した方がよいと思われる。

また、問２の設問文中で、「水揚が多い漁港」を選べというなら、釧路だけでなく、釧路と比較すべき漁港をもう一つくらい選択肢の中に入れておいた方がよいのではなかろうか。

Ⅴ （Ａ）出題内容として一考を要する問題である。出題内容・事項など、かなり深く専門的であり、詳しい資料も含まれている。しかし、高校の教科書や一般的授業では、ここまで盛りこまれていない。いたずらに混乱をおこさぬよう、高校の教科書に目を通し、それをふまえたうえで、もう少しヒントを与えるなどの配慮をした出題にしてほしい。問題文も専門書の一部分のぬき書きの感もあり、もう少しわかりやすい文章にしてほしい。

例えば、文章Ｄの「これに対し、最も低い［　　］地方は……」でも、もっと明確に「自給率の高い［　　］地方は」のような表現にするとか、「素材生産」の用語についても明確な表現の配慮をしてほしい。しかし、なんといっても出題内容に適正を欠き一考を要する問題である。

また、年次についても、文章Ａの中では1973年であるが、Ｂ以下の統計年次は1975年が用いられるなど不統一である。これらについての配慮を切望する。

Ⅵ （Ａ）本問も出題内容や事項について一考を要する問題である。都市について思考させようとする出題意図はわからぬでもないが、内容的に見ても、文章表現からみても、一考を要する問題であり、適正な出題とはいい得ない問題である。

特に問３・問４・問５の設問は、内容・事項・表現ともに、どうみても適正な出題とはいい難い。

もっと教科書と日常の学習内容をふまえて出題されたい。都市の機能や地域分化、都市問題などについて、もっと理論的な思考問題の出題を望みたい。

また、文章表現上の問題点が多すぎるのではないだろうか。例えば、

問３　都市にある諸施設は「多くの場合に～区別することができる」の３行分はなくてもよいのではないか。乏しい時間で多くを解かねばならないのであるから、思わせぶりな余分な文章

は避けてほしいものである。

問４　「最も適当なものを二つ選び～」というのもおかしい。最も適当なものは一つのはずではなかろうか。

問５　設問や説明文の文意がとりにくい。もっと明確に説明してほしい。国語のテストではないのであるから、文章表現で迷うようなことでなく、内容を大切にしてほしい。また⑥の文章表現は好ましくない。百貨店とスーパーマーケットの両方ある都市は多くあり、この場合は、「スーパーマーケットのある都市より大きい」を、「スーパーマーケットしかない都市より大きい」とすべきではないか。

本文の文章もわかりにくく、文章表現をもっと理解しやすくすべきである。また、文章末の「一定の関係」とはどのようなことか不明である。もっと文章表現にも配慮を切に望みたい。

（本試験・地理Ｂ）についての問題点と要望

地理Ｂの出題は、概して内容・事項・形式・地図など、扱い方とともに良問が多かったのは好ましいことである。ただし、一部に細かすぎる地名や事項もみられたのは残念であった。以下それを記し、今後の改善を切に望みたい。

（Ⅰ・ⅡはＡＢ共通であるから除く。）

Ⅲ　内容・事項・設問など良問である。特に「東ヨーロッパ」と限定し、文章の中のヒントも適切である。しかし、エンバ油田や、バスク族などはやや細かすぎる一面もある。地名・都市名や州名などの出題については、日常の授業内容に特に配慮し、エスカレートしすぎないように特に留意されたい。また私立大入試への影響が大であることも考慮してほしい。

Ⅳ　地図を中心に、総合的に思考させようとする意図もよく、内容も概して良い出題である。しかし、都市や州名などを出題する場合は、エスカレートしすぎないよう特別の配慮が望まれる。今回は州名が出題されたが、教科書によっては州名はふれていないものも多くあるので、酪農・小麦・とうもろこしの分布にしても特別に慎重にしてほしい。この出題でもややエスカレートしている向きもあるくらいである。

また大陸混合林気候区という表現も、D_1気候の表現はほとんどなく、Df・Dwが多いので植生の表現にするなどの配慮が望ましい。

Ⅴ　河川を中心に、地図を思い出させて思考させる総合問題であり、内容も適当である。

しかし、問３の、ホンツォー（洪沢）やフォンマン（豊満）の地名などは、やや細かすぎ、受験生に不安をあたえ、暗記を助長する結果にもなりかねないので、特に配慮してほしい。

また、チャン川（長江）は、(長江)(揚子江）または（長江＝揚子江）と表示してほしい。

「地名の表記」については、文部省の「地名の呼び方と書き方」に準拠してほしい。特に中国の地名については、現地名をカタカナで記し（　）に漢字を記す方式を今後も守ってほしい。また地図帳に出ていないような細かい地名などは出題しないよう、特に注章してほしい。

（追試験・地理Ａ・Ｂ）について

出題の意図、総合問題としての内容・事項・出題形式ともにおおむね良い問題が多く好ましいことである。特に「地理Ａ」については、むしろ追試験を本試験としてほしかった。

しかし、統計の出題と地名については、教科書や授業内容から逸脱しないよう、また暗記を助長する危険性を避けるよう配慮を切望したい。例えば、セメント生産高の比率などはやや難であり、これ以上エスカレートしないように配慮してほしい。この場合でも、地理ＡのⅤのように、縦と横を比較して地域性を読ませるのも一つの方法である。

教科書と指導要領をふまえた出題で、統計から地域性を思考させる問題にするよう配慮を切に望みたい。

(3)　問題作成部会の見解

1　出題の意図と出題形式

高等学校段階における学習の到達度を判定するため、地理Ａ・地理Ｂともに、高等学校教科書に記述されている基礎的知識、及びそれら基礎的知識を論理的に整理することによって習得できるはずの地理的思考力や地理的洞察力などについて、一般的な受験生の学力・能力を総合的に判断しようと考慮した。出題に当たっては、文部省の指導要領に記載されている各学習事項について、ある特定の領域にかたよらぬように心掛けただけに、たまたま結果的に昨年に引き続いて同じ領域から出題されることもあった。出題に際しては、個別的な知識を単独に問う形式はなるべくさけ、でき

るだけ多様な様式で、総合的・立体的な理解の程度を問えるようなものを考えた。したがって、文章で基礎的知識を問う形式のほかに、図表・統計等を通じて、それらに対する受験生の習熟の度合をみ、また地理学習にとって不可欠な地形図の読図と等高線を主体とする地形図の作業を課することによって、受験生のこの方面における基礎的な能力をみようとした。また、本年度は考えて答える問題をふやし、解答数を減らした。

なお、追試験については、本試験と同じ意図をもって出題しているので、以下では省略する。

(1) 出題意図

本試験の地理Aの6問（Ⅰ～Ⅵ）及び地理Bの5問（Ⅰ～Ⅴ）のうち、ⅠとⅡとは地理A・Bに共通なので、これらを〔共－Ⅰ〕・〔共－Ⅱ〕と呼び、それ以外は〔A－Ⅲ〕・〔A－Ⅳ〕・〔A－Ⅴ〕・〔A－Ⅵ〕、及び〔B－Ⅲ〕・〔B－Ⅳ〕・〔B－Ⅴ〕と呼ぶことにする。

〔共－Ⅰ〕　アジアの国々について、人口密度や米の生産量を参考に、国名や貿易品目を問うたもので、総合的な理解度をみようとした。

〔共－Ⅱ〕　等高線のみの地形図を提示し、読図作業を通して、受験生の基礎的な能力をみようとした。

〔A－Ⅲ〕　産業別就業者数の構成比を指標として、わが国の都道府県名を判断させ、さらに、三角グラフを判読してわが国と外国の四か国とを比較させたもので、これらについてどの程度習得できているかをみようとした。

〔A－Ⅳ〕　世界の主要漁場について問うたもので、基礎的知識の理解度をみようとした。

〔A－Ⅴ〕　わが国の資源と産業を通じて、国土の地域的特徴を正しく理解しているかどうかをみようとした。

〔A－Ⅵ〕　都市機能について問うたもので、外国の都市を含め総合的な理解度をみようとした。

〔B－Ⅲ〕　東欧五か国について、国土面積・人口・宗教・農鉱産物などを指標として、これら諸国の性格を正しく理解しているかどうかをみようとした。

〔B－Ⅳ〕　アメリカ合衆国の地誌的知識を、地図を参考に問うたもので、地理学習の際、常に地図を利用して学習しているかどうかもみようとした。

〔B－Ⅴ〕　中国の地誌の問題で、五つの河川流域の概略的な特徴についての理解度をみようとした。

(2) 出題形式

ア　地理の学習では、地図・統計表・グラフをよく活用するが、出題に当たっては、正味8問のうち5問においてこれらを掲げ、学習過程におけるそれへの習熟度をみようとした。また、とくに出題の中の地図については、設問の便のみだけでなく、問題の理解を助けるように配慮した。統計表については、統計年度や出題範囲によく関心がもたれるが、当該問題についての全般的な理解度を見ようとして作成されており、表と選択肢を見比べながら解答を出せるように配慮されている。本年は、グラフについては三角グラフを用いたが、統計表と同じようなねらいと配慮がなされている。

イ　〔共－Ⅱ〕については、地形図に関する基本的な理解度をみようとして、等高線のみの図を作成した問題であり、選択肢の中にも図形で視覚的に地形を問うようにしたところもある。

ウ　選択肢については、事項・地名・生産物などから選ぶ形式と、文章のうちから正誤を判断する形式のものとがあるが、いずれにおいても「まぐれ当り」を少なくするために、選択肢数を過多とならない程度にふやしている。とくに、生産物については、2～3種類の組み合わせ方式を採用したものもある。地名については、地理の学習に不可決であるが、〔A－Ⅴ〕、〔B－Ⅳ〕のように、地図上の場所で解答させる問題も含めた。

エ　従来の教科書では必ずしも具体的に触れられていないことでも、設問の前文を十分読むことによって、その問題を習熟している場合には、解答が可能となる問題をも含められた。例えば、〔A－Ⅵ〕の動態的な都市機能に関する問題でも、都市の機能についての基本を十分に学習しておれば、解答できるようになっている。

2　解答結果の検討

本年度の追試験は受験者が非常に少なく、分析のためのサンプル数が十分にないので、ここでは本試験の解答結果のみを検討することにする。

全体としてみると、教科書にのっているような表現をそのまま用いて出題した場合は、正答率が高かったが、高等学校における地理学習の内容を基本的に十分理解した上での応用力を必要とするような問題については、概して正答率が低かった。地理Aの問題には、後者の種類の問題が多かったが、これが地理Bに比して地理Aの平均点を低くした最大の理由と考えられる。〔A－Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ〕などは、正確な統計数値や地名についての詳細な知識の記憶を求めているのでは決してなく、地域

や国についての基礎的な知識があって、それを応用して考えればできる問題であったが、受験生にはこのような訓練が不足していたように思われる。

〔共－Ⅱ〕の地形図に関する問題にも、このような傾向が顕著にあらわれていた。設問の難易度に差があるのは当然であるが、今回の結果をみてみると、設問ごとの正答率にかなり大きな差がみられた。この点は今後検討されるべきであろう。

次に、本試験で正答率の低かった設問を個々に検討してみた結果は次の通りである。

(1) 〔共－Ⅱ〕の 12 、 14 、 16 ……地形図、とくに等高線の判読に関する基礎的事項を問う設問であるから、地形図にふれた学習を十分にしている受験生には妥当な問題であったと思われる。しかし、正答率がやや低かったのは、そのような学習態度に欠けた受験生が多いことを示しており、基本的地理学習における問題の所在を暗示している。

(2) 〔A－Ⅲ〕の 18 、 20 、 22 、 24 ……ほぼ全問にわたって選択肢にまぎらわしいものが少なからず含まれてはいたが、産業就業人口構成についての細かな数字を知らなくても、地域の性格を正しく理解していれば正答できたものと思われる。個々の数値の暗記を求めるものでは全くないにもかかわらず、数値に惑わされた受験生が多かったものと判断される。

(3) 〔A－Ⅴ〕の 33 、 34 ……資源と産業の問題であるが、正答率がかなり低かった。これは注意深く文章を読めば正答できるはずであり、題意の理解が不十分な者が多かったためであろう。

(4) 〔A－Ⅵ〕の 37 、 38 ……都市名を選ぶ問題である。いずれも正答率が著しく低かったが、内容にやや地誌的色彩が強かったとは言え、設問文のみにとらわれず本文との関連からよく考えれば必ずしも難問ではなかったと思われる。

(5) 〔A－Ⅵ〕の 39 、 40 ……選択肢にまぎらわしいものが若干含まれたため、世界の主要な都市の機能・性格についての理解が十分ではなかった者には誤答が多かったようである。

(6) 〔B－Ⅳ〕の 34 、 35 ……アメリカ合衆国のように地域的多様性の著しい国については、主な州の地域的特色の理解が必要であるが、その不十分さが解答結果にあらわれたものと思われる。

3 出題についての反響意見に対する見解

本試験・追試験における地理Ａ・地理Ｂに関しては、高等学校における学習内容や受験生の標準レベルに対応した、おおむね妥当な問題が多いとの評価を受けた。しかし、いくつかの個所については、改善の余地があるとの指摘があった。とくに本年度は、本試験における地理Ａと地理Ｂの平

均得点に差のあったことから、この点に関連した意見が多かった。

(1) **設問数について**　設問数は、本試験の場合、地理Ａで29、地理Ｂで25、これに対応する解答数はそれぞれ46、51で、おおむね妥当であるとの評価を受けた。設問数が少ない場合には、受験生に十分な思考を要求することが可能であり、逆に広く各分野にわたって問う場合には、問いの数が多くなってくるので、今後とも出題意図に応じて適宜配慮してゆくことになろう。

(2) **配点について**　配点方法に関連する意見・質問がいろいろあったが、必ずしも機械的に配点したわけではない。問題の内容・難易度を配慮した配点方法なども考慮された。

(3) **出題形式について**　本試験・追試験ともに、出題形式について大きな問題点はなかったようである。問題に地図・図表・統計などが盛られていることについても、好評であった。しかし、統計に高等学校教育では使用しないものがあるとか、図表が読みにくいといった表現上の問題点について、若干意見が出された。これについては、単に資料を読みとるだけでなく、基本的な知識があれば、資料から地理的事象を考えて解答できる思考過程を重視した問題を配慮したい。したがって、今後とも地図帳や教科書にない統計を利用することもあろう。また、統計年表をそろえるようにとの指摘が多かったが、統計比較の場合、統計の種類によって必ずしも年次がそろうとは限らないことを理解しておく必要がある。

その他、地理Ａと地理Ｂの共通問題、分量の不均衡について若干の意見があった。共通問題を設けたことについて、地理Ａと地理Ｂは、地理学の本質的な違いに基づいたものではなく、まとめかたの違いであり、したがって、共通問題を設けることは適切であろうとの評価を得た。分量の不均衡については、内容の難易によって生じるものではなく、出題の設問の仕方で起こるものであり、やむをえない面もある。しかし、文章量が多く、読解及び思考に時間を要すると思われる場合は、解答数を減らすなどの配慮をしたい。

(4) **難易度について**　一部の設問には、難問・奇問がみられるとの意見もあったが著しい難問や奇問はなかったように思う。作成にあたっては、科目間に難易の差がないように配慮したつもりだが、得点結果をみると、地理Ａ、地理Ｂ間に、やや難易の差があったやに見受けられる。これについては、誤答率の高かった設問も含めて、出題内容を検討し、今後の参考としたい。また設問によっては、問題文の意味がわかりにくいとの指摘もあり、今後は読んで、直ちに理解できるような文章表現に努めてゆきたい。

(5) **出題範囲について**　地理Ａ、地理Ｂともに、細かい点についてはいくつかの意見が寄せられたが、大きな問題点はなかったようである。全体的な範囲については、指導要領や教科書などによ

る取り扱い範囲を十分考慮する必要があるが、重要な地理的事象であり、かつ基礎的な学力を習得していれば解答できると考えられる問題は、上述の範囲を多少こえたとしても出題することもありうる。また高等学校における分野・地域別の配分時間に応じての出題配分を、という意見に対しては、基本的な問題に重点をおくようにした上で、出来うる限り、設問数に応じて分野・地域に偏りがないように配慮したい。日本の産業別人口構成及び林業に関する出題、アメリカ合衆国の州名に関連する出題に対しては、さまざまな意見が出されたが、それらは基礎的な知識の習得ならびに地図帳に沿っての学習があるならば、十分解答できるものである。今後とも、特定地域の受験生が有利とはならぬよう、偏りのない出題に努めたい。

(6) **地理Aと地理Bの均衡化について**　地理Aと地理Bの区別は、高等学校の地理学習において現実に配慮されているように、学習上全く別個なものではなく、地理的事象を系統的にまとめて学ばさせるか、地域的にまとめて学ばさせるか、いわゆるまとめかたの違いにすぎない。地理学習は、本来、系統的側面と地誌的側面の両方からの同時的接近が必要であるが、高等学校における地理学習の現状に鑑み、地理A・地理Bという形式の科目分割はやむをえぬものと判断される。本年度の〔A—Ⅲ〕～〔A—Ⅵ〕、〔B—Ⅲ〕～〔B—Ⅴ〕の出題の立場も、このまとめかたの違いに準拠しており、出題に当たっては、両者の平均得点に差の生じぬよう意図したものである。

今後、なお一層、両者の平均得点の均衡化に努めてゆきたい。

数　学

(1) 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 構成と内容

(1) **数学Ⅰと数学一般の共通問題の数について**

前年度の報告にあるような意見もあるが、数学一般の受験生が不利にならないように配慮されていればよく、今年の場合、2題の共通問題によって、数学一般の分野が無理にかたよって出題されたとは思われないので、この点については問題がない。

(2) **出題内容について**

当該科目の中の全部の分野が出題されることが望ましい。共通第1次学力試験は、それを受験する人数からみて、高等学校の教育に重大な影響を与えている。それは単なる選抜の手段であってはならない。大学教育を受けるにふさわしい学力を有するか否かを判定するものであるだけでなく、受験生の高等学校における学習の成果が正しく評価できるものでなければならないと考えるからである。

数学一般については、高等学校学習指導要領に示されている分野が(1)～(4)、(5)*～(8)*の多岐にわたっているから、2分野程度の欠落があっても致し方ないが、数学Ⅰの本試験の場合、ベクトルの分野が抜けたのは残念である。「単年度をみれば抜けた分野があっても、何年かの間にはもれなく出題する」という説明もあるが、受験生にとっては1回限りの受験であり、翌年の受験生には別の意味での悪影響を与えることになりかねないので、全分野から出題されるよう一層の工夫をお願いしたい。

(3) **個々の問題について**

本試験　数学Ⅰ　問題Ⅱ：思考力や論理性を問う問題が出題されるのは、数学という教科の性質上当然のことではあるが、マークシートという様式では出題しにくい欠点がある。この問題の場合、結果だけとなって、本当に思考力や論理性が試されたかどうかは疑問である。

本試験　数学Ⅰ　問題Ⅳ：4つの小問は、細かくいえばたしかにそれぞれ異ったねらいが認められるが、数学Ⅰの確率の分野の出題としては平担である。小問2つ位に圧縮して、問題Ⅰのように他分野(例えばベクトルの分野)を加えることも可能ではなかったか。

追試験　数学Ⅰ　問題Ⅰ：(i)(ii)(iii)と段階をつけ、B⊆S[f]とB＝S[f]を併記した工夫は一応評価するが、(ii) (iii) については題意の把握が難しい。

追試験　数学Ⅰ　問題Ⅱ：選択記号が5種類しかなく、題意の把握が不完全でも正解が得られる可能性が大である。また選択肢②が不十分であるという表現は、高校生にとっては無理である。

2　範囲と程度・設問数等

(1)　本試験問題の範囲と程度・設問数等

数 学Ⅰ

本年度の問題は、昨年度のそれに比べて、難易度や量においては、基本的には変りがなく、固定化された感じがする。共通第1次学力試験が学習到達度の正しい評価をねらいとする以上、問題の程度の類型化及び固定化はある程度まぬがれないとしても、昨年度と同様本年度も問題は少し易しすぎるのではないだろうか。「大学教育を学ぶのにふさわしい能力と適性をもつためのものを公正に、しかも妥当な方法で選ぶ。」という趣旨から考えると、本年度の問題は結果からいって、適当であるかどうかは疑問である。

出題分量は、5問で適当であるといえよう。昨年度は中学生でもできると評される問題があったが、本年度はそのような問題はなかった。

平均点は、146点（73点)、昨年度は、152点（76点）で、100点満点にして、3点低くなっているが、これは果たして問題が難しくなった為であろうか。いずれにしても、他教科より100点満点にして、5点～15点高く、また標準偏差も大きく、高得点者が続出し、度数分布は昨年度と同様に、J字型分布となるとみられ、数学の能力の程度を判定するには困難なものと考えられる。

昨年度の受験者集団を、次の4つの集団に分けると、

ア　2次試験で、数学Ⅲまで課す学部志望者　　約3割

イ　2次試験で、数学ⅡBまで課す学部志望者　約3割

ウ　2次試験で、数学を課さない学部志望者　　約2割

エ　上記ア、イ、ウの区別のつかない志望者　　約2割

ウの志望者は、この共通第1次学力試験の結果（平均点128点）が、2次試験における選抜資料となるのは、他の教科との関連において、やや高すぎるきらいがある。本年度においても、アは約104,900人、イは約99,400人、ウは約61,300人、エは約67,000人、でその割合は3：3：2：2となって、昨年度とほぼ同様の結果となると考えられる。

大学によっては、ウの志望者群のように、2次試験を課さないところもあり、共通第1次学力試験における数学の学力判定が、他教科のそれと比べて均衡を欠くことになると、受験生にとっては不公平になる。

問題が易しいということは、それだけ勉強をしなくても得点できるという安易感を受験生に与えることになりかねない。しかしまた急に難しくすることは、受験生に不安を与えることになってよくないが、単に計算を複雑にすることではなく、もう少し高い学力が判定できるような配慮を望みたい。

数学一般

問題数6問、各問題とも基本的で、範囲・程度とも適当である。

数学一般は受験者　28人、平均点51点（26点）
　　最高点155点（78点)、最低点14点（7点）

昨年度は受験者　54人、平均点60点（30点）
　　最高点143点（72点)、最低点0点（0点）

数学Ⅰと比較して、あまりにも開きが大きい。問題の内容・程度は、数学Ⅰとあまり変りがないが、受験者数の少いこと等から、数学一般を共通第1次学力試験でどう扱うかを検討すべきではなかろうか。

(2)　追試験の範囲と程度・設問数等

追試験の問題の範囲、設問数等は適当である。程度については、本試験よりやや高いのはやむを得ないとしても、本年度の場合は、本試験と比較して、格段の難しさである。というより本試験が易しすぎるのか、これでは追試験の受験者が不利になることは明らかである。この点についてもさらにご検討をお願いしたい。

3　出題方法（試験時間、問題の表記、配点）

(1)　試験時間について

本年度の試験問題の内容については、試験時間100分が妥当であるが、共通第1次学力試験全体の中で、数学の試験時間としては120分が必要と考える。このことは、昨年度の報告書並びに各方面からの意見として出されていることであるが、ここでも重ねて要望しておきたい。単に学生を選別するのではなく、高校における学習到達度をみるという共通第1次学力試験の趣旨からすれば、やはり全領域からの出題が望ましい。(本年度はベクトルの出題がなかった。)そのためにも時間が必要である。また、社会・理科の教科がいずれも120分で200点満点であることを考えると、教科間の試験時間と配点の均衡上からもそれが望ましいと考える。

(2)　問題の表記等について

ア　本試験　数学Ⅰ　問題Ⅱは「同じ記号を何度用いてもよい。」という注意書きがあったほうがよいと思う。

イ　問題文の表現形式を統一されたい。本年度の出題中には次のような不統一がみられた。

例
- 本試験　数学一般問題Ⅱ　二次関数 ax^2+bx+c について……
- 追試験　数学Ⅰ問題Ⅲ　二次関数 $y=ax^2+(a+1)x-2a+1$ $(a\neq 0)$ がある……

例
- 本試験　数学一般問題Ⅵ　連立一次不等式 $x-3y\geqq -18$、$4x+y\leqq 19$、$x\geqq 0$、$y\geqq 0$ の表す平面上の領域を考える……
- 追試験　数学一般問題Ⅴ(i)　連立不等式 $x\geqq 0$、$y\geqq 0$、$7x+3y\leqq 21$、$x+2y\leqq 6$ の表す x y 平面上の領域について……

ウ　本年度の出題の中にも $\sqrt{\square}$ の形で答を求めているものがあるが、これは正解につながる直接のヒントを与えることになっており好ましくない。なんとかしてこの形式の出題を避ける工夫をお願いしたい。

エ　本試験 数学Ⅰ問題Ⅰ(i)は、$f(x)=\frac{x+3}{x-2}$、$g(x)=\frac{ax+b}{x+c}$ だから、$f(g(x))$ の定義域は、$x\neq -c$、$g(x)\neq 2$ で、$x\neq -c$ より $x\neq 1$、$g(x)\neq 2$ より $x\neq 0$ が得られるから $f(g(x))$ の定義域は $x\neq 0$、$x\neq 1$ であって、これは $\frac{1}{x}$ の定義域 $x\neq 0$ と一致しない。したがってこの問題文は、二つの関数 $f(x)=\frac{x+3}{x-2}$ と $g(x)=\frac{ax+b}{x+c}$ について $f(g(x))=\frac{1}{x}(x\neq -c)$ が成り立つならば……とすべきであろう。

オ　本試験 数学Ⅰ 問題Ⅱは、選択肢から解答を選ばせる問題であるが、「命題「……」は □ 」の形になっている ア ・ ク は文章の構造からみただけでも解答は真か偽しか考えられず、実質的な選択肢が2個だけになり好ましくないと考えるが、一方、この問題によって合成命題の真・偽の理解度をみるのであれば問題Ⅱの中の他のものとは分離させた形の出題のほうが、出題の意図がはっきりしてよいと思う。

カ　追試験 数学Ⅰ 問題Ⅱ エ〔説明〕について、高校で使用している多くの教科書ではこの問題の解答として次のように指導するようになっている。

2枚ひいたトランプの中にジョーカーが入っていることは、

〔A〕　1枚をひいてそれがジョーカーであり、もう1枚のカードは何でもよい。

〔B〕　1枚をひいてそれがジョーカーでなく、もう1枚のカードがジョーカーである。

上記〔A〕〔B〕の事象のうちいずれかが起ることである。〔A〕、〔B〕の起る確率はそれぞれ、$\frac{1}{53}\times 1=\frac{1}{53}$、$\frac{52}{53}\times\frac{1}{52}=\frac{1}{53}$ であるが、〔A〕と〔B〕は互いに排反する事象であるから、求める確率は $\frac{1}{53}+\frac{1}{53}=\frac{2}{53}$ である。

したがって、問題文に記されてあった〔説明〕では、正解として②、つまり「〔答〕は正しく、〔説明〕自体には誤りはないが、〔説明〕は〔答〕を導くのには不十分または不適当である。」を選ぶ可能性が十分にあると考えられ好しくない。

(3)　配点について

ア　本試験 数学Ⅰ 問題Ⅲの ウ、エ の13点は、ウ、エ を別々に算出する方法もあるので、分割した配点が望ましい。

イ　本試験 数学Ⅰ 問題Ⅱの イ、ウ 及び エ、オ、カ はそれぞれ組で正解なわけだから、個別に配点することは疑問である。

(2) 教育研究団体の意見・評価

日本数学教育学会

1 程度について

(1) 本試験問題の程度については、「やさしすぎる」という意見が多いが、「適当」という意見もかなりある。ただ、全体として、もう少し計算量のある問題が欲しいという意見が強い。

(2) 数学Ⅰと数学一般との間に、昨年のような程度のアンバランスがなく、調和がとれていたのはよい。

(3) 本試験と追試験とで程度のアンバランスが目立つ。これは昨年の共通第1次学力試験でもみられた。多くのものの意見では、追試験の方が良問が多く、程度についても本試験を追試験程度にあげたいということであった。

2 内容について

(1) **本試験・数学Ⅰ**

Ⅰ (i) 単なる計算練習にすぎない。もう少し内容のあるものが欲しい。

(ii) 良　問

Ⅱ 命題という用語の用い方に疑義がある。例えば、(iii)で、命題「$a^2=1$ かつ $b=2$」とあるのは条件というべきではないか。(iv)の命題「$(x, y)\in c$」についても同様。

Ⅲ 「やさしすぎる」という意見が圧倒的である。

Ⅳ 小問が4つあるが、類似の問題で単調である。もっと広く確率についての学力を問う問題にして欲しかった。

Ⅴ 余弦定理などを用いなくとも、中学校の知識だけでも解けてしまう。もう少し、三角関数の知識を問うための工夫が欲しい。

(2) **追試験・数学Ⅰ**

Ⅰ S［f］の記号は少し新奇すぎて、生徒にショックを与えたことであろう。共通第1次学力

試験の趣旨からすると、一考を要する。

Ⅱ ⓪～④のそれぞれの違いを理解するのに時間がかかる。また、ウのような説明は、数学の学力のある生徒を混乱させるおそれがある。苦心の作ではあるが、共通第1次学力試験向きではない。

(3) **数　学　一　般**

Ⅵ $a=\frac{\boxed{\text{カ}}}{\boxed{\text{キ}}}$ を求めさせる問いをなぜつけ加えたのか必然性が感じられない。また、$3a-7=0$ から $a=\frac{7}{3}$ を求めるのに、5点の配点というのも考えさせられる。

3 出題方法について

(1) 解答欄に適合するものがないときなど、＊をマークする指示が与えられているが、このケースは本試験にはなく、追試験の方にはあった。正解に＊を要するような出題は不親切な問い方ではなかろうか。

(2) 本試験・数学一般　Ⅰは順列組み合わせ、Ⅲは順列組み合わせを用いる確率で、この2題で80点というのは、出題が偏りすぎている。

(3) 全体として、もう少し思考過程が詳しくみられるような配慮が欲しい。

(4) ベクトルは数学Ⅰでの重要教材であるのに、その出題がみられなかったのは物足りない感じがする。

4 そ　の　他

(1) せっかくの全国的なテストであるから、これを大学入試に利用するだけでなく、高校教育の向上に役立つよう、成績結果を教育的見地から分析したものを公表して欲しい。

(2) 数学の共通第1次学力試験がこの程度であると、高校の現場において数学の学習を軽視する傾向が現れるのではないかという声がある。反面、現在各大学ごとに行っている2次試験に数学を課さない大学の中から、今後、2次試験にも数学を課す大学が現れるのではないかと危惧する声もある。

(3) 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

(1) 基 本 方 針

問題作成の方針は昨年と基本的には同じであるが、要点を述べることにする。

共通第1次学力試験は、国公立大学に入学を志願する者の高等学校の段階における一般的かつ基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的として実施するものである。したがって、数学の問題作成に当たっては、技巧を避けた素直な問題を出題することが重要である。すなわち、数学Ⅰ（または数学一般）の教科書を十分に理解していれば満点がとれ、理解不足があればその程度が点数に反映されるような問題を課すべきである。

他方、共通第1次学力試験は、各大学・学部が実施する第2次試験と併せて、大学の入学者の選抜に利用されるものであり、数学を重視する必要のある大学・学部は第2次試験で数学を課している。したがって、第2次試験において数学を課さない大学・学部の受験者については、選抜試験としての効果があることが必要である。

(2) 問題の難易度について

上記の基本方針に沿って昨年度の共通第1次学力試験の成績を分析検討し、適当と考えられるレベルの問題を作成することとした。また、数学Ⅰと数学一般との関連については、前年度と同様に、同じ試験における選択科目である以上、学習指導要領に示された履修内容からみて、平等であることを目標とし、難易度の差を共通問題によって判断し得るように配慮した。

数学Ⅰによる受験者の大多数が、数学ⅡA・ⅡB、さらに数学Ⅲまで履修している現状と、数学の学習において積み重ねの効果が非常に大きいことを考え併せるとき、上記の基本方針にしたがって出題すれば、第2次試験で数学を課さない大学・学部の受験者集団については、選抜試験としての役割を果し得る反面、数学Ⅰによる受験者全員を対象とすれば、かなりの高率で高得点取得者がでることになる。

2 出題形式についての今回の試み

試行テスト及び昨年度の共通第1次学力試験の反響をふまえて検討したが、解答上の注意を見やすく、わかりやすいように整理し直した以外は、解答記入方式を含めて、特別の変更はしなかった。

3 各問題の出題意図と解答結果

(1) 問題の取り上げた対象について

教科書の扱う対象はいろいろあるので、問題の組み合わせが重要な対象すべてにわたることは至難であり、特にそのように心がければ問題の質を大きく制約するおそれがある。しかし、必ずしも全体をカバーしないまでも、なるべくいろいろの対象を扱うことを意図して問題を組み合わすようにした。

たとえば今回の本試験の数学Ⅰでは、写像の合成・いろいろの関数、集合と論理・不等式と領域、剰余の定理・整式の計算・方程式、確率、平面図形の性質・三角関数についての理解をためす問題を組み合わせた。

(2) 受験者集団

昨年度は327,140名の本試験受験者中54名が数学一般を受験したが、今年度は333,026名の本試験受験者中28名が数学一般を受験した。また、追試験の受験者は昨年は287名であったが、今年は186名であり、いずれも数学Ⅰの受験者であった。

以下においては（受験番号の記載を誤った者等を除いて成績評価の対象となった）332,766名の受験者があった本試験の数学Ⅰについて述べることにする。

2次試験で(Ⅰ)数学を課さない大学・学部、(Ⅱ)数学ⅡBまで課す大学・学部、(Ⅲ)数学Ⅲまでを課す大学・学部がある。今回の試験が基本方針に沿っていたかどうかを検討するために、共通第1次学力試験出願時点における受験票記載の第1志望の大学・学部によって332,766名の受験者を区分すると、

Ⅰ群　61,307名、　Ⅱ群　99,367名、　Ⅲ群　104,884名

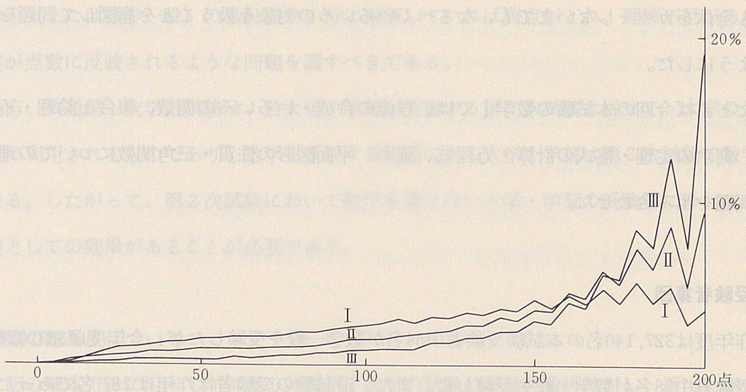
であった。ただし、この他に2次試験の科目が学部で統一されていない等のために区分が困難・不明の者が67,208名あった。

(3) 成　　績

本試験の数学Ⅰの成績を、全受験者、Ⅰ群、Ⅱ群、Ⅲ群の受験者についてみると次の成績表（0点及び満点欄は母集団に対する百分率で表す）の通りであった。

	全　体	Ⅰ　群	Ⅱ　群	Ⅲ　群
平均点	146.49	127.93	146.77	165.49
標準偏差	47.09	49.60	47.49	38.27
0　点	0.03%	0.04	0.04	0.02
満　点	8.84%	2.95	8.13	17.10

次の図表は、母集団に対する百分率を示す成績分布図（得点5点きざみ）で、Ⅰ群、Ⅱ群、Ⅲ群を対比して示している。



上記の成績を問題別にみると、平均点（各問とも満点は40点）及び0点・40点の取得者の百分率は次の通りである。ただし、（　）内はⅠ群のみに限定したものを示している。

	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問
平均点	30.28 (25.52)	23.55 (20.43)	35.32 (32.65)	29.47 (26.98)	27.87 (22.35)
0　点	4.81% (8.37)	1.50 (2.22)	2.95 (5.15)	4.26 (5.98)	15.13 (24.57)
40　点	54.72% (37.01)	14.74 (7.34)	82.40 (73.15)	41.55 (32.02)	48.16 (31.30)

(4) 各設問ごとの誤答率

本試験の数学Ⅰについて各設問ごとの主な誤答及び誤答率は次の通りである。ただし、正答及び正答率は（　）内に示し、誤答率が2.5%以下のものは省略した。

〔第1問〕

ア、イ（－3　74.3%）
白紙　4.3
＋3　3.0
－2　2.9
3＊　2.6

ウ、エ（－2　70.4%）
白紙　5.7
2＊　4.1

オ、カ（－1　70.2%）
白紙　5.7
1＊　4.4
－2　2.5
2＊　2.5

キ（3　88.5%）
4　4.0

ク（8　76.9%）
2　7.0
白紙　4.2
4　3.8
3　2.6

ケ、コ（12　72.7%）
白紙　6.9
18　3.3
14　2.6

〔第2問〕

ア（1　39.9%）
0　44.2
2　14.3

イ（7　66.3%）
9　15.2
8　12.5
6　5.2

ウ（5　87.7%）
3　8.0
4　3.6

エ（6　47.5%）
9　25.6
8　13.6
7　12.0

オ（3　72.9%）
4　25.6

カ（4　68.1%）
3　22.3
5　9.0

キ（6　46.9%）
8　22.1
9　14.7
7　14.0

ク（1　55.4%）
0　24.9
2　7.3
9　4.8
7　3.8

第2問については、特にアの誤答の多いのが印象的であった。すなわち、論理として真であることの意味がよく理解されていない。

また、この設問において、「命題」という用語は教科書によって取り扱いが一定していないので、(iii) 及び (iv) の前半における「命題」はむしろはぶいた方がよかったと考えている。

〔第3問〕

ア（5	88.1%）	エ（ 2	88.0%）	白紙	3.1
イ（6	87.3%）	オ、カ（－1	94.3%）	ケ（2	86.0%）
ウ（4	88.0%）	キ、ク（－2	86.1%）	白紙	3.7

第3問の場合、全受験生の$\frac{4}{5}$以上が満点をとっており、このような事項については理解度が高いと考えられる。

〔第4問〕

ア、イ、ウ(445	84.4%）	7＊	3.1	1645	11.7
19＊	3.5	カ、キ (79	77.0%）	1＊3＊	4.6
エ、オ (15	77.9%）	12	3.1	1445	4.3
29	4.6	ク、ケ、コ、サ(1745	51.8%）		

第4問については、同種の問題が並びすぎているという反響意見があったが、(i)、(iii)は(ii)、(iv)を誘導するためと、考え方に部分点を与える意味で出題したので、(iv)の正解率（52%）はこうした配慮がなければさらに低くなったろう。

〔第5問〕

ア、イ、ウ(－12	79.4%）	143	7.0	1＊	6.0
1＊2	2.9	白紙	4.7	ケ、コ、サ、シ (7326	63.0%）
8＊7	2.6	キ、ク (57	61.0%）	白紙	10.9
エ、オ、カ(283	70.9%）	白紙	9.0		

第5問のような事項については不得手の者が多いように見受けられる。予想に反して0点が多かった。

(5) 本試験の数学一般について

本試験の数学一般はⅠ集合、Ⅱ変化、Ⅲ確率、Ⅳ論理、Ⅴ行列、Ⅵ線形計画についての理解をためす問題を組み合わせ、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの3問と、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵのうちから選んだ2問の計5問を解答させることとし、Ⅲ、Ⅳは数学Ⅰと共通の問題とした。

受験者数が28名に過ぎないので、統計的に結果を論ずることは適切でないと考えるが、参考までに結果を述べておく。

全体成績は19名が14～48点、6名が65～90点で、あとの3名は97、109、155点であった。

問題別にみると、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵを選択した者（解答が白紙の者を除く）はそれぞれ27名、22名、5名で、各問題の平均点（満点は40点）及び0点・40点の取得人数は次の通りであった。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
平均点	5.54	6.36	15.21	11.33	15.68	5.00
0点	21人	15	9	3	0	3
40点	0人	2	1	0	0	0

28名の受験者という現状で特定の結論を出すことはできないが、数学Ⅰとの共通問題の成績にくらべて、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの成績が予想に反して悪かった。

4 本年度の問題についての反響意見

昨年度と同様に、「やさしすぎる」という意見が多いが、「適当である」という意見もかなりあった。また、数学Ⅰと数学一般との間のアンバランスがなく、調和がとれていて良かったという意見もあり、アンバランスだとする意見もあった。

本試験と追試験の間にアンバランスがあるという指摘があったが、この指摘については程度の差は別として甘んじて受けておきたいと考えている。

出題の範囲については、例えばベクトルの分野からの出題がなかった。これについては、できるだけ全分野から出題して欲しいという希望がでていた。このことについては**3(1)**でも述べたが、今後できるだけの努力を続けて行きたい。

問題の内容については、良く洗練された素直な問題であるという意見が多かったが、**3(4)**でふれた「命題」についての指摘もいただいた。また、本試験数学Ⅰの第2問において、「同じ記号を何度用いてもよい」という趣旨の注意書きがあった方がよいという意見もあったが、これは本来必要なく、重復使用があるかどうかの判断も学力のうちと考えている。

その他各方面から多くの意見をいただいた。中にはマークシート解答方式という枠から逸脱するものや、偏見・誤解によるものもあったが、多くは共通第1次学力試験をより良いものとする趣旨からのものであり、今後の出題にあたって参考にすべきものもあるので、そのような部分は今後の問題作成にあたって十分検討していきたいと考えている。

5　今後の出題にあたって留意すべき点

1 に述べた出題の基本方針は今後も変らないと考えられるので、基本的にはこの方針にしたがって問題作成をしていきたい。なお、具体的には次の諸点に特に留意すべきであると考える。

(1)　問題に取り上げる内容の偏りは、高等学校の数学教育に影響を与えるおそれがあるので、できるだけ教科書の全域から出題するよう工夫することは当然であるが、断片的な知識をいたずらに網羅的に問うような安易な姿勢は避け、試験の形式の許すかぎり、思考力を問いうるようにすべきである。

(2)　個々の問題については十分に吟味して、内容を洗練するとともに、文章表現については出題意図が正確に把握されるようにし、特に用語について十分に検討すべきである。

(3)　解答記入形式の変更は、受験者に余分な負担がかかるおそれがあるので、慎重な検討が必要である。

理　科

物　理

(1)　高等学校教科担当教員の意見・評価

1　構成と内容

(1)　本試験問題の構成と内容

力学、波動、電気及び一般（物理量と単位）の大問4題で構成されており、物理Ⅰの範囲内で、各分野におおむね均衡のとれた出題である。しかし、熱現象に関係する問題、設問がほとんどないこと、波動現象の問題がやや軽く扱われすぎた感じがすること等が残念である。以下各問題毎に若干の考察を加え、感想と希望を記したい。

ⅠA　実験を重視した適切な出題である。

ⅠB　小問の独立性はよく活かされているよい問題であるが、小問の2つくらいは直列型（ある設問に正答が得られなければ、次にある設問に正答が得られない。雪崩型ともいわれる。）の問いにしてもよいのではないかと考える。

Ⅱ　Ⅰ、Ⅲにくらべて構成が単純である。（設問数、配点にもこれが反映している）正答率が70％くらいで4点か5点の小問がもう1つほしい。また 9 では縦波を横波に変換して考えれば、（この縦波の扱い方、あるいは表現法は、どの教科書にも記載されているが、これを応用できるまでに十分に理解している生徒は少ない。）容易に正答を得られるはずであるが、縦波を横波に変換して考える着想が難かしく、縦波を縦波として考え、混乱した生徒が多かったのではないかと考える。

Ⅲ　静電誘導による電荷の符号、大きさ、導体の電位をまたコンデンサーの電圧・極板間の電界を問うものである。特にBでは、図から箔検電器を省いても出題の意図は失われない。いたずらに、受験生を惑わせる結果となったのではないかと思う。

$E_2 > E_1$の設定に設問の新鮮さを感ずる。

Ⅳ　単位の組み合わせが全体として表わしている物理量の名を解答群より選択させる問題であ

る。学習内容の定着度を見る問題と考える。生徒の立場からは公式を知っている方が断然有利である。後の出題方法とも関連するが、設問の表現と解答群の設定によってⅠ～Ⅲ（あるいは追試験）の設問に吸収させることも可能であろう。

この型の問題の出題頻度は少ない方が望ましい。

(2) 追試験問題の構成と内容

力学、波動、熱と仕事、電界と荷電粒子を扱った大問４題で構成されている。物理Ⅰの範囲、程度の限度内で調和のとれた、また、実験の面からも好ましい問題もあり、むしろ、本試験と入れ替っていた方がよかったのではないかと思われる。

(1)の場合と同様に、以下各問題毎に考察を加えてみた。

Ⅰ　２次元の衝突現象を素材とする多角的な出題が特色である。

A　問１と問２の間に小物体ＰまたはＱの速さを求めさせる設問があってもよい。図１の１目盛が0.05ｍが効いてくるのはＢの問３だけで、他は仮りに１目盛ａとしても、ベクトルの作図から解ける問題である。一考を要するところであろう。

B　問１で速度が算出されるので、問４を問１のすぐ後にした方がよい。

Ⅱ　高校の教育に無理をきたさない、平素の学習に密着した素直な問題でよい。波動の問題で、波の基本式、重ね合わせの原理の比較的簡単な応用問題である。

問４を「唸り」の知識で解いた生徒のうち、横軸を時間軸とする表記の教科書を使った者は多少混乱したものと思う。

Ⅲ　仕事と熱（エネルギー）に関する問題で heat pump（問題文では電気冷凍機）を働かせた場合の仕事と熱の出入りからエネルギー保存則の理解の程度をみようとする問題と思う。平素、多くの高校で、授業の中で行っていると思われる実験をもとにした問題をも考えてほしい。

Ⅳ　電界中の荷電粒子の運動を取り上げた問題である。

Ａ問３からＢ問２までが雪崩型の設問になっている。得点への影響が大きすぎる。Ａ問４、Ｂ問１、Ｂ問２ともに力のつり合いの問題とも考えられる。２問に削減し、電位、エネルギーなどの設問を加えて多面的な取り扱いにしたらどうであろう。

Ａ問１について、実験重視の観点から評価はできるものの、中学での既習内容とはいえ、物理Ⅰでは電流回路は扱っていないし、可変抵抗器を持ちだすのはどうか。

2　範囲と程度、設問数等

(1) 本試験の範囲と程度、設問数等

Ⅰ　範囲は適当である。Ｂの問３、問４が程度が高すぎる。設問数は６～７で適当。

Ⅱ　程度は普通。設問数３は少ない。４～５が適当。大問Ⅰ、Ⅲにくらべて波動分野での取り扱い範囲が狭い。平易に、総合的に取り扱う問題は工夫できないものか。

Ⅲ、Ⅳ　範囲設問数は適当。ⅢのＡ問２は程度が高すぎると思う。

(2) 追試験問題の範囲と程度、設問数等

Ⅰ　Ａ、Ｂで設問数７、配点33は多すぎる。１問は減じた方がよい。衝突後、Ｐ、Ｑが合体する程度の問題としてもよいのではないか。

Ⅱ　波動の基本式、重ね合わせの原理だけの問題で範囲がせまい。程度は適当、設問数はもう１問追加したい。

Ⅲ　範囲、程度、設問数ともに適当と思う。

Ⅳ　範囲については、もう少し広げて多角的な取り扱いにしてもよい。程度、設問数は適当である。

3　出題方法（試験時間、配点、問題文の表記、解答方法）

(1) 本試験問題の出題方法

追試験にも共通して、制限時間60分（適当と思うが、これは問題の難易と量で変化すべきものと考える）として、受験生の50～60％程度の者が５、６分の見直し時間の余裕をもって解答できるようなものであってほしい。

大問ⅠとⅢの配点がやや大きすぎる。

問題文の表記について、問い形式（大問のⅠ等）と空所補完式ー空白記入式ー（大問Ⅱ）とに大別される。（Ⅳのように２群選択結合式の問題は少ないと見てよい。）いずれかに統一できないものか。

解答群の設定を数値または式の群と単位の群とに分け、これら２つの組み合わせで解答させる方法もある。

大問Ⅰのばねの図がやや粗雑である。図2の方眼の線が太すぎる。細くしてすっきりとした感じを与える方眼にしたい。

(2) 追試験問題の出題方法

Ⅰ 問2で「Qを基準にしたPの速度」は「Qから見たPの速度」とした方が表現が平易になる。

図の表示に、注意工夫の余地がある。図1は方眼の下方に書くべきで方眼の右上隅などに書くのはよくない。方眼の線が太すぎる。(問1の解答群、図2についても同様)。図1のP、Qの運動方向を示す矢印が長すぎる。問1の解答群中、④が見にくい。

Ⅱ 大問としての配点がやや少ない。

Ⅲ 大問としての配点がやや少ない。大問Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、の配点差が大きすぎる。問題の中で、冷凍機、冷蔵室の区分、定義が明確でない。そのため、問題が把握しにくいところがある。

Ⅳ A問1の解答群にだけ「解答群」と書かれている。何か理由があるのか。

1問当たりの配点は5点を上限とする程度でよい。

A問3「------何N/Cか。」を「------何N/C(V/m)か。」とした方がよい。

A問4 $|q/m|$ を用いないで、B問2と同様に、q/mの絶対値は何 C/kg か。とした方がよい。

全体を通じて、解答番号が3桁の設問が割り込ませてある。受験生によけいな気苦労をかけさせたのではなかろうか。

文字式の選択肢では次元の異なるものも混在させてはどうか、と考える。

4 そ の 他

(1) 問題設定に引用される実験器具や装置については、特に、高校で標準的なものとして、広く使用されているもの、または多くの教科書に記載されているものを取り上げていただきたい。この意味では、今回の本試験Ⅲの箔検電器について、出題の意図を失わない表現は可能であった。

(2) 問題文のページ数を、冊子を開いて、左右2ページ以内に収められないものであろうか。(活字の大きさ、行間隔を工夫すれば可能であろう。)

(2) 教育研究団体の意見・評価

① 日本物理教育学会

日本物理教育学会は、「共通第1次学力試験」を重要視して、「共通1次試験検討委員会」を設置し、共通第1次学力試験の試験問題について検討を進めている。

この委員会では、共通第1次学力試験試験問題は、高等学校物理教育に与える影響が極めて大きいので出題は「高校物理教育を促進するもの」であってほしい。また、「高校物理教育の目標を指向しているもの」であってほしいということも念頭において、下表の判定基準を作成するとともに、これにより試験問題を検討した。

試験問題の意見・評価のまとめは、この判定基準に基づくアンケート調査によることとした。以下は、このアンケート調査の集計結果である。

なお、アンケートに協力いただいた大学・高校の方々は北から、北海道地区、東京地区、名古屋地区、大阪地区、岡山地区、九州地区の大学関係13名、高校関係77名(2月22日現在)計90名である。

1 判 定 基 準

①	物理の基本的概念基礎的事項について問う問題である。	⑥	図・写真・グラフをみてその物理内容を読みとり理解できるかどうかを見る問題である。
②	学校の授業をキチンと勉強していればできる問題である。	⑦	日常生活の現象の中にひそむ法則性をみつけ出す能力が必要な問題である。
③	基本的な原理から重要な法則(定理)がどのようにして導き出されるかの道すじを十分に理解しているかを見る問題である。	⑧	いくつかの基本方則や公式の中から適当なものを選び出して使う能力を見る問題である。
④	正しく数値を計算する力、及び(または)式を変形する力のあることが必要な問題である。	⑨	ありふれた問題ではあるが重要な事項を尋ねている問題である。
⑤	実験して観察考察する習慣と能力の程度がわかる問題である。	⑩	学校の授業をキチンと勉強しただけでなく、それに思考力が加わらないとできない問題である。

(次頁に続く)

⑪	いままでに出たことのないような型の問題である。	⑯	出題のパターンが一方に偏している問題である。
⑫	公式の過度の暗記を要求している問題である。	⑰	共通一次用として、よい問題である。
⑬	出題範囲が標準的な授業の範囲を逸脱している問題である。	⑱	共通一次用として、まあまあの問題である。
⑭	共通一次用として難しすぎる問題である。	⑲	共通一次用としては、適当ではない問題である。
⑮	問題の表現形式が適当でない問題である。	⑳	全体としてみると時間が足りない。

2　アンケート調査の集計結果

(1)　⑰、⑱、⑲は総合判定事項である。これをみると、大問Ⅰ、Ⅱ、Ⅲはよい問題であったという判定をした回答者が多いが、大問Ⅳは必ずしも全面的には受け入れられていないといえるようである。

(2)　⑳は解答時間の過不足を尋ねる項である。全問を解くのには時間が不足するという判定が、49パーセントあった。

(3)　ⅠB問3、問4は難しいという意見が比較的多いようである。(⑭の丸印が比較的に多い)

備　考

①　アンケート用紙には、各小問ごとに該当項の○印の総計を、百分率に換算して表示してある。○印はいくつつけてもよいことにしたので、総計は100パーセントにならない。

②　百分率の多い項はそれだけ○印をつけた回答者の数が多いことを示しているから、回答者が、問題の性格、特性をどのように受け止めているかという傾向を推定することができると思われる。

問題番号 / 判定基準	〔Ⅰ〕							〔Ⅱ〕			〔Ⅲ〕								〔Ⅳ〕				
	A			B							A				B								
	問1	問2	問3	問1	問2	問3	問4				問1	問2		問3	問1	問2	問3		問1	問2	問3	問4	問5
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	101	102	103	104	105
①	% 34	% 34	% 41	% 70	% 51	% 26	% 33	% ⑦⓪	% 49	% 49	% 49	% 47	% ㊼	% ㊼	% 38	% 44	% ㊼	% 43	% ㊶	% ㊹	% ㊵	% ㊳	% 38
②	48	㊹	㊽	㊷	㊵	32	31	63	㊿	㊼	㊼	㊽	40	41	24	㊾	㊼	㊾	40	40	36	32	33
③	0	9	11	11	6	14	13	9	12	11	2	2	3	3	3	2	9	3	17	17	17	16	16
④	0	1	46	31	43	㊸	29	10	4	1	0	0	0	0	0	32	6	32	23	24	27	27	27
⑤	㊾	23	8	2	1	1	1	16	18	18	53	33	32	30	38	6	10	3	0	0	1	0	0
⑥	1	62	40	0	0	0	0	23	29	24	21	22	18	20	16	12	20	10	0	0	0	0	0
⑦	2	11	2	1	2	2	1	3	1	2	6	3	3	3	4	0	1	0	0	0	0	0	0
⑧	0	0	2	32	53	㊸	㊷	14	8	10	1	6	4	6	3	24	12	31	31	32	33	32	32
⑨	16	26	18	23	21	9	12	26	19	21	18	19	20	19	18	13	18	12	8	9	9	8	8
⑩	0	0	0	8	10	42	28	8	30	20	18	33	40	37	㊼	22	28	21	13	13	16	20	17
⑪	2	1	0	0	0	6	4	9	10	9	4	11	11	10	10	4	7	8	33	32	33	37	㊴
⑫	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	4	3	4
⑬	0	0	0	0	1	8	9	0	1	1	3	3	4	6	6	3	7	4	8	7	6	10	8
⑭	0	0	0	1	4	26	20	0	6	2	0	3	3	4	8	4	4	2	1	2	3	3	2
⑮	3	1	0	1	1	3	2	1	9	4	1	1	1	1	7	0	0	0	10	8	8	9	10
⑯	1	0	1	0	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	11	10	10	12	12
⑰	㊸			㊳				㊻			㊻								20				
⑱	38			26				34			42								㊶				
⑲	2			12				4			18								30				
⑳	㊾																						

(①～⑯、⑰～⑲最大値○印表示)

② 日本理科教育学会

本試験及び追試験を通じ、その内容は、高校物理で学習する事項のうち、基礎的基本的事項に関連し、その程度もおおむね妥当であろう。また、出題の量も試験時間に見合っていると思われる。しかし、共通第1次学力試験の内容が、今後の高校の授業のあり方に多大の影響を与えることは否定できない。したがって、その観点から、出題のあり方として望ましい点と、今後の検討を要する点について意見を述べる。

1 望ましい点

(1) 基礎的基本的事項からの出題であること……特に、追試験Ⅰは運動量保存則及び運動量の変化と力積との関係を取り上げ、これを二次元の現象に適用している。一次元の扱いしかしていない学習（あるいは指導）では、この法則の真の理解になっていないことへの警鐘となるだろう。また、本試験Ⅳは、単位に関する問題である。物理量を扱う際、単位は極めて重要であり、基本的事項のひとつである。設問の方法も新しい形式が工夫されている。それだけに難問に見えるかもしれない。ただし、「どんな量の単位を表しているか」という表現には疑問が残る。このほかにも、単位に関連する事項は、本試験Ⅰ、追試験Ⅰ、Ⅲ、Ⅳにも見られる。

(2) 実験に関連する出題があること……本試験Ⅰや追試験ⅣAのような問題は、実際に実験を行っていなければ解答が難しいだろう。実験・観察などを通して学習することは、理科教育の目標とも関連し、今後いっそう重視されなければならない。

(3) 科学の方法に関連する出題があること……本試験Ⅰや追試験Ⅰでは、与えられたデータを解釈したり、比例定数を求めたりする。また、本試験Ⅲでは、はく検電器のはくの動きから電荷や電位の分布を解釈する。これらはデータ（事実）から法則性などを見つけだす過程に関連し、日常の学習に望ましい影響を与えるだろう。ただし、本試験ⅢAの内容は、実際にはく検電器を扱った学校の受験生に対しては、知識の再生に近い。それだけに、扱わなかった学校の受験生には、とっつきようもない程難しい問題であろう。

(4) 基本的な法則を日常の場面に適用して考察させる出題があること……追試験Ⅲの問3、問4では、エネルギーの変換と保存則を総合的に、しかも数量的に取り扱っている。高校では、力学的エネルギー保存則を具体的な場面に数量的に適用して考察させることは、従来もよく行われている。しかし、一般的なエネルギー保存則は極めて重要な法則であるにもかかわらず、この問題

のように、電気や熱のエネルギーを含めて扱った例はほとんど見当たらない。

(5) 用語などの記憶を要求しない配慮があること……追試験Ⅲでは「熱容量」の定義が与えてあり、それを物理的に理解すれば、問2が解けるようになっている。あまり本質的ではない用語を暗記しなくてもすむようにしてあることは、設問の方法として歓迎できる。

2 検討を要する点

(1) 一部の教科書だけが記述している内容からの出題……本試験Ⅰ問3では、ばねの位置エネルギー、おもりの位置エネルギー、おもりの運動エネルギーの3種を含めて、力学的エネルギー保存則を適用させるようになっている。現行の高校物理Ⅰの教科書11社、17種のうち、この3種のエネルギー間の移り変わりを本文あるいは例題、問題として記載しているのは5種に過ぎない。このことは、一部の受験生に有利になることが考えられる。

(2) 複雑な計算を要する問題……上記の本試験Ⅰ問3を解答するためには、若干の文字計算を要する。この計算は、高校を修了する生徒として、特に困難な計算ではないかもしれないが、今回の試験問題を通して見た場合、この問題だけが際立って計算を要求している。

(3) 問題文の表現……例えば、本試験ⅡB設問 [9] にかかわる文章は、題意の読みとりがややむずかしい。補助図などを使う工夫が考えられないだろうか。また、本試験ⅢA問1の文章では、Xを「固定した」と記した後に、Xの移動のことが記してあり、混乱を起こすおそれがある。さらに、この文章は以下の問1～問3にかかるはずなのに、問3では、新たに状態Ⅲが提示され奇異である。また、追試験Ⅱの変位の図は、波P及び波Qとが、それぞれ単独に進行しているときの図であろう。これを「ある時刻tにおける……変位を……示したもの」とするのは、おかしくないだろうか。

(4) 解答群に示す解答の数とその内容……数値計算あるいは文字計算を要する問題では、与えられた解答の数が8個～10個（追試験Ⅳ問3、4では15個）となっている。列挙した解答の数に何故そのようなばらつきがあるのだろうか。また、誤答の内容には、それぞれどんな根拠（誤った考え方）があるのだろうか。例えば、本試験Ⅱ設問 [9] の解答群中、②、③、⑤は、これでよいのだろうか。

(5) 前問の正解を使う問題……追試験ⅣAの問4は、問3の結果を使い、Bの問2は、問1とAの問3の結果を使うことになる。もし前の問題を正解していなければ、後の問いの正解が得られない。このように前の問題の解答に関連する出題は、できる限り避けるべきであろう。

③ 日本理化学協会

1 はじめに

ここに記した意見は、日本理化学協会の全国都道府県各支部からのアンケートによる意見を集約し、さらに、日本理化学協会大学入試問題検討委員会によって検討したものである。検討に当たっては、高校において普通の授業を受けた受験生が、60分で解答することを想定した。

この結果、全体としては、おおむね妥当な問題と考えられるが、分量、程度その他にいくつかの問題点がある。以下、具体的に問題点を中心に述べる。

2 出題の範囲について

特に問題はない。

3 出題分野の割合について

力学と電気現象に重点が置かれ、これに波動現象が加わり、熱現象や原子については皆無であり（Ⅳ、問5にふれられてはいるが）出題分野に偏りがみられる。偏りのないことは望ましいことではあるが、60分という時間で、論理的思考力や系統的知識を試験するためには、やむを得ないことかも知れない。

ただし、数年にわたってみた場合、物理Ⅰの分野のバランスはとるべきである。ただ、今回は材料として、つるまきばね、はく検電気に偏り過ぎていた。

4 難易の程度について

比較的やさしい問題からむずかしい問題にわたって出題されており、よいことである。全体としては、適当な程度といえるかも知れないが、次のような問題点を指摘しておきたい。

(1) ⅠB、問3、問4：重力を考慮して式に入れると、式が繁雑になり、高校の普通の授業では必ずしも扱わない。

(2) Ⅲ：条件が複雑である。

はく検電気の扱い方は、教科書によってかなりの差があり、はくの周囲を金網で囲うような扱い方はほとんどしない。

静電気現象の基本的、本質的な部分とはいえ、程度として高い。

ⅢBについては、はく検電器を置いて状況を複雑にしているが、設問の主旨は、はく検電器がなくても達せられる。

5 問題の分量と配点について

問題の分量は、その問題の質、程度、制限時間及び対象とする受験者の面から考えねばならない。さきに述べた問題点や、次項に述べる問題点などから考えると、今回の問題量はやや多いと思われる。

21設問、1問の配点は問題の質により3～8点、平均5点弱というのは、設問数、配点バランスとしては問題はない。しかし、ⅢA、問2の8点配分は、部分点がないとしたら配点過剰と思われる。また、Ⅳのような問題は、設問数として多過ぎ、15点を配点していることも過剰と思われる。

6 その他の問題点について

(1) Ⅱについて：良問であるが、材料がつるまきばねに偏ることを避けて、弦を伝わる横波にしても、出題の意図はほぼ達せられるのではないか。

(2) Ⅳについて：物理量についての単位の重要性は理解するが、出題の形に工夫がほしい。単位はMKS系を中心としたものでよい。

(3) 解答関連問題について：ⅢのA、B共に問1の答をまちがえることにより、それ以下の問題の答えもまちがえることになる。ⅠBではこの点は配慮されている（重力を計算に入れると関連する場合もできるが）。入試という状況下では、一つの誤答が次へ影響を与えるような設問はなるべく避けてほしい。

7 来年度への希望

以上指摘した問題点の改善につとめていただくと共に、高校における普通の授業を受けた者を対象とすることを、あらためて念頭に置いていただき、以下に述べるいくつかの要望もあわせて考慮していただきたい。

(1) 他科目との比較：物理Ⅰの平均点は、昨年度59.87、今年度55.17で、大きな変動もなく、かつ、適当な点数と思われるが、他科目との比較で一考をお願いしたい。すなわち、理工系志望者で物

理を比較的得意とする者が多く受験していると思われる物理Ⅰの平均点が、文系志望者が多く受験していると思われる生物Ⅰの平均点より、10点以上も少ないということ。

(2) 今回の問題は多少むずかしかったが、論理的思考力、系統的知識を試験するためにはよい問題であったと考える。この傾向は今後とも続けてほしい。ただ、問題の設定条件は、比較的単純にし、内容も基本的なものとしてほしい。

㈱ 追試験について

追試験の問題は、出題範囲の偏りも少なく、一つ一つの問題が粒よりである。このため、全体としてむずかしくなり、量もやや多い。ただ、本試験に対する追試験の問題という観点からは適当な問題と思われる。

(3) 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

物理Ⅰにおける基本的概念や法則に関する知識と理解の度合、及びそれらを具体的な現象に適用する能力を問うことを基本方針としたが、今年度は特に実験的要素を含んだ問題を加えることとした。問いかけの方法は、各大問についてそれぞれ状況設定を行い、これについていろいろの角度からの小問が続く形式をとった。受験生が状況設定の文章を読み、その状況を理解するのに若干の時間を要するので、大問の数は4問程度とした。小問については単なる記憶で答えられるものはなるべく避け、思考力を試すような出題をすることに努力した。また、時間の制約もあり小問数は20～25問程度が適当と考えた。小問においては、1つの問いの解答を誤ると、その次の小問の答も誤答となるような配列はなるべく避けたが、段階的に思考力をみたい場合にはそのような問いをも設けた。

今回のような出題形式にすれば、1回の試験で物理Ⅰの学習内容全体を覆うことは極めて難しい。本試験と追試験をあわせたり、また、数年間を通してみわたしたりした時、範囲全体のバランスがとれていればそれでよいと考えた。単発式の出題にすれば1回の試験に全範囲を含めることも可能であろうが、この形式で物理的思考力を問う問題を出題できるかどうかに疑念が残る。これは今後の研究課題である。

難易度については例年と同じく、予想平均点が60点になることを目標とし、平易な問いも難しい問いも含まれるようにした。

なお、本試験・追試験の区別は問題作成過程では全く意識せず、同じ価値のものとして同じ努力を払った。

2 各問題の出題意図と解答結果（本試験）

Ⅰの力学に関する問題は物理実験についての基礎的知識を問うと共に、力学における衝突、ばねの弾性、仕事とエネルギー、運動方程式等についての理解度を問うものである。Aの問1～3の正答率はすべて予想より高く、いずれも8割を越えていた。Bの問1～2も正答率7～6割台であり、特に問2については物理受験者の成績が下位1/5のグループ以外は半数以上が正答していた。この程度の基礎的学習内容はかなり習得されていることを示している。Bの問3～4は成績上位1/5のグループは大部分が正答しているが、それ以下の受験生のグループについては順に正答率が下がっている。問3の正答率は3割前後であるが、仕事の符号を間違えた者は少ない。問4の正答率は問3より更に低く、⑦ $g+\frac{kA}{M}$ をマークしたものが正答の⑤ $\frac{kA}{M}$ をマークしたものの2倍以上もあった。これはこの問題設定に運動方程式を適用する仕方を間違えたものと考えられる。

Ⅱの波動の問題は、ばねを伝わる縦波において進行波と定常波についての理解を問うものである。

解答番号 9 の問いを除いてその他はよくできている。 9 の問いでは誤答⑨ x_1, x_3, x_5, x_7 にマークした者が多いが、これは波がどこまで到達しているかを間違ったものであろう。つまり、進行波と定常波とを混同したものと考えられる。

Ⅲの電気に関する問題は前半のはく検電器を題材にして静電誘導を問う問題と、後半のコンデンサーと電界についての問いとからなっている。問題設定として、ガラス容器の内面を大地と同電位にしておく方が簡単であるので内部に金網を入れることとした。前半のAの問1は正答率が5割台で大体予想通りであった。問2も同じ程度の正答率を予想していたが実際の結果は予想外に低く2割を下回った。これは解答番号 12 13 14 に対して①③①と答えたものが正解者よりはるかに多かったためである。このことは静電界の中での導体の各部分が同電位であるという基本的知識が定着していないことを示している。問3の正答率も予想より少し悪く2割台であった。

後半のBについては、問1は単なる公式の適用計算のためか、予想を上回る正答率（8割台）であった。ところが問2の正答率が悪く、④が正答であるのに、③を答えたものがほぼ同数いた。次

の問３の解答結果と総合してこの理由を考えると、問２を間違った受験生は極板Ｙの電位を大地と同電位と考えたようである。しかし、大部分の受験生が③か④を答えているので電界の向きと電位の高低の関係については理解できているようである。問３については、上に述べたＹの電位を誤解した関係で正答の⑥についで④を答えたものが多かった。問２、３についてはいずれも正答率は予想を下回った。

Ⅳの単位に関する問題は基本的事項としての単位相互間の関連について、その理解度を総合的に問うものである。

正答率は、平均６割台であったが、問４だけは３割台と正答率は低かった。問４は誤答⓪、⑨にマークした者が多かった。クーロン・ボルトがエネルギーの単位になっていることに気付かなかったためと思われる。

この本試験については受験者総数178,844、平均点55.17、標準偏差19.27であった。

3　追試験の解答結果

Ⅰの力学に関する問題はグラフの読みとりかた、相対運動、衝突の力積、エネルギー等についての理解をみる問題である。Ａの問１は正答率は８割台で高く、問２、問３と順に低く、問３では５割台であった。問３の正答率は物理Ⅰ受験者中成績が上位2/5までのグループについては極めて高く、それ以下のグループでは低いことが特徴的であった。Ｂの問１～４の正答率はすべて５割以下であった。問１では誤答ⓒをマークした者が５割近くもあり、問２では誤答⓪をマークした者が多かった。これは運動量保存の法則を用いてベクトル的に衝突後の運動を推理せず、図をみて速度のみに着目してＰの運動方向を判断したためであろう。また、問１と問４の正答率の間の相関係数は大きかった。したがって問題の配置としては問１のすぐ次に問４を置くべきであった。

Ⅱは波動の重ね合わせについての理解を問う問題である。正答率は最後の問４が少し低いが、その他は８～９割台であったから、比較的平易な問題であったと言えよう。

Ⅲはエネルギー保存則についての理解をみる問題である。問１の正答率は６割台であったが予想を下回った。問２の正答率は９割台であったが、問３は正答の⑤をマークしたものが２割台で、これに対して誤答③をマークしたものが５割をこえた。これはエネルギー保存則の真の理解に至っていない者が多いことを示している。問４の正答率は問３より高く５割近くであった。

Ⅳの電気の問題はミリカンの実験について、装置の結線図、電気力と電界、比電荷、終端速度等

についての理解をみる問題である。Ａの正答率は問１では３割台と低いが、問２、問３の順に高くなり、問３では７割台であった。問４についてはノーマークの受験生が１部あったが５割台が正答であった。Ｂの問１の正答率は４割台であり、誤答⑨をマークした者が１割近くあったが、これは力の向きを間違ったものと思われる。問２の正答率は３割台であった。

この追試験については、受験者数103名で平均点、標準偏差については本試験と大きな差はなかった。

4　問題についての反響意見

昨年に続いて今年も本試験にばねの問題が出たことについて批判があったが、ばねは大きさの変化し得る力を実験的につくり出す代表的器具であるので、止むを得なかった。大問Ⅱにもばねが現れるが、この問題は波動の問題であって、この場合は単に波の媒質として用いられているにすぎない。また横波として出題した方が素直ではないかとの批判があったが、波は横波も縦波も本質的には同様に取り扱えることであり問題の難易には大きい影響はなかったと考えている。上にも述べたように解答番号 8 と 10 はよい成績であり、 9 の成績が悪いのは進行波がどこまで到達しているかを誤解したことに主な原因がある。

大問Ⅲのはく検電器に金網を入れた理由はすでに述べたが、Ａの問１と問３が連動するとの意見があった。確かに、問３に出てくる状態Ⅲについては図がなく、あまり多くの状態を設定したとも考えられ、問３は省略しておいた方がよかったかもしれない。

後半Ｂの問題については金属板Ｙの下部は必ずしもはく検電器である必要はなく、この部分は問題の内容には何の関係もない。このため、徒らに問題を複雑にしたという批判があった。それにも一理あるが、はく検電器の電極が大地と絶縁されていることは自明のことであり、これによって惑わされるということは静電気に関する知識が定着していないためとも考えられる。

大問Ⅳについてもいろいろの反響があった。大体この問題は物理の重要な公式からある量を求めた時に出てくる単位の組み合わせになっている。例えば、問１は運動の方程式、問２は力積と運動量、問４は荷電粒子を高電圧で加速したときの運動エネルギー等である。問３、問４は電気の単位が含まれているためディメンション的に何の単位かを探すとかえってわからず、随分時間をとられた受験生があったらしい。単位がＭＫＳＡ単位系にそろえていないが、物理は自然界に起る現象を対象としたものでありこれを記述するための単位をＭＫＳＡ系に限る必要はなく、その場合に応じ

て適当な大きさの単位を用いるのがよい。したがってどのような単位ができても特別に煩雑な量的換算の場合はともかく、それがどのような物理量に対応しているかという定理的判断をする能力は高校物理においても習得していることが望ましい。

以上を通じて、最終的に平均点が55点台になったことについても反響があった。出題時に予想した正答率よりも予想外に低い正答率しか得られなかった問いはすでに述べた通りであるが、これが平均点が60点を下回る主な原因となった。

5　今後の出題に留意すべき点

各方面より受けた反響についてはすべて部会において逐一審議した。指摘を受けた点については今後十分留意することとしたい。また平均点の予測については高校で十分教えこまれたような問いについては我々が予想した以上の正答率になるが、少し深い思考を要求した問いに対しては予測をはるかに下回ることを痛感した。今後この点に配慮して平均点を予想することが肝要と思われると同時に、十分の思考力を備えた高校卒業生が増加してくれることを期待している。

化　学

(1)　高等学校教科担当教員の意見・評価

本年度の共通第1次学力試験試験問題(化学)については、全体としては、きわめて妥当かつ適切であり、作問にあたられた委員の方々に深く敬意と謝意を表するものである。高校教育を乱さないようにという配慮がうかがわれ感謝にたえないが、さらに現在の高校教育を正しく認識していただき、それを望ましい方向に誘導するくらいの意気ごみで、今後とも一層の努力を願ってやまないものである。

以上のような建設的な立場から、本年度の問題について意見を申し述べたい。なお、意見の中には、主観の相違に属すると思われるものや、作問の際の技術的制約に原因が在ると思われるものもあることを重々承知しているが、来年度からの問題作成の一助にしていただければ幸である。

1　構成と内容

(1)　原則として化学Ⅰの全分野から出題するよう配慮されたい。

このことについては、本年度の本試験問題、追試験問題ともに十分な配慮がなされており、特に指摘する事柄はない。ただこの原則にあまり拘束され過ぎると、別の弊害が発生するおそれがある。即ち、限られた60分間という試験時間内に、化学Ⅰの総ての項目を機械的に盛り込もうとすると、必然的に設問数が多くなり、問題内容が浅薄になりがちである。科学的思考力を試すよりは、単なる暗記を要求する傾向に陥りがちとなる。

昨年度の日本理化学協会からの意見の中にも、解答マーク数は最大35におさえて欲しいという要望もでている。(本年度のマーク数は、本試験で42、追試験で41である。)要は、特定の分野に偏った構成は厳に戒めて、化学Ⅰの基礎的事項から出題するという基本的態度を今後とも堅持していただきたいということである。

(2)　高校における化学実験の趣旨を理解され、その趣旨に基いて出題されたい。

本年度の本試験問題、追試験問題の両者とも、実験を重視した問題を作成するという基本方針がにじみ出ていて、誠に結構であり賛意を表するものである。

しかし、ここでもう一度高校における化学実験のねらいを再認識していただき、単に実験にか

かわる問題を出しさえすれば良いということではなく、高校の化学教育における実験のねらいに即した問題作成に一段の努力を願いたい。

高校の化学教育においては、実験を科学の方法として位置づけ、仮設の設定、情報の収集、情報の処理、検証というようにいくつかの段階に区分している。そしてそのすべてを通して実験すること（いわゆるフルコース）はまれであり、多くの場合そのいずれかに主眼をおいて実験指導を構成している。即ち、実験操作そのものより、実験方法の考案や実験結果の考察等に真のねらいをおいているわけである。したがって、単に器具の名称であるとか、器具の操作方法とかの実験技術にかかわることは、比較的軽く扱っていることを理解いただきたい。

(3) 二者択一の解答形式については、今後とも英断をもって推進されたい。

昨年度についても、本年度の本試験、追試験の両者についても、真偽を問う二者択一の形式の問題が出題されている。従来から客観形式テストの最大の欠点として、○×式の偶然性が指摘されていたが、真正面からこの批判に挑戦したかたちになっている。このことについては賛否両論あると考えられるが、当部会としては二者択一形式も許容したいと考えている。

作問段階において、無意味な選択肢の数を増すことは容易であるが、有意の選択肢の数を多くすることは大変困難な作業である。そしてさらに憂慮されることは、選択肢の数を増すことを優先させるあまりに、出題内容が枝葉末節的な事項に陥りやすくなり、その結果、共通第1次学力試験の「高校での学習到達度を判定する」という大目標が損われるおそれがあるからである。問題形式に多少の瑕疵があっても、問題内容が化学Ⅰでの基礎的事項から逸脱しないことの方がよりたいせつである。このような観点から、二者択一形式が世論として理解され、定着することを希望するものである。

なお、二者択一形式の採点基準について、減点法を採用することの可否については、今後さらに検討を続けられたい。

(4) 各論の取り扱いについて検討願いたい。

理論化学と各論の配点比率は、本試験においては71：29（Ⅰの問3、Ⅳを各論とみなして）、追試験においては64：36（Ⅲを各論とみなして）となっていて、大体において各論の占める比率は約3割というところである。この比率が適切なものであるか否かは、それぞれの立場によって意見の相違もあろうが、まずは妥当なところではなかろうか。

各論に偏り過ぎると往々にして暗記を強要する傾向を生じやすくなり、化学は暗記科目であるという印象を高校生に与えることとなり、望ましいことではない。もちろん基本的物質はきちん

と記憶しておく必要があることはいうまでもないが、大学の先生方が化学学習上の常識と考えている物質でも、発達途上にある高校生にとっては常識的物質でない場合が少なくなく、負担過重の傾向を生ずるおそれが強いのである。

また「理論化学は大学で教えるから、高校では各論についての豊かな知識と体験を与えて欲しい」という大学側の要望を耳にすることもある。たしかに大学進学者だけを対象にして化学教育を行なうのであれば、大学側の要望に添うことも可能であるかも知れない。しかし、過半数の非大学進学者をも含めた高校での化学教育は一応の完成教育としての役目も果さねばならない立場をもっていることも理解いただきたい。

以上のような観点から、各論の取り扱いについては、高校教育の現状を正しく認識したうえで、今後とも検討を願いたい。

2　範囲と程度、設問数等

本試験、追試験の範囲と程度について

(1) 化学Ⅰを越える範囲について

本試験Ⅳの周期表について、化学Ⅰでは第3周期までの扱いで、第4周期は化学Ⅰの範囲をこえているとの批判が強くうかがわれる。第4周期については、Caまでに止められたい。(但し、同族元素としてはⅠA、ⅡA、ⅢB、O族は、上下の関連で扱われてもよい。)

追試験Ⅲ－問2－36のように、Agのアンモニア錯イオンの扱いは、構造には関係なく、現象そのものをきかれているのではあるが、単にAgのみでなく、Cu、Zn、Fe……等の錯イオンに関するすべては、化学Ⅱの範囲である。

(2) 有機化合物の取り扱いについて

現在検定教科書として認められるものの内容が、鎖式炭化水素にわずかに、アルコール、アルデヒド、カルボン酸の付記程度のものから、芳香族化合物、高分子までを相当系統的に取り扱っているものまであり、まちまちである。現行の指導要領にも示されるように、炭素化合物の構造や反応は化学Ⅱで扱い、化学Ⅰでは各事項で扱う化合物の例として、その特徴を周期表との関連において、概括的に扱うように指示されている。これらの意味より、鎖式炭水化水素あたりで止められるのが望ましい。今後とも有機化合物の取り扱いについて特に配慮されたい。

本試験Ⅰ－問1－5のセルロース、ポリスチレンは高分子化合物の学習を必要とする分野で

ある。

追試験Ⅲ—問3の選択肢のクロロホルム、四塩化炭素は、メタン系置換体として問われる場合はゆるされるが、性質との関連は化学Ⅰを逸脱している。

(3) 出題の意図には賛成であるが、取りあげられている素材にはもう少し配慮がのぞまれる。

本試験Ⅰ—問3— 11 のヒ素、 15 のタングステン等は高校生としてはあまりふれていない素材である。

(4) 設問の文章は高校生レベルで作っていただきたい。

追試験Ⅱ—問1— 12 、 15 (詳細は3で)

また文章の読みとりを、より正確に、容易にするために図中に適当な指示(記入)が、本試験Ⅱ、追試験Ⅰのようになされているのは望ましい。

本試験Ⅲ—問2 (詳細は3で)

追試験Ⅰ—図1、A：硝酸銀水溶液
　　B：塩化ナトリウム水溶液
　　→混合　と付記しては。

(5) 実験学習をふまえての出題方針は基本的に賛成であるが、高校での実験の実態を理解しないと、問題のための問題例えば、追試験Ⅲ—問1のように、実際には高校で取り扱わぬ問題内容になりかねないと思われる。

本試験問題、追試験問題とも問題量、時間等においては適当であったと思われる。

3 出題方法

(1) 本試験問題の出題方法

問題Ⅰ—問1は化学の事項を文章に表わし、その記述が正しいか、誤りを含むかの二者択一の問題である。文章表現であるから化学の全範囲から出題できるという利点もあるのでこういう形式の問題には賛成である。しかし、54年度の問題部会からの指摘の通り、問題文の作り方で、できるだけ1つの要素から判断できるようにしてほしい(1対1対応)。要素がいくつか含まれていると(多対多対応)問題のどの部分が理解されていないのかもわからない。例えば「 4 デンプン、寒天、ショ糖は沸騰水に溶かすと、コロイド溶液になる。その理由は、これらがいずれも高分子化合物だからである」で、デンプン、寒天、ショ糖はコロイド溶液になる、デンプン、寒天、ショ糖はいずれも高分子化合物であると、互いに対応するので混乱をまねく。

問題Ⅰ—問2の 8 、 9 は硫化水素が水溶液中で2段階に電離することより、水溶液中のS^{2-}の濃度、及びHS^-の濃度の変化を平衡の移動と弱酸と強塩基とから考える問題である。2価の酸の2段階電離は電離式程度の扱いで平衡の移動までは扱わないのが現状である。さらに弱酸と強塩酸との反応については炭酸と水酸化ナトリウムの反応を扱う程度である。炭酸と同じように考えて解くにしても受験生にはかなりの無理がある。

問題Ⅰ—問3は元素と単体の区別を理解しているかを見る問題であるが、元素と単体について高校の教科書には例えば〔単体や化合物を構成している原子の種類のことを元素、同じ種類の原子からできている物質を単体〕。〔水素や酸素のように、もはや二種以上の純成分に分解できないものを単体、単体や化合物を構成している究極の成分を元素という〕となっている。元素と単体について、問題文にあるような使い方で区別をしていないのが現状であるが、このような基本的科学概念は正確に区別できるよう高校現場でも努力すべきである。

問題Ⅱは電池と電気分解とを組み合わせた問題である。表現も簡明であり、基礎学力を問うことができる問題であり、今後ともこの方向で努力をしてほしい。

問題Ⅲ—問2に0.500mol/ℓの水酸化ナトリウム溶液に0.500mol/ℓの塩酸を加えて、生成する熱量を求める実験の図があるが、この図の中に実験の操作的なものを書き加えた方が問題の意味がよくわかる。また、加えた塩酸の量と温度の関係を表わすグラフの解釈については、比熱・熱容量などの物理領域の知識が必要になってくる。化学領域以外のことは中学校で履修した程度におさえるよう今後とも配慮してほしい。

問題Ⅳ 101 ～ 110 の文は、下の周期表中の空欄□の元素について述べたものである。それぞれに最もよくあてはまる元素を選んで解答する問題のなかで「 110 この元素は、窒素およびリンとともに植物の三大栄養素の1つで、その化合物には肥料として用いられるものがある。」答えK、は周期表と関連づけた化学的特徴のある問題にしてほしい。

(2) 追試験問題の出題方法

問題Ⅰは法則や学説と関連のある実験を図示し、この法則や学説を発見・確立または提唱した人の名前を選び、さらに、その法則をもとに化学計算をするという問題である。確かに人名は自然科学の発達という意味で必要がある。しかし、受験生が単に人名や法則名を暗記することに傾くので、法則の内容及び自然観の移り変りを試すような問題になるよう努力してほしい。さらに人名については代表的なものにとどめてほしい。

問題Ⅱ—問1、次の各事項が(　)内の条件によって変化するとき①、(　)内の条件に関係なく一定のときは②と解答する問題のなかで「12 純粋な液体の蒸気圧（モル数）」は「一定温度で純粋な液体の飽和蒸気圧（液体のモル数）」というように 11 と同様に条件が明示されている方がわかりやすい。

問題Ⅱ—問2は文章表現の記述のうち正しいものに①、誤りを含むものに②と解答する問題のなかで「15 イオン結晶、分子結晶および共有結合性結晶のうち、1モルが何グラムであるかがきめられるのは分子結晶だけである。」の問題文の下線部は分子量がきめられるという意味に受け取られやすい。

問題Ⅱ—問4「CO_2（気体）、H_2O（液体）及びC_2H_5OH（液体）の生成熱はそれぞれ94.1Kcal/mol、68.3Kcal/molおよび66.2Kcal/molである。C_2H_5OH（液体）の1.00gの燃焼熱は何Kcalか。」とあるが、一般に燃焼熱はKcal/molで表わされるので「…、C_2H_5OH（液体）の1.00gが燃焼するときの熱量は何Kcalか。」とする方がよい。

問題Ⅲ—問3「化学実験に使用する物質には、取り扱い上あるいは保存上注意を必要とするものが多数ある。下のⒶ～Ⓣに示した物質のなかで 110 ～ 104 に記した配慮を必要とするものはどれか。該当するものを一つずつ選べ。」は20種類の物質から選んで解答する問題であるが、選択肢の数が多すぎる。また、選択肢の数を解答欄の数に合せたようにも見える。なお、20種類の物質は性質別に分類するなどの配慮が必要である。

4　そ　の　他

採点基準をもっと詳細に公表されたい。

受験生の自己採点の結果が、出願大学の選択に重大な影響を持つことはいうまでもない。それだけに自己採点は相当に高い信頼性を持つことが必要である。そのためにも、採点基準をもっと詳細に発表することが望まれる。受験生側の立場から考えて「採点基準をもっと詳細に発表したらどのような不都合があるのか」理解に苦しむところである。特に誤答に対して減点する場合、その減点方法によっては自己採点の結果に相当大きな誤差を生じることが考えられる。

採点基準を細部まで発表することについては、化学部会だけの決定ではどうにもならないであろうが、来年度からは是非前向きの姿勢で努力を願いたい。

(2)　教育研究団体の意見・評価

①　日本理科教育学会

1　出題範囲

出題範囲はほぼ適当と思われる。有機化合物の取り扱いも本年度のもののように大きい問題の一部に含めているのも1つのいき方であり、特に独立させなくてもよい。

2　問題の程度

全体としてあまり無理な問題はなく、無難である。小問数もほぼ適当であろう。

3　問題の形式

単純な記憶にたよる再生問題が比較的少く、かなりよく理解していないと解けないものが多いのはよい。計算問題の数も全体に対してほぼ適当であろう。

計算問題の解答の形式として、選択肢から選ばせるのもよいが、計算値を数字で出させる方式をもっと利用してもよい。

今回の本試験の問題Ⅳのようにアルファベッドを組み合せて答えさせる問題は形式としては面白いが、大文字しか使用できないので元素記号の表現にはやや抵抗を感じる。この形式の解答の適用についても今少し研究する必要があろう。

問題場面を設定して応用力をためす問題をもう少し取り入れられないか。

4　問題の内容

全体として内容的にもよく考えられている。しかし実験に関するものは工夫のあとは見られるが、正しい実験操作ができるか、実験の企画や準備ができるか、実験の手順を考えることができるか、

実験結果の処理や解釈ができるかなどを調べる問題は作成できないか、今後さらに検討してほしい。また個々の物質の性質に関する問題ももう少し出されてもよい。化学の知識理解を日常の問題に応用して考えるような問題も工夫されてよい。

本試験用問題Ⅰの問2は化学平衡の問題としてかなり工夫されている。ただこの種の問題として止むを得ないことではあるが、選択肢が少いのでまぐれ当たりの公算は増える。問3は元素と単体の定義に関するものであるが、最近の高校化学ではあまり厳密に扱っておらず、また内容としてもさほど重要なことではないのではないか。

問題Ⅲの問2もただグラフを選ばせるだけでなく、その理由も聞くような形にしたらどうだろうか。このままではまぐれ当たりの公算もかなりある。

追試験用問題Ⅲの問1のように選択肢の多いのはよいが、中には先ず選びそうもないものもいくつか含まれている。これも問題作成上の問題点であろう。

全体として追試験用の問題の方が本試験用の問題より易しいような印象を受ける。

② 日本理化学協会

1 はじめに

ここに記した意見は、日本理化学協会の全国都道府県各支部からのアンケートによる意見を集約し、さらに、日本理化学協会大学入試問題検討委員会によって検討したものである。

化学Ⅰの試験問題全体としては、適当であるとの意見が多いが、各個所については、次のような問題点がある。

2 出題範囲について

(1) Ⅰの問2のb(8)、C(9)

$H_2S + H_2O \rightleftarrows H_3O^+ + HS^-$　　$HS^- + H_2O \rightleftarrows H_3O^+ + S^{2-}$

の2段階電離において、第1段階の電離定数が第2段階の電離定数に比較して非常に大きいことが理解されていないと正解がでない。ところが、化学Ⅰの範囲では、第1段階、第2段階の電離

の定量的な扱いには、触れないことが原則となっていることから、化学Ⅰの範囲を越えた問題といえる。

(2) Ⅰの問1の5

セルロース、ポリエチレン、ポリスチレンの構造は、化学Ⅱの範囲の内容であり、とくに、ポリスチレンは、化学Ⅰだけを学習した生徒の多くは、はじめて聞く物質名である。

(3) Ⅰの問1の4

デンプン、寒天、ショ糖に関するコロイド溶液についての設問は問題ないが、高分子化合物かどうかの区別については、高分子化合物が化学Ⅱで学習することから、共通第1次学力試験に、化学Ⅱの学習が必要であるという誤解を招くおそれがある。

3 出題分野の割合について

化学Ⅰの全体から、幅広く出題されてはいるが、次のようにやや片寄りがあるともいえる。

化学Ⅰで学習する内容は、次の4分野から成り立っている。

(1) 化学量と化学式（物質の構造）　(2) 物質の状態

(3) 化学反応（物質の反応）　(4) 物質の性質

このうち、(3)の「化学反応」には、熱化学、化学平衡、酸と塩基の反応、酸化還元反応（電気化学も含む）が含まれているが、Ⅰの問2（化学平衡）、Ⅱ（酸化還元）、Ⅲ（酸と塩基の反応、熱化学）がこの分野に属し、配点で53点をしめている。このことから、(3)の「化学反応」の比重がかなり大きいといえる。

4 その他の問題点

(1) Ⅰの問1、問3、Ⅱの問1のように、二者択一の問題(○×式問題)が多過ぎる。(解答数42中17)

(2) Ⅲの問2のグラフは、D社の教科書に、類似のグラフが掲載されており、他の教科書にはないことから、D社の教科書を使用した学校に有利になっていると思われる。

(3) Ⅲの問2の配点が8となっているが、グラフの選び方によって、配点に段階差（例えば6点、4点など）があるならばよいが、8点か0点ならば、その正誤の影響が大き過ぎる。

5　来年度への希望

(1)　有機化合物（炭素化合物）に関する出題は、結構なことであるが、この分野は、化学Ⅰと Ⅱにわたっていて、教科書によって、その内容に大きな差があるため、その出題内容は慎重に検討されたい。そして、化学Ⅰでは、有機化合物の基本事項しか学習していないことを原則とした問題内容にされたい。

(2)　どのような減点法がとられているか不明であるが、いずれの減点法の場合でも正解の得点に影響があり、受験生に無用の不安をもたせ、また、他の教科では採られていないことなどから、減点法は是非やめて載きたい。

(3)　高校で学習している化学の具体的な内容、すなわち、学習指導要領の内容及び使用されている教科書の内容を、十分調査・検討の上出題されたい。

6　追試験の問題点

(1)　Ⅱの問１の 13 の気体の溶解度では、溶解質量と解釈すれば、圧力に比例することになり、溶解体積と解釈すれば、圧力に関係なく一定となる。

(2)　Ⅲの問３の 102 で、クロロホルム、ジエチルエーテルのいずれを選ぶかは、化学Ⅰの学習内容からは無理である。

(3)　問題作成部会の見解

1　問題作成の方針

(1)　「化学Ⅰ」の全体から偏ることなく出題し、しかも設問数が多くなり過ぎないことに留意した。

(2)　計算問題は、解答に時間がかかり過ぎることがないよう、数値を工夫し、また設問数もその意味で制限した。

(3)　実験を行い、物質そのものに接することは、化学の学習における最も重要な基本であるから、可能な限りその精神を盛り込むように努力した。高等学校における化学の授業において実験観察

が重視されていない傾向があるからといって、その現状に配慮することはしなかった。

(4)　二者択一の問題については、多少の批判はあるものの強い賛成意見もある。この出題形式は、化学の基本事項についての理解や論理を問うに適しているので、本年も躊躇することなく採用した。また、でたらめ解答を抑制する意味で、二者択一問題には昨年と同様誤答は減点するという採点方法を採用した。

2　各問題の出題意図と解答結果

(1)　本　試　験

Ⅰ　**問1** では主として、他の設問に含まれなかった内容を補足する目的で、広い範囲から題材を選び、単に知識を試すのではなく基本的な事項についての理解度をみることを問題作成に当たって留意した。

正答率は 1 75%、 2 62%、 3 93%、 4 58%、 5 83%、 6 60%であり、 2 、 4 、 6 の正答率は、二者択一の設問としては極めて低い。 2 の正答率が低率であることは、沸点上昇の原因についての理解の不足を意味し、 6 では、全体としての上位の成績の者についても正答率が低く、全般的に実験経験の不足を如実に示している。

Ⅰ　**問2** は、化学平衡、電離、中和などの基本概念を問う総合的な問題で、思考力，応用力を試す意図で作成した。４問正答は３％、３問正答でも15％と正答率は極めて低く、特に 8 、 9 が低くなっている。これは受験生が応用問題に極めて弱いことを示すものである。

Ⅰ　**問3** は、化学における最も本質的な概念である元素概念が正しく把握されているかどうかをみる目的で、元素と単体の区別を問う形で出題した。

５問正解はわずかに25％で、これを個々にみると、正答率が最も高いのは 15 の74％、最低は 11 の60％であったのは意外である。化学を学びながら、その根本概念の一つである元素の理解がなおざりにされているのは一考を要する。

Ⅱは、電池及び電気分解の基本的事項を、たがいに関連させて理解しているかどうかを試した問題である。

16 、 17 、 18 の正答率がそれぞれ74％、88％、91％と高いのに対し、他の３問の正答率は非常に低く、二者択一の問題であるのに 20 、 21 の正答率は50％を大幅に下回っている。特に 16 ～ 19 の４問に正答した者（31％）のうち2/3が 20 、 21 の両方とも誤っているの

は注目すべきである。電極反応を理解したうえで質量の増減を判断するというような、筋道だった思考が受験生にとって苦手であることが、ここにも明瞭に現れている。上記問1の定性的事項に対する理解が不十分であるにもかかわらず、計算問題 22 の正答率は46%もあった。これは、計算問題の訓練が物事の本質を理解するうえに役立たず、ただ計算するだけに止まっていることを示すものであろう。なお、電流の方向を逆にとりながら、他の5問をすべて正答している者が、正位グループに2%以上もあるのは理解に苦しむ。

Ⅲは、中和反応に関連して、熱化学方程式の完成に実験的要素を加味して出題した。**問2**は、論理的思考によって実験経過を想定し正しいグラフを選択する問題であるが、実験経験を通じて育成された考察力が有利に働くであろう。

問1の正答率は90%以上で問題はないが、**問2**は19%と著しく低い。未経験の事象でも、論理的思考に基いて正しく判断できる能力の養成が必要である。なお**問2**の⑦の解答は正答よりも多く21%であり、④、⑨はそれぞれ18%、14%であった。**問3**は発生した熱量と、それに基いて中和熱を求める簡単な計算問題であるが、正答率は 30 が50% 31 が35%と意外に低かった。

問4は、溶液を調製するときには必ず出くわす簡単な計算であるが、この正答率も50%と低率であった。

Ⅳは、周期表中の元素の位置とその特性との関係、および主な元素についての常識を問うたものである。また、元素記号を正しく記憶することは化学の学習の第一歩であるのでそれを書かせるような出題形式を採用した。

101 ～ 108 の正答率は、それぞれ77、69、78、82、88、58、67、78%と高いのに対し、109 は36%, 110 は48%とかなり低い。

109 ではFeと答えたものが44%もあり、 110 ではSと答えたものが23%にも及ぶ。また、101 ～ 108 では、総点での最下位グループの正答率が目立つて低いのに対し、109 と 110 では、最上位から最下位まで、正答率が緩傾斜で下っているのが特徴的である。このことから、上位のものでも、日常生活に密着した常識に乏しいことが指摘できる。

(2) 追 試 験

Ⅰは、化学における最も基本的な法則・学説が、単なる暗記でなく、内容について正しく理解されているかどうかを試すため、検証実験・人名・化学計算を関連させて問うたものであり、化

学史を問う意図はない。

1 の正答は91%と非常に高率であるが、人名についての 4 、 10 はいずれも23%で、アレニウスとファラデー、アボガドロとドルトンの混同がそれぞれ目立った。前者については電離の電気分解の区別がつかないことを示すものである。また、 9 については、気体反応の法則と答えたものが正答よりも多く、化学反応式の内容についての理解の不確かさがはっきり現れている。

Ⅱ **問1**は、物質の性質や状態がどのような因子によって左右されるか、についての理解度をみる意図で出題した。4問中、正答率の最も高かったのは 11 の85%である。

14 については、他の3問の正答者中で、この設問だけの誤答が正答よりも多く、その程度は下位の成績の者で特に著しい。この設問は、水素イオン濃度が温度で変わるかどうかという知識を問うものではなく、弱酸の解離も化学平衡であるから、当然温度によって支配されるという思考力をみるものである。

Ⅱ **問2**は、本試験のⅠ、**問1**と同じ主旨の設問である。 15 の正答率は90%を超えており、モル概念の定着していることがわかる。 18 も、中位以下のグループについて、誤答が正答を大幅に上回っている。これは、前述の 14 と同様、思考力を要求されるためであろうか。それとも、沸点上昇や凝固点降下が難解なためであろうか。

Ⅱ **問3**は、反応の本質を把握しているかどうかをみるため、化学反応式を示して、それがどの型の反応に分類されるかを選ばせた。正答率が最も高かったのは 19 の88%であり、最低は 21 の37%である。中位以下のグループで、この答に電離を選んだ者が正答者の4倍もあるのは明かに異常である。 22 の正答⑦の「いずれでもない」は選びにくいであろうと予想したが、正答率は74%と高かった。

Ⅱ **問4**は、熱化学の典形的な問題である。この設問で1g当たりの燃焼熱を答えさせたのは、分子量の計算をさせるためである。その正答率は42%であったが、1モル当たりの値を選んだものが19%あった。

Ⅲ **問1**は、反応性に乏しい主成分中に含まれる反応性に富む不純物を除去する方法を通して、各物質の化学的性質と実験操作についての理解度を問うたものである。その正答率は 26 — 27 、 28 — 29 、 30 — 31 、 32 — 33 についてそれぞれ8、51、17、8%と極めて低く、ここにも実験軽視の結果が明瞭に現れている。特にベンゼン中の酢酸を除くのにエタノールを選んだものが、上位グループでも正答者の1.5倍もあったり、ガス洗浄びんや分液漏斗を用い

るべきところでビュレットを選んだ者が目立って多いことなどは、実験について全く弱いことを暴露している。

Ⅲ　**問2**は、実験の設問形式をとってはいるものの、物質の化学的性質を直接問うものであったためか、正答率は 34 、 35 、 36 、 37 についてそれぞれ39、55、73、35％で、**問1**よりも高率であった。ただし、 34 で NaCl と Na_2SO_4 を選んだ者の合計が34％にも上るのは理解に苦しむ。

Ⅲ　**問3**は、危険薬品の取り扱い法を通じて物質の性質を問う形式で出題した。授業中に必らず実験しているはずのナトリウムの正答率も65％と意外に低く、他の3問はいずれも40％台であった。 101 について、黄リンや赤リンと答えた者が多いのは、発火性だけに着目したためであろう。また、 102 は引火性ということだけでジエチルエーテルを選びそうなものなのに、クロロホルムを選んだ者が正答より多数であった。

104 ではⓀやⓂを選んだ者が多いが、これらは、正答の炭化カルシウムを知らないばかりでなく、塩化カルシウムや酸化カルシウムも知らない証拠である。この設問で、過マンガン酸カリウムと答えた者が少なくないのは理解しにくい。

なお、追試験の受験者はわずかに130名であるから、その結果について、あまり厳密な評価はできないことを申し添えておく。

3　問題に対する反響

高等学校側からの批判の多くは、問題が化学Ⅰの範囲外ではないかという意見であり、本試験の 4 と 5 、Ⅰ・**問2**などがその対象である。しかし、高分子については化学Ⅰのすべての教科書に記載があり、 4 の出題の重点はむしろコロイドにあるのであるし、 5 については、その正答率が83％と高いことから、問題はないと考える。

本試験Ⅰ　**問2**の硫化水素の2段解離は、前項で述べたように、知識ではなくて思考力、応用力を試すのが目的であるので、あえてどの教科書でも取り扱っていない H_2S を題材として選んだのである。炭酸の2段解離は化学Ⅰで扱われており、H_2S が弱酸であることは問題に記載されているのであるから、H_2S の解離の反応式が与えられれば、既知の知識を応用して解答を導くことができるはずである。

本試験のⅠ　**問3**について、タングステンは高等学校では扱わない元素であるという批判がある

が、結果をみると、この設問の正答率が5問中最高である。**問3**は、元素・単体の意味を正しく理解しておれば、例にあげた元素そのものを習ったかどうかに関係なく答えられるものである。この場合は「融点が高い」という説明句が単体と答えることを助けたのではなかろうか。

本試験Ⅲ　**問2**の熱量計の実験が、一部の教科書だけで取り扱われているので不公平にならないかという批判があるが、熱量計を用いた比熱の測定実験は中学校で詳しく取り扱われている事項であるから、この批判は当たらない。さらに、本問題の想定は完全な断熱系であり、教科書の例はいずれも放熱系であって、グラフの性格が両者で全く異なっている。

追試験Ⅱ　**問3**で、選択肢の数が20もあるのは多すぎるという批判があるが、系統的に配列してあるのであるから、それほど問題にはならないのではなかろうか。

4　その　他

化学Ⅰの合計点は典型的な正規分布をなしている。これは、全範囲にわたって出題され、かつ難易度を異にする問題が適当に組み合わされていた結果であろう。しかし、高等学校の達成度をみるという主旨から言えば、本試験の 3 や追試験の 36 のような易しすぎる問題は、かえって不適当であるのかもしれない。

問題の文章については、内容を正確に表現し、かつ素直で読み易いことをモットーとして慎重に検討したが、うっかりすると誤読するような文章が皆無ではなかった。今後も文章表現には一層の注意を払うよう努力したい。

生　　物

(1)　高等学校教科担当教員の意見・評価

1　構 成 と 内 容

(1)　本試験問題の構成と内容

問題Ⅰについて

生物の生活環をもとにして生殖に関する基礎知識を問う出題である。問題の構成は、シダ植物と被子植物の生活環、シダ植物と被子植物の配偶体の比較、被子植物の重複受精、動物の配偶子形成などについて問い、最後に動物の単為発生にまで発展させている。動物と植物の生殖を関連させていろいろな角度から総合的に取り扱われており、構成・内容共に全体として妥当である。

問題Ⅱについて

多岐にわたる遺伝という内容を、不完全優性、染色体の組み合わせ、性決定と伴性遺伝及び連鎖に関する基礎的知識と思考力を問う出題となっている。問3と問4の染色体の組み合わせの問題は思考力を試すのに適切であり、問9は連鎖にまで発展させる配慮がなされている。しかし、問1と問2は記憶に頼る傾向の問題であり、また、問5～問8は性染色体に関する問題が連続している。これらの点は構成上で少し工夫が必要である。内容は妥当である。

問題Ⅲについて

出題されていない分野からピックアップした問題の集まりである。内容は植物ホルモンであるオーキシンの性質、光合成の明反応の働き、植物の窒素源の利用についての発問である。幅広い偏りのない範囲からの出題にするためには、このような合成問題は必要であるが、このために逆にまとまりを欠いている。

問題Ⅳについて

ヒトの内臓諸器官（心臓、腎臓、肝臓、すい臓）を柱にして、発生、組織、神経、呼吸、ホルモン、排出、消化等の基礎的事項を問う出題である。広い範囲の知識を問いながらよくまとまった構成で、それぞれの小問に流れがあって内容も妥当である。

問題Ⅴについて

哺乳類のヘモグロビンをとりあげて、存在場所、成分、酸素解離曲線、さらに発展させて胎児のヘモグロビンの酸素解離曲線について出題している。問1～問3は主に知識的なものを、問4～問6は思考力を試すように配慮がなされている。しかし、構成面では問1～問3を整理して無脊椎動物のヘモシアニン、血液全体からの出題が加味されればさらに幅広い問題になったであろう。

全体として

一つの分野について深く追求していく問題もあれば、多くの分野にまたがった問題もあり、出題についてはよく考えられていると思う。全体として問題の構成・内容ともに適切である。

(2)　追試験問題の構成と内容

問題Ⅰについて

植物の体細胞分裂の基礎的学習内容を通して、染色体、ＤＮＡ及び配偶子形成まで広範囲にわたって出題されている。特に問6のように実験の基礎事項については高校教育の面から大変望ましいことであり、また必要なことでもある。全体として構成・内容共に妥当である。

問題Ⅱについて

呼吸から光合成、消化、刺激の伝導にいたる内容で、基礎的事項が広範囲にわたって扱われ、構成・内容共におおむね妥当と考えられるが、各設問間の関連性が明確でなく、特に問2～問5は他のものとのつながりが乏しく、単純な語句の説明文になっているように思われる。各設問の配列にも工夫がほしい。

問題Ⅲについて

すべての教科書で扱われている重複受精に関する基礎的な出題で、被子植物のめしべの断面図をもとにして、その各部の名称、生殖細胞の形成、受精、被子植物の胚のうとコケ植物の配偶体、精核とシダ植物の精子の比較にまで発展させている。暗記だけでなく、思考させる設問の比重が大きく、構成・内容共に大変よい出題である。さらに、核相、裸子植物との対比、コケ植物の受精とその進化上の相違点などの発問に発展させると、内容面で広がりをもった問題になると思われる。

問題Ⅳについて

身近な動物の実験結果からホルモンの相互作用を探求させる内容と構成になっており、思考

させるねらいの問題としては大変よいものと思われる。しかし、設問の中には非常に簡単なものがあり、実験をぬきにしても答が出せる内容のものがある。刺激ホルモンと甲状腺ホルモンの相互作用を総合的に考えさせる内容と構成が加味され、設問に工夫がなされれば一層幅広い深みのある問題になると思われる。

全体として

基礎知識に関する問題と探求の過程を思考させる問題とのバランスがよくとれており、内容も広い範囲におよび、高校での学習内容からの出題で、構成・内容共に妥当である。本試験よりもむしろ適切な内容のように思われる。

2　範囲と程度、設問数等

(1)　本試験問題の範囲と程度、設問数等

問題Ⅰについて

全体として、生物Ⅰの教科書の学習内容に取り入れられている範囲から、片寄りもなく、広範囲からの出題で、範囲・設問数等共に妥当である。造精器の図は教科書にはあるが盲点をつかれた感じがする。程度については少し易しいと思われる設問もあるが正答率から判断しておおむね適切である。

問題Ⅱについて

すべての受験生が学習している遺伝の基礎的学習内容が網羅されており、範囲・程度共に妥当である。

問題Ⅲについて

生物Ⅰの学習内容の範囲であるけれど、窒素同化作用は生物Ⅱで扱われるようになってきているし、藍藻(らんそう)の窒素同化の取り扱いは教科書により記載がまちまちになっているので配慮してほしい。

問題Ⅳについて

発生、ホルモン、器官の作用等の範囲からうまく工夫された出題であり、程度も各設問間に難易の差が少ないことが正答率から判断でき、範囲・程度共に妥当である。

問題Ⅴについて

問4の設問はもう少し掘り下げた内容でもよいのではないか。たとえば二酸化炭素の量を単

に数値で示すのではなく、選択肢に肺胞、組織などにおける二酸化炭素の状態を示して答えさせる方が思考性の高い問題となるものと思われる。問6は教科書の学習内容を離れ、程度も高く、難しいことが正答率の低さからもわかり、この問題にまで発展できるか疑問である。

全体として

範囲・程度共に疑問と思われる設問も含まれているが、出題範囲・程度・設問数等に細かい配慮がなされおおむね妥当である。

(2)　追試験の範囲と程度、設問数等

問題Ⅰについて

ほとんどすべての教科書に記載されている内容で、生物Ⅰの基礎知識、実験、思考させる設問等いろいろ細かい配慮がなされ、範囲・程度共に妥当である。ただし、ＤＮＡの複製については教科書によりその扱いに差があるので配慮してほしい。問6の設問は範囲が実験に及び、実験を大切にするという意味から適切である。

問題Ⅱについて

広い分野からの出題で、受験生の偏りのない学習を見るには、大変よい出題形式だと思われる。しかし、その反面問題が断片的になった感じがする。

問題Ⅲについて

生殖について全体的な理解を問うのには適切な範囲である。被子植物の重複受精から、生殖細胞の形成、コケ植物、シダ植物の範囲にまで広げて扱われ、その内容が一般に高校で教示されている範囲にとどめられている。程度については問2、問5の正答率が少し低いように思われるが全体的にみれば妥当である。特に問2の核分裂回数を問う設問は、受験生のしっかりした力を試すのに適した問題である。

問題Ⅳについて

問題のねらいは大変よいと思われる。しかし、設問によっては選択肢があまりにも常識的であること、甲状腺ホルモンが一般的なものであることから簡単になってしまい、探求させる意図が十分にかなえられなかったのではないかと思われる。範囲・主旨・設問数については妥当である。

全体として

受験生の人数の関係で平均点は高くなっているが、本試験よりむずかしいと思われ、知識を

試すものと探求の過程を思考させる設問とのバランスがよくとれ、範囲・程度・設問数共に妥当性が高く本試験よりむしろ適切なものと感じられる。今後も、この程度の出題が共通第1次学力試験の意義を支えるものであるから維持してもらいたい。

3　出題方法（試験時間、配点、問題文の表記、解答方法）

(1)　本試験問題の出題方法

問題Ⅰについて

ア　問1において図eはもう少し詳細にした方が望ましく、図fは造卵器ということが明確にわかるような工夫が必要である。また図hの精核は小さく図が不鮮明である。

イ　図Jから図bへのつながりは、卵（受精卵）から図bにつながるのが一般的のように思われる。

ウ　問1の解答方法で、選択肢のhを消却すれば、答が出てしまうのでhをぬいたものを1～2個入れるように工夫した方が望ましい。

エ　問5でイモリを扱うのであれば、人工単為発生のことも考えて、問題文に『自然界では』という語句を挿入した方が適切である。

問題Ⅱについて

ア　問1、問2は単純であり、これをもとにして思考させるような解答方法が望ましい。

イ　問5ではZO型を除いてあるが、すべての教科書で性決定を4つの型で扱っているので、ZO型を選択肢の中に加えた方が適切である。

ウ　問2の④は子葉の色だけの表現でよいものと思われる。

エ　性に関しての配点が多く、問7と問8、問1と問2の配点に差をつけた意味がわからない。また、問9の配点は少ないように思われる。

問題Ⅲについて

ア　問2の①の、『光の強さに比例する』を、『光の強さに左右される』に、同じく④の、『環元されたＮＡＤＰ』を、『環元されたＮＡＤＰH_2』にした方が適切である。

イ　問3の選択肢では、藍藻類をあげているが、アゾトバクターかクロストリジウムの方が一般的で望ましい。

ウ　自己採点が正確に出来るように、1個だけ正解の場合の配点がどうなっているかを示して

ほしい。ここでは2つ正解でなくとも点をあたえた方が望ましい。

問題Ⅳについて

ア　二者択一では偶然性が高すぎるので工夫が必要であり、特に語群Bの選択肢の数を増加させることが望ましい。

イ　配点基準の示し方が不親切であり、この基準では自己採点ができないので詳細な基準を示す必要がある。

問題Ⅴについて

ア　問4の選択肢が問5に比較して非常に少ない。選択肢の表現を変えると共にその数を増加させる必要がある。

イ　問6については胎児の環境についての説明が不足のようである。

ウ　問6のグラフについては母体のグラフを問4の酸素解離曲線とほぼ同じにして、胎児の曲線を、①、②、③、④で記入しておくと1つの図ですみ、すっきりとする。また生徒も問題の主旨を把握しやすいと思われる。

エ　配点については、問1～問3が大きすぎるので、他にまわした方が良い。

全体として

ア　試験時間は適切である。

イ　配点基準を詳細に示してほしい。また同じような程度の設問なら配点が同じになるように工夫してほしい。

ウ　選択肢の少ないものをなくし、最低5つぐらいを基準にしてほしい。

エ　解答方法はわかりやすく妥当である。

(2)　追試験問題の出題方法

問題Ⅰについて

ア　問6の酢酸カーミンは、高校では最もよく使用されていると思うが、それは染色と固定とを兼ねて使用されていることが多いのではないだろうか。

イ　問6の設問文中に、『三通りの処理』と、あるが『三段階の処理』とした方がよいのではないか。

ウ　問5の解答で、1個正解の場合の配点基準を示してほしい。

問題Ⅱについて

ア　問１の設問文中に、「二酸化炭素と水素原子に分解される」、「酸素にまで運ばれて水となる」、「効率よく 11 がつくられる」、とあるが、ここの所はもっと表現に親切な説明がほしい。

イ　問２の選択肢の表現が適切でない。

ウ　問５は①を正解にした受験生が多い事から、①と④の区別が曖昧になっているので、問題文の表現を工夫してほしい。

エ　問６の設問文中の、「ペプシンによってペプチドに」は、「ペプシンによってペプトンに」の方が一般的に教科書で扱われている表現である。

オ　配点基準が明確で大変よい。

問題Ⅲについて

ア　問４の選択肢は具体的に植物名をあげるとさらにつっこんだ設問になったと思われる。

イ　問５の選択肢 31 中にある造卵器は配偶体の一部でありまぎらわしい語句であるため他の語句にすべきである。

問題Ⅳについて

ア　問５の設問文で、「若いハツカネズミの雄に」とあるが、甲状腺ホルモンが雌雄により作用が異なることを問うのでなければ、ここの表現は、「若いハツカネズミ」だけの方がまぎらわしくなく適切である。

イ　問３の出題のねらいは良いが、発問の意味がとらえにくいのでもう少しわかりやすい説明がほしい。

全体として

ア　試験問題は適切である。

イ　採点基準はできるだけ詳細に示し自己採点ができるようにしてほしい。

ウ　解答方法が明確で大変よい。

4　そ　の　他

(1)　高等学校生物Ⅰの指導内容から逸脱した高度な問題や難問・奇問はなく、適切であった。今後もこの程度の内容を維持してほしい。

(2)　受験生が生命に対する基本的な考え方や基礎的な知識を身につけているかを判定できるような問題にしてほしい。

(3)　コンピューター処理の関係で知識偏重の問題になりがちと思うが、探求の過程を重視した実験・観察に関する問題や理科的思考力が試されるような問題ができるだけ多くなるように配慮してほしい。

(4)　自己採点により進路を決定するのであるから枝問の配点や採点基準を詳細に示してほしい。

(5)　本試験と追試験の出題基準がそろうように配慮してほしい。（問題数、設問数、範囲、問題の内容とその程度、配点等）

(6)　理科全体の中で、選択した科目によって不平等が生じないように配慮してほしい。

(2)　教育研究団体の意見・評価

①　日本理科教育学会

1　本試験について

生物Ⅰの基本的な内容について、ひととおり学習をすませてある生徒にとっては平易な出題で、学習の到達度をみようとする共通１次テストの主旨からみれば穏当な出題であるといえる。ただ、全体に知識を重点とする問題が多く、思考を要する問題も、どちらかというと直観的に答えてしまいがちな内容で、理科教育の目標である探求の過程や、原理を応用する能力などに関する問題が少なく、他の理科の科目に比較してやや程度が低いのではないかと考えられる点などについてものたりなさを感ずる。昨年に較べても、実験に関するものを欠き、資料を対照させて考える形式のものがないので、受験生は取り組み易かったものと判断され、平均点の上昇の原因になったと考えられる。

Ⅰについては被子植物とシダ植物の生活史の各期の図がさまざまな基準で書いてあること、図自体も丁寧なものと雑なものがあって、全国的規模のテストとしてはもう少し完成度の高い図がほしい気がする。ａやｆは教科書にみられないか、または違った書き方をしているという点で、もう少し配慮がほしい。問４の花粉四分子の形成を、ただ動物で相当する過程に対応させるのはやや疑問を感ずる。

Ⅱは内容的には問題がないように思われるが、問６のＸＯ型の例として、トノサマバッタを学習し

ていない受験生に、他の例から判断させるような出題がよいかということ、及び、直接解答に関係はないが、ニワトリがZW型としていない教科書あるいは辞典などがまだ残っていて、多少の問い合わせがあったことなどが問題点か。この内容では多少応用力をみるような出題がほしい。問1、問2の設問も予備テスト的で選択肢が少ない気がする。問7、問8程度の思考的操作はすべてにほしいと思う。

Ⅲの問題は正しい知識と判断力を求めたものとしてうなづけるが、問3のある種の藍藻や、細菌のように特殊な生物例に関する正誤判断は、問題の性格としてやや不満である。この種の問題では正しい知識より、正しい概念や定義を聞くような設問がほしい。

Ⅳはいろいろな知識を組み合わせた総合問題で、出題内容の偏りをなくす意味で出題されたものであると思うが、その意味ではやや難点はあったにせよ、前年度の問1の方がおもしろかった。配点がいろいろになっているが、穴埋めの用語間で文の流れの点から脈絡のあるもの、ないものがあり、機械的に採点するのは合理的でない気もする。

Vの問1～3は全く予備知識を問う問題で、あまりに簡単すぎる。問4以降は今回の出題中、もっとも意義のあるものであろうが、問5で、ヘモグロビンに結合していた酵素のおよそ何％というところが、選択肢からのヒントでわかるという形式で、ある意味で受験慣れした生徒に利したところがあるかもしれない。問6ぐらいの問題はもう少し多くてもよいと思うが、受験生は酸素圧の低いところで、酸素とヘモグロビンの結合力が高まる③を正解にしたくなるかもしれない。考え方としてはおもしろいし、酸素分圧からみてきわどいところで変化しているので、考えすぎた生徒に不利だったというところはないだろうか。

始めに指摘したように、理科としての生物は、単に知識だけの学力をみるような学習を現場では不十分とみていること、もう少し応用力をみることが大学進学者の素質からみて要求されることなどを考慮してほしい。また、内容は異なるが、前年と同じ発生・ホルモン・血液などの範囲がやや頻出事項的印象を与えていること、高校生物Ⅰでもっとも重視している物質交代の分野がやや軽視されているのではないかといったような点が指摘される。

2　追試験について

本試験と同様に知識問題がやや多い気がするが、実験・観察に関する出題が含まれていること、資料から判断する出題がなされていることなど、前年の水準に近く、あるいはこの方が点が少しとりにくかったかも知れない。

Ⅰは細胞分裂の図を基礎としてなかなかよい点をついた小問が含まれているように思う。問3～5は良問の部類ではないか。

Ⅱは総合問題で、本試験のⅣに相当すると考えられるが、一つ一つの小問の穴埋めの用語間の関連が高く、満点とそれ以外で本質的にはかなり差があると判断され、個々の配点に考慮する必要があると考えられる。問2の選択肢のゼロ点など生物の学習に出て来ないもっともらしい用語を入れるのはあまり感心しない。

ⅢもⅠと同じく、図を基礎とした問題で基本的知識を聞いているが、生活史でコケ植物は、シダ植物ほど扱かわれていない点、問4～5が少し教科書によって偏った結果になると考えられる。また、被子植物の図を中心に聞いておいて、被子植物を出すのは、図の問題の性格から不均衡な感じを受ける。

Ⅳは、はじめにあげたような理由から、共通第1次学力試験に加えてほしい良問であると思う。

実験の意義に関する出題は、なかなかむずかしいと思うが、是非研究してほしいところである。

本試験・追試験を含めて、生物の学習からみれば、内容や程度は妥当である。出題の方法や、思考的操作を伴う出題を研究してほしいということ、また他の科目にくらべてやさしいという印象を与えすぎはしないかという点などについて、一応の検討を要望したい。

②　日本生物教育会

昨年と同様に、問題内容の適否、程度、生物Ⅰの範囲内かどうかなどの視点から検討した。また、採用教科書により、有利・不利がないかも調べてみた。

1　本試験について

Ⅰ　生　活　史

問1　aのつぼみの図はわかりにくかったかもしれないが、ある程度常識でわかるだろう。シダの胞子の形は、bのシダ植物の胞子と合わせてあるのか。シダの胞子の形にこれを選んだのはどういうわけか。gはカキの種子だが、aの花は別もの。そろえたほうがよいのではないか。

問２～４　無　難

問５　問４と関連させたのかもしれないが、他の問題と比べて異質。習っていれば易しいが、知らない生徒は全くわからない。

全体として、やさしい問題であった。

Ⅱ　遺　　伝

問１～２　無　難

問３　高校生物では、相同染色体にアルファベットをつけることは、あまりやらないのではないか。A、a、B、b……の記号は、遺伝子記号として使う。

問４　小文字（a、b、c）が１つ以上はいるもの（例 AaBBCc など）にしたほうが、よかったのではないか（AABBCC では、単純、やさしすぎる、おもしろ味がないなど）。

「……AABBCC であるものは全個体数の何分の１になるか。」…「理論的には」ということばを入れたほうがよい。

問５　選択肢に、ＺＯ型をなぜ入れないのか。

問６　高校生物で、トノサマバッタの性染色体の型を知っていなければならないか――重箱の隅をつつくような問題だ。ただし、授業で教えている先生もあり、教え方による。

問７～９　無　難

全体として、遺伝の問題は、もっと思考させる問題が必要ではないか。ごく初歩的な問題ばかりでやさしすぎる。ただし、やさしくてよいという意見もある。

Ⅲ

問１　無　難

問２　ＮＡＤＰが載っていない教科書がある（本文中に載っている４社、欄外３社、載っていない４社）。

問３　無　難

全体として、良い問題と思う。

Ⅳ　内臓の発生と機能

○暗　記　的

○図があれば答えやすい。棒暗記的で良問とはいえない。

○いわゆる、典型的な生物の問題という感じ。

○グルカゴン、アセチルコリンの載っていない教科書が若干ある。選択肢にこれらの用語を入れ

るのは適切かという少数意見もある。

○丸暗記的・博物的でなく、また思考力を問う、親切な良問を望む。

Ⅴ　ヘモグロビン

問１　中学程度でやさしすぎる。

問２～３　やさしい。

問４　無　難

問５　よい問題である。

問６　習っていなくても、考えればできるよい問題である。

全体的に昨年よりやさしい。普通科以外の生徒も受けることを考えて、平均が60点くらいになる問題がよい。

2　追試験について

Ⅰ　植物の細胞分裂

問１　やさしい。

問２　厳密に言えば、この設問では答えられないはず。図ｄで判断させるのは不適当。

この設問は、例えば、「この植物の根端の分裂組織の細胞の染色体数はいくらか」とでもしたらよい。

問３～５　無　難

問６　カッコ内の $1_{N}HCl$ は不必要ではないか。Ｎを小さく書くのはよくないのでは。１規定(1Ｎ）塩酸、１規定（Ｎ）塩酸のように表示したら。

Ⅱ

問１　解糖は解糖系とまぎらわしい。筋肉などにおける解糖とか、あるいは解糖という語を用いないでアルコール発酵など他の無気呼吸の用語に変える方がよかろう。

問２　無　難

問３　本試験の問題と類似性のある問題は、できるだけ避けたい。追試の 14 は、本試の 41 と同じ。

問４～７　無　難

Ⅲ　被子植物の受精

問１～２　無　難

問３　良い問題である。

問４～５　無　難

Ⅳ　オタマジャクシの変態とホルモン

良い問題である。Ⅳのような問題を、本試験にも出題してほしかった。

追試験では、本試験とダブルような問題または非常によく似た問題は避けてほしい。追試験で受験した方が有利という印象を一般に与えるのは好ましくないであろう。

(3)　問題作成部会の見解

1　問題作成の方針

当部会では昭和52年度の試行テストの結果、昭和54年度の第１回共通第１次学力試験（本試験）の結果を十分に考慮し、次の諸点に留意して問題の作成に当たった。(1)　昭和54年度同様、60点程度の平均点が得られることを目標とする。(2)　生物Ⅰの３大項目である‘物質交代とエネルギー交代’、‘恒常性と調節’、‘生命の連続性’のすべてにわたって出題する。(3)　基本的事項を十分に理解しているかどうかを問うことに焦点を絞り、難問・奇問はさける。(4)　基本的事項を基にした、考えさせる問題を工夫する。ただし、必要に応じて中学で学んだ事項をも加える。(6)　実験・実習に関する事項では、偏りのないよう十分な配慮を行う。

2　各問題の出題意図

(1)　本試験について

問題Ⅰ　種子植物と後生植物との対比が生活史全般にわたってどの程度理解されているかを問う。

問題Ⅱ　遺伝を理解する上で必要と思われる基本的事項の理解の程度と、それに基づく思考力を問う。

問題Ⅲ　植物の物質交代と、それに大きな影響を与えている植物ホルモンについての総合的理解

の程度を問う。

問題Ⅳ　人体との関連において、内臓諸器官の由来及びその機能を理解する上で必要と思われる基礎知識と思考力を問う。

問題Ⅴ　ヘモグロビンの解離曲線を中心にして、ヘモグロビンについての基礎知識とヘモグロビンによって行われている調節作用についての思考力を問う。

(2)　追試験について

問題Ⅰ　細胞分裂とその観察法について、具体的にどの程度の理解が得られているかを問う。

問題Ⅱ　物質交代全般にわたって、基本的事項をどの程度理解しているかを問う。

問題Ⅲ　被子植物の生殖に関する基礎知識を問い、さらにシダ植物とコケ植物の生活史との関連をどの程度正しく理解しているかを試す。

問題Ⅳ　オタマジャクシの変態に関する実験について、生物学的な考え方がどの程度できているかを試す。

3　試験結果とその考察

始めに述べたように60点程度の平均点を目標として問題作成に当たったが、本試験では下表に見られるように、その平均点は65.32点となり、多少とも昨年度を上回る結果となった。

本　試　験　結　果

問　題	配　点	最　高	最　低	平　均（100点換算）	標準偏差
Ⅰ	15	15	0	8.83　(59)	4.64
Ⅱ	20	20	0	12.69　(63)	4.81
Ⅲ	18	18	0	13.16　(73)	3.55
Ⅳ	27	27	0	18.54　(69)	5.77
Ⅴ	20	20	0	12.10　(60)	4.16
全　体	100	100	0	65.32　(65)	17.54

(1) 本試験についての考察

問題Ⅰ　問1の正答率が76％でやや高く、問5の正答率は49％でやや低かったが、他は60％前後で、当初は全体としてやや易しすぎるのではないかという心配を持っていたのが逆に59点（100点換算）という、平均点を下回る意外な結果となった。実物を離れた生物教育の欠陥が露呈したように思われる。

問題Ⅱ　問1、問2の正答率がそれぞれ94％及び82％と高く、逆に問6及び問8の正答率が30％及び45％と低かった。しかし、全体では平均点に近い63点（100点換算）となった。問6については、教えていないトノサマバッタという生物名が出てきて無理な出題であるとする批判が多くよせられたが、ＸＯ型はおもにコン虫類に現れる性決定型であるという基本に対する応用であり、問7ができるのであれば、当然その応用として問8もできてよいものである。応用し考える問題には弱いということが、ここにも現れているものと思われる。

問題Ⅲ　光合成と光の関係という最も基礎的な事項についての理解を問うた問3の正答率が42％という低い結果になったが、原理を応用するような考えさせる問題を多く出すべきであるとする現場からの声に反し、この種の問題に対しては、ここでも正答率が低くなるという結果になった。

問題Ⅳ　ここでもいわゆる暗記事項に対する正答率は高く、基礎を応用すればわかる問題の正答率は低かった。すなわち、肝臓とすい臓は十二指腸に開口しているということは中学での学習事項である。このことが理解されていれば、内胚葉起源である消化器との関連において、この2者も内胚葉起源であることに思いついて当然と思われる。現場での教え方にも一工夫望みたいところである。

問題Ⅴ　ここでも知識を問う問1から問4までの正答率はそれぞれ、88％、65％、88％、83％と高く、応用問題といえる問5と問6では、それぞれ40％、24％と非常に低い正答率であった。これは、解離曲線はヘモグロビン分子の特性を示すものであること、また、曲線とヘモグロビン分子のはたらきはどのような関係にあるかという原理が正しく理解されていないことを如実に示しているものと考えられる。原理を正しく理解させる教育が望まれる。なお、設問中に、「胎児には別型のヘモグロビンが存在する」ということを加えるべきであったとする意見もよせられているが、説明がなかったことが正答率を低くしたとは考えにくい。

(2) 追試験についての考察

問題Ⅰ　問4と問5の正答率がそれぞれ45％及び51％と低く、実験観察についての問6では、43％、35％という、さらに低い値が得られた。これは、ＤＮＡの複製は静止期に完了し、核分裂はこの複製されたＤＮＡの分配が行われる過程であるという基本が理解されていないことに原因があり、また、問6では、実際に現場で実験が行われていれば、HCl処理をしなければ根端はうまくつぶれてくれないし、固定されていないとうまく染まらないはずであるので、このような低い正答率は考えられないものと思われる。ここでも基礎的事項の正しい理解と、現場での実験の実施が望まれるところである。

問題Ⅱ　問題全体としては79点（100点換算）と正答率は高かったが、重要な生物現象の1つである能動輸送についての理解が低いのは意外であった。

問題Ⅲ　問1は中学での学習事項でもあるが胚珠とすべきところを子房または胚嚢と解答するなど、全体と部分の混同が見られ、問2はどの教科書にもある基本的事項の応用問題であるが、正答率は36％で、予想した以上に悪かった。問5はシダ植物及びコケ植物との対比を問うたものであるが、コケ植物との対比の方が33％で、シダ植物との対比（57％）よりも正答率は低かった。

問題Ⅳ　ここでは、問1で94％、問2で94％、問4で95％という、予期しない高い正答率が得られたのに対し、問5の正答率は37％と非常に低かった。問5の場合ハツカネズミの代りにヒトではとすれば、おそらく高い正答率になったものと思われる。ハツカネズミもヒトも哺乳類に属するという基礎的なことが分っていれば容易に判断できることであり、さほどむずかしいことではない。

4　出題形式について

本年度も基本的な事項に対する理解の程度を知るため、生物Ⅰの教科書の範囲内で広くかつ多角的な設問を用意した。現場からは依然として思考力や応用力を問う設問を多くせよという要望が強いが、基本的事項についての知識と理解があって初めて応用力も生れるものであり、両者のバランスのとれた出題が最も大切なことと思われる。また、考えさせる問題については、パズルを解く式の問題の正答率は高くなるが、基礎的事項を応用して考えなければならない形式の設問ではその正答率は非常に低くなる点が注目された。この点に関しては今後も種々検討を加えていかなければならないものと思われる。

5　本年度の出題についての反響及び意見について

本年度の出題に関して、日本理科教育学会、日本生物教育学会、高校や大学の教官、受験生やその父兄などから多数の質問や意見がよせられた。また、大学入試センターでも共通第１次学力試験等連絡協議会試験問題部会（生物）が開かれ、高校側委員による協議報告書が提出された。これらの反響や意見、及びこれに対する問題作成部会の意見のうち、そのおもなものについて以下に述べる。

問題全体として見た場合、その出題の量・範囲などはほぼ妥当であるとする意見が大多数を占めた。問題の内容に関しても、ほぼ妥当とする意見に加えて、幾分易しすぎるのではないかとする意見もよせられた。確かに当初の目標平均値の60点を５点程度上回る結果になったが、この程度の誤算は大きいものとは考えられず、内容的にもほぼ妥当な出題であったと考えられる。以下細部について見ていくことにしたい。

(1)　本試験について

問題Ⅰ　内容的にはほぼ妥当とする意見が多かったが、図については、前葉体に造卵器や造精器が記入されていなくて雑であるとか、いろいろの種類の部分のよせ集めで不親切であるなどの指摘も受けた。種類にこだわらずに図を作製したことは意図して行ったことであったが、全国的な試験という性格上、図を外注するわけにはいかないので、上手に仕上げるのは難しい。

問題Ⅱ　全体として無難であるが平易にすぎるという意見もあった。得点をみると平易にすぎたとは思えない。問５～問８では、受験生は、性の決定型と遺伝子の形質発現との関係を十分に理解していなかったように思われる。問３と問４は、一方ができれば他方もできるという意見もあったが、これは１つの理論を両面から理解しているか否かを見るためのものであった。

問題Ⅲ　あまりに基本的で平易にすぎるという意見と、高校での学習範囲を超えているという両極端とも思える意見がよせられ対応に苦しむ。出題範囲を広くカバーする意図のもとに作成した設問であるため、まとまりに欠けるとする指摘は致し方ないかもしれない。文章上の指摘もあったが、原文の方が正確かつ適当と考えられる。

問題Ⅳ　大学側からは諸器官の胚葉起源を問うのは無理であるとする意見があり、高校側からは、妥当な出題であるとする意見がよせられた。正答率から見ても後者の意見を取りたい。全体としては、起源・機能・調節について、各器官の特徴をふまえて構成したつもりであるが、この程度の基礎知識は高校レベルで身につけておいてほしいものである。

問題Ⅴ　問１～問３についてはやさしすぎる。また、問４～問６については妥当とする意見が多かった。また、問６の胎児のヘモグロビンに関する出題は、考えさせる良問であるという意見が多かった。全体としては難易とりまぜて平均点は60点（100点換算）に近く良問と思われる。

(2)　追試験について

問題Ⅰ　ほぼ妥当とする概評を受けた。細胞に関しては基礎知識と同時に、基礎的な観察実験の実施が望まれると同時にＤＮＡについての学習の導入としても必要と思われる。１$_{N}$HCl の表示についての意見もあったが、これは多数の教科書を参照しての考慮である。

問題Ⅱ　全体としては妥当であるが、問２の選択肢の表現が不適切、文章表現がまずいなどの意見もよせられたが、正答率からみて、受験生にとってはあまり問題にならなかったようである。また、問３は本試験問題Ⅴに関連していて好ましくないとする意見もあったが、内容からみてこの評は当を得たものとは考えられない。

問題Ⅲ　全体としては、ほぼ妥当とする意見が多かったが、問５のコケとの対比は教科書によって扱いの程度が異るので不公平との意見もあった。これは、教科書に一様に扱われているもののみについて出題するというわけにもいかないので、致し方のないことと思われる。

問題Ⅳ　おもに高校側から、実験結果からホルモンの相互作用を考えさせる良問であるとする評価を受けた。しかし、予期しない高い正答率が記録された。これは、設問中に易しすぎるものが含まれていたため、受験生がこの問題の内容をすでに知識として持っており、思考の過程をふまずに解答してしまったためと思われる。今後十分に考慮しなければならない点である。

地　　学

(1)　高等学校教科担当教員の意見・評価

1　構成と内容

(1)　本試験問題の構成と内容

ア　海洋や陸水など水圏に関する内容が乏しいが、全体として「地学Ⅰ」の全範囲にわたっている。

イ　対象のスケールが大きい総合的内容と小さい基礎的な内容がある。例えば、前者は地球の生成進化で、後者は岩石の成分に関した部分でみられる。

ウ　基礎的で平易な内容（問題ⅠのB　地上付近の風、Ⅲの問1　火成岩など）と応用的で難解な内容（問題Ⅱの問2　地質構造、問3　地球の生成進化など）が混じっている。

エ　地学的自然事象を総合的・関連的に考察する内容がとりあげられている。（問題ⅠのA 太陽放射と地球放射、ⅣのB　恒星の性質と惑星の運動）この試みは、断片的知識だけでなく、それらを多面的にとらえ判断する能力を調べることができると考えられる。

オ　問題の構成に当たっては、出典が特定の教科書（例えば、問題Ⅲの問2　イン石と地球の内部構造）に偏らぬような配慮がほしい。

(2)　本試験問題の範囲と程度、設問数等

問題Ⅰについて

○A、B、Cの順に地球の外側から地球大気、地球表面の形と順序づけられ、受験生の思考過程をよく考えてある。

○Aは太陽放射と地球大気及び地球放射との関連を問うており、総合的に思考させる良い問題である。

解答の方法で、番号順にならないのは選択肢の提示に工夫が必要である。また、問3の中に⑤躍層があるが、高校生では、この言葉を水温躍層と考えることが多いから、無意味ではなかろうか。

○Bは地上で、空気に働く力の要素をベクトルで示した図であり、基礎的な問題である。破線で等圧線を指示してあるが、これの説明は問題の説明文の中へ組み入れるか、あるいは、記入しなくても理解できるのではなかろうか。

○Cはやや難問である。⑥にくらべ、③や⑤及び他の文では説明が不足のように思われる。

問題Ⅱについて

○問題配列については、地球の生成、進化の問3が、問1より先の方がよい。

○問1は大きな内容の問題で配点も5点と大きいが、配点から考えて、設問はもう1つくらいあってもよい。

○問2は地層形成についての基本的な理解をとおして活用・推論する思考力を問うている良問である。しかし、模式図であっても、実際の大きさはどれ程であるか、さらに、このことについて表現が厄介なら、図の実際の大きさの大小関係を問うてもよかったのではなかろうか。また、16 の偽層に（クロスラミナ）と入れた方がよい。18 の境界はもっと凸凹があるか、あるいは 16 、17 のように不整合の文字を記入した方がよいのではなかろうか。

○問3は、地球の生成と進化に関した内容であるが、高校ではくわしく扱われていない。それは、仮説的な面があったり、生成・進化についての説を実証する説明が不足するからである。このような見地から、問題文のはじめに、問2のように説明的な文があってもよいのではなかろうか。地学の問題としてとりあげる内容は他にも多かろうし、配点も大きすぎると思う。

○問3の⑤の解答文はⅢの問2と関連する。③④では「星間物質」でⅢの問2では「惑星物質」とある。用語の統一が必要である。

○受験生にとって問3は予想外であったのではなかろうか。それだけ新鮮であり、幅広い知識が要求されていることになろう。

問題Ⅲについて

○問1にくらべ、問2はⅡの問3と関連しており、岩石分野での他の内容をとりあげてみても、よかったのではなかろうか。

○問1は基礎的な問題である。 101 ～ 103 は同じような内容で、火成岩の他の性質を問うた方がよい。

○問2は地球内部の物質の推定の方法であり、順序よく考えれば難しいと思われない。しかし、特定の教科書の記載がそのまま、共通の試験問題に用いることは、ミス以前の性質のものであり、出題者側は大いにその非を認めざるを得ないだろう。

○問２については、問題文の長さにくらべ、質問の数が多すぎるように思われる。また、前後関係から解答できるし、Ⓜ弾性波、Ⓝ地震波の正しい知識がなくとも解答できる。

問題Ⅳについて

○天体は受験生にとって法則、計算、原理の関連、推論が多く最も苦手とする分野である。この問題では、Ａで彗星の公転運動、Ｂで恒星・惑星の性質と、総合的に問題が作成されており、やや平易とも考えられるが、妥当である。

○Ａは近似計算をとり入れたケプラーの法則の応用で、基本的な問題である。設問及び内容も良好である。

○Ｂは仮説設定した問題で、太陽と地球におきかえて考えれば容易に解答できよう。

○Ｂの 122 はⅡの問３、Ⅲの問２と関係しており、ここでとりあげなくてもよかったのではなかろうか。惑星の運動とか、恒星の他の性質についての出題があった方がよかった。

○Ｂの 117 ～ 121 は、よく考えられた問題である。

○Ｂの 123 ～ 124 は、問題文から直接解答をひき出すことが困難である。この恒星を太陽と考えれば、容易に理解できるだろう。

(3) 追試験問題の構成と内容

ア　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳはそれぞれ天体、気象、地史、岩石鉱物と大別される問題で、各分野に分けられている。

イ　本試験問題にくらべ、より基礎的内容である。

ウ　各分野の相互関連や総合的に考える内容が少なくなっている。

エ　問題の内容にくらべ、設問の数が多い部分がある。（問題Ⅰの問４　天体のスケール、ⅡのＡ　地球の内部構造、Ⅳの問２　変成作用、問３　鉱物など）

オ　知識の有無をしらべる問題が多く、原理法則の理解や応用面をしらべる内容が少ない。

カ　本試験問題の設問数50問に対して63問と多すぎる。

(4) 追試験問題の範囲と程度、設問数等

問題Ⅰについて

○地平座標の表示法、太陽の日周運動、ＨＲ図と恒星の諸量、天体の大きさのスケールと順に出題されており、高校での基本的な学習内容でもある。

○問１は地平座標での天体の位置の表わし方の基準となる用語で、無理がない。

○問２は黄道傾斜と季節を結びつけた出題で、地球の公転面と自転軸との交角が、太陽を基準に地平座標でどのように現われてくるかを考えさせる内容で、この程度なら「地学Ⅰ」の応用範囲内といえよう。

○問３はＨＲ図で恒星のスペクトル型と温度、大きさ、質量、寿命との関係を考える内容で、学習上の重点事項である。

○問４は太陽や惑星の大きさ、さらに球状星団、銀河系までひろげて、宇宙空間のスケール概念の理解をしらべる問題であるが、無難な内容と思われる。しかし、１つの設問で８つの答を順序づけるのは、数が多いのではなかろうか。受験生にとって自己採点を迷わせる出題方法である。例えば、太陽系と恒星の最近距離、銀河系と星雲団、指数を表示した大きさなど、別の設問があってもよかった。

問題Ⅱについて

○Ａは地球の内部構造、Ｂは高層風、Ｃは地球大気や地球のまわりの場で、まとまりがあるが、問題はあまり推敲されていないように見られる。

○Ａでは地球の内部の層構造の名称と大きさ、性質で、ごく基本的な内容である。問題文の表現は、教科書の記載でみられるように単純平滑である。

○Ｂでは高層風の風向が等高度線に平行になること、及び地衡風の原理がわかれば解答できる。

○Ｃは雲、霜、オゾン層、バン・アレン帯の生成の原因を選び出す問題で、「最も関係深い語」とあるが、注意しないと、雲と雷、霜と下降気流と誤答しやすいので、選択肢の内容に工夫がほしい。また、この問題は雲～バン・アレン帯と対象範囲が大きすぎるように思う。

問題Ⅲについて

○Ａは日本列島の地質構造について、地質区、グリーンタフ、変成帯と変成岩の特徴についての理解度をしらべ、Ｂは示準化石と示相化石の選び方の問題である。問題内容はよく検討されている。

○問２　この程度の大きな変成帯と中央構造線の関係については、明確に知っておく必要があろう。

○問３はグリーンタフのたい積状況を推定する設問で、①～⑤はよく工夫された表現である。

○問４は三郡、三波川変成帯に多くみられる変成岩は、結晶片岩であることに気付くことが必要である。この問題は問１、問２とも関連しており、これの代りに、例えば東北地方などに見られる古生界の特徴を出題してもよかったのではなかろうか。

○Bは示相化石、示準化石の意味を問題文のはじめに述べられているので、解答のさいにいくらかヒントが与えられている。しかし、化石の量や現地性、異地性の点で、化石のもつ意味を理解してないと解答できない問題である。

問題Ⅳについて

○問1で火山岩、深成岩の組織、問2で変成岩の2つのタイプ、問3で鉱物の生成条件による多形について出題されており、基礎的な、しかも無難な問題となっている。しかし、問題文の長さにくらべ、設問の数が多くつくられ、高等学校で使用されている教科書の一部や、高校での定期学力考査の問題のようで、もっと練れた問題であってほしい。

○問1は火山岩と深成岩の鉱物のパターンの特徴の用語を選ぶさい、Ⓐ～Ⓞの中で、粉状、基石、巨晶、星状などは正答の用語とまぎらわしい。また、これほど多くの用語を並べる必要があるだろうか。

○問2で変成作用と変成岩の2種類について述べられている。内容はごく基礎的なもので、高校での平常の学習さえ定着していれば、文章の前後関係から判断できる設問もあり、解答は容易であろう。

○問3で鉱物の同質異像のでき方と鉱物例を問うている。この種の問題は例となる鉱物やその条件が限られてくることになり、簡単な知識で解答できよう。しかし、さらに深く生成条件や鉱物の組み合わせとなると、高校段階では無理となり、扱いにくい内容である。

2　問題の出題方法

(1)　本試験問題の出題方法

○問題内容は基本的・基礎的なものが多く、60分の試験として適当と思う。

○設問は昨年と比べ50とやや多くなっているが、基礎的な知識に関する出題が多いことから、受験生の負担は多くはないと推定される。計算処理や原理・法則の応用・関係づけの問題が多くなれば、設問数を減らす必要があるだろう。

○配点については次のことがいえる。

ア　ⅠのBは力のつりあいと風の方向であるから、 9 （摩擦力）、10 （転向力）は両方とも正解で得点とすべきではなかろうか。また、配点が5点であるCの 11 ～ 13 は重みつき得点について、疑問がある。

イ　Ⅱの問1の5点は大きすぎる。

ウ　Ⅲの問2は小問の数が多く、他の問題から類推できる内容もある。小問を減らして配点の多い方がよい。

エ　ⅣのAは、妥当である。

Bの問1、問3も適当と思う。

問2はやさしいわりに得点が大きくなっている。

○表記について

前章（1）（本試験問題の構成と内容）で述べたが、それらも含めて列記すると、次のようになる。

ア　ⅠのAの問題文中で「通過」に対して「透明」の使い方。問3の「躍層」と出した意味。

Bの図の破線での指示のわずらわしさ。

Cの説明文の不足。

イ　Ⅱの問2の大きさのスケールのちがい。

問3の水素ガスと遊離酸素という表わし方。

ウ　Ⅲの問2の弾性波、惑星物質。

エ　Ⅳの問3で、正解G型を解答欄のⒺにマークするさい、そのままⒼにマークすることもあるので解答記号の工夫。

(2)　追試験問題の出題方法

○問題内容は基本的・基礎的であり、60分の所要時間は妥当である。

○設問数は63で多すぎると考えられる。これは基礎的知識を問う内容が多いから、いきおい、このようになったと推察されるが、受験生がマークミスをひきおこしやすく、数が多く精神的に負担がかかるおそれがある。

○配点については、次のことがいえる。

ア　Ⅰの問1、問2は適当である。問3は二者択一で、当て推量に解答することにならないだろうか。また、誤りについては減点する方法がとられるのだろうか。問4は設問数が多すぎる。

イ　ⅡのA、B、Cとも妥当。

ウ　ⅢはA、Bとも妥当。

エ　Ⅳは前章（2）（追試験問題の構成と内容）で述べたように設問が多すぎる。この種の形式では、前後関係から解答が推定できる場合もあるし、内容の全体的理解がなくとも、いくつかの正答を得ることもできる。さらに、問題文の中で、きわめて重要な基本的事実を知らなくとも、枝葉の部分を知っていて、得点に結びつくこともある。

○表記について

ア　Ⅰの問4の⑥ベテルギウス（超巨星）の表わし方。

イ　Ⅳは全問をとおし、解答語群が多すぎる。また、かな書きと読みがなつきとの混合。

3　そ　の　他

(1)　本試験の結果は平均61.93点、標準偏差17.46点で、学力試験結果として妥当である。

(2)　出題に当たっては、高等学校「地学Ⅰ」の教科書の多くを通覧し、特定の教科書の記載にとらわれないようにすべきである。

(3)　「地学Ⅰ」の基本概念に沿い、基礎事項から逸脱するような難問・奇問は避けてほしい。

(4)　単に記憶されている知識のみを調べるのではなく、原理・法則の理解や関連・活用なども含めた問題内容にしてほしい。

(5)　本試験問題は地球全体に関した応用的内容が多く、追試験問題は分野ごとに基礎的で教科書の記載に似た内容になっている。前者は新鮮であるが意外性が大きく、後者は受けとめやすいが陳腐になったきらいがある。両者が渾然一体となった問題がほしい。

(6)　試験終了後、すぐ、民間会社の採点指針によって受験生が自己採点を実施している。このような現状であるから、配点のみでなく、採点方法もあわせて公開した方がよいのではなかろうか。

(7)　この共通第1次学力試験が、さらによりよいものになるよう研究を進められ、数年を経ずして中止になることのないよう要望する。

(2)　教育研究団体の意見・評価

日本地学教育学会

1　本試験問題について

(1)　全般的なことがら

ア　昨年度にも具申いたしましたが、単純な記憶力にたよる問題がまだ多いようです。できるだけ観察・実験を通して勉学をしてこなければならないような問題をだすよう、ご配慮いただきたい。

イ　直感的に解答がだせる傾向の問題が多いようです。

ウ　特定の教科書の内容を、引用しすぎるように感じます。

エ　内容・選択肢に「地学Ⅰ」を逸脱しているものが見られます。「地学Ⅱ」にでてくる内容や語句の使用のために、「地学Ⅰ」の授業を指導要領の範囲以上に拡げさせられることになる恐れがあります。

(2)　各問題について

ア　ⅠBについて

空気の働く力……の「空気」だと、空気の運動方向が問題になります。「空気」よりも「風」とした方がよいのではないでしょうか。もし、「空気」を使うならば「水平方向に運動している空気」としなければまずいと考えます。

このような、モデル化した図を使うときは、条件の設定を十分にしていただきたい。

イ　ⅠCについて

③と⑤は問題があります。重力の大きさや人工衛星の運動から、地球の形を決められる関連性を、生徒はつかんでいるでしょうか。授業でもそうしたことに、ほとんどふれられないでしょう。

また、④の地磁気は「地学Ⅰ」に入っていません。生徒の多くは、消去法で解答をだしたようです。

この問題は単なる暗記問題と考えられます。

ウ　Ⅱ問1について

問題の視点は大変よいと思いますが、問いかけがやや粗いようです。

この解答に5点の配点は、他にくらべて多いように考えます。

エ　Ⅱ問2について

おもしろい問題ですが、 16 の「偽層」という術語が、現行の教科書で記述されているのは、特定のもののみで、それもクロスラミナ（偽層）となっています。現在は「斜交葉理」か「クロスラミナ」を使っているようです。

また、 19 の火成岩の岩脈の図は、岩脈の下方が上方より細くなっています。自然界のことですから、そのようなこともあるかと思いますが、模式図では、同じ幅か、下方が太くするのがよいのではありませんか。

オ　Ⅱ問3について

「地球の生成と進化に関する記述である。」と断言して、特定の学説を正しいものとみなしていることに問題がありませんか。

また、正解の 24 ― 25 の⑤―①の順序は逆ではいけませんか。※印がついてもよいと考えます。

カ　Ⅲ問1について

101 ～ 103 の SiO_2の量を問うのは、数値の暗記だけを試すものであり、出題にもうひと工夫が望まれます。

キ　Ⅲ問2について

特定の教科書の丸写しは、すでに指摘されてますが、教科書の記述に加筆した部分が、問題でないでしょうか。「……が地球の引力の影響により落下したものである。」と断言できるでしょうか。

また、イン石の中を伝わる弾性波の測定は、現在、高温高圧下でほとんど測定されてないのではありませんか。それなのに、「マントル内を伝わる地震波の速度とほぼ等しい。」として、地球内部の構成物質の組成を推定することができましょうか。（このことは、むしろ教科書の問題かも知れませんが、それをそのまま試験問題に採用されていますので、付記しました。）

ク　ⅣAについて

彗星の周期を33年と、細い数字を出していて、選択肢が5きざみの概数なのはどうなのでしょう。概数ならば、問題文の「……に入れるのに最も適当な数を」でなく、むしろ「……に入れるのに最も近い数を」ではないでしょうか。

ケ　ⅣBについて

大変おもしろい問題と思います。ただ、問3は恒星Xが太陽と気付けば簡単です。(46ページ下から4～2行にかけての文章で明らかです。)

問1、問2に対して問3は質問数を増すためにもうけた感がいたします。

2　追試験問題について

(1)　全般的なことがら

ア　本試験よりもやさしくならないようにしていただきたい。

イ　本年度の問題では、穴うめ形式が多いように感じます。試験の方法、採点方法などからみて、ある程度はしかたありませんが、出題にあたりひと工夫いただきたい。

ウ　追試験でも、「地学Ⅰ」の範囲を逸脱しないように、願いたい。

(2)　各問題について

ア　Ⅰについて

「地学Ⅱ」に入るところですが、この程度なら許容されるかと考えます。問3は、単に二者択一でなく、理由を聞くなどが欲しかったように思います。

また、問4は、8種類は多すぎませんか。⑥や⑦を理解している生徒はどのくらいいるでしょうか。①もどこまでを直径と見るか、問題があります。

イ　ⅡBについて

高層天気図は「地学Ⅰ」で、まだそれほど一般化していません。むしろ「地学Ⅱ」といえるでしょう。問1と問2は逆にして、さきに風向の決定法を聞いてから、風向を聞く方が順ではないでしょうか。

ウ　ⅡCについて

31 霜の正解は②ですが、⑥でもよいと考えます。選択肢の数が少なく、質問も粗雑な感がいたします。

エ　ⅢAについて

問２でなぜ特定の変成帯の名前だけを聞いたのでしょうか。本問題の意図がわかりません。固有名詞よりも変成帯についての基本的なことを聞いて欲しい。

問４の問題文で、「三郡、三波川などの変成帯中……」のなどが問題です。問２の選択肢に①～④まで、変成帯の名前があり、しかも三郡、三波川、飛騨、領家の順になっているので、「など」と書かれていれば四変成帯全部と受けとる生徒もでてきます。「など」がなくてもこの場合、題意は通じると思います。このような問題では、日本列島の略図を用いるなど、工夫ができると考えられます。

オ　ⅢＢについて

あまりにも簡単であり、しかも配点が他にくらべて多いように思われます。この程度ならば、示相化石や示準化石の定義を記述することはないと考えます。

カ　Ⅳについて

全部穴うめ式であるのは考えさせられました。

問１の「これは 103 組織と……」とありますが、「これは」のさすものにとまどう恐れがあります。選択肢のⓀ双晶は、「地学Ⅰ」でほとんどふれられません。ⓆⓆ基石とはなんのことでしょう。なぜこうした選択肢を出すのか意図がわかりません。なお、問３の選択肢Ⓐアラレ石も「地学Ⅰ」では疑問です。

(3) 問題作成部会の見解

1　問題作成の方針

地学は総合科学であり、高校の地学Ⅰも当然のことながら物理及び化学の基礎的素養の上に教育されるべきものである。しかし、他方、現実の高校においては、物理及び化学の素養なしに単に記述としての地学が学習されている場合もある。したがって、大学入試としての地学Ⅰは、前述の理想にしたがって高度な出題にすべきことが当然ではあるが、他方、後述の現実も無視出来ない。それ故に不十分ではあるが、将来の高度な学習に適する受験者の資質について試す出題と、単に基礎的事項について問う出題とを織りまぜて、現実の高校卒の受験者にとって十分バランスのとれた出題となることに留意した。

2　各問題の出題意図

(1)　本試験について

Ⅰの A は、地球大気現象を支配する太陽放射についての基本的な理解度を問う出題である。特に電磁波放射について総合的な問いかけを試み、可視光線と赤外線に対する大気の受けとめ方や、放射線の温度依存性を放射体としての太陽及び地球の各々の表面温度との対応で考えることに重点をおいた。B は北半球における地上付近の空気に働く力の水平方向の３成分を問う出題で、高校地学Ⅰの気象の分野ではまず第一に教える事項である。C は地球の形状を正確に決定するという基本的な問題をとらえて、直接的には各受験者がこの事項についてどの程度理解しているかを問う出題であるが、合せて大学での勉学に必要な推論する能力を試すことが目的である。

Ⅱの問１では地学における時間の概念を問うたもので、地質時代（動物進化の特徴にもとずき、相対的な新旧によって区分したもの、すなわち相対年代）と岩石中に含まれる放射性元素の同位体比に基づく放射年代（絶対年代）との区別を理解している受験者には容易に解ける問題といえる。

問２はたい積、しゅう曲、断層、不整合及び火成岩の貫入などの地質現象の理解にもとずいて、たい積岩の上下判定をおこなわせる問題で、地質学の基礎を扱ったものである。野外観察の経験があれば難問ではない。問３は、地球の生成から植物の出現にいたるまでの岩圏、水圏及び気圏の変遷を問うたもので、地学を歴史科学としていかに把握しているかを知る出題である。

Ⅲの問１は、岩石の化学組成及び造岩鉱物名より岩石名を解答させるもので、将来、より高度な地球科学を学習するための基礎になる。問２は、地球を惑星の一つとして考察し、イン石の組成と弾性波速度という実験室内のデータを地震波速度と対比させて地球内部の組成を推論させる問題である。

Ⅳは天文学分野の問題である。A では、ケプラーの第１法則と第３法則を十分に理解しているかどうかを試し、B では惑星の自転、公転及び内部構造、並びに恒星のスペクトルと放射エネルギーなどの惑星と恒星に関する総合的な理解と思考力を試すことを意図した。

(2)　追試験について

Ⅰは天文分野の問題である。問１及び問２は天球の概念と太陽の運行についての理解度、問３は恒星の物理量と進化についての知識、また問４は天体の大きさについての総合的な理解度を試すものである。

Ⅱは地球物理分野からの出題で、Aの問1は地球内部の層状構造、問2は地震波の伝わり方、Bは上層気圧分布と風の関係、Cは地球大気中の重要事項の理解度を問う出題である。

Ⅲの A は日本列島の大地質構造に関する基本的事項の理解度を試す問題である。全般的に教科書の記述通りの問いにしている。問1は、東北日本と西南日本の地質の特徴を問う設問である。教科書などに掲げられている日本列島の地質図をみて、地質の大局的な特徴をとらえているかどうかを試している。問2は変成帯の地理的分布を試す問題である。問3は日本列島に広く分布し、第三紀の地殻運動に密接に関係するグリーンタフのたい積環境を問うている。日本列島の地史を扱うとき、必ず触れる事項である。問4は、結晶片岩の岩石学的特徴を問う設問であり、一般的な基礎知識を試している。Bは示相化石と示準化石の性質を問うている。各々の化石の定義が示されてあり、思考を要する設問になっている。

Ⅳの問1は、火成岩の組織についての知識を試し、火山岩及び深成岩における結晶化の過程の組織の違いを、地学で一般に用いられている術語で説明する基本的な設問である。問2は主要な岩石の一つである変成岩に関する設問で、変成岩の成因及び特徴について正しい理解を試すことを目的としている。問3は鉱物の同質異像（多形）に関する設問である。この種の問題は、地学の専門分野では重要問題として、近年クローズ・アップされている。実際、ダイヤモンド、SiO_2及び方解石の多形に関しては、扱われている頁数は少いが、かなりの教科書に掲載されているので、あえて出題した。

3 解答結果

今回の問題は、前年度の成績を考慮し、ほぼ同程度の難易度で出題した。本試験の成績は昨年度とほぼ同様であった。以下、本試験・追試験の順で述べる。

(1) 本試験について

Ⅰの A は全体を通じて平均点が予想より悪かった。このことは地学の受験者中に物理の素養のあるものが少いことによるものと思われる。ただ、赤外線及び温室効果を解答させる問題はかなり良好な成績であった。Bは基本的問題であったためか、正答率は良好であった。また、Cは新傾向の出題のためか正答率は非常に低かった。

Ⅱについてみると、問1は正答率がほぼ良好であった。問2は偽層・れんこん（波形の模様）といった特殊な地層のたい積状態を取り扱ったためか、正答率は非常に低かった。ただ解答番号 15

の通常の逆断層の問題がきわめて悪い正答率であったのは意外であった。解答番号 18 ～ 19 については正答率が高かった。問3は地球の生成と進化の問題で正答率は非常に低かった。

Ⅲについては、全般に正答率が高く、高校においてこの種の学習がよく行われていることがわかる。問2はイン石と地球の内部組成についての問題で、正答率がきわめて高かった。これはこの設問が地学Ⅰの学習結果よりも高校卒程度の一般の理科の基礎的素養によっても解答出来る性質のものであったためかもしれない。

Ⅳにおいては、A、Bを通じて正答率はほぼ予想通りであった。Aは計算問題であり、若干難かしいと考えていたが、予想よりも結果はよくなかった。しかし、上位受験者の正答率はかなり高かった。Bは総合問題で適当な出題であると考えていたが、結果は問2、問3では正答率が高く、全体としても予想より正答率が高くなっていた。

(2) 追試験について

Ⅰについては、問1の解答番号 1 ～ 5 において正答率がきわめて高かった。問2は予想に反して全体の正答率も低く、また成績上位の受験者の正答率も低かった。問3の主系列星のスペクトル型と質量の関係を問う設問は正答率も妥当でよい設問であったといえる。問4の天体の大きさに関する問題については、基礎的で重要な問題であるがやや難しいのではないかと予想していた。結果はその予想よりも悪く、また、上位受験者の正答率も高くなかった。

Ⅱ－Aについては、問1及び問2を通じて正答率は非常に高く、地球の内部構造と地震波の事項については高校の学習がきわめてよく行われていることを示している。Bは上層気圧分布と風向きの関係を問う基礎的な問題であるが、解答番号 28 の正解である ④ 北西の風と答えた受験者がきわめて低く、②の南東の風と答えたものが多かった。これは風向きに対する単純なミスと考えられる。Cは地球大気中の特殊現象の理解度を問う設問で一般に正答率は高かった。

Ⅲの日本列島の地質構造に関する設問については平均してほぼ50％程度の正答率であった。この種の内容については、特に力を入れて学習する高校も多いときいていたが、予想に反して結果がよくなかったのは設問が若干難しかったせいかもしれない。

Ⅳの問1の火成岩・組織に関する設問は、地学における基礎的事項と考えられ、正答率も良好であった。また、問2の変成作用に関する設問は高校における学習が行きとどいていたためか、きわめて高い正答率であった。問3は鉱物の多形について問うたものであるが一般に正答率が高く、受験者のこの種の問題に対する学習がよく行きとどいていることを示していた。

4　出題形式についての今回の試み

今年度も前年度と同様に、特に新しい試みの問題はなく、前年度の形式を踏襲した。ただ若干、新傾向の問題もおりまぜた。例えば、本試験問題Ⅰ－Ｃでは地球の形を決めるという基本的問題に関連して、受験者の理解度の他に、大学での勉学に必要な推論の能力をみることも目的として問題を作成した。

5　本年度の問題についての反響意見

(1)　本試験について

Ⅱの問２は地層の逆転について判断させる設問であるが、解答番号 16 の偽層及び同じく解答番号 17 のれんこん（波形の模様）についての設問に対し、このような地層の特殊なたい積環境について問うことは、高校レベルとして問題ではなかろうかという意見が出された。しかしこの事項に関しては、地学Ⅰの教科書の多くのものに記述されており、また学問的にも重要な事項なので、この程度の出題はさしつかえないと思う。同じく問３の地球の生成と進化に関する記述について、これは仮説の一つにすぎず、仮説段階のものを出題することには疑問がのこるという意見が出された。Ⅲの問１については、化学組成より岩石名を当てる設問で、記憶を試すだけであるからよい設問とはいえないという意見があった。しかし、大学の地学は非常に多数の専門用語で記述されているので、この程度の専門用語の記憶の試験はどうしても必要である。次に、問２については、設問は良好であるが、特定の教科書に酷似しているという意見が出て、大学入試センター側としてもこの点は適当でないという見解をとった。特定の教科書の表現に酷似した記述であっても、内容的に他の多くの教科書にもりこまれており、それが問題作成委員会の意図に近いものならば問題ないのではなかろうか。ただし、特定の教科書にしか書かれていない内容の記述を採用するのは大きな誤りであろう。

(2)　追試験について

追試験については受験者数も少く、あまり意見がなかった。ただ連絡協議会の高校側委員より、追試験の方が本試験より問題がすなおで、その点本試験と追試験を逆にして行った方がよかったのではないかという意見があった。

6　今後の出題に留意すべき点

地学は、物理・化学的分野と、生物・歴史科学的分野との総合によってなりたつ総合科学的な側面をつよくもっているので、高校の地学のレベルといえども、そのことを念頭に入れて出題すべきである。現実に地学Ⅰのうち、天文及び地球物理の分野では、受験者に数式・グラフ及び数値といった数量的取り扱いについてのテストを多く行うべきだとする大学関係者は多い。この点については、将来の出題について留意すべきことと思う。他方、大学教育の地学には多くの特殊な専門用語を必要とするので、このような用語の記憶及び理解なしには地学は学習出来ない。したがって前者に加えてこのような専門用語についての出題も織り込んで総合的な出題にすることを考慮する必要もあろう。

一方、地学を選択する受験生の多くは、将来かならずしも地学の専門家になりうるとはかぎらず、それゆえ、地学を勉強することにより、他の基礎科目では学べない地学特有の総合的判断力や自然に対する地学的観察力が養われ、各々の専門分野や実生活においても有効に地学又は地学的考え方の応用が出来得るような能力を身につけてもらわなければならない。このようなことも念頭において今後の出題に留意すべきであると考える。

基　礎　理　科

(1)　高等学校教科担当教員の意見・評価

1　構　成　と　内　容

(1)　本試験問題の構成と内容

ア　全体的にみて問題を読みながら理解し、考察を進める問題が多く、出題の題材を身近な自然現象の中に求めることが配慮されている。実験を行い、情報を集め、推論し、仮説を立て、検証を行うなど科学的に探究する過程を示し、正しい結論を選ばせるなど、科学の方法をそのまま再構成した良問が多くおおむね適切なものである。

イ　地球的規模でとらえた現象や、自然現象を総合的に問うなど、物理、化学、生物、地学の中、2つ以上の領域にわたる問題も出題され、基礎理科の目標から見ても望ましいことであり、問題作成に努力のあとが見られる。

ウ　全体の構成についてみると、化学領域に関する内容が少なく、しかもそれが物質の性質に関するもののみで偏りがある。又地学的領域についてみると、問題Ⅲ、Ⅳ、Ⅴがあげられるが、いずれも地球的規模での出題であり、別の側面からの出題がほしい。

エ　設問構成では、諸現象を定量的な面から問う出題が多く、記号化した数式や数値を追いすぎている。この為、出題のねらいがかえって損なわれているのではないだろうか。もっと定性的な問いが多くてもよいのではないか。

オ　他の理科の問題と比較しても、問題数が少し少なく、1つの問題の配点が大きすぎたのではないか。もう少し平易なレベルの関連質問を増やして、1問の配点を小さくしてほしい。

カ　専門的になりすぎ程度の高いものがあった。

(2)　追試験問題の構成と内容

ア　本試験問題に比較すると、読んで考えさせるような理解力や思考力を見る問題が少なく、単純な問いに終っている。

イ　化学領域と思われる問題が3題出題されており、本試験の1題のみの出題に対して比重が大

きくなっている。物理、化学、生物、地学の各領域に均衡のとれた出題であってほしい。

ウ　他の点に関しては構成と内容共に本試験の場合と同じく適切である。

2　範囲と程度、設問数等

(1)　本試験問題の範囲と程度、設問数等

ア　Ⅰについて

A　身近な現象を取り上げ、実験を行い、その結果より結論を考えさせるという理科の方法がよくまとめられており範囲、程度とも適切である。

B　前文でドップラー効果の説明がなされた上で問いに入っているのは大変よい。ただ解答はドップラー効果の知識だけで解けるものであり、光のドップラー効果等に発展した問いがほしい。特に、物理と地学との両分野にわたる問題ができたのではないか。

イ　Ⅱについて

浮力の問題として基本的な問題であるが、基礎理科では扱われず、むしろ中学校での教材の範囲である。にもかかわらず重力加速度gなども使われており、かなり難しい。しかも問3が限度で、問4は原理は同じでも難しく基礎理科を中心に学習してきた生徒には、意表をつかれた問題ではないか。

また、与えてある量に単位を付しておけば、もう少し考えやすかったのではないだろうか。

ウ　Ⅲについて

地球の半径と質量とを2地点間の距離および北極星の高度の観測より求めさせており、設問形式が優れている。また物理的な要素、地学的な要素が組み合わされている点は評価できる。

問3では測定法についての図が与えられていた方が親切であり理解されやすかったのではないか。基礎理科として問3、問4は程度が高すぎる。

エ　Ⅳについて

水の循環をわかりやすく取り扱っており、適切な問題である。

オ　Ⅴについて

地殻の構成元素を単に量的な面から考えるのみではなく、金属元素、非金属元素という観点から考察させたり、化学、生物教材との関連をはかるなど、またいずれも地球の構成物質についての基本的な理解を問う問題であり、素直な設問であり、良問である。ただし、㋐㋑㋒㋓の

元素が何であるか、記憶だけを出発点にしているところに問題がある。

カ　Ⅵについて

化学領域の出題範囲として、物質の性質に関する問いのみであり、他の領域の出題がみられず偏っている。もっと大きく全体的にみた重要な基本的事項の設問が欲しい。設問形式としてはAは新鮮な感じがし、面白い問い方である。

キ　Ⅶについて

物質交代の基本的な事項としての問題であるが、内呼吸のしくみのうち、問4は難しすぎる。⑤が正解と思われるが、②のⓓの過程にもエネルギーの放出があるような表現をしている教科書や、副読本などもあり、難易度については大学の一般教養程度の問題である。

ク　Ⅷについて

生態系の問題と進化の法則とを総合的に構成してある良問である。特に問3は単に遺伝の法則を知っただけでは解けず、十分理解しているかどうかが問われており、統計的な考え方が導入された面白い問題である。ただし、教科書によって、そのまま記載されているものと、記載されていないものとがあり公平さという点では考えてみなければならないところがある。

(2)　追試験問題の範囲と程度、設問数等

ア　Ⅰについて

設問の程度、内容からみて標準的問題といえるが、単にスペクトルの種類を問うことのみにとどまり、単なる知識を試す問題となっている。思考力を試すような努力がほしい。

イ　Ⅱについて

基本的、基礎的な問題であり、応用性に乏しいが、最も大切な事項であり、適切である。

ウ　Ⅲについて

a　モル概念、状態方程式等の簡単な応用問題としての問いで適切である。

b　物質の反応を問う、基本的な事項があげられており、適切である。なおこの種の問題では、何らかの形で化学反応式を書かせる程度まで、程度を上げてほしい。

エ　Ⅳについて

電気分解に関し、総合的に問題が出題され、きわめてよい問題である。問3以下が、前問と無関係に独立して解答できる点は、この問題の良さである。また、問4、問5は、物理的領域と化学的領域とが、コンバインされており、基礎理科の問題として、望ましいものである。

オ　Ⅴについて

範囲、程度共に適当であるが、問4の理由としての解答が適切でない。④が正解と思われるが、グラフより10℃ 温度が上昇すると酸素の発生量はa、bのグラフでは約2倍になっており、温度が10℃上昇しても衝突回数は2倍にはならない。したがって、この問いの正解としては、「活性化状態になる粒子数が増加する」旨の解答がほしい。しかし、これは基礎理科としては難があり、温度と反応速度との関係を問うのは難しすぎる。

カ　Ⅵについて

実験の過程と考察の過程が、少々複雑であるが、文章を正しく続むと答えられる適切な問題である。こうした問題の場合は、実験経過を図示するなど、明解に示す工夫をしてもよいのではないか。また、ある教科書には、これと全く同じ実験結果が記載されており、他の教科書には記載されていない。したがって、どの教科書にも記載されてない事実、又はどの教科書にも記載されている事実の応用として、この種の問題を作成してほしい。

キ　Ⅶについて

身近な台風という現象について問うているのは、なかなかよいが、問題文の表現や図1が曖昧で、解答しにくい。この点については、問題文の表記の項で指摘したい。

ク　Ⅷについて

出題の意図がはっきりせず、問2のエネルギー効率の問題は、基礎理科として重要な意義のあることかどうか疑問がある。特に核燃料での発電の効率に関しては、基礎理科の学習範囲を少し越えているのではないだろうか。

3　出題方法（試験時間、配点、問題文の表記、解答方法）

(1)　本試験問題の出題方法

ア　試験時間について

高校で普通に学習しておれば十分解ける内容であり、時間的にみても無理な点は感じられない。120分は内容と照らし合わせて妥当なところである。

イ　配点について

問題文の長さ、量、質共に良いと思うが、1問あたりの配点がやや大きすぎるのではないかと思われる。他の理科を選択した者は2科目を選択するわけであるから、ほぼそれに見合った

程度の問いの作成が望ましい。全体的に関連する問いの数を多くし、１問あたりの配点を引き下げる工夫をしてほしい。

ウ　問題文の表記

全体的にみて平易でわかりやすい文章表現となっており、特に説明文などは短い中にもよくまとまっている。ただし具体的にいくつかあげると次のようである。

Ⅲについて……図中に２地点ＡＢの表示をした方がよい。又文中の「おもりにはたらく山の引力は水平方向であるとする。」という部分と、次ページの参考図に、山の中心に重心と思われる点が示してあることとがうまくつながらないのではないか。これを解消するために、測定法を示す図がほしかった。

Ⅳについて……水の循環、水の収支に関する大規模な自然の営みを取り上げた良問であるが、図中の矢印の示す方向の意味がはっきりしない。又問４は測定法がはっきりしていないのに、④の解答を求めるには少し無理がないか。測定の精度についての記述がほしい。

Ⅵについて……問題文の表現がわかりずらく、問題文だけを読んだのでは解答方法がわからない。問いの内容をみて、はじめて解答方法が理解できる状態であり、解答例を出すとか別の表現にするとかしてほしい。

エ　解答方法について

注意事項の３に「解答用紙の片面を使用せよ」とあるが、どちらの面を使用すべきなのか、緊張して試験に臨んでいる受験生には気になることであろう。「どちらの面をつかって解答してもよい。」とか、もっと親切な指示がほしい。

みずから計算させて答を求めるような出題も可能であり、１２３というような具体的な数字を記入させる問題もあった方がよいのではないかと思う。

(2)　追試験問題の出題方法

ア　試験時間について

本試験の場合の指摘事項と同じである。

イ　配点について

本試験の場合の指摘事項と同じである。

ウ　問題文の表記について

Ⅰについて……問２は選択肢の中に正解となり得るものが２つあるにもかかわらず「①～⑥のうちから１つ選べ」とあるのは、受験生を不必要に悩ませるものである。こういう場合には「ただし正解と思われるものが２つ以上ある場合は、そのうちの１つを選んでマークせよ。」等の表現を加えて欲しい。このことはⅦの問２についても同様である。

Ⅲについて……Ａの問題文中「完全に反応させた」と記述してあるところは、この表現でもよいと思うが、残った一酸化炭素も存在するし、平衡状態を考える生徒もいるので「この条件のもとでは一酸化炭素は十分な酸素が存在する時はすべて二酸化炭素に完全に反応するものとする。」とした方がよい。

Ⅳについて……問１と問２は順序を逆にした方がよい。流れた電気量を計算させた後、析出した銀の質量を計算させる方が高校では一般的に行われている。

Ⅴについて……問４の答は④が適切な解答でなく、活性化エネルギーの解答が見当たらない。したがってこの④を正解とさせるためには「１つの原因として正しい解答と思われるものを選べ。」とか表現を変えるべきである。

Ⅷについて……「９時ごろ」という記述を「９時」とはっきりした方がよい。１行上では「９月30日０時に…」と言い切っており表記表現が一致していない。また「９時ごろ対馬の東に達した。」と記述されているが、図１中のどの位置かが判断しにくく、したがって問１の「９月30日21時における位置」が確定しにくい。

エ　解答方法について

本試験の場合の指摘事項と同じである。

4　そ　の　他

(1)　受験生が少数であるのにもかかわらず、広い分野の中で全体的に調和のとれたよい問題である。

(2)　基礎理科の平均点が非常に低いが、問題自体の難度によるものか、受験者群の特性によるものか検討の必要がある。特に物理、化学、生物、地学のいずれかの科目において同じような問いを設け研究していただきたい。

(3)　出題に於ては、物理、化学、生物、地学、各領域にわたって均等な比重で構成されることを望むが、このことをふまえつつ、問題作成にあたっては、むしろ四領域を色分けすることなく、自然は一つという基礎理科のねらい、立場から相互関連を重視し、全体的、総合的に構成する工夫と努力を今後も望みたい。

(4) 現在市販されている教科書は、指導要領に準拠して構成、編集されていることは勿論であるが、具体的な内容や取り扱い方は、個々に軽重がある。したがって問題作成に関しては、この点、既に十分配慮されていることとは思うが、使用教科書による有利、不利が生じないよう、今後も一層配慮されることを望みたい。

(5) 前年度に出題したから今年度は、その分野を避けるというのではなく、大切な基本的事項については、毎年でも問う工夫をお願いしたい。

(6) 高校教育は、いうまでもなく、その指導要領が一つの基準となるが、一方現実には、共通第1次学力試験が高校教育のもう一つの程度、範囲を示す標準、ないしは指標となることも否定できない。したがって、共通第1次学力試験の趣旨からも、その出題においてはその構成、内容、範囲、程度が、より難解なものになることを戒め、あくまでも平易に、日常の学校での学習活動の成果が、十分に発揮され得るような出題となるよう尽力されることを、特に望むものである。

(7) 57年度以降、高等学校の教育課程の改訂が実施される。理科Ⅰと基礎理科とは、そのねらいや、内容を異にする科目ではあるが、最も類以した科目であろう。理科Ⅰへの先導的役割を担う意味からも、基礎理科の出題にあたっては、その趣旨を十分生かす配慮を望むものである。

(2) 教育研究団体の意見・評価

日本理科教育学会

1 本試験の内容について

Ⅰ ドップラー効果については、採用率の高いと思われる教科書に、全然記載されていない事項である。本文の内容説明を十分に検討すれば、正解へたどるのはそう困難とは思われないが、限られた時間内に解答するためには、はじめてのものには出題そのものに無理がある。

Ⅱ 指導要領から全面的にはずれた問題内容であり、基礎理科の出題としてはまことに不適当そのものである。

Ⅲ 問1は中学理科の内容である。他の問いはどの教科書もふれていることなので、出題に問題はないが、あまりに内容と問いが平易すぎる嫌いがある。

Ⅳ 図の表現がおそまつすぎ、まったく判じ物の感がある。特に図の矢印の意味あいが不十分でナンセンスに近い。その上の問3・問4の問いはひどい。問1・問2は中学理科の内容である。本文の意味することは大事なことであるが、問題としての設定に考慮が不十分である。

Ⅴ ケイ酸については、記載のまったくない教科書がある。ほんの少し軽くしかふれていないのもある。各社の教科書を十分調査したが、問5は地学Ⅱの分野である。最初に地殻について考えると述べて出発したのだから、問3は出題にあたって文章表現上、唐突な感じを与えない工夫が必要である。

Ⅵ 思考力をともなわない、まったく暗記物の感じを与える問い方である。 20 ～ 24 の □ の横に短文があって、出題のポイントをつかませる工夫が必要である。

Ⅶ 学術用語の羅列の感がする。基礎理科では授業において、このような指導をしていない。生体内の働きの一つの過程と次につながる過程とには、物質交代とエネルギー変換にどんな違いがあるかを基礎理科では大事にしなければいけないのであって、その過程内のこまかいメカニズムは生物Ⅱの分野（分子生物学）である。まったく基礎理科の指導要領をふみ出している。

Ⅷ 工業暗化についてふれているのは2社である。他社は、遺伝の基本にふれているだけである。それでいいのであって、工業暗化から遺伝の法則にたちいるよりも、むしろ進化について適者生存、自然選択に内容を導いていけば、授業で学習していなくても良い出題になる。

以上、要するに基礎理科の出題については、必ず文部省検定済のどの教科書もふれている内容について出題されることを切に望みたい。そして、一題ぐらいは、物理・化学・生物・地学の基礎理科の内容を総合的にとらえたものを出題されたい。学習指導要領の理科Ⅰが誕生するまでは……というよりも。

2 追試験の内容について

Ⅰ スペクトルに関しては、2社の教科書には比較的詳しく説明があるが、他の2社にはスペクトルという語句が、記載されているにすぎないといってよい。このような現状にもかかわらず、問題本文の下から2行目の「太陽の元素」というような意味を持つのが、ヘリウムという元素であるとみちびかせるのは無茶であるといってよい。しかしながら、科学用語の語源について、一般高校生に関心を持たせることへのエポックメーキング的示唆としては歓迎する。

Ⅱ 4社の教科書すべてに位置エネルギーの記載がある。比較的基本的な知識とその応用という点で

無難な出題である。

Ⅲ　Aの問1・問2は、他の問いと比較して内容が幼稚すぎる嫌いがあるが、緊張時の落着きを見るのにはよいだろう。大学入試の問題としては、内容にもうひとひねりの工夫が望まれる。

Bの問1は、炭素化合物についての付加反応のことを述べているが、このことについて記載しているのは、2社のみであり、片寄った出題としてのそしりは免れない。

Ⅳ　電気分解についての知識として、ここまで基礎理科という教科で要求するのは無理であり、むしろ、化学Ⅰでの出題というべきである。電解についてややくわしく記載しているのは、4社のうちの1社のみで、電気量（クーロン）の計算などは無理である。物理Ⅰ、化学Ⅰも学習している受験生を対象としての出題といわれても仕方ない。

Ⅴ　1社の教科書には、酵素の記載をまったく欠いているが、程度・内容・表現とも妥当な問題である。

Ⅵ　1社の教科書の本文の内容に、あまりにも忠実である出題は大きな問題を残す。他3社の教科書を採用した高校と著しい差を生ずる。

Ⅶ　1社にのみ潜熱の説明があり、問3は地学Ⅰの内容である。問題の生じる出題である。

Ⅷ　人間と自然、特にエネルギー利用に関する一般的・総合的な出題である点では、内容が羅列的ではあるが妥当である。

以上、全般的にみて、本試験ともども出題にあたってより慎重な検討をされるよう望みたい。本年度のような傾向が続くことは、文部省検定済の教科書での学習だけでは不備であるという感覚を高校に与えると思う。出題者は、物理・化学・生物・地学の専門家であると思うが、総合的視野にたっての内容検討に欠けている点を、共通第1次学力試験の基礎理科の内容について、特に指摘したい。

(3)　問題作成部会の見解

1　問題作成の方針

学習指導要領「基礎理科」の内容を、偏ることなく出題するという方針で問題作成にあたったが、教科内容が多岐にわたっているため、完全にまんべんなく取り上げると設問数が非常に多くなるので、全体としてのバランスと、問題数のかねあいを考慮した。前年度問題量がやや少なかった

のではないかという反省に基づき、今年度は解答欄の数を少し多くした。難易度の見積りは必ずしも容易ではないが、複合教科であることに鑑み、「やや容易」か「中くらい」を標準とし、「難」と考えられるものを除くよう努めた。また基本的な事項の理解度を見ることに重点を置き、基本的な知識やその応用によって導かれる事柄、科学的思考力を見るような出題を行うよう努めた。

2　各問題の出題意図

本試験問題

Ⅰ　A　実験事実からどれだけのことが結論として引き出せるかを考えさせ、論理的な力を評価することをねらいとした。

B　音に関する基本的事項の1つであるドップラー効果について、どの程度理解しているか、基礎的学力を評価することをねらいとした。

Ⅱ　浮力に関する基礎的知識だけを使って、どのように力が釣り合っているか、また、作用し合っているか、種々の場合についての基礎的理解を評価することをねらいとした問題で、単なる知識でなく、それを応用する思考力の評価を行うよう考えた。

Ⅲ　人類が地球の質量をどのようにして求めたかという科学史上のできごとをもとにしてモデル化し、身近かな事象から地球全体を考えさせる意図で出題した。問題では、引力等の基礎的事項の解答をもとめた。

Ⅳ　自然界で行われている、気圏、水圏、岩圏間の水の循環について考えさせる意図で出題した。問題では、河川流出量を、循環から考えた収支と測定値とを比べる形で、間接的に求める方法を中心にした。

Ⅴ　地殻ならびに地球全体を構成する元素と、地殻を構成する鉱物に関する基本的事項について出題した。

Ⅵ　日常生活で身近かな物質、あるいは初等化学でよく取り扱う物質の性質と構造についてどの程度基本的事柄を理解しているかを見る設問である。

Ⅶ　生物の細胞で行われる物質交代およびエネルギー交代に含まれる種々の過程とそのしくみを総合的に問う設問である。

Ⅷ　ガの工業暗化を材料として、個体レベルの遺伝の基礎および集団における遺伝子構成の変化のしくみについての設問である。

3　出題意図と解答結果

本　試　験　問　題

Ⅰ　Aは実験事実から結論を導く思考力をテストする平易な問題であり、また、Bのドップラー効果の基礎的知識を評価するもので、結果は比較的良好であった。

Ⅱ　問1は浮力について基本的知識があれば直ちに正解が得られる問題で、比較的正解は多かった。問2・問3の正答率が極めて低いのは、思考力の不足を示すものであろう。問4は問2・問3よりも正答率はやや高かった。浮力に関する基本的知識の応用力や思考力を試すこのような問題に対する正答率が全般的に低いことには問題がある。とくに、問2で①を正解としたものが意外に多いのは出題者として理解に苦しむところである。

Ⅲ　全体として、基礎的事項についての理解の有無と、それらの応用の計算の出題をしたが成積上位の者はいずれも半数をこえる正答率があり、基礎的事項を理解していれば正答できると思われる。全体の正答率は問1～3が20%～30%、問4が50%であった。

Ⅳ　陸水という身のまわりの現象に題材を求めた基礎的な問題であり、本問題の中でもっとも正答率が高く（53%）、出題の意図が評価されたといってよい。

Ⅴ　地殻及び地球を構成する元素等に関する問1～3についてはほぼ理解していると思われるが、㋐～㋓の元素がわからなかったために問1を誤答しているものが多いようである。問4・5についてはケイ酸塩について基本的な理解がなかったようで、正答率は全体として低い（23%）。

Ⅵ　正答率は20%で非常に低い。この問題は単なる暗記ではなく、基本的な物質についての科学的な理解を求めた設問であり、基本の理解ができている受験生には容易なはずである。たとえば塩化水素が硫化水素よりも強い酸であることや、誤答の多かったBでは、メタンが水に溶けにくく、CH_4のHが酸性を示さないことなどは難かしいことではない。また、Aの誤答の多さから考えると、化学構造のごく基本的な事柄についての理解が不十分と考えられる。

Ⅶ　問1～問4、問6については、ほぼ妥当な解答結果がでていると思われる。ただ設問をよく読まないで記入した間違いが多かったようである。問5については、②にマークした誤答の方が正答を上まわっているのは理解に苦しむ。全般に物質交代とエネルギー交代の各素過程の相互のつながりを理解させる必要があると思われる。

Ⅷ　進化のしくみに関与する要因については出題の意図がよく理解されていたようである。問2の分離比は正答率が高かったにもかかわらず、集団の中で遺伝子の構成をもとに分離比を考える

問3は正答率が低かった。分離比を機械的におぼえるのではなく、配偶子の遺伝子をもとに考えてほしい。

全体の成績は前年とほぼ同じで、基本的な事項についての受験生の理解は比較的良好であったが、できのよくないものが少なくなかった（平均62.2、最高点129 、最低点18）。暗記だけで答えられる設問の正答率は高いが、基本的事項から容易に導き出せると考えられる設問の正答率が低い傾向が見られる。

4　出題形式についての今回の試み

出題形式については、前回のテストとあまり大差はない。本年も図や表の内容を読み取る力を評価することも考慮した（Ⅳ、Ⅴ）。理科全体（物理、化学、生物、地学）を統一的に把握するような広い問題の作成を試みたが、原案について委員会で協議し改善するうちに、当初の意図がうすまるようなこともあった。この点については今後もいっそう努力を要すると思われる。しかし、理科全体を統一的に把握するためには、それぞれの分野内の基本を理解しておくことが必須であることも忘れてはならない。

出題形式に関する事の一つに用語の問題がある。理科の各部会とも協議し、用語の統一をはかったが、物理、化学、生物、地学のそれぞれに特有の慣例もあり、今後も適宜協議を続ける必要があるであろう。

5　問題についての反響意見について

高校で基礎理科の授業を実際に担当している教員は少数であり、適切な批判のできる人は多くはない。共通第1次学力試験における受験生が少なかったこともあり、マスコミで問題に関する批評が発表されることはまれであった。

協議会の高校側委員の意見は、別にまとめられているが、その他、次のような意見があった。

(1)　問題数は昨年より少し多いが、それでも「問題数をもっと多くし、平易なレベルの関連質問を増やし、一問あたりの配点をもっと小さくする方が良い」という意見があった。

(2)　「化学に関する設問が少なく、また、地学などでも出題されたもの以外にも重要事項が多い」という声もあった。重要な基本的事項ならば、設問の形式を工夫して、毎回でも出題して良いで

あろう。このような点については今後検討する価値があると思われる。

(3) 一部の問題（たとえばⅢ、Ⅷなど）は、程度が高すぎるのではないかという指摘もあった。

6 今後の出題に留意すべき点

(1) 何人かの出題委員が、たがいに緊密に協力し、案を出し合い、相互批判を重ね、いろいろの角度から練られた問題を作成することが、今後とも必要である。この点は他の部会についてもあてはまるが、基礎理科という複合教科の部会ではとくに大切であろう。探究学習の重視、科学的方法の習得に重点を置いた設問を工夫するとともに、学習指導要領に含まれた重要事項を、できるだけ偏ることなく出題するように努力を続ける必要がある。

(2) 学術用語や出題の内容は、最新の時点で正しいものであるべきであるが、高校生がどのような教科書あるいは用語によって学んできたかについても配慮する必要がある。今後も他の理科の部会と協議し、用語の統一をはかる必要がある。

(3) 問題の分量は、他の理科と比べて従来少なすぎる感があった。量と難易度について、今後ともたえず考慮を払い、適正な程度が保たれるように努力を続ける必要がある。

(4) 図や表は、わかり易く、誤解を起こさないように細部にわたって注意を払う必要がある。

(5) 基礎理科は教科書によって教科内容の扱い方がまちまちであり、全教科書に出ている事柄のみに限定すると、出題範囲が著しく限定される。本年のⅣのように、教科書に取り上げていない事項であっても、正答率の高い問題もあり、基礎理科の指向する「考え方」についての出題が肝要である。

外　国　語

英　語

(1) 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 構成と内容

(1) 本試験問題の構成と内容

ア　問題の構成は高等学校学習指導要領に即し、全体的にバランスがとれている。

イ　Ⅰは内容的には適切であるが、選択肢を5にしてはどうか。

ウ　Ⅱは文構成力をみるものか、綴りをみるものか明確でない。選択肢を工夫して綴りの問題（英語ⅡA）としてはどうか。

エ　ⅢA、Bの発音問題は紙上テストである限り必ず問題点があるわけだが、類型化と難化の傾向は極力避けるべきである。

オ　Ⅳは表現力を見る問題としてはおおむね妥当であるが、もっと解答しやすい形で問題数をふやしてはどうか。

カ　Ⅴの文整序は解答に手間どるが望ましい問題形式である。ただ内容に主題とまとまりがあり、でき上がった文が明確な文でなければならない。

キ　Ⅵは文内容を読み取る問題であるのが望ましいと思うが、部分的sentenceのTrue-Falseの問題になってしまい、単純すぎないだろうか。

ク　Ⅶは語法的に興味のある個所が多いが、内容のまとまりに欠けるうらみがある。長文の読解問題は、単なる長文でなく内容に豊かな人間性が読みとれるようなものであってほしい。

ケ　Ⅷは読解力を見る問題としては適切であるが、やや長すぎるのではないか。

(2) 追試験問題の構成と内容

全体的には本試験と同様なことが言えるが、特に次の点に言及したい。

ア　Ⅵは本試験が3問とも同一の設問であるのに対して、設問に変化があり大変望ましい。

イ　Ⅶは本文全体についての設問となっており、本試験のⅦと比べて全文の読解という点ではより良い。

(3)　英語Ａ問題の構成と内容

ア　Ⅱは英語Ｂと比べて綴りの問題の要素が強くなっており、ねらいが明確であるという意味で適当と考えられる。

イ　ⅢＢは英語Ｂの同種の問題と比べて下線を引いただけ親切な問題であると言えよう。また、ねらいが発音のみに集中してすっきりしている。

ウ　その他英語Ｂと同様に全体として適切な出題である。

2　範囲と程度、設問数等

(1)　本試験問題の範囲と程度、設問数等

ア　範囲・程度に関しては全体として適当である。

イ　Ⅰについては出題数がやや多すぎる。全体の中での配点の割合が25％であるが，20％ぐらいでよいと思う。

ウ　Ⅱの設問数は妥当であるが、問題形式の特異性もあって必ずしも容易ではない。前項でも触れたように、この種の問題形式は再考を促したい。

エ　ⅢＡは選択肢と正答数が10：３になっているが、10：４位ではどうか。ⅢＢは選択肢の紛らわしさに妙味がある反面、音声学的・音素論的厳密さを必要とする場合があるので、基本的で頻度が高く、日本人として間違い やすいものに限った方が無難であろう。

オ　Ⅳの表現力を見る問題は、あまり手間どらないような配慮があれば、もう少し問題量をふやした方がよい。表現力や文構成力の分野をもっと強化してはどうか。

カ　Ⅴは全体として適当である。会話文をとり入れたのはよい。今後も続けてほしい。

キ　Ⅵは３問とも同一の設問で単調といわざるを得ない。追試験のように変化があった方がよい。

ク　Ⅶは高校教育の現状を考慮して語彙の面で工夫してあるのはよい。問題なのは⑤⑥⑦の設問が続いていることである。内容・程度・全体のバランスから見るとⅦのウエイトが大きすぎるのではないか。

ケ　Ⅷは本文がやや長く、設問文の１部（問１）に不十分なところがあるのを除けば共通１次の

問題としては標準的といってよい。

(2)　追試験問題の範囲と程度、設問数等

各問題が本試験に準拠しており、全体的に適切といえるが、強いて言えば本試験よりも答えやすい問題が多い。

(3)　英語Ａ問題の範囲と程度、設問数等

ア　英語Ａが平均９単位であることを考えると、ややむずかしすぎるのではないか。特にⅧは本文の量が多いためにかなりむずかしく感じるであろう。しかし、使用されている構文及び単語は無理がなく適切である。

イ　英語Ａと英語Ｂの問題量をどのように考えるかはむずかしいことである。単位数から考えると英語Ａの方がかなり少くなるべきであるが、試験の所要時間から考えると、ほぼ同じでよいであろう。

3　出題方法（試験時間、配点、問題文の表記、解答方法）

(1)　本試験問題の出題方法

ア　試験時間について——100分に対して問題量がやや多いのではないか。

イ　配点について——個々の小問の配点は妥当である。２点・４点・５点の３種で明解である。しかし、４点・５点の設問が比較的多かったので得点に開きが生じたようである。

ウ　問題文の表記について——ⅢＢのように分かりにくいもの、Ⅵのように統一すべきものもある。

エ　解答方法について——全体としてバラエティに富み、よく工夫されている。

オ　その他——ｉ）選択肢の数は４、５、６の３種になっているが、４を５に、６を５にしてもよいものもあるように思われる。

ii）型にはまらない出題方法を毎回とり入れてほしい。

(2)　追試験の出題方法

ア　試験時間について——Ⅶ、Ⅷの問題が本試験に比べて解答しやすい形式になっているので、本試験ほど問題量が多すぎるとは感じない。

イ　配点について――問題はない。適切である。

ウ　問題文の表記について――本試験と同様ⅢＢの表現が分かりにくい。

エ　解答方法について――特に問題はない。

オ　その他――本試験に比べて無理なく解答できる問題が多い。反面、型にはまった記憶中心の問題が本試験より多くなっているように思う。

(3)　英語Ａの出題方法

英語Ａの科目の特徴を生かすべく、口語表現や対話文にもっと配慮してほしい。

4　そ　の　他

(1)　長文問題に一定の主題をもつ論説文を加えてもよいと思う。現代の口語英語を重要視するあまり、軽妙な文体にのみ傾くのは物足りなさを感じさせる。

(2)　外国語がいつも最終日の最終時間にならないような方策を検討してほしい。

(3)　本試験Ⅷの問１ 69 の正解は④となっているが、ここの選択肢は問題があると思う。become boredとfeel unhappyとではかなりニュアンスが違うのではないか。正解が④にしろ③にしろいずれも不完全といわざるを得ない。

(4)　本試験Ⅳの問３で be supposed to～とbe taken for granted～ が全く同意であるかどうか。

(5)　追試験Ⅰの問８で It makes no difference to me whether～ が It makes no matter to me whether～でもよいのではないか。

(2)　問題作成部会の見解

1　問題作成の方針

問題作成の方針は、今年も基本的には従来と全く変らないが、特に次の諸点に留意した。

(1)　入学志願者の高等学校段階における基礎的な学習の達成度を判定することを目的とする。

(2)　高等学校学習指導要領に準拠し、同解説を参照する。

(3)　高等学校教育の正常な発展の障害とならないよう、受験者に過重な負担をかけるような問題を出さないよう十分配慮する。

以上の諸点を考慮しつつ、具体的には、受験者が高等学校において、まじめに学習していれば60％程度の正答率が得られるような出題を目途とし、問題の難易度および分量は昨年度と同程度を目指すこととした。

2　各問題の出題意図

(1)　英　　語　Ｂ

Ⅰ　語彙、語法、文法などの基本知識に関する問題。指導要領に盛られた枠を越えることなく、できるだけ各品詞にわたるよう配慮して出題してある。

Ⅱ　文中のある箇所にはいる語を推測させることによって語彙力、表現力をみようとした。この形式の問題はしばしば誤解されているようだが、綴字の問題ではなく、不完全に与えられている綴りはヒントの役割を果すものであり、同時に受験者が直観的に推測した語を検証する役目も持つ。

Ⅲ　発音問題　スピーキング、ヒヤリングはリーディングなどと共に英語学習の大きな柱であり、本来は実際のヒヤリングのテストの実施が望ましい。マークシート方式によるテストでは自ら限界はあるが、本問では実際のスピーチに一歩でも近寄る意図で、文の中で語の発音の問題を扱ってみた。

Ａ　文の中である語の果たす役割と、その役割に伴うアクセントを含めた発音の移動に関する知識をためすもの。

B　アクセントとの相関で発音の知識をためすもの。

Ⅳ　表現力をみる問題で、与えられた文をパラフレーズすることによって英語学習者の構文や表現に関する能力をみようとしたもの。

Ⅴ　文と文のつながりについての理解力をためすことによって、文の理解のみならず、文の構成力、論理的思考力をみようとしたもの。

Ⅵ　数個の文からなるパラグラフの要点を把える問題。

Ⅶ　かなりの長さの文の中に含まれる会話的な表現や文について、全体的な内容と関連させながらその意味を問う問題。

Ⅷ　約500語よりなる長文を読ませ、その内容の理解度をためそうとした問題。数個のパラグラフからなる。比較的長い文章をかなりの速さで読んで全体を把握しようとする、いわゆる速読の必要は近年重要視されている。本問は全体と関連させてある部分の正確な理解と全体の内容的把握をためそうとした。

(2)　英　　語 A

Ⅰ　出題意図は英語Ｂ大問Ⅰに同じ。指導要領の枠内での出題だけにより基本的な知識をためす問題になるよう留意した。いくつかの問題は英語Ｂと共通である。

Ⅱ　文中の欠けた語を推測し、なおその語の正しい綴字の知識をためすもの。

Ⅲ　A　語のアクセントに関する問題。基本的な語とその派生語との間のアクセントの移動に関する知識をためそうとしたもの。

B　語の中の音（特に母音）に関する正確な知識をためす問題。

Ⅳ　出題意図は英語Ｂ大問Ⅳに同じ。

Ⅴ　出題意図は英語Ｂ大問Ⅴに同じ。

Ⅵ　短文を読んで、そのタイトル、要旨を問い、全体の文章の内容の理解度をテストする。

Ⅶ　中程度の長さの文について与えられたステートメントの正誤を判断させ、その内容の把握力をためそうとしたもの。

Ⅷ　いわゆる長文問題。テレビを家へ持ち込むことに対する老人の態度をユーモラスに描いた文章について、その内容の理解をためす問題。全体と関連させて、ある部分の正確な理解と全体の内容的把握をためすもの。

3　出題についての今回の試み

基本的には昨年度のものに準じて出題したが、今回は新しい試みとして特に次の５点を考慮した。

(1)　昨年度の大問Ⅱの文中における単語を入れ替えても意味が変わらないものを選ばせる問題は、本質的には大問Ⅰの狙いと同じなので、今回はこれを大問Ⅰに含めた。

(2)　大問Ⅲの発音問題は、文章の中での品詞の違いによって生じる発音の変化を問うことにした。

(3)　大問Ⅳ 昨年度は表現力、構成力をみる問題として選択肢中に語順を与え、その中から正しいものを選ばせる問題を出したが、正答率がやや高すぎたので改める必要が生じた。今回はこれに代わるものとして、ほぼ同じ意味の文に書きかえさせる作業を要求し、選択肢も単語、句を含め８つとした。

(4)　大問Ⅴの文順を問う問題では、選択肢を５つから６つに、大問Ⅵ～大問Ⅷの読解力をみる問題では選択肢を従来の４つから５つに変えて解答の偶然性を防いだ。

(5)　大問Ⅶでは会話・対話文をとりあげた。従来多かった論説文の読解に限ることなく、出題される文章の種類の範囲を拡げた。また単に構文力を問う問題から慣用表現を問う問題に改めた。

なお、昨年度は問題量が多すぎるという批判があったが、速読の必要性を訴える意見も多く、あえて問題量を減らすことはしなかった。

4　出題意図と解答結果

本年も正答率60％を目標として出題したが、結果は50％をやや下回ることになった。各問別に考察すると次のとおりである。

(1)　英　　語 B

Ⅰ　語彙、語法及び文法に関する基本知識を問う問題であり、語彙については、特定の品詞に偏ることなく、名詞、動詞、形容詞、前置詞、助動詞、代名詞にわたっての設問がある。全体としての語彙のレベルも高等学校の教科書に出てくる範囲を越えないように配慮してある。文法、語法についても基本的な設問にすべく留意した。

解答結果についてみると、問18　It is necessary that every member ☐ inform himself of the rules of the club as soon as possible. 問23　They insisted ☐

use of the opportunity. 問25　I went all the way to see my doctor, ☐ find him absent. の３題は正答率のもっとも高い問題である。これは、いずれも慣用的な表現を問うものであり、セット・フレーズとして記憶した受験者には容易な問題であったと思われる。一方、正答率の低いものは、問１ Mr. Jones is angry ☐ never being invited to the parties. 問４　The translation is quite true ☐ the original. 問13　His salary is ☐ what it was seven years ago. などであり、前置詞の正確な用法の理解度が低いことを示している。

個別的に見れば、問題の難易度にばらつき認められるが、全体の平均点は６割程度でありほぼ妥当な出題であったと思われる。

Ⅱ　文中の特定個所に入る語をスペリングのヒントによって推測させて、語彙力及び表現力を試す問題。問２　He seemed ☐ with this argument of mine. の正答率が低く、平均点は５割弱であるが、得点分布は正常分布曲線を描いている。

Ⅲ　発音問題。Ａは文中における語の機能によりアクセントの移動する現象に関心を向けさせる問題。形式自体、新しい設問ではないが、発音を固定したものとして考えることなく、文脈における機能に目を向けさせる意図をもつ出題。

Ｂについては個別的な発音を、アクセントとの関連を問う設問であり、ごく平易な語の正確な発音の知識をたずねる問題。もっとも正答率の低いのは問４の volume の問題で、その理由としては日本語式発音の干渉があげられよう。

Ａ、Ｂを総合的に見た平均点は５割強である。

Ⅳ　書きかえ問題。表現力を試す設問で同義的な文のパラフレーズを与え、文の構成要素及びその配列を問い、文を完成させることを目的とする。正答率は約５割。やや予想よりも点が低いとはいえ、各問とも理想的な分布曲線を示している。もっとも正答率の高いのは、問５で I cannot understand their behavior. のパラフレーズを問う問題。正答率が低いのは問６ If the patient takes this medicine, he'll recover from the disease. をパラフレーズさせる問題。

Ⅴ　文順についての設問。短文の配列を正して論理的にまとまった文章を構成することを目的とするもの。口語体と文語体の英語を資料とし、前者の正答率は約４割で後者は約５割。昨年度より選択肢を５つより６つに増やしたのが今年の新しい試みであり、昨年度より正答率もいくぶん低下した。

Ⅵは100語前後よりなる文章を読ませ、全体の趣旨を把握する能力をみることを目的としたものである。正答率は問１→６割弱、問２→４割強、問３→６割弱で、問２がやや難しかったきらいはあるが、得点分布は全問とも正常分布曲線を描いており、まず出題意図は達せられた。

Ⅶは250語ほどの、主として会話体よりなる文章を読ませ、全体の趣旨、及び会話特有の簡潔な言いまわしの理解力をみることを目的としたものである。Ａ（問１～問７）は下線部分の意味を問う問題であるが、問５（正答率２割弱、上位の正答率４割弱）を除き４割～６割の平均正答率を示し、得点分布も正常曲線を描いており、ほぼ出題意図は達せられた。大問Ⅵに較べて、正答率はやや下回っているが、従来この種の問題が少なかったので受験者が不慣れであったためと思われる。これはあらかじめ予想されたことで、問題が難し過ぎたとは思われない。

Ｂ(問１～問２)は内容の把握力をみる問題であるが、正答率６割弱で、出題意図は達せられた。

問Ⅷは約500語よりなる長文を読ませ、内容の理解度をみようとしたものである。設問は下線部分の意味を表わすものとして最も適当な表現を選ばせるもの、空所を埋めるのに最も適当なものを選ばせるもの、本文の内容と一致するものを選ばせるものの３種類７問であるが、これらはいずれも密接に関連しており、全体としては、あくまでも内容をいかに正確に把握しているかをみることを目的としている。Ａ（問１～問４）は下線部分の意味を問うもの、Ｂ（問１～問２）は空所を埋める問題、Ｃは内容の理解をみる問題であるが、全体的に正答率は低く、正答率の最も高い問題（Ａの問２）でも４割強であり、Ｃは両問正答率は１割に満たず、識別力は劣っていたと思われる。特にＡの問３に関しては、上位得点者グループも下位得点者グループも正答率に差がなく、識別力がなかったと思われる。大問Ⅷの正答率が低かった理由としてまず考えられる事は、問題そのものが難し過ぎたのではないかということである。しかし今回出題された文章は、それ程難解なものとは思われない。客観テストでは、ともすると文法的知識のみを問われがちであるが、内容の理解こそ英語教育の究極の目標であることを考慮するならば、この程度の問題はむしろ当然出題されなければならないと考えられる。次に考えられることは、この問題も含めて、英語の問題量が多過ぎたのではないかということである。大問Ⅷが最後に位置していることを考えるならば、これは無視出来ない要因であろう。(白紙解答者が、大問Ⅶまでは5,000人以下であったのに対し、大問Ⅷの問１～問２では8,000人を上回り、問４以後では10,000人を超えている。)なるほど、問題数は前年度と同じであるが、選択肢が全体的に多くなっている。このことが、結果的には出題量の増加と同じ影響を及ぼしたのではなかろうかとも考えられる。この選択肢の増加は、単にこの大問Ⅷの正答率の低さだけでなく、全体の正答

率の低下（昨年度62.75％、今年度47.09％）とも関連しているように思われる。選択肢の増加は本文の難易とは関係なく、受験者の負担を重くする働きをするものと思われる。大問Ⅷの C は7個の選択肢から2つの正解を選ばせる問題であるが、2つとも正答を与えたものはわずかに1割弱にすぎなかったことはこの点を物語っているように思われる。

(2) 英　　語 A

英語Aの出題意図は前掲の英語Bと基本的に変わるところはない。ただし、英語Bに比べると語彙のレベル、文法項目については平易になるよう努めたが、結果は予想点をかなり下回ることになり、受験者の基礎学力の不足が顕著である。大問Ⅰについては問11 It is no [　] that a man of his ability is so successful. 問17 Oil has [　] an important part in the progress of civilization. の正答率はいずれも3割程度にすぎず、大学入学時の学力としてはいかにも低い。着実な基礎学力の向上が望まれる。おなじ傾向は大問Ⅱ、Ⅲについても認められ、たとえば、問4 loud, allow, shout, flow の発音の異同に関する正答率は2割強にしかすぎず、大問Ⅳ、Ⅴについても正答率は平均して2割程度であり、全体としてきわめて低い正答率となったのは残念である。英語Aの学習時間が英語Bのそれよりも少ないことを考慮して作成された問題であり、それでも英語Bと英語Aの正答率に約14％のひらきがあることは憂々しいことである。その原因は単に学習時間数の問題だけに求めることは出来ないように思われる。

5　本年度の問題についての反響意見

試験実施直後の新聞評を見る限り、今年も概して好評だったように思う。「全体として特に難しい単語や表現は見当らず、妥当な問題だ。」（「毎日」）、「昨年と同様、語彙が難しすぎることはない。質的にも高校の授業をしっかりやっていれば、つまずくようなことはないだろう。」（「読売」）、「昨年、やや抽象的な評論文を使っていたのに比べて身近な話題が採用されるなど、工夫されていた。」（「朝日」）、とりわけ評判がよかったのは、対話・会話文を取り入れた英語Bの大問Ⅴ、大問Ⅶだった。「大問Ⅶは、単語は実に平易なものばかり使いながら、下線部の表現は、文全体の流れをよくとらえていないと誤読するおそれのあるもので、読解力をためすには良問である。」（「日経」）、「大問Ⅴや大問Ⅶは会話・対話文で、ことし初めて出てきたが、生きた英語につながっていくことになり歓迎する。」）（「産経」）

その反面、批判的な意見や要望もなかったわけではない。主要なものをあげると、次の三点である。

(1) 問題量に関するもの。「英語Bは問題量が多く、後半の問題は十分考える余裕がないという批判があった。」（「赤旗」）、この批判は、現に受験者の間に、「英語は時間が足りなかった。」、「英語のレベルは高すぎたように思う。」、「英語には参った。」（「朝日」）等の声が高かったこと、及び平均点が昨年度と比べて30点（15％）ばかり下回ったという事実によって裏づけられているように思われる。

(2) 選択肢に関するもの。「あまり細部にわたる異同に関して受験生のケアレスミスを誘うような選択肢は避けて、もっと本文の要旨についての大局的な理解をためすようなものにしてもらいたかった。」（「日経」）

(3) 聞き取りテストに関する要望。「マークシート方式の限界ということから、前回もそうだったが、時代の要請から現場で最近重視されているヒヤリング、スピーキングの面がどうしても弱い。この点を工夫すると、高校教育の実態により合ってくるのではないか。」（「東京」）

6　今後の出題において留意すべき点

(1) 発音問題に関して

発音に関するペーパーテストの限界はたびたび指摘されている。なお工夫の余地はあろうが、いずれにせよ音声テストに代わる適切な問題を作ることは困難である。

(2) 問題形式に関して

問題の形式については年度毎に考慮がなされているが、全般的に型にはまらないよう注意する必要がある。特に表現力・文構成力をみる問題については、なお一層の工夫が望ましい。本年度の大問Ⅱについても、「文構成力をみるものなのか、綴りをみるものなのか明確でない」（連絡協議会報告書）という批判もあるので、検討が必要であろう。

(3) 語彙に関して

難しいものは出題しないよう心がけたい。ただし、高校生が容易に類推できるようなものについては出題してほよいであろう。難しいと思われる語彙を他の語句に言いかえると不十分になるような場合は注をつけるという工夫があってもよい。ただやさしい語彙だけに出題範囲を限るとい

う安易な行き過ぎがないよう注意したい。

(4) 分量に関して

共通第１次学力試験の趣旨を考えると、やさしい問題を多く出すことが望ましい。特に速読の必要性からみて、いたずらに分量を減らす方向を取ることは危険である。適正量を慎重に目ざしたい。前半の文法・発音に関する問題に最初に必要上の時間をかけすぎて後半の読解に関する問題に手が回らなくなるため、一般に問題の分量が多いという印象を与えたということも考えられる。この場合は受験者に対する高校側の指導もあらためて必要となるであろう。

(5) 英文の内容について

連絡協議会報告書に「現代の口語英語を重要視するあまり、軽妙な文体にのみ傾くのは物足りなさを感じさせる」とあるが、これは大問Ⅴ問１、及び大問Ⅶをさして言っているものと思われる。問題作成委員会では高校生が口語英語にも関心を持ってもらいたいという意図で出題したものであり、大問Ⅶは論説文になっていることをみてもわかるように、特に口語英語を重視するつもりはない。むしろ「対話文をとり入れることは望ましい」という要望も多いので今後ともこの点配慮すべきであろう。

本年度の読解問題の内容は一般に好評であった。今後とも様々な種類にわたって、知的興味のある内容の文章を出すよう心がけたい。

(6) 読解問題の設問の順序について

読解力に関する問題（大問Ⅶ、Ⅷ）については、その究極の狙いは全体の趣旨を把握させることであるから、大意を問う問題を先に与えてから、部分についてくわしく問う問題を与えるようにすべきだという意見を尊重したいと思う。これはＡ、Ｂに共通した検討事項である。

(7) 問題の難易度についての配慮

今年度の読解問題は昨年度のそれより幾分多い。長文問題がやや長すぎるという批判もあるが、速読の必要性が強調されている現在、長いものは読み易くするという配慮をした上で、長文問題を取り上げていきたい。

7 その他

我々が行っているテストはマークシート方式という極めて大きな制約を受けている。例えば、表現力をためそうとする時、実際には表現の仕方はいろいろあるにもかかわらず、我々が利用できる形式は、書き換えとか語順の配列とかそれに類するものしかない。この種のテストで最も大きな制約を受けるのは話す能力、聞く能力のテストである。今回はアクセントと母音に関して出題したが、実際の発音のテストの代替物になるものではない。あくまで発音の知識の問題であり、発音に関心を引き留めるための苦肉の策と言えなくもない。スピーキング、ヒヤリングも英語学習の主要な柱である以上、いつまでもこれらの問題の出題を避けて通るわけにはいかない。問題作成部会はこれらの実現について積極的にとりくみたいと考えているが、実施についての技術的、予算的な問題もあり、全受験生に対する公平性も考えながら大学入試センターの関係委員会とも連絡をとりつつ検討を進めていきたい。

ドイツ語

(1) 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 はじめに

事前の長期に渉る準備、試行テスト、第1回本試験等をふまえて第2回本試験が実施されたのであるが、ドイツ語試験問題は、内容、程度、分量等大部分が高校におけるドイツ語教育の現状に適ったものであったと言えよう。第1回に比較しても苦心のあとが見うけられ、構成、内容とも一段と改良されたようである。以下具体的に出題された項目にそって意見を述べる。

2 本試験について

(1) 発音・音声に関する問題（Ⅰ）

ア　問題の分量、配点とも適当である。

イ　問2の 3 で長母音、短母音の違いを問う問題は、高校におけるドイツ語教育の現状からは、少々無理がある。しかし、本試験問題にあがっている語は頻度の高いものであるので、それほど問題はないが、今後こういう問題を出題されるときには、この点を考慮していただきたい。

ウ　問2の 4 の①Meyer及び⑤ bayrisch は頻度が少ない語であり、ほか（Mayer、Meier、Bayern等）の語の方がよかったのではないか。Mayer、BayernをそれぞれMeyer、bayrischにしたのはそれなりの理由があると思われるが、受験生を何か迷わす結果となっている。

(2) 初級文法に関する問題（Ⅱ）

ア　全体として適当なむずかしさと、適度なやさしさとを含んだ適正な問題と言えよう。

イ　A、問10 16 は、Sorgenとumの結合を問う問題ではあるが、Zukunftと前置詞の結合に受験生は迷わされる。したがってSorgen＋umは難しい問題ではないが、例文に工夫が欲しい。

ウ　A、問15 21 は、完了不定詞および動詞の格支配を問う問題と見うけられる。2つの文法事項を問う問題は、問題として悪いとは言えないが、それだけに難しい問題となるので、頻度数

の高い語を使って欲しかった。

エ　B、問2 23 は、Bのほかの問いと比べても、構成が1つだけ異なり、それぞれの例文もかなり難しいものになっている。（①再帰動詞の現在分詞、③⑤zu不定詞、④助動詞）意味も全例文おたがいに関係のないものである。問題の意図が受験生にはわかりにくいものとなっている。こういう問題の構成方法は再考されたい。

オ　B、問6 27 の現在分詞の用法は高校の授業においてはなかなか時間をかけて教えられない項目である。

(3) 作文に代り得る問題（Ⅲ）

ア　全体として内容、むずかしさの点で適度のものである。

イ　設問の問い方をもう少し簡単なものにできないであろうか。

ウ　配点について少々問題がある。ドイツ語の特徴として、語順は片方がわかれば、もう片方は必然的にわかる場合が多い。例えば、問1 28 、29 は、 28 ができたものは 29 は必らずできるものである。両方で6点の配点は全体からみて高すぎる。

エ　問1から問6まですべて「接続」を問う問題である。

オ　イ、ウに述べたことから考えても、作文に代り得る問題は今後さらに工夫を期待する。

(4) 会話の問題（Ⅳ）

ア　会話の状況が全体としてよくわかり、身近なテーマをとりあげており、非常によい問題である。

イ　今後、会話の問題を出される場合、状況、テーマがはっきりして平易な文章であることが望ましい。その点、この問題は適切であったと思われる。

(5) 長文理解の問題（Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ）

Ⅴについて

ア　Ⅴは、問題の内容および難易度は適切であったと思う。

イ　文章の長さに比して下線部が多すぎる。 46 は不要ではないかと思われる。また、 47 、 48 はどちらか一方だけ問えば、生徒の理解力を知るのには十分である。

ウ　いろいろな形式の設問があって生徒の理解力を知るのにはよい問題と思われる。

Ⅵについて

ア　Ⅵの問題文は、内容、難易度いずれも適切であったと思う。

イ　配点に問題がある。

53 、 54 がそれぞれ２点は低すぎる。Ⅱの初級文法の問題はそれぞれ２点ではあるが、このⅥの問題は前後の内容を理解することが要求される。また、問５以下が６点であることを考えても、３～４点与えるべきである。

ウ　56 は、前後の文章から判断するには難しすぎる問題である。

エ　57 、 58 、 59 、 60 は、いずれも内容を問う問題で、４問も問う必要はない。しかも、配点がそれぞれ６点で全体のバランスから考えると、配点が高すぎる。特に、 60 は、 57 、 58 、 59 が理解できた生徒は、必ず正答を得ることができる。こういう重複する設問はさけるべきである。

Ⅶについて

ア　昨年より１題増えてこの問題が加えられたと思うが、こういう文の要旨を問う問題は必要である。

イ　この問題は内容も、Ⅴ、Ⅵの問題と違った現代的なトピックスを扱っており、しかも難易度も適正でよかったと思われる。

「長文解釈の問題」の配点は全体の約40％である。非常に高い配点率なので、それだけ問いの仕方に考慮が欲しい。例えば、Ⅵにあるようなものでは、全体のバランスがくずれる。

3　追試験について

(1)　発音に関する問題（Ⅰ）

ア　子音に関する問題であるが、全体的には良い問題だと思われる。

イ　問題の分量及び配点は適当である。

ウ　問２、 4 、 5 は高校の授業ではあまり時間をかけていない事項である。しかし、発音の問題として必要な事項であるので、今後も頻度の高い単語のみに制限されることを望む。

(2)　初級文法の学力をみる問題（Ⅱ）

ア　多方面にわたる問題が提出されていて問題としてよい。

イ　12 、格変化を問う問題であるならもう少し例文に工夫が必要であろう。（‘ablehnen’の格支配を問うのであるならば、むづかし過ぎると思われる。）

ウ　27 、例文の内容が５つとも異なっていて「受身」を問う問題とは判別しにくいし、受験生にはむづかし過ぎると思われる。

(3)　作文に代りうる問題（Ⅲ）

ア　本試験と比べると、多方面にわたる問題が尋ねられていて良いと思う。

イ　問５、このような問題は非常に良い。

ウ　本試験と同じく、設問の仕方に工夫が欲しい。もう少し、わかり易く、簡単にしてもらいたい。

(4)　会話の問題（Ⅳ）

ア　ひと言でいって、次に挙げる理由によって、この問題は良くない。

a　会話というものは、自問自答であろうと、ある状況が想定されて成り立つものと思われる。ところが、問１から問５までの状況はバラバラである。受験生にとって、たった１あるいは２文で状況を判断するのはむづかしく、各人の想像によってちがった場面を想定するかも知れない。

b　同一人物が語るとしても、さまざまな状況が考えられ、これだけの内容でただ一つの答を要求するのは困難であるし、少々むづかしい感じがする。例えば、問３の 42 は、必ずしも③を選ばなくても結びつくかも知れない。

イ　本試験のような形式こそ「会話の問題」としては望ましいものではないだろうか。

ウ　本試験と故意に形式を変えたのであろうが、その必要はなかったのではないか。

(5)　長文理解の問題（Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ）

Ⅴについて

ア　内容及び難易度は適切であった。

イ　多方面にわたる問いが出されており、いい問題である。

ウ　50 は受験生に少しむづかしいと思われる。この熟語は頻度が低く、前後の関係からも判断しにくい。また、これがわからないと、この長文が理解できないという種類のものでもないようだ。

Ⅵについて

ア　独文解釈の問題と見うけられる。内容は身近な話題で、難易度も適切であったと思われる。

イ　問２から問５まで、下線部の意味を問う問題が続いているが、あまりにも短かい範囲に集中していて、理解力を問うには重複した感じがする。また、短かい範囲で設問を多くした場合には配点を低くすることが望まれる。

ウ　上記イから、ここの配点は高く、全体から見てバランスが取れていない。

Ⅶについて

ア　本試験と同じく、こういう文の大意を問う問題は必要であろう。

イ　本試験と比較して、文章が少し抽象的で、話題も身近かなものでなく、受験生にはこの方がむづかしかったのでなかろうか。

がいして「長文理解の問題」は配点が高く、それだけに、本試験との差をなくすることが必要である。また、問いの仕方にも、もっと工夫がほしい。

4　むすび

ア　本試験・追試験ともに欠けていると思われる問題――スペル、語い力を問う問題／１つ１つの文章を組み合わせて、１つの内容のある話題を作る問題。

イ　本試験と追試験問題の形式、内容とに変化を持たせようとした努力は理解できるが、Ⅳ「会話の問題」のように、あまりにも本試験問題と追試験問題との差があって、追試験問題のように「会話の問題」とは判定し難い問題形式となったのは再考を要するところと思う。

ウ　本試験・追試験とも全体的にみて問題は平易で、基礎学力を問うものが多く、また話題も身近かなものであったのは、高校におけるドイツ語教育をよく理解していると、昨年度に続いて敬意を表したい。

エ　ある意味において、この共通第１次学力試験の試験問題が高校におけるドイツ語教育の指針であり、生死にかかわるといって過言ではない。今後とも、この点をより一層理解されて努力されることを切望する。

(2)　問題作成部会の見解

1　問題作成の方針

問題作成に当たって、高等学校の指導要領に基づいた正常な学習によって到達できる範囲内の学力をみることを目的としたのは当然であるが、ただ高等学校におけるドイツ語教育には、学習時間や学習量に関して、英語と異なった点があることにも留意した。

出題のドイツ語は、当然のことながら実際に用いられている現代標準ドイツ語に限り、語、語義、用法、発音とも、古いものや、一部の地域、一部の層の人々にしか用いられないものは排除した。語いは基本的なものに限るよう配慮し、出題形式は単なる受験技術で解答できるようなものを避け、出題の内容や範囲は解釈のみに片寄ったり文法のみに片寄ったりすることのないよう注意を払った。ただしマークシート方式ではほんらいの意味での話したり聞いたりする能力のテストは不可能である。しかし発音に関する問題が全く出題されないとなると、ドイツ語の発音にとって最も重要なアクセント（強勢）にさえ注意が払われなくなり、かえって高等学校におけるドイツ語教育の重要な部分が欠落するかも知れないという懸念があるので、今年も出題した。

2　各問題の出題意図

Ⅰでは、アクセント（強音）の位置、注意すべき母音・子音の発音を問うことによってドイツ語の標準的な発音の原則が理解できているかどうかをみる。

Ⅱでは、名詞、代名詞、冠詞、形容詞の性・数・格の変化、動詞・助動詞の変化、前置詞の格支配、副詞や接続詞の用法、さらにこれらと関連させて、時称、話法、態語順などの基本的な文法知識が習得されているかどうかをみる。

Ⅲでは、作文に代わりうる問題として、設問のドイツ語の文に相応する別なドイツ語の文を、与えられた５つの単語を適宜並べ換えて完成させ、５つの単語の中の２語を空欄に入れさせる形で、文構成能力をみる。

Ⅳでは、本試験において会話文を、追試験において同一人物の語る短文を出題し、日常的な状況における言葉の流れが把握できるかどうかをみる。その場合、単に文脈から一定の解答を導きださ

せるだけでは、たとえばⅥの一部と出題意図に重複が生じるので、ここでは日常語特有の言葉も問題にするよう心がけた。

Ⅴ、Ⅵ、Ⅶでは、それぞれ文体の異なる比較的長い文章を読ませ、それらの文章の細部にわたる論理的関連を理解できるかどうかを問うと共に、大意を的確に把握できるかをみる。その際、語りや文章構造の難易なども十分に考慮した。

3　出題意図と解答結果

全体としては、出題者が予想した正答率にほぼ近かった。ただしⅡに関しては、他の設問に比して正答率がやや低かった。

4　出題形式についての今回の試み

Ⅰの問題について

前回の出題形式とは異なり2問にわけ、アクセント、母音の長短、複母音・子音の発音等について多面的に問うこととした。

Ⅱの問題について

前回の形式に加え、Bにおいて、文法知識の応用能力を問うことに重点をおく、やや総合的な形式をとり入れた。

Ⅲの問題について

作文の問題をマークシート方式に合致させることは難しいが、この方式の制限の中で、今回は受験者の文構成能力をより正確に評価できるように、5つの語句を与え、それを適宜並べ換えて、設問のドイツ語の文に相応する文を作らせた上、適当な個所を2つ抜き出し、そこに選択肢の番号を入れさせる形式をとった。なお、ドイツ語における副文の語順の重要性に鑑み、本試験では副文を重点的に出題した。

Ⅳの問題について

本試験では、会話文をあたえ、一定の状況のなかでの自然な言葉のやりとりから正解が引きだせるようにした。また追試験では、一定の単文から生じうる一定の状況を受験者自身に想定させ、その状況のなかでの可能な後続文を選ばせた。

Ⅶの問題について

長文の意味をすばやくかつ的確に読みとる能力をためすために、設問は2つだけとし、要旨のみを問うた。

5　本年度の問題についての反響意見

(1)　発音の問題に関しては、分量、配点とも適当であるという意見が多かったが、使用頻度数の少ない単語は今後とも避けてほしいという要望がみられた。

(2)　文法問題に関しては、全体としては適正であるという評価を得たが、文法の知識を総合的に問う場合は、出題の意図が多岐にわたるため、受験者にとって難しくなる傾向があるという指摘もあった。

(3)　作文に代わりうる問題については、設問の問い方をもう少し簡単明確なものにした方がよい、との指摘があったが、全体としての内容、難易度の点に関しては、適度なものと評価された。

(4)　本試験のⅣの問題については、会話の状況が明確であること、テーマが身近であること、文章も平易であることなどからいって、非常によい問題であるとの意見が寄せられた。しかし追試験については、「問題Ⅳは会話である」という前提に立っての意見があり、従って、よくない問題であるという批判も受けた。ことに、1つの単文からさまざまな状況が想定され、ただ1つの解答を要求するのは困難であるという指摘があった。

(5)　長文理解の問題に関しては、文の長さに比して、下線部の設問が多すぎるものがある（本試験Ⅴ、追試験Ⅵ）、難易度と配点にややバランスを欠き、訳の問いの配点が高すぎるものがある（本試験Ⅵ）などの具体的な指摘があった。このほか、配点が全体の40％をも占めているので、設問の仕方に十分配慮が必要であるとの一般的な要望もあった。しかし、全体としては内容、難易度の点からみても適切であり、物語的なもの、現代的なトピックスを扱ったものなど、文体的にもバラエティーに富んだよい出題であるとの評価を得た。

6　今後の出題に留意すべき点

共通第1次学力試験が高等学校のドイツ語教育に及ぼす影響の大きさを考え、出題委員は本報告書の「1問題作成の方針」に盛られた諸点を今後とも考慮し、より適切な問題を作成すべく努力

を重ねる必要がある。マークシート方式による採点という制約内においても、さまざまな設問形式の可能性を模索する余地が残されていると思われる。次のような出題に際しては、とくに以下の諸点に留意すべきであろう。

(1) 発音に関する問題では、設問形式と設問に用いる語あるいは語句の選択に十分注意すること。

(2) 文法に関する問題では、一部の項目に偏らないように努めること。また、設問に用いるドイツ語の文が難しすぎないよう今後とも配慮すること。

(3) 作文に代わりうる問題では、設問形式にいっそうの工夫を加えること。

(4) 会話に代わりうる問題では、日常の言語生活に即した一定の状況の中での自然な思考の流れが把握できるかどうかに重点をおき、それに適した問題を作成するよう努めること。

(5) 長文理解の問題では、文意、あるいは要旨が的確に把握できるかどうかを問うことが重要であるから、そのような方向で設問形式に工夫を加えること。

フランス語

(1) 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 構成と内容

(1) 本試験問題について

構成上(読解、作文、文法 etc の間のバランス)は、ほぼ妥当と思われるが、① 文法項目上にやや片寄りが見られる、(前置詞の偏重、問題Ⅵ 30 を含めて、問題Ⅶ 40 ～ 47 は、配点はともかくとして、量的に多すぎるし、特に 41 44 45 などは、前置詞の問題としても、疑問の余地がある。) ②問題Ⅵで扱われた作文力は、もう少し文型的にパターン化した内容の文で問うことが望ましい。設問形式は、追試験問題Ⅵの形式により、これがはるかに好ましい。③ 語彙(い)の面で、受験生の生活意識と遊離した語句(identité, révitage, divorce, plaider, etc, あるいは gare-stationarrét の区別)、あるいは高度な抽象名詞(vocation, suppression etc)の使用は避けて欲しい。

(2) 追試験について

本試験に比べて構成がやや雑である。㋐ 設問の重複(問題Ⅱ 6 ～ 10 と、問題Ⅶ 57 ～ 66)、単語の重複(suppression)が見られる。㋑ 文法問題の比重が、やや大きすぎる(問題Ⅶ 42 ～ 56)。㋒ 問題Ⅴで扱われた長文が内容的に、高度である。(固有名詞の処理を工夫して欲しいし、選択すべき日本文に、ややあいまいさが残る)。

2 範囲と程度、設問数

(1) 本試験について

問題Ⅷ 48 ～ 61 は、確かにおもしろい型式であり、読解力テストとして好適な問題と思われるが、やや数量的に多すぎたのではあるまいか。内容を読み切っての解答を要求されるだけに、受験者の緊張感にかなりな負担であると思われる。その他、上に述べた問題Ⅶの前置詞偏重の問

題を除けば、設問数は妥当である。

なお問題Ⅰで扱われた動詞活用形（直説法現在）、あるいは、各問題文中で用いられている活用形（直説法複合過去、および半過去、条件法現在および過去）は、将来ともに、この範囲を越えないように、強く希望する。代名詞に関する問題も、基本的なものに限られていることは好ましく、今後も、高度な知識、テクニックを要求する問題は避けてもらいたい。

(2) 追試験について

語彙定義の問題数が多すぎる（問題Ⅱ 6 ～ 10 、問題Ⅲ 11 ～ 19 、問題Ⅶ 57 ～ 66 ）問題Ⅶは類型的な問題の安易な寄せ集めの感が強い。

いくつかの問題（例えば、問題Ⅱ、問題Ⅲ、問題Ⅳ）は、それ自体は、非常に好適で、今後の設問型式に採用してもらいたく思われるが、全体としては、語彙の選別に難があり、有機的な統一性を欠く、という印象が強い。

3 出題方法（試験時間、配点、問題文の表記、解答方法）

試験時間（追試験に比べて、本試験の方が問題Ⅷの分だけ過重か）、配点は妥当である。

本試験問題Ⅰ、追試験問題Ⅲは、問題文の表記にやや明解さを欠く。本試験問題Ⅷは言わば、受験者の意識の逆手をとった設問形式で、逆な解答をした受験者が少なからずいたことを付記しておく。

4 高校側からの要望

(1) この共通第１次学力試験は、高校におけるフランス語教育の重要な指針となるものであるから、フランス語受験者層の実態を綿密に調査して、それに基づいた出題の基準をすみやかに、定着させてもらいたい。参考までに述べると、フランス語受験者は、次の様な層に分類される。

（学校名は、東京およびその周辺に限る）

○第一層――暁星学園、白百合学園など、小学校課程での週１～２時間の授業を含めて、中学１年より高校３年まで、第一外国語として、週６時間のフランス語を履修した者。

○第二層――雙葉学園、カリタス学園、聖ドミニコ学園、明星学園など、高校１年より、第一外国語として週５～６時間のフランス語を履修した者。

○第三層――第一層及び第二層に揚げた学校において、第二外国語として、週２～３時間のフランス語を履修した者。

○第四層――都立高校において、クラブ活動の一環として、週２時間のフランス語を履修した者。

○第五層――フランス語圏の諸外国より帰国した者。

高校側としては、以上述べたうちの、第二層に属する学校のフランス語カリキュラムを、大学入試センター、フランス語部会でよく御検討の上、その到達度を出題の基準とされるよう、強く要望する。

(2) 上記の第一層及び第二層に属する学校において、第二外国語としてフランス語を履修した者（第一外国語は英語）、及び都立高校のカリキュラムに基づいてフランス語を履修した者に、その履修した第二外国語が活かせるように、「英語問題」の中で、一部、フランス語問題の選択（ドイツ語についても同様）が可能であるような問題の作成を英語部会に働きかけてもらいたい。

(2) 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

共通第１次学力試験の趣旨に添い、高等学校学習指導要領外国語編に定められた諸基準に従いつつ、しかもありうべき達成目標を設定した上で基本的なフランス語の理解・運用能力とみなされるものを、できるだけ客観的に判定できるような問題の作成に向けて、前年度までの蓄積されたデータをふまえ、さらに応分の創意工夫を傾けて努力した。主な作成方針を以下に列挙する。

(1) フランス語受験者の内訳が、海外よりの帰国子女、各種学校で個人的に学習した者、特別にフランス語教育をとり入れている私立学校の卒業者など多種多様にわたっている上、使用された教材も、種々雑多であるため、難易入りまじった各種の問題を比較的多数用意して、諸方面から受験者の能力が片寄りなく判定できるように意を用いた。発音記号、文法上の専門用語などについては、ある程度の共通了解事項となっているものはいくらか設問文中にも取り入れた。(例、母音、子音、動詞、複数形、疑問文など）フランス語現用法の許容する範囲をできる限り最大限に考慮し、学習者のおかれた条件の違いによって正答誤答の判定に疑問が生じないよう、あらゆる用例を集め、各方面から知識を求めて、正確な基準を保持できるようにつとめた。

(2) 語彙の選定に当たっては、指導要領記載の基本語彙5,000語の枠をはずさないように留意したが、5,000語の決定については、既刊の各種辞書の基本語彙表をたえず参照しながらも、学習者のおかれている現状や、流動的な言語状況の変化を考慮して、弾力的に対処した。問題の中に採用したフランス語の語句、文章についても、基本的一般的なものを選び、特殊な古語法、歴史文法の知識を必要とするものは避け、その内容もなるべく受験者全体に十分納得の行く、親近感の強い、日常的な材料を主とするように配慮した。特に、選択肢の誤答例中にも、フランス語としてそれ自体通用しない不自然な語句、文が含まれないように格別に注意した。

(3) 原則として、発音、語彙、文法等のそれぞれの知識を個々に切り離さず、文脈の中で総合的に判定できるような問題を工夫した。マークシート方式による共通第1次学力試験としてゆるされるかぎりの可能な形式をさぐることにより、多方面から語学力を判定できる変化に富んだ問題を準備した。単なる受験技術の体得だけによっては正しい解答が不可能であって、言語の構造的な理解が最初から不可欠とされるような方向に問題作成の主眼を求めた。

(4) 昨年度のデータ分析の結果、受験者の能力と解答のために要した時間との関係、さらに全体的、総合的な展望のもとに語学能力を見定めるための必要から、多少問題数を増やし、本試験66題、追試験71題を準備した。

2 各問題の出題意図

(1) 本 試 験

Ⅰ 日常よく使われる動詞について、語形変化、発音の双方について正確な知識を有するか否かが同時に明らかにされることをねらった。

Ⅱ 単語の意味を問う問題であるが、その説明をフランス語で与え、読解力をも合わせて判定できる意図をもりこんだ。

Ⅲ 2～3行程度の簡潔なフランス語の文章について、その内容の正確な理解をみる問題。多少抽象化された内容を的確につかむ論理的思考力をも合せてうかがおうとした。

Ⅳ ごく一般的な常識に即して後続の節との連関を発見させる問題である。主として読解力、現代生活に必要な基本語彙の知識を判定することを意図した。

Ⅴ 比較的長い文章を読ませ、その文脈にそって数か所の部分訳を試みさせ、さらに全体の正確な概括を行うことができるかをみようとした。

Ⅵ 和文仏訳の問題であるが、かなり長い会話文の一部を穴埋めによって完成させる形式をとる。文脈との有機的な連関をたえず配慮させるとともに、日常会話に頻出する慣用表現の知識をも求めている。

Ⅶ 基本的ないくつかの前置詞の用法を問う問題。

Ⅷ 一つの文を前半と後半に分け、この二つを結ばせる問題。文法知識、読解力、作文能力などを総合的に判定できる問題として、相当多数を用意した。

Ⅸ 日常会話の幾場面かを設定し、問いの文を答えとする疑問文を選択肢の中から選ばせるもの。

(2) 追 試 験

Ⅰ 基本的な綴り字の発音を問う問題であるが、問い、選択肢とも短文の中に含めて示し、文全体の正しい読み方の能力が試されるよう配意した。

Ⅱ 文章中の空所に与えられた単語を補充する問題であるが、正解を得るためにその語の定義として示された短文を参照することが必要である。単語の意味と同時に、文脈の正確な把握をも合せて判定することをねらった。

Ⅲ 単語の正しい綴りを問う問題であるが、それぞれの単語の定義を示して、フランス語文の正確で速やかな理解の能力をも問おうとした。

Ⅳ かなり長い文章を読ませ、その内容を完全に把握した上で質問、応答の形で全体をまとめさせようとするもの。

Ⅴ 本試験のⅤと同じである。

Ⅵ 語句の順序を並べかえて、日本語の文に対応するフランス語の文を作らせる問題。

Ⅶ 本試験のⅦと同じであるが、空所に補うものとして前置詞以外のものを多数用意して、この形式による出題の多様な可能性をさぐってみた。

Ⅷ 本試験のⅨと同一形式であるが、本試験の場合とは裏表の関係になっている。

3 出題意図と解答結果

本試験の受験者数は222人、平均点は102.59点（51％）標準偏差は47.21であった。昨年度の成績（58％）と比べると、正答率の低下を見のがすことができない。フランス語受験者は他に比して絶対数が少ないため、その原因の正確なつきとめは困難であるが、他の教科の点数別人数分布グラ

フと比較して注目すべき点は、全体がノーマルな曲線をえがいていず、中史部（ミドル・クラス）で落ちこみが見られ、２つの山があらわれていることである。点数40点前後のあたりに第１の山があり、受験者数の約20％に当る40人以上の者がこの程度の点数に集中している。昨年度の報告書にも分析されているように、60問以上の問題数を含むテストにおいて60点以下という成績しかとれないということは、フランス語の正確な知識において欠ける所があることを示している。

平均点が比較的高かったのは、Ⅴ（仏文和訳）、やや近かったのは、Ⅲ（仏文による文意の要約）、Ⅶ（前置詞の穴埋め）、Ⅷ（２つの文をつなぐ）であった。なお、追試験は今年度も受験者がなかった。

次に、それぞれの問題ごとの検討結果をかかげる。

Ⅰ　平均して53％の正答率を示し、ほぼ受験生の水準に適当した出題であったとみられる。ただ、問１に限って、正答率は17％ときわだって低かったことは、受験生が、語の意味を文脈の中で特定化することなく、孤立的にとらえた語形に直ちに機械的に反応するという悪習慣を脱していないことを示している。

Ⅱ　問題ごとに多少難易度に差がみられた。正答率が平均以上であったのは、問１、問５、問７、問８、問10などであり、平均以下では問２、問４、問６が目立った。これら３問が特にむずかしく感じられたのは、選択肢の中に正答と誤認しやすいものが含まれていたためと考えられる。たとえば、問４において copie を選択したものがかなりある（36％）ことは注目を引く。

Ⅲ　単なる訳読の方法だけによっては到達不可能な、原文の正しく精密な読みの能力を求めているので、ここでも受験者の弱点がかなりにあらわれている。全体的な正答率も、42％と低かったが、特に内容の抽象度が高いと目される問４においては、32％の成績しか示していない。概して各問にわたり成績上位者に及ぶにつれて順当な正答率の上昇を示しているから、格別に解答困難な問題であったとは考えられないが、語学の技術的習得にとどまらず、言語によって伝えられる情報の処理能力、フランス語の発想に即した論理的思考力まで求めている点で、今後の外国語教育に一つの課題を提供しえたといえよう。

Ⅳ　標準的な読解力をもつ受験者ならそれ程の困難は感じずにすむ問題であって、成績上位者はほぼ100％に近い完全な解答を与えており、全体的にも56％の正答率であった。

Ⅴ　仏文和訳の問題の通例に従い、本問題でも成績はよかった。全体として40％以上の正答率があらわれていることは、受験者のこの種の問題に対する親近感をうかがわせる。問題作成の労力に比して、受験者の能力の弁別性に関しこの種の形式は、なお多くの研究余地を残しているかと思われる。

Ⅵ　解答結果は平均点16点（52％）で、問いによって幾分のバラツキはあるが、問題の難易度は概して適切であった。ただ、この種日常会話における慣用表現の習熟度という点で、若干の問題点を残した。

問１では、誤答例が少なくなかったことからみて、乗り物に用いる正しい前置詞の用法がなお十分理解されていないと考えられる。問４においても、正答に匹敵する割合の誤答（Non, merci, Nicole, je les trouve aussi.）が見出せる。基本的な代名詞の使い方が身についていない上に、前後の文脈の中で正しい表現を選ぶ習慣に欠けていることを示す。問６の正答率が約30％で特に低かったのは注目に価する。

Ⅶ　この種の穴埋め形式の問題では基本的知識の有無が直ちに正答の可否に通じ、受験者の能力が端的にうつし出されることになる。問３、６、７、８については、正答率はいずれも50％をこえ、比較的平易であったとみられる。ただし、問１の gentil avec～, 問４の se passer de～については、正答率が低い。

gentil á～, se passer sans～と答えた者が多いことは日本語からの連想が働いたためとみられる。また、問２においては généreux contre～の誤答がはるかに正答を上回ったのは contre ses ennemis の結びつきに関心が向けられすぎたためとみられる。

Ⅷ　与えられた短文を手がかりに、情報内容を正しくつかむことは受験者にとって相当むずかしかったようである。正答率45％は決して高くない。特に文の内容が、一般に教室内での外国語教育の類型的な題材をはずれたものについては、成績はかんばしくない。中級以下のクラスの受験者にとっては、この種の問題はほとんど手がつかなかった事実が観察されるが、他方では全問の正解者が12名（5.41％）もいて、この種形式のものは、能力のある者を選抜するのにきわめて適しているといいうる。

Ⅸ　全５問中３問については、中級およびそれ以上のクラスの受験生が、ほぼ80％以上の正答率を示している。この種の日常よく用いられる定型的な文章には、多くの受験生がなれ親しんでいるためと思われる。正答率が比較的低かったのは、問１のように動詞 aller の特殊用法を問うたもの、問３のように名詞の性に関する正確な知識を必要とするものである。

4　出題形式についての今回の試み

問題作成の方針においても詳述したように、本年度はほとんど全問題にわたって総合的な学力を

試そうとする傾向が一段と強められた。フランス語原文についても、試行テスト、前年度の問題に比べ、さらに洗練度が高くなり、選択肢において、本来通用しない誤ったフランス語を提示すること、設問文における特殊な専門用語の使用はまったくかげをひそめた。特に、フランス語の正確な読みの力を重視する問題（Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅷなど）が多くなり、Ⅱ、Ⅵ、Ⅷなどにおいては、新形式の試みも行われた。

5　本年度の問題についての反響意見

試験問題部会協議報告書では、構成上も、問題形式としても妥当であったという評が与えられている。語彙、文法規則の知識も、基本的なものからはずれていない点は好ましいとされ、本試験の問題Ⅷのような新形式の開発についても多分に興味が寄せられている。ただ、2、3 の小さな点について指摘が加えられたので、問題作成部会としての見解を示し、今後の検討材料に資することにしたい。

(1) 本試験において、特に前置詞に関する問題が多すぎることが指摘され、追試験においては、穴埋め形式の問題に余りに多種多様の類型的なものが集中しすぎてた点に批判が加えられている。前置詞の問題のみをこれだけの数にまとめたのは、問題としての整合性を目ざしたためでもあるが、前置詞の穴埋めという形式をとりながらも実際には動詞や補語との関係を中心とする。より広い文法知識を背後に要求し、文全体の意味との関連の上ではじめて正答がみちびき出されるような出題工夫がつくしてあることを付言しておかねばならない。また、追試験において、各種の穴埋め問題を形式的に一つにまとめてしまったことは、一つの試みとして評価できるにせよ、それぞれ解答への手続きの点で問題の性質が違うことからも、今後は細かな検討を加え、再分類をはかることが望ましいと思われる。

(2) 語彙の面で、受験生の生活意識と遊離した語句や高度な抽象名詞が散見することが指摘され、長文の内容が多少高度になった点（追試験Ⅴ）も注記されている。解答結果の分析でもみたように、確かにこうした点が、主として成績下位の受験者に不利な結果を、もたらせていることは否定できない。しかし、成績上位者においては、むしろこのような傾向の問題ほど自己の能力を十分に発揮できる機会になっていることをも見のがすことはできない。外国語学習に対する便宜的な対応と実質的な能力をそなえようとする着実な態度との差がここにも明瞭にあらわれているといえる。また、抽象的表現そのものに習熟することがフランス語の本質を学ぶ道に通じていることも忘れてはなるまい。

(3) 追試験において、比較的頻度数の低い語（例. suppression）が、選択肢の中で重ねて用いられているとの指摘があったが、この点は、問題完成後の十分な見直しが、今後とも強く求められよう。

(4) 動詞時制や法の特殊なものを使用しないこと、文法項目をできるだけ基本的なものに限ることは、問題作成部会の方針としても共通の了解事項である。

6　今後の出題に留意すべき点

(1) 語彙、文法項目については今後とも、研究を重ね、問題作成に当たってどの範囲までを最少限の必要既習事項とするかについて、多方面からの検討がなされてよい。

(2) 解答結果の分析から見て、100分という時間内ではもっと多くの問題をこなしうるとみられ、さらに、個々の問いごとの配点を小さくして、受験者の失点を減らすため、問題数をもう少し増やしてもよいかと思われる。

(3) 昨年度、今年度と継承してきた方針通りに、言語の生きた理解を試すため、総合的な能力判定の可能な問題形式が、さらに開発されてよい。

7　そ　の　他

(1) 昨年度の報告書においても要望事項としてつけ加えられているように、日本におけるフランス語学習の組織的調査はぜひ行われる必要があろう。さらに共通第1次学力試験におけるフランス語受験者の成績が他教科の成績とどのような相関関係にあるかの研究も合せ進めることにより、解答結果のデータ分析は一そう精密化できよう。

(2) 試験問題部会協議報告書にも特に強調されていることであるが、高等学校で第二外国語としてフランス語を履習した者に、その成果を活かせるよう、英語につけ加え、一部分フランス語でも受験可能とするような方法も今後研究されてよい。

Ⅳ 資　　料

Ⅰ．大学入学者選抜実施要項

（昭和52年６月30日文大大第247号大学局長通知）

最近改正　昭和54年６月11日文大大第211号一部改正通知

大学入学者の選抜は、大学教育を受けるにふさわしい能力・適性等を備えた者を公正かつ妥当な方法で選抜するように実施するとともに、入学者の選抜のために高等学校の教育を乱すことのないよう配慮するものとする。

第１　選　抜　方　法

１　入学者の選抜は、調査書の内容、学力検査その他の能力・適性等に関する検査の成績、大学が必要に応じて実施する健康診断、その他大学が適当と認める資料により、入学志願者の能力・適性等を合理的に総合して判定する方法によるものとする。

２　上記１の選抜方法によるほか、大学の意向によっては、次の選抜方法によることもできる。

(1)　入学定員の一部について、出身学校長の推薦に基づき、学力検査を免除し調査書を主な資料として判定する方法

ア　大学は、能力・適性等に関する推薦の要件を具体的に定め、これを高等学校長に提示して推薦を求めるものとする。

イ　大学は、入学志願者について面接を行い、又は小論文を課することが望ましい。

(2)　学力検査を課さないで調査書を主な資料として判定する方法

大学は、入学志願者について面接を行い、又は小論文を課することが望ましい。

(3)　学力検査等に先立ち、調査書を主な資料として判定し、この合格者に対し学力検査等を課して最終判定する方法

第２　選　抜　期　日

１　入学者選抜の期日は、次により適宜これを定めるものとする。

(1)　入学者選抜試験期日　　入学する年度の前年度（以下「前年度」という。）の３月１日から入学する年度の４月15日までの間

(2)　入学願書受付期間　　入学者選抜試験期日に応じて定める。

(3) 合格者の決定発表　　入学する年度の4月20日まで

2　入学定員の一部について、出身学校長の推薦に基づき、学力検査を免除し調査書を主な資料として判定する方法による場合は、判定結果を原則として前年度の2月26日までに発表するものとし、この期日に応じて入学願書受付期間を適宜定めるものとする。

3　学力検査を課さないで調査書を主な資料として判定する方法による場合の入学者選抜の期日は、上記1により定めるものとする。

4　学力検査等に先立ち、調査書を主な資料として判定し、この合格者に対し学力検査等を課して最終判定する方法による場合は、調査書を主な資料として判定した結果を原則として学力検査開始日の10日前までに発表するものとする。

第3　調　査　書

1　大学は、入学者選抜の資料として、出身学校長が生徒指導要録等に基づき、かつ調査書作成に関する委員会の審議を経て作成した調査書を提出させるものとする。

調査書の様式、記入上の注意事項等は、別紙様式1による。

2　調査書は、入学志願者の学習成績、健康状況、性格、行動等が記載された重要な資料であるので、入学者の選抜に当たっては、調査書を十分活用することが望ましい。

なお、学力検査を実施する場合、入学志願者が受験する教科・科目以外の教科・科目については、特に調査書の学習成績に留意するものとする。

また、専門教育を主とする学科卒業の入学志願者について、その専門教育が当該学部・学科の教育と密接に関連すると認められる場合には、調査書の専門教育に関する科目の学習成績に留意することが望ましい。

3　調査書に記入される学習成績概評は、高等学校における同一学年生徒全員（ただし、教育課程の異なる類型のある場合は類型別、専門教育を主とする学科の場合は科別）の3か年間（ただし、定時制及び通信制の課程にあっては4か年間）における各教科・科目の評定平均値の平均を表1の区分に従ってA、B、C、D、Eの5段階に分け、その生徒の属する成績段階を示しているものである。

（表1）　学　習　成　績　概　評

各教科・科目の評定平均値の平均	学習成績概評
5.0 ～ 4.3	A
4.2 ～ 3.5	B
3.4 ～ 2.7	C
2.6 ～ 1.9	D
1.8 以下	E

4　大学は、高等学校長に対し学習成績概評Aに属する生徒のうち、人物、学力ともに特に優秀で、高等学校長が責任をもって推薦できる者については、「学習成績概評」欄にⒶと標示するよう希望することができる。

なお、この場合には「備考」欄にその理由を明示させるものとする。

5　「健康の状況」の欄は、高等学校生徒健康診断票に基づいて記載されるものであり、入学後の保健指導等の参考資料としても併せて活用することが望ましい。

6　大学は、高等学校長に対し当該大学の学部・学科に対する能力・適性等について、特に高等学校長が推薦できる生徒については、その旨を調査書の「備考」欄に記入するよう希望することができる。

7　やむを得ない事由により完全な調査書が得られない場合は、次により措置するとともに、面接によって不足を補う等の配慮が望ましい。

(1)　廃校、被災その他の事情により出身学校長の調査書が得られない場合は、卒業証明書、成績通信簿その他入学志願者が提出できる書類をもってこれに代えてもよい。

(2)　本人が被災等により上記書類をも整えられない場合は、出身学校所管の教育委員会、知事又は出身学校長が作成したこれに関する証明書を提出させる。

ただし、このような証明書を受理した大学は、本人について更に調査をすることが必要である。

(3)　大学入学資格検定等の試験検定の合格者については、当該試験の成績証明書をもって調査書に代えることができる。

8　学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）第57条の3の規定に基づき、教育課程編成上の特例の適用を受けている高等学校（研究開発学校）があるので留意すること。

第4　学　力　検　査　等

1　学　力　検　査

(1)　学力検査は、高等学校学習指導要領に準拠し、高等学校教育の正常な発展の障害とならないよう十分留意して実施するものとする。

(2)　大学は、学力検査の一部又は全部を他の大学と共同し、共通の学力検査として実施することができる。

(3)　大学は、学力検査を第1次と第2次に分け、第1次の学力検査の合格者に対して第2次の学力検査を課することができる。

(4)　学力検査は、国語、社会、数学、理科、外国語の5教科について実施することを原則とするが、大学・学部の目的、特色、専門分野等によっては、一部の教科を除き、又は他の教科を加えて実施することができる。

(5)　各教科における学力検査実施科目等は、次により大学が定める。

国　　語　　国語は、現代国語、古典Ⅰ甲のうちから1科目又は2科目を出題する。ただし、大学・学部の目的、特色、専門分野等によっては、2科目を出題する場合、古典Ⅰ甲に代えて古典Ⅰ乙を出題することができる。

社　　会　　社会は、倫理・社会、政治・経済、日本史、世界史、地理A及び地理Bのうちから3科目以上を出題し、1科目を選択解答させる。ただし、大学・学部の目的、特色、専門分野等によっては、2科目を選択解答させ、又は特定の1科目ないし2科目を出題することができる。

数　　学　　数学は、数学一般又は数学Ⅰを出題する。ただし、大学・学部の目的、特色、専門分野等によっては、数学Ⅰを出題する場合、これに数学ⅡB及び数学Ⅲを加えることができる。なお、数学Ⅲを出題しない場合は、数学ⅡAを加えて数学ⅡBと選択解答させることが望ましい。

理　　科　　理科は、基礎理科を出題するか、又は物理Ⅰ、化学Ⅰ、生物Ⅰ、地学Ⅰのうちから3科目以上を出題し、1科目を選択解答させる。ただし、大学・学部の目的、特色、専門分野等によっては、前記の科目中基礎理科を除き、2科目を選択解答させ、若しくは特定の1科目ないし2科目を出題し、又は同種のⅠ、Ⅱの科目を合わせて1ないし2を選択解答させ、若しくは特定の1ないし2を出題することができる。

外　国　語　　外国語は、英語A又は英語Bを出題するか、又は英語B、ドイツ語、フランス語その他の外国語を出題し、1科目を選択解答させる。

(6)　商学、工学、農学、水産学、家政学、看護学等に関する大学・学部で、その目的、特色、専門分野等からみて適当と認められる場合には、前記(4)に掲げる教科の一部に代えて、職業に関する教科を出題し、又は前記(5)の社会、数学又は理科の科目に商業一般、水産一般、家庭一般、看護基礎医学等職業に関する基礎的、基本的科目を加え、選択解答させることが望ましい。

(7)　学力検査は、次の諸点に留意して、入学志願者の学習能力をできる限り合理的に検査することができるよう出題方針を立てるものとする。

ア　学力検査は、各種の客観式及び記述式の検査方式を適宜組み合わせて実施することが望ましい。

イ　原理的、根本的なものを基礎として、これを運用して解答できるもので、それぞれの科目に関して学理的な適応性を検査できるような問題が望ましく、単なる記憶や知識のみを検査するような問題であってはならない。

ウ　出題に当たっては、1教科内の二つ以上の科目にわたる知識を必要とする問題は避けなければならない。

エ　高等学校の専門教育を主とする学科の卒業者のための上記(6)に示す職業に関する科目の出題に当たっては、専門教育を主とする学科の卒業者が普通教育を主とする学科の卒業者に比べて不利にならないよう、特に考慮するものとする。

2　実技検査、面接、小論文

(1)　実　技　検　査

美術、工芸、音楽、体育等に関する学部・学科（教員養成学部にあっては主専攻）においては、前記1の学力検査のほか、実技に関する検査を課することが望ましい。

(2)　面接と小論文

大学は、入学志願者に対し面接を行い、又は小論文を課することができる。

第5　健　康　診　断

1　入学志願者の健康状況のは握は、次により行うものとする。

(1)　入学する年度の前々年度の高等学校卒業者及び前年度の3月卒業見込みの者については、調査書の「健康の状況」欄の記載によるものとし、これ以外の年度の高等学校卒業者及び大学入学資格検定合格者等調査書を提出することができない者については、調査書の「健康の状況」欄の記載事項とされている視力、色覚、聴力、結核及びその他の疾病、異常等について医師の作成した健康診断書（様式は特に定めない。）を提出させ、その記載による。

(2)　特定の学部・学科等が必要とする特別の事項に関する検査、異常所見者に対する精密検査等については、必要に応じて大学が実施するものとする。

2　入学者選抜に際して健康診断により不合格の判定を行うについては、疾病など心身の異常のため志望学部・学科等の教育の目的に即した履修に耐えないこと、又は伝染性疾患などにより集団生活に適しないことが、入学後の保健指導等を考慮してもなお明白な場合に限定することが望ましい。

第6　学力検査実施教科・科目等及び選抜方法等の決定・公表

1　大学は、学力検査の実施教科・科目並びに実技検査の実施科目、面接の実施及び小論文の出題等について決定し、前年度の6月1日から7月31日までの期間内に公表するものとする。

2　大学は、次の事項に該当する場合には、それぞれ具体的な取扱いを決定し、上記1で定める期間内に公表するものとする。

(1)　入学定員の一部について、出身学校長の推薦に基づき、学力検査を免除し調査書を主な資料として判定する方法をとる場合

(2)　学力検査を課さないで調査書を主な資料として判定する方法をとる場合

(3)　学力検査等に先立ち、調査書を主な資料として判定し、この合格者に対し学力検査等を課して最終的に判定する方法をとる場合

(4)　調査書にⒶ標示を希望する場合

(5)　調査書に能力・適性等についての推薦の記入を希望する場合

(6)　学力検査の一部又は全部を他の大学と共同し、共通の学力検査として実施する場合

(7)　学力検査を第1次と第2次に分け、第1次の学力検査の合格者に対して第2次の学力検査を課する方法をとる場合

3　公表は、国立大学（国立短期大学を除く。）及び公立大学（公立短期大学を除く。）にあっては別紙様式2及び別紙様式4により、私立大学並びに国立短期大学及び公立短期大学にあっては別紙様式3及び別紙様式4により、各都道府県の知事及び教育委員会教育長、各指定都市の教育委員会教育長並びに国立大学の大学附属又は学部附属の高等学校長に通知する方法によるものとし、同時に文部省大学課へも報告することとする。

第7　募　集　人　員

各大学で募集する人員は、所定の入学定員によるものとする。

第8　出　願　資　格

大学に入学を志願することのできる者は、次のとおりである。

1　高等学校を卒業した者及び前年度の3月卒業見込みの者

2　通常の課程による12年の学校教育を修了した者及び前年度の3月修了見込みの者

3　学校教育法施行規則第69条の規定により高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者及び前年度の3月31日までにこれに該当する見込みの者

第9　募集要項、出願の手続等

1　募　集　要　項　等

(1)　大学は、募集人員、選抜期日、選抜方法、検査場、出願手続、入学検定料その他入学に要する経費等出願に必要な事項を記載した募集要項を発表するものとする。

なお、大学は、入学に要する経費のすべてを募集要項に記載するものとし、これに記載されない寄付金等の納入を条件として入学許可を行うことのないようにするものとする。

(2)　大学は、当該大学の学部・学科等の教育を受けるにふさわしい者の能力・適性等について、募集要項に具体的に記載することが望ましい。

(3)　大学は、前年度の12月25日までに募集要項を発表するものとする。

(4)　大学は、入学志願者に対し、大学案内等により、学部・学科等の組織、特色その他学生生活の概要、諸経費を明らかにすることが望ましい。

2　出　願　の　手　続

(1)　入学志願者は、出願に必要な書類を取りそろえ、志願大学の定める手続により、志願大学へ提出するものとする。

この場合において、出願に必要な書類を出身学校長が取りまとめて志願大学へ提出し、又は、出願に必要な書類のうち出身学校長が作成すべき調査書等のみについて、出身学校長が直接志願大学へ提出することも差し支えない。

(2) 出願に際して提出する写真は、出願以前3か月以内に撮影したものとする。

第10 国立大学の入学者選抜方法等

共通第1次学力試験の実施に伴う国立大学（国立短期大学を除く。以下この項において同じ。）の入学者の選抜に関しては、第1の1に掲げる選抜方法の基本にのっとり、原則としてこの要項の各項に掲げるところに従って実施するものとするが、学力検査その他の能力・適性等に関する検査の実施方法、選抜の日程、特別の選抜方法等については、次に掲げるところによるものとする。

1 学 力 検 査

(1) 学力検査は、第1次の学力検査及び第2次の学力検査に分け、第1次の学力検査は、共通第1次学力試験として各国立大学が大学入試センターと協力して共同で実施し、第2次の学力検査は、各国立大学が必要に応じて実施するものとする。

(2) 第1次の学力検査は、主として、入学志願者の高等学校の段階における一般的かつ基礎的な学習の達成の程度を判定することを目的とするものとし、その出題教科・科目等は、次によるものとする。

国　　語　国語は、現代国語及び古典Ⅰ甲を出題する。

社　　会　社会は、倫理・社会、政治・経済、日本史、世界史、地理A及び地理Bを出題し、2科目を選択解答させる。ただし、地理A及び地理Bの2科目を選択することはできないものとする。

数　　学　数学は、数学一般及び数学Ⅰを出題し、1科目を選択解答させる。ただし、数学一般を選択解答できる者は、高等学校において当該科目を履修した者に限るものとする。

理　　科　理科は、基礎理科、物理Ⅰ、化学Ⅰ、生物Ⅰ及び地学Ⅰを出題し、基礎理科1科目又は基礎理科を除く科目から2科目を選択解答させる。ただし、基礎理科を選択解答できる者は、高等学校において当該科目を履修した者に限るものとする。

外 国 語　外国語は、英語A、英語B、ドイツ語及びフランス語を出題し、1科目を選択解答させる。ただし、英語Aを選択解答できる者は、

高等学校において当該科目を履修した者に限るものとする。

(3) 第2次の学力検査は、主として、入学志願者が、当該大学・学部の目的、特色、専門分野等の特性にふさわしい能力・適性等を有するか否かを判定することを目的とするものとし、その実施に当たっては、次の諸点に配慮するものとする。

ア 出題する教科・科目の数については、当該大学・学部の目的、特色、専門分野等の特性に応じ、必要な最小限度とすることが望ましい。

イ 高等学校の専門教育を主とする学科の卒業者のため、職業に関する基礎的、基本的科目を出題し、選択解答できるよう特に配慮することが望ましい。

ウ 出題形式は、記述式及び論文式により、入学志願者の記述力、考察力、表現力等が検査できるようにすることが望ましい。共通第1次学力試験に出題された科目から出題する場合は、この出題形式によるよう特に配慮することが望ましい。

(4) 第2次の学力検査を実施する大学における学力検査の成績の判定は、共通第1次学力試験の成績と第2次の学力検査の成績とを合理的に総合して行うものとする。この場合において、特に共通第1次学力試験の成績が、この試験の目的に即して、十分適切に評価されるよう配慮するものとする。

2 実技検査、面接、小論文

美術、工芸、音楽、体育等に関する学部・学科等においては、実技に関する検査を課することが望ましい。

また、入学志願者に対しては、面接を行い、又は小論文を課することが望ましく、特に、第2次の学力検査を実施しない場合は、入学志願者に対し面接を行い、小論文を課するよう配慮するものとする。

3 募集、出願受付、選抜等の日程等

(1) 共通第1次学力試験に関する要項の発表

大学入試センターは、共通第1次学力試験の実施期日、実施方法、試験場、出願手続、検定料等に関する要項を定め、前年度の6月30日までに発表するものとする。

(2) 各大学の第2次の学力検査実施教科・科目等及び選抜方法等の決定・公表

第6によって行う各大学の第2次の学力検査実施教科・科目等及び選抜方法等の決定・公表には、5に掲げる特別の選抜方法をとる場合も含むものとする。

(3) 各大学の募集要項等については、第９の１によるものとするが、第９の１の(1)及び(3)による募集要項の発表については、次によるものとする。

ア 各大学の入学者選抜に関する要項の発表

各大学は、当該大学の学部・学科等の内容、入学定員、第２次の学力検査その他の能力・適性等に関する検査の実施教科・科目、選抜方法等及び５に掲げる特別の選抜方法による場合の実施方法・内容等の基本的な事項についての入学者選抜に関する要項を決定し、前年度の７月31日までに発表するものとする。

イ 各大学の入学者選抜に関する細目の発表

各大学は、募集人員、出願期日、第２次の学力検査等の実施期日、試験場、検定料その他第９の１による必要事項を記載した入学者選抜に関する細目を、前年度の12月25日までに発表するものとする。

(4) 選抜等の日程

区　分	共通第１次学力試験の出願、試験実施等の日程	各大学に対する出願、第２次の学力検査等の日程
出願受付	前年度の10月１日から10月15日まで	前年度の２月９日から２月15日まで
試験期日	前年度の１月10日から１月19日までの期間内で大学入試センターが定める日	前年度の３月４日から各大学が定める必要な期間
合格者の発表	――――――	前年度の３月20日まで

(5) 共通第１次学力試験の出願受付、出願方法等

ア 高等学校卒業見込みの者は、出願に必要な書類を取りそろえ、出身学校長を経由して、大学入試センターに提出するものとする。

高等学校卒業見込みの者以外の者（高等学校を卒業した者、大学入学資格検定合格者等）は、出願に必要な書類を取りそろえ、大学入試センターに直接提出するものとする。

イ 入学志願者は、出願に際し、志望の大学・学部等を第２志望まで申請し、大学入試センターは、その志望状況を12月中を目途として公表するものとする。

(6) 各大学に対する出願

入学志願者は、共通第１次学力試験出願の際に申請した第１志望、第２志望

のいずれかを選んで出願するものとする。ただし、特に必要がある場合は、それ以外のものに変更することも差し支えない。

(7) 共通第１次学力試験の問題の正解例等の公表

ア 大学入試センターは、共通第１次学力試験の問題の正解例を試験実施後速やかに公表するものとする。

イ 大学入試センターは、共通第１次学力試験の科目別平均点等の適当な資料を各大学に対する出願の受付け開始日までに公表するものとする。

4 共通第１次学力試験実施上の配慮

(1) 試験場の割当てについては、原則として、入学志願者が出身学校の最寄りの大学が設定する試験場で受験できるように配慮するものとする。

(2) 身体に障害のある入学志願者については、障害の種類、程度に応じ、出題、解答の方法、試験場の整備等、特別な配慮を行うものとする。

(3) 天災その他の事情により試験が実施できなかった場合の再試験及び病気その他のやむを得ない事情により所定の試験を受験できなかった者に対する追試験は、必要に応じ、大学入試センターが定めるところにより実施するものとする。

5 特別の選抜方法

(1) 推　薦　入　学

ア 各大学は、第１の２の(1)に掲げる選抜方法をとることもできるものとし、この場合の学力検査の免除については、第２次の学力検査についてのみ免除することを原則とするものとする。ただし、当該大学・学部等の目的、特色、専門分野等の特性に応じ、特に必要がある場合は、共通第１次学力試験についても免除することができるものとする。

イ この方式による出願の方法、受付期間等は、各大学が適宜定めるものとするが、その判定結果の発表は、２月26日（学力検査の全部を免除する場合は２月８日）までに行うものとする。

(2) 第２次募集

ア 合格者又は入学者が入学定員に満たない場合の第２次募集は、共通第１次学力試験を受験している者で、かついずれの国立大学にも合格していない者を対象として、３月21日以降において、各大学が適宜定めて実施するものとする。

イ 各大学は、入学定員の一部についてあらかじめこれを留保し、これについ

て上記アに準じて第２次募集を行うこともできるものとする。

(3)　２段階選抜

ア　入学志願者の数が入学定員を大幅に上回り、第２次の学力検査等を適切に実施することが困難であるため特に必要がある場合には、主として調査書の内容及び共通第１次学力試験の成績により第１段階の選抜を行い、その合格者について更に必要な検査等を行って最終的な合格者を決定する方式をとることもできるものとする。ただし、この場合においては、第１段階の選抜に合格させる者の数が入学定員のおおむね３倍を下回らないよう配慮するものとする。

イ　この方式により選抜を行う大学は、３の(4)の出願受付後速やかに第１段階の選抜を行い、その判定結果の発表は、２月26日までに行うものとする。

第11　公立大学の入学者選抜方法等

公立大学（公立短期大学を除く。以下この項において同じ。）の入学者の選抜に関しては、第10の国立大学の入学者選抜方法等に準じて実施するものとする。

ただし、第１次の学力検査等については、次によるものとする。

1　公立大学の第１次の学力検査については、第10の１の(1)の国立大学の共通第１次学力試験を利用するものとする。

2　第10の３の(4)に掲げる各大学に対する出願、第２次の学力検査等の日程については、第２の１の範囲内で、各大学の定めるところによるものとするが、第２次の学力検査等の試験期日については、前年度の３月４日以降とするものとする。

第12　注　意　事　項

1　身体に障害のある入学志願者については、その能力・適性等に応じた学部等への進学の機会を広げる観点から、受験の機会を確保するよう配慮すること。

2　大学は、入学者選抜において出題した学力検査問題等について、支障のない限り、標準的な解答例や出題の意図等を適切な方法により明らかにするよう配慮すること。

3　大学は、選抜方法に関する研究委員会を設けて調査研究を行い、入学者の選抜に当たっては、その成果を十分に反映させることが望ましいこと。

4　大学のうちには、入学定員を著しく超えて入学させている向きもあるが、学生定員は、学科目又は講座の数、教員組織、施設、設備等を総合的に考慮して定められていることに十分留意すること。

5　本要項により実施し難い事情のある大学は、募集要項の発表前に文部省と協議のうえ実施すること。

6　募集要項の発表後に、募集要項のとおり実施し難い事態が生じた場合には、事前に文部省と協議のうえ実施すること。

なお、緊急事態の生じたことにより、事前に協議できない場合には、その事態及び措置を速やかに文部省に報告すること。

第13　備　　考

この要項は、昭和54年度の大学入学者選抜から適用する。

一部改正　昭和53年１月30日文大大第83号大学局長通知

一部改正　昭和54年６月11日文大大第211号大学局長通知（昭和55年度の大学入学者選抜から適用）

別紙様式1

（表）

調　査　書

※	※	※	※

1. ふりがな 氏　名	昭和　年　月　日生	男・女	現住所	都道府県　市区　町村　丁目　番　号	
学校名	国立・公立・私立　高等学校（分　校）		昭和　年　月　入　学、編入学、転入学（第　学年）		
全・定・通	普通・専門（　）		昭和　年　月　卒業・卒業見込		

2. 各教科・科目の学習の記録

教科・科目	履修単位数	評定 第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	修得単位数 計	教科・科目	履修単位数	評定 第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	修得単位数 計
国語							芸術						
社会							外国語						
数学							家庭						
理科													
保健体育							計						

教科・科目の学習についての所見	

3. 評定平均値	教科	国語	社会	数学	理科	保健体育	芸術	外国語	家庭			平均
	平均値											

4. 学習成績概評	成績段階別人数											
段階	A	人	B	人	C	人	D	人	E	人	合計	（　人）　人

（裏）

※	※	※	※

5. 出欠の記録

区分＼学年	1	2	3	4
授業日数				
出席停止・忌引き等の日数				
出席しなければならない日数				
欠席日数				
出席日数				
備考				

6. 健康の状況

視力	右	.（.）	担当学校医所見
	左	.（.）	
色覚			
聴力	右		
	左		担任教員所見
結核			
その他の疾病及び異常			

7. 各教科以外の教育活動の記録

8. 行動及び性格の記録

Ⅰ 評定

項目＼学年	1	2	3	4	項目＼学年	1	2	3	4
基本的な生活習慣					寛容				
自主性					指導性				
責任感					協力性				
根気強さ					公正さ				
創意くふう					公共心				
情緒の安定									

Ⅱ 所見

9. 備考

本書の記載事項に誤りがないことを証明する

昭和　年　月　日

学校名

所在地

校長名　㊞　記載責任者　㊞

調査書記入上の注意事項等について

1　調査書作成の基本方針

(1)　調査書は、高等学校生徒指導要録等に基づいて作成するものとする。

(2)　調査書の作成に当たっては、個人的主観にとらわれたり、特別の作為を加えたりすることのないようにするものとする。

(3)　調査書は、ホーム・ルーム担任教員等が記入し、関係教員をもって組織した調査書作成に関する委員会の審議を経て、高等学校長が作成し、その責任において、大学に提出されるものとする。

2　調査書の様式、規格及び用紙

調査書は、この様式により、日本工業規格Ｂ５判（182×257㎜）上質紙（90㎏程度）とし、表裏の両面を使って作成すること。ただし、複写機等により作成する場合は、Ｂ４縦型表判（257×364㎜）複写紙の左右に表裏を複写し、二つ折りとしても差し支えない。

3　記入上の注意

(1)　上段※印欄は、大学において必要な事項を記入するための欄とし、高等学校では記入しないこと。

(2)　男女別、全日制・定時制・通信制の課程別、普通科・専門教育を主とする学科の別、入学・編入学・転入学（編入学及び転入学の場合はその学年を記入）の別、卒業・卒業見込みの別の該当事項を〇で囲むこと。

なお、専門教育を主とする学科については、農業、水産、工業、商業、家庭、音楽等の別及び各科別を、例えば工業に関する学科の機械科の場合（工・機械）のように、（　）内に記入すること。

(3)　「各教科・科目の学習の記録」欄は、高等学校在学中の全学年について、次のように記入すること。

ア　「教科・科目」欄の履修科目名は、生徒指導要録に基づいて記入すること。

なお、空欄不足の場合は、紙をはり足してもよい。

イ　「履修単位数」欄は、当該高等学校において生徒に履修させる単位数を、「修得単位数の計」欄は、修得を認定した学年ごとの単位数の計をそれぞれ記入すること。

なお、卒業見込みの者で、最終学年の修得単位が未決定である場合には、当

該学年における履修単位を修得したものとして計算すること。

ウ　「評定」欄は、５．４．３．２．１．の５段階で表示すること。

エ　旧教育課程による高等学校卒業者の場合は、次のようにすること。

(ア)　「評定」は、昭和23年以前の学習成績については、教科ごとに秀、優、良、可、昭和24年度以降の分については、目標別に５．４．３．２．１、昭和31年度以降の分については、科目別に５．４．３．２．１、のそれぞれの評語を用いて記入すること。

(イ)　「履修単位数」の計は、昭和40年３月以前の卒業者については、学年ごとの単位数の計を記入すること。

オ　卒業見込みの者で、最終学年の成績が未決定である場合は、直近における成績を総合して、最終学年の成績とすること。

カ　「教科・科目の学習についての所見」欄については、生徒自身について認められた教科・科目の学習における特徴のうち特記すべき事項を記入するものとし、無い場合はその旨明示すること。

(4)　「評定平均値」欄については、次のように記入すること。

ア　各教科の評定平均値は、生徒指導要録に基づき、各教科ごとに各科目の評定の合計数を各教科の評定数で除した数値（小数以下第２位を四捨五入）を記入すること。

なお、例示以外の履修教科は、空欄を利用すること。また、空欄不足の場合は、紙をはり足してもよい。

（計算例）

下記の成績の者の計算例は、次のとおりである。

(1)　$\frac{\text{評定点の合計}}{\text{評　定　数}}=\frac{5+3+3+4}{4}=\frac{15}{4}=3.75$

(2)　小数以下第２位を四捨五入すると、この者の理科の評定平均値は、「3.8」となる。

教科・科目		履修単位数	評定 第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	修得単位数の計
理科	物理Ⅰ	3		5			3
	化学Ⅰ	3	3				3
	生物Ⅰ	3	3				3
	地学Ⅰ	3		4			3

イ　評定平均値の平均は、(4)のアにより算出した各教科の評定平均値の合計数を履修教科数で除した数値（小数以下第２位を四捨五入）を記入すること。

ウ　昭和33年３月以前の卒業者については、評定平均値は記入しないものとする。

(5)　「学習成績概評」及び「成績段階別人数」欄は、次のように記入すること。

ア　「学習成績概評」欄は、高等学校における同一学年生徒全員（ただし、教育課程の異なる類型のある場合は類型別、専門教育を主とする学科の場合は科別）の３か年間（ただし、定時制及び通信制の課程にあっては４か年間）における各教科・科目の評定平均値の平均を次の区分に従って、A、B、C、D、Eの５段階に分け、その生徒の属する成績段階を記入すること。

各教科・科目の評定平均値の平均	学習成績概評
5.0 ～ 4.3	A
4.2 ～ 3.5	B
3.4 ～ 2.7	C
2.6 ～ 1.9	D
1.8 以下	E

イ　大学が希望する場合、学習成績概評Aに属する生徒のうち、人物、学力ともに特に優秀で、高等学校長が責任をもって推薦できる者については、「学習成績概評」欄にⒶと標示することができる。

この場合、高等学校長は「備考」欄にその理由を明示しなければならないものとする。

ウ　「成績段階別人数」欄は、各段階に属する人数とその合計を、「A○○人、B○○人、C○○人、D○○人、E○○人、合計○○人」のように記入すること。なお(5)のアにより、類型別又は科別に記入した場合は、「合計」欄に同一学年生徒の合計数を（　　）内に記入すること。

エ　昭和33年３月以前の卒業者については、学習成績概評及び成績段階別人数は記入しないものとする。

(6)　「出欠の記録」欄は、高等学校生徒指導要録該当欄の記載事項を転記するものとするが、卒業見込みの者の最終学年の欄は、直近の学期末現在における出欠の状況を記入し、その旨を備考欄に明示すること。なお、旧教育課程による高等学

校卒業者の場合は、旧生徒指導要録における該当欄のみを記入すること。

(7)　「健康の状況」欄は、次のように記入すること。

ア　「視力」、「色覚」、「聴力」及び「担当学校医所見」の欄には、それぞれについて高等学校生徒健康診断票の該当欄の最も新しい記載事項を転記すること。

イ　「結核」の欄には、高等学校生徒健康診断票の該当欄の記載事項を転記すること。

ウ　「その他の疾病及び異常」の欄には、高等学校生徒健康診断票の該当欄の記載事項及び「心臓の疾病及び異常」等該当欄以外の疾病・異常、各種疾患等に関する記載事項で、特に教育上又は保健指導上必要と認められる事項があれば記入すること。

エ　「担任教員所見」欄には、高等学校在学中に教育指導上特に支障のあった疾病又は異常についてホーム・ルーム担任教員の所見を記入すること。

(8)　「各教科以外の教育活動の記録」欄は、ホーム・ルーム、生徒会活動、クラブ活動及び学校行事などにおける参加、活動状況のうち、特記すべき事項を記入すること。

なお、旧教育課程による高等学校卒業者の場合は、旧生徒指導要録における「行動及び性格の記録」の「Ⅰ事実の記録」欄の記載事項により記入すること。

(9)　「行動及び性格の記録」欄は、次のように記入すること。

ア　「評定」欄は、評定項目に従い、学年ごとに生徒指導要録記載のうちA（特にすぐれたもの、又は程度の著しいもの）及びC（特に指導を要するもの）についてのみ記入すること。

なお、旧教育課程による高等学校卒業者の場合は、旧生徒指導要録により、評定項目を書き換えて記入すること。

イ　「所見」欄は、A及びCの評定理由、Cの場合の指導方針等の特記すべき事項について記入すること。

記入すべき事項が無い場合は、その旨明示すること。

(10)　「備考」欄には、生徒指導要録の学籍の記録の備考欄及び進路に関する記録欄の記載事項のうち、特に必要と認められる事項等を記入するものとし、無い場合はその旨明示すること。

なお、大学の希望により当該大学の学部・学科に対する能力・適性等について特に高等学校長が推薦できる生徒についてはその旨記入すること。

また、学校教育法施行規則第57条の３の規定に基づき、教育課程編成上の特例の適用を受けている研究開発学校にあっては、その旨明示すること。

(11) 記載責任者職氏名は、必ず明記し、押印すること。

なお、記載内容を訂正した場合は、訂正か所に校長の印を押印するとともに、欄外に加除字数を表示すること。また、紙をはり足した場合も、校長の印で割印をとること。

別紙様式３

昭和○○年度○○大学入学者選抜方法等

学部(学科・専攻・課程)名 ＼ 選抜方法等	○　○　学　部 ○○学部(○○学科)	○　○　学　部 ○　科　系	○　科　系	○○学部 ○○学部	備　考
ア　入学定員の一部について、出身学校長の推薦に基づき、学力検査を免除し調査書を主な資料として判定する					
イ　学力検査を課さないで、調査書を主な資料として判定する					
ウ　学力検査等に先立ち、調査書を主な資料として判定し、この合格者に対して学力検査等を課して最終的に判定する					
エ　調査書にⒶ標示を希望する					
オ　調査書に能力・適性等に関する推薦の記入を希望する					
カ　学力検査の一部又は全部を他の大学と共同し、共通の学力検査として実施する					
キ　学力検査を第１次と第２次に分け、第１次学力検査の合格者に対して第２次学力検査を課する					
ク　実技検査を課する					
ケ　面接を行う					
コ　小論文を課する					

記入上の注意

１．「学部(学科・専攻・課程)名」欄には、同一の選抜方法等を実施する学部（学科・専攻・課程）名を列記すること。

同一学部であっても、例えば、文科系の専攻と理科系の専攻が選抜方法等を異にする場合には分けて記入すること。

２．該当する欄には○印を付し、該当しない欄には×印を付すること。

３．「備考」欄には、推薦入学募集人員（又は比率）、推薦要件、学力検査等に先立つ調査書による判定の合格予定数（又は比率）、その他受験者の参考となる事項を記入すること。

４．ク、ケ、及びコの備考欄には、例えば、「推薦入学志望者について面接を実施する。」等の実施対象等について記入すること。

５．本表に該当する事項が全くない場合は、別紙様式４にその旨注を付すること。

別紙様式2

昭和○○年度○○大学

入学者選抜方法等

選抜方法等 ＼ 学部・学科名	第2次の学力検査		実技検査等の実施			推薦入学		
						入学定員の一部について、出身学校長の推薦に基づき、学力検査を免除し調査書を主な資料として判定する		
	課する	課さない	実技検査を課する	面接を行う	小論文を課する	(1) 第2次学力検査を免除し、共通第1次学力試験を課する	(2) 第2次学力検査を免除し、共通第1次学力試験をも免除する	推薦入学募集人員（又は比率）

記入上の注意

1．「学部・学科名」欄には、同一の選抜方法等を実施する学部・学科名を列記すること。
　同一学部・学科であっても、例えば、文科系の専攻と理科系の専攻が選抜方法等を異にする場合には、分けで記入すること。
2．各欄は、該当する欄には○印を付し、該当しない欄には×印を付すること。ただし、募集人員等は、具体的に記入すること。
3．「2段階選抜」欄の「その他」の欄は、2段階選抜を実施する場合の前提となる条件等を具体的に記入すること。
4．「備考」欄には、例えば、「推薦入学志望者について面接を行う。」等の受験者の参考となる事項を記入すること。

第2次募集			2段階選抜			備考
(1) 入学定員の一部についてあらかじめこれを留保し、これについて第2次募集を行う	同左の募集人員（又は比率）	(2) 入学定員に生じた欠員等が生じた場合に第2次募集を行う	主として、調査書の内容と共通第1次学力試験の成績により第1段階の選抜を行い、その合格者について更に必要な検査等を行う	第1段階の選抜による合格者数		
				定員に対する倍率	その他	

別紙様式4

昭和○○年度○○大学入学者選抜学力検査実施教科・科目

学部(学科・専攻・課程)名 ＼ 科目数等 ／ 出題教科・科目名		○ ○ 学 部 ○ ○ 学 部（○○学科）			○ ○ 科	
（教 科 名）	（科 目 名）	出 題 科 目	受験科目数	摘 要	出 題 科 目	受験科目数
合 計						

記入上の注意

1．「出題教科・科目名」欄には、学力検査（実技検査を課す場合は、これを含む。）として当該大学に
　査に関連して理論を課す場合においても、教科・科目の名称を実技検査とは別に記入すること。
2．「学部（学科・専攻・課程）名」欄には、同一教科・科目で学力検査を行う学部（学科・専攻・課
　同一学部であっても、例えば、文科系の専攻と理科系の専攻が教科・科目を異にする場合には分け
3．「出題科目」欄には、各学部（学科・専攻・課程）の出題科目に○印をつけるものとし、受験者が
4．「受験科目数」欄には、大学が出題した科目のうち、受験すべき科目の数を教科別に記入すること。
5．「摘要」欄には、出題範囲、出題の方法（例えば、現代国語と古典Ⅰ乙を出題して、それを同一試
6．「合計」欄には、大学において出題した科目の数及び受験者が受験すべき科目の数の合計を記入す
7．学力検査を第1次と第2次に分けて実施する場合には、それぞれ分けて記入すること。なお、その
　欄にその旨を記入すること。ただし、国立大学（国立短期大学を除く。）及び公立大学（公立短期大学
　と。

○ 学 部 ○ 系		○ 科 系		○ ○ 学 部 ○ ○ 学 部		
摘 要	出 題 科 目	受験科目数	摘 要	出 題 科 目	受験科目数	摘 要

おいて出題するすべての教科・科目の名称を高等学校学習指導要領に準拠して列記すること。なお実技検
程）名を列記すること。
て記入すること。
必ず受験しなければならない科目については◎印とすること。

験時間内に解答させることなど）、その他受験者の参考となる事項を教科別に記入すること。
ること。
際、第1次と第2次とで出題方針や出題方式（例えば客観式、記述式など）等が異なる場合には、「摘要」
を除く。）については、第2次の学力検査（実技検査を課す場合は、これを含む。）についてのみ記入するこ

2．昭和55年度大学入学者選抜

共通第１次学力試験実施要項

（昭和54年６月13日入試セ事第46号
大学入試センター所長通知）

Ⅰ　国立大学の共通第１次学力試験の実施

大学入学者選抜実施要項（昭和52年６月30日付け文大大第247号文部省大学局長通知）の第10に定める国立大学の共通第１次学力試験（以下「共通第１次学力試験」という。）の実施については、次に定めるところによるものとする。

1　目的とその実施

(1)　共通第１次学力試験は、国立大学に入学を志願する者について、主として、高等学校の段階における一般的かつ基礎的な学習の達成の程度を判定することを目的とする。

(2)　共通第１次学力試験は、各国立大学が大学入試センターと協力して、同一の期日に同一の試験問題により、共同して実施する。

2　実施に当たっての業務分担

共通第１次学力試験の実施に当たっての業務は、大学入試センターと各国立大学が、次のとおり分担する。

(1)　大学入試センターは、共通第１次学力試験の実施に当たり、試験問題等の作成・印刷及び輸送、受験案内等の作成、出願の受付、受験票の交付、監督要領等の作成、答案の採点・集計、試験成績その他資料の各大学あての提供、その他これらに関連する業務

(2)　各国立大学は、共通第１次学力試験の実施に当たり、試験場の設定、試験監督者等の選出、受験案内等の交付、試験の実施、答案の整理・発送、その他これらに関連する業務

3　対　　象

共通第１次学力試験の対象は、次に掲げるいずれかに該当し、かつ国立大学に入学を志願する者（以下「入学志願者」という。）とする。

(1)　高等学校を卒業した者及び昭和55年３月卒業見込みの者

(2)　通常の課程による12年の学校教育を修了した者及び昭和55年３月修了見込みの者

(3)　学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）第69条の規定により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者（別紙参照）及び昭和55年３月31日までにこれに該当する見込みの者

4　出題教科・科目等

(1)　共通第１次学力試験の出題は、高等学校学習指導要領に準拠し、主として高等学校においてすべての生徒が履修する科目から行う。

(2)　共通第１次学力試験の出題教科・科目等は、次のとおりとする。

国　　語　　国語は、現代国語及び古典Ⅰ甲を出題する。

社　　会　　社会は、倫理・社会、政治・経済、日本史、世界史、地理Ａ及び地理Ｂを出題し、２科目を選択解答させる。

ただし、地理Ａ及び地理Ｂの２科目を選択することはできない。

数　　学　　数学は、数学一般及び数学Ⅰを出題し、１科目を選択解答させる。ただし、数学一般を選択解答できる者は、高等学校において数学Ⅰの科目を履修せず、数学一般の科目を履修した者に限る。

理　　科　　理科は、基礎理科、物理Ⅰ、化学Ⅰ、生物Ⅰ及び地学Ⅰを出題し、基礎理科１科目又は基礎理科を除く科目から２科目を選択解答させる。ただし、基礎理科を選択解答できる者は、高等学校において物理Ⅰ、化学Ⅰ、生物Ⅰ、地学Ⅰの科目を履修せず、基礎理科の科目を履修した者に限る。

外　国　語　　外国語は、英語Ａ、英語Ｂ、ドイツ語及びフランス語を出題し、１科目を選択解答させる。ただし、英語Ａを選択解答できる者は、高等学校において英語Ｂの科目を履修せず、英語Ａの科目を履修した者に限る。

(3)　出題範囲については、共通第１次学力試験の実施期日の時点における高等学校の履修の状況に配慮する。

(4)　共通第１次学力試験は、主として多肢選択による客観式の検査方式により出題し、解答はマーク方式による。

5　受験案内等の交付

(1)　共通第１次学力試験の受験案内及び出願に必要な書類等は、大学入試センターが作成し、昭和54年７月上旬から各国立大学において交付する。

(2) 受験案内及び出願に必要な書類等の交付を受けようとする者は、直接又は出身高等学校を経由して、居住地又は出身高等学校の最寄りの国立大学に請求する。

6 出　　願

共通第１次学力試験の出願は、次によるものとする。

(1) 出願の期間は、昭和54年10月１日（月）から10月15日（月）までとする。

(2) 出願の方法は、次のとおりとする。

ア．高等学校（盲学校、聾学校及び養護学校の高等部を含む。以下同じ。）を昭和55年３月卒業見込みの者は、出願に必要な書類を取りそろえ、検定料(7,000円）を受験案内に定める手続きにより納付し、その領収証書を添えて、出身高等学校長を経由して大学入試センターに郵送により提出する。

なお、これに関する高等学校での取扱い等については、大学入試センターが別に定める。

イ．高等学校を昭和55年３月卒業見込みの者以外の者（高等学校を卒業した者、大学入学資格検定合格者等）は、出願に必要な書類（出願資格を証明する書類を含む。)を取りそろえ、検定料（7,000円）を受験案内に定める手続きにより納付し、その領収証書を添えて、直接大学入試センターに郵送により提出する。

(3) 入学志願者は、出願に際し、志望する大学・学部等を申請するものとする。この場合、第２志望まで申請することができ、その際公立大学を含めることができる。

7 受験票等の交付

(1) 大学入試センターは、出願を受理した入学志願者に対し、受験番号、試験場等を記載した受験票、志願大学に提出するための共通第１次学力試験成績請求票等を昭和54年12月下旬までに原則として直接郵送により交付する。

(2) 受験票等の再発行に関する手続き等については、大学入試センターが別に定める。

8 試験場の指定等

(1) 大学入試センターは、入学志願者に対し、次により試験場を指定する。

ア．高等学校を昭和55年３月卒業見込みの者(通信制の課程によるものを除く。)については、原則として出身高等学校が所在する都道府県内（北海道にあっては、受験案内で定める地区とする。以下同じ。）の国立大学が設定する試験場

イ．高等学校を卒業した者及び通信制の課程による卒業見込みの者については、入学志願者の希望を考慮し、出身高等学校が所在する都道府県内の国立大学が設定する試験場又は居住する都道府県内の国立大学が設定する試験場

ウ．大学入学資格検定合格者等については、居住する都道府県内の国立大学が設定する試験場

(2) 大学入試センターは、各国立大学に対し、当該大学が所在する都道府県内の入学志願者の数を割当て、各国立大学は、その割当てに応じた試験場を設定する。

9 実施期日等

(1) 共通第１次学力試験は、昭和55年１月12日（土)、13日（日）の２日間で実施する。

(2) 実施する各教科の試験時間は、国語、数学及び外国語については各100分とし、社会及び理科については各120分とする。

10 追試験の実施

(1) 共通第１次学力試験の追試験は、疾病・負傷及び交通機関の事故その他のやむを得ない事由により、共通第１次学力試験を受験できない入学志願者を対象として、昭和55年１月19日（土)、20日（日）の２日間において、大学入試センターが指定する国立大学が設定する試験場で実施する。

(2) 各国立大学は、追試験の出願を受付け、大学入試センターが定める基準により審査のうえ、受験の可否を決定するものとする。

(3) 追試験の実施に関する必要な事項は、大学入試センターが別に定める。

11 再試験の実施

雪・地震等による災害その他の事情により、所定の期日に共通第１次学力試験を実施できなかった場合には、その再試験を実施することとする。

12 資料の公表

大学入試センターは、共通第１次学力試験に係る資料を次のとおり公表する。

(1) 入学志願者の志望大学・学部等の申請の状況について、昭和54年12月中を目途として公表する。

(2) 共通第１次学力試験の問題及びその正解について、試験実施後速やかに公表する。

(3) 共通第１次学力試験の科目別全国平均点等について、昭和55年２月８日(金)までに公表する。

13 成績の請求及び提供

(1) 各国立大学は、当該大学の入学志願者についての共通第１次学力試験の成績を、入学志願者から提出された共通第１次学力試験成績請求票に基づき、大学入試センターが定める方法により大学入試センターに請求するものとする。

(2) 大学入試センターは、各国立大学の請求に基づき、共通第１次学力試験の成績を各大学に対し速やかに提供するものとする。提供する成績は、入学志願者の個人別の科目別得点及び総得点とする。

(3) 共通第１次学力試験の個人別成績は、発表しないものとする。

14 身体に障害のある者に対する試験実施上の配慮

(1) 共通第１次学力試験の実施に当たっては、身体に障害のある入学志願者に対し、障害の種類・程度に応じ、特別の配慮を行う。

(2) この場合、盲者の入学志願者に対しては、点字による出題、試験時間の延長、特定試験場の設定等の措置をとることとし、その他の身体に障害のある入学志願者に対しても、必要に応じ特定試験場の設定、介助者の付与等の措置をとることとする。

(3) 身体に障害があり、志望の大学・学部等における修学上特別な配慮を必要とする入学志願者は、あらかじめ当該大学と協議（協議中を含む。）のうえ出願するものとする。協議を受けた当該大学は、協議の結果又は協議中である旨の文書を入学志願者に交付するものとする。

Ⅱ 公立大学における共通第１次学力試験の利用

大学入学者選抜実施要項の第11に定める公立大学における共通第１次学力試験の利用に関しては、次に定めるところによるものとする。

1 利用の手続き等

(1) 各公立大学は、共通第１次学力試験の利用に関し、大学入試センターとの間で所要の取り決めを行うものとする。

(2) 各公立大学は、共通第１次学力試験の実施に関し、試験場の設定、試験監督者等の選出、受験案内等の交付、試験の実施、答案の整理等について、最寄り

の国立大学に協力するものとする。

(3) 各公立大学は、公立大学に入学を志願する者に対し、共通第１次学力試験を当該大学の第１次の学力検査として利用する旨を周知するものとする。

2 公立大学に入学を志願する者の受験申込

(1) 公立大学に入学を志願する者は、前記Ⅰの６に定めるところに準じ、共通第１次学力試験の受験申込みを行うものとする。

(2) 志望大学・学部等の申請については、Ⅰの６の(3)に準ずるものとし、第２志望まで申請するときは、国立大学を含めることができる。

3 成績の請求及び提供

(1) 公立大学に係る成績の請求及び提供は、前記Ⅰの13に準じて実施するものとする。

(2) 大学入試センターは、公立大学に成績を提供するときは入学志願者１人につき150円の成績提供手数料を当該大学から徴収するものとする。

4 そ の 他

その他については、前記Ⅰに準ずるものとする。

3．昭和55年度大学入学者選抜
共通第１次学力試験

受　験　案　内　（抄）

昭和55年１月12日(土)午後、13日(日)

大学入試センター

昭和55年度大学入学者選抜共通第１次学力試験
前年度受験案内との主な相違点

1　高等学校卒業見込みの者は、出願書類を在学する高等学校長へ提出すること。

2　高等学校卒業見込みの者以外の者（高等学校を卒業した者、大学入学資格検定合格者等）は、出願書類を直接大学入試センターへ郵送により提出すること。

（詳細は「Ⅳ　3　出願書類及びその提出方法」参照）

昭和55年度大学入学者選抜共通第１次学力試験
受　験　案　内

国公立大学入学者の選抜方法

Ⅰ　出願資格

Ⅱ　試験の期日及び試験時間

Ⅲ　試験教科・科目等

Ⅳ　出願

1　検定料の納付　　2　出願期間及び出願書類提出先

3　出願書類及びその提出方法

Ⅴ　志望する大学・学部等の申請

Ⅵ　試験場の指定及び受験希望県の申請

Ⅶ　出願に当たっての注意

Ⅷ　志願票記入事項の確認

Ⅸ　受験票等の送付

Ⅹ　受験票等の再発行

Ⅺ　資料の公表

Ⅻ　身体に障害のある者に対する試験実施上の取扱い

ⅩⅢ　追試験

ⅩⅣ　再試験

（略）

ⅩⅤ　志願票作成上の注意

ⅩⅥ　身体障害者受験措置申請書作成上の注意

ⅩⅦ　問合せ先

ⅩⅧ　高等学校へのお願い

ⅩⅨ　コード表

1　高等学校等コード表　　2　受験希望県コード表　　3　大学・学部コード表

〔注〕検定料の納付書、身体障害者受験措置申請書、受領書（高等学校用）、封筒（出願書類提出用）は折り込んである。

国公立大学入学者の選抜方法

国公立大学の入学者選抜は、昭和54年度の選抜から従来の大学入学者選抜方法を改善して、共通第１次学力試験を取り入れた選抜方法により実施しております。

これは、大学入学者の選抜は大学教育を受けるにふさわしい能力と適性をもった者を、公正にしかも妥当な方法で行わなければなりませんし、また入学者選抜に当たっては高等学校の教育を乱すようなことがあってはならないという理念に添って改められたものです。

この選抜方法は次のとおりです。

まず共通第１次学力試験をすべての国公立大学が大学入試センターと協力して共同で一斉に実施し、これによって入学志願者の高等学校における一般的・基礎的な学習の達成の程度を判定します。つづいて各大学がそれぞれの大学・学部等の特性等に応じて第２次試験（第２次の学力検査、実技検査、面接、小論文等を必要に応じて実施する。）を実施します。

各大学ではこれらの１次と２次の試験の成績や、高等学校長から提出される調査書の内容などを総合して合否の判定を行うのです。

国公立大学に入学を希望する者（共通第１次学力試験を課さない推薦入学を希望する者を除く。）は、共通第１次学力試験を受験しなければなりません。

共通第１次学力試験に出願する者は、この受験案内にしたがって所定の手続きをとってください。

昭和55年度国公立大学入学者選抜実施日程

54年7月上旬から　**共通第1次学力試験受験案内を各国公立大学で交付**

↓

7月末日まで　各国公立大学が第2次試験の実施要項を公表

↓

10月1日(月)～15日(月)　**共通第1次学力試験の出願受付、志望する大学・学部等を申請**

↓

12月上旬まで　共通第1次学力試験志願者に受験票等を送付

↓

12月25日(火)まで　各国公立大学が第2次試験の細目を公表、出願書類等の交付開始

↓

12月中　各国公立大学の大学・学部等志望状況を公表

↓

55年1月12日(土)、13日(日)　**共通第1次学力試験実施**

↓

1月13日(日)　共通第1次学力試験問題の正解の公表

↓

1月19日(土)、20日(日)　**追試験（病気等による受験不能者対象）の実施**
〔再試験（雪害等による受験不能者対象）の実施〕

↓

2月8日(金)まで　推薦入学（共通第1次学力試験を課さない場合）の結果発表

↓

2月8日(金)まで　共通第1次学力試験の科目別平均点等公表

↓

2月9日(土)～15日(金)　**各国立大学の出願受付**（各公立大学もほぼ同じ時期）

↓

2月26日(火)まで　一部の国公立大学で実施する二段階選抜と推薦入学（共通第1次学力試験を課す場合）の結果発表

↓

3月4日(火)から　**各国立大学と大部分の公立大学が第2次試験を実施**

↓

3月5日(水)以降　**一部の公立大学が第2次試験を実施**

↓

3月20日(木)まで　**各国立大学合格者発表**（各公立大学もこれに準ずる）

↓

3月21日(金)以降　一部の国公立大学が第2次募集を実施

Ⅰ 出願資格

共通第1次学力試験に出願できる者は、次のいずれかに該当し、かつ国立大学・公立大学に入学を志願する者とする。

1　高等学校を卒業した者及び昭和55年3月卒業見込みの者

2　通常の課程による12年の学校教育を修了した者及び昭和55年3月修了見込みの者

3　学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）第69条の規定により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者及び昭和55年3月31日までにこれに該当する見込みの者

これらの者は次のとおりである。

(1)　外国において、学校教育における12年の課程を修了した者及び昭和55年3月31日までに修了見込みの者

(2)　文部大臣が高等学校の課程に相当する課程を有するものとして指定した在外教育施設の当該課程を修了した者及び昭和55年3月31日までに修了見込みの者

(3)　文部大臣の指定した者（〔注〕を参照）

(4)　大学入学資格検定規程（昭和26年文部省令第13号）により文部大臣が行う大学入学資格検定に合格した者及び昭和55年3月31日までに合格見込みの者

(5)　その他大学において、相当の年令に達し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者

II　試験の期日及び試験時間

期　日	教科	試験時間
1月12日(土)	国　語	12：00－13：40
	理　科	14：30－16：30
1月13日(日)	社　会	9：00－11：00
	数　学	12：20－14：00
	外国語	14：50－16：30

III　試験教科・科目等

1　次の全教科をすべて受験すること。

1教科でも受験しなかった場合には、共通第1次学力試験を受験したことにはならない。したがって、各国公立大学の第2次試験（共通第1次学力試験を課さない推薦入学を除く。）に出願することができない。

国　語……「現代国語」と「古典Ⅰ甲」をあわせて1科目解答
社　会……2科目解答
数　学……1科目解答
理　科……2科目解答。ただし「基礎理科」を選択する場合は、1科目解答
外国語……1科目解答

2　共通第1次学力試験は、高等学校学習指導要領に準拠し、主として高等学校においてすべての生徒が履修する次の科目から出題する。

教科	試験時間	配点	出題科目	受　験　科　目
国　語	100分	200点	現代国語と古典Ⅰ甲	「現代国語」と「古典Ⅰ甲」をあわせて解答
社　会	120	200	倫理・社会 政治・経済 日　本　史 世　界　史 地　理　A 地　理　B	2科目を試験室で選択解答 （「地理A」及び「地理B」を2科目として選択することはできない。）

教科	試験時間	配点	出題科目	受　験　科　目
数　学	100分	200点	数　学　Ⅰ 数学一般	1科目を解答 （「数学一般」を解答できる者は、高等学校において「数学Ⅰ」の科目を履修せず、「数学一般」の科目を履修した者で、その選択をあらかじめ志願票で届出て、受験票で認められた者に限る。大学入学資格検定合格者についても同じ。）
理　科	120	200	物　理　Ⅰ 化　学　Ⅰ 生　物　Ⅰ 地　学　Ⅰ 基礎理科	「物理Ⅰ」「化学Ⅰ」「生物Ⅰ」「地学Ⅰ」の4科目から2科目を試験室で選択解答 又は、「基礎理科」1科目を解答 （「基礎理科」を解答できる者は、高等学校において「物理Ⅰ」「化学Ⅰ」「生物Ⅰ」「地学Ⅰ」の科目を履修せず、「基礎理科」の科目を履修した者で、その選択をあらかじめ志願票で届出て、受験票で認められた者に限る。大学入学資格検定合格者は「基礎理科」を選択した者に限る。）
外国語	100	200	英　語　B ドイツ語 フランス語 英　語　A	1科目を試験室で選択解答 （「英語A」を解答できる者は、高等学校において「英語B」の科目を履修せず、「英語A」の科目を履修した者で、その選択をあらかじめ志願票で届出て、受験票で認められた者に限る。大学入学資格検定合格者については「英語A」「英語B」のいずれの科目を選択してもよい。ただし「英語A」を選択する場合は、あらかじめ志願票で届出ること。）

3　「数学一般」、「基礎理科」、「英語A」の選択をあらかじめ志願票で届出て、受験票で認められた者は、試験室で他の科目に変更して解答することはできない。

4　『社会』の教科のうち「日本史」については、高等学校学習指導要領の『社会』「日本史」の内容中「(7)現代の世界と日本」（第二次世界大戦終結以降の事象）は出題範囲から除外する。ただし、中学校における履修程度の出題を行うことがある。

5　共通第1次学力試験は、主として多肢選択による客観式の検査方式により出題し、解答はマーク方式による。

Ⅳ 出　　願

1　検定料の納付

(1)　検定料の額

共通第１次学力試験の検定料は7,000円とする。

なお、第２次試験の検定料は、各大学へ出願する際に納付するものとし、国立大学においては8,000円（夜間に授業を行う学部にあっては5,000円）、公立大学においては、各公立大学が募集要項等で定めるところによる。

(2)　検定料の納付期限

昭和54年10月15日(月)（指定金融機関の窓口締切時刻まで）

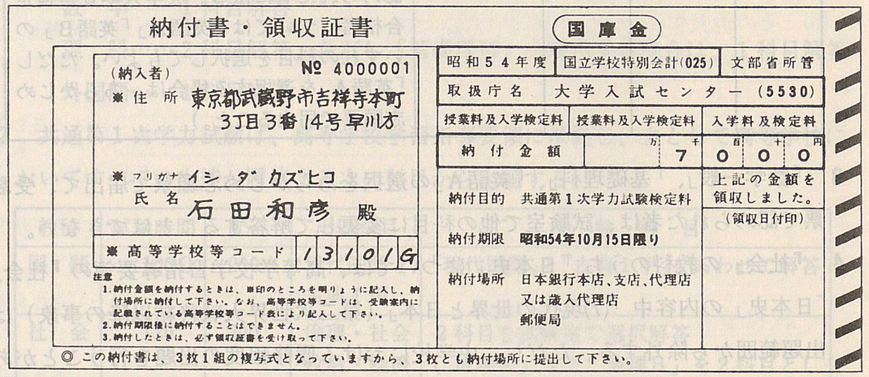
納付期限を厳守すること。

(3)　納付方法

①　検定料の納付書は、納付書・領収証書、領収控、領収済通知書の３枚１組であること、及び納入者欄の番号が３枚とも同一であることを確認すること。検定料の納付書は、この受験案内に折り込んである。

②　納付書に入学志願者の住所、氏名(フリガナ)、高等学校等コード（38～58ページ参照）を黒又は青のボールペンで正確に記入すること。

〔納付書・領収証書記入例〕



納付書・領収証書　　国庫金

（納入者）　№ 4000001

※住所　東京都武蔵野市吉祥寺本町3丁目3番14号早川方

※フリガナ　イシ　ダ　カズヒコ

氏名　石田和彦　殿

※高等学校等コード　13101G

注意
1. 納付金額を納付するときは、※印のところを明りょうに記入し、納付場所に納付して下さい。なお、高等学校等コードは、受験案内に記載されている高等学校等コード表により記入して下さい。
2. 納付期限後に納付することはできません。
3. 納付したときは、必ず領収証書を受け取って下さい。

昭和54年度	国立学校特別会計(025)	文部省所管
取扱庁名	大学入試センター（5530）	
授業料及入学検定料	授業料及入学検定料	入学料及検定料
納付金額	万 7 千	百 0 十 0 円
納付目的	共通第１次学力試験検定料	上記の金額を領収しました。（領収日付印）
納付期限	昭和54年10月15日限り	
納付場所	日本銀行本店、支店、代理店又は歳入代理店 郵便局	

◎この納付書は、３枚１組の複写式となっていますから、３枚とも納付場所に提出して下さい。

③　最寄りの日本銀行の本店、支店、代理店、歳入代理店又は郵便局で納付すること。

日本銀行歳入代理店は、銀行、信用金庫等の本店、支店で「日本銀行歳入代理店」の表示のあるもの。

④　納付した際は、必ず領収証書を受け取ること。

⑤　領収証書は、検定料納付の証明として志願票の裏の所定欄に貼付すること。

万一、領収証書を紛失した場合は、氏名、高等学校等コード、納付した金融機関名、納付年月日を速やかに大学入試センター事業部事業課（電話03－465－8600）に連絡すること。

2　出願期間及び出願書類提出先

(1)　出願期間

昭和54年10月１日(月)から10月15日(月)まで（10月15日消印有効）

出願期間を厳守すること。

(2)　出願書類提出先

〒100 東京都千代田区丸の内２丁目７番２号

東京中央郵便局留置

大学入試センター事業部

3　出願書類及びその提出方法

(1)　高等学校（盲学校、聾(ろう)学校、養護学校の高等部を含む。以下同じ。）を昭和55年３月卒業見込みの者

出願書類

①　志願票（この受験案内の裏表紙を切りはなして使用すること）

②　検定料納付済の領収証書（志願票の裏の所定欄に貼付すること）

提出方法

①　入学志願者は、出願書類を取りそろえ、在学する高等学校長へ提出すること。

②　高等学校長は出願書類を取りまとめ、大学入試センターへ書留扱いで郵送すること。

(2)　高等学校を卒業した者

出願書類

①　志願票（この受験案内の裏表紙を切りはなして使用すること）

②　検定料納付済の領収証書（志願票の裏の所定欄に貼付すること）

③　卒業証明書（出身高等学校長が発行するもの。様式を問わない。日本工業規格Ｂ５判）

高等学校からの封筒から取り出して添付すること。

④　単位修得証明書（出身高等学校長が発行するもの。様式を問わない。日本工業規格Ｂ５判）

高等学校からの封筒を開封せず、そのまま添付すること。

この単位修得証明書は、「数学一般」、「基礎理科」、「英語Ａ」を選択し解答することを届出る者のみ提出のこと。

〔注〕卒業証明書及び単位修得証明書は出願期間以前に、はやめに出身高等学校へ請求し入手しておくこと。

提出方法

入学志願者は、出願書類を取りそろえ、必ず折り込みの指定の封筒を使用し、大学入試センターへ書留扱いで直接郵送すること。

(3)　高等専門学校第３学年を修了した者及び昭和55年３月修了見込みの者

出願書類

①　志願票（この受験案内の裏表紙を切りはなして使用すること）

②　検定料納付済の領収証書（志願票の裏の所定欄に貼付すること）

③　高等専門学校第３学年を修了したことを証明する書類又は修了見込みの証明書（出身高等専門学校長が発行するもの）

高等専門学校からの封筒から取り出して添付すること。

提出方法

入学志願者は、出願書類を取りそろえ、必ず折り込みの指定の封筒を使用し、大学入試センターへ書留扱いで直接郵送すること。

(4)　外国において、学校教育における12年の課程を修了した者及び昭和55年３月31日までに修了見込みの者

出願書類

①　志願票（この受験案内の裏表紙を切りはなして使用すること）

②　検定料納付済の領収証書（志願票の裏の所定欄に貼付すること）

③　外国において学校教育の12年の課程を修了したことを証明する書類又は修了見込みの証明書

提出方法

入学志願者は、出願書類を取りそろえ、折り込みの指定の封筒を使用し、大学入試センターへ書留扱いで直接郵送すること。

(5)　文部大臣が高等学校の課程に相当する課程を有するものとして指定した在外教育施設の当該課程を修了した者及び昭和55年３月31日までに修了見込みの者

（立教英国学院高等部がこれに該当する）

出願書類

①　志願票（この受験案内の裏表紙を切りはなして使用すること）

②　検定料納付済の領収証書（志願票の裏の所定欄に貼付すること）

③　在外教育施設の高等学校の課程に相当する課程を修了したことを証明する書類又は修了見込みの証明書

提出方法

入学志願者は、出願書類を取りそろえ、折り込みの指定の封筒を使用し、大学入試センターへ書留扱いで直接郵送すること。

(6)　文部大臣の指定した者（６ページ参照）

出願書類

①　志願票（この受験案内の裏表紙を切りはなして使用すること）

②　検定料納付済の領収証書（志願票の裏の所定欄に貼付すること）

③　出身学校等を卒業又は修了したことを証明する書類、修了見込みの証明書、もしくはこれに準ずるもの

国際バカロレア資格を取得した者は、国際バカロレア事務局から授与された国際バカロレア資格証書　（International　Baccalaureate　Diploma）

提出方法

入学志願者は、出願書類を取りそろえ、必ず折り込みの指定の封筒を使用し、大学入試センターへ書留扱いで直接郵送すること。

(7)　大学入学資格検定に合格した者及び昭和55年３月31日までに合格見込みの者

（昭和55年３月31日までに18歳に達する者）

㋐　大学入学資格検定に合格した者

出願書類

① 志願票（この受験案内の裏表紙を切りはなして使用すること）

② 検定料納付済の領収証書（志願票の裏の所定欄に貼付すること）

③ 大学入学資格検定合格証書の写し又は合格証明書（文部省が発行するもの）

文部省初等中等教育局高等学校教育課へ請求し入手すること。

提出方法

入学志願者は、出願書類を取りそろえ、必ず折り込みの指定の封筒を使用し、大学入試センターへ書留扱いで直接郵送すること。

㋑ 昭和54年度大学入学資格検定に合格見込みの者

出願書類

① 志願票（この受験案内の裏表紙を切りはなして使用すること）

② 検定料納付済の領収証書（志願票の裏の所定欄に貼付すること）

③ 昭和54年度大学入学資格検定受検出席票（受検の際に交付する）

④ 科目履修証明書（出身高等学校長が発行するもの。様式を問わない。日本工業規格B５判）

高等学校からの封筒を開封せず、そのまま添付すること。

この科目履修証明書は、受検科目の一部の科目に相当する科目を在学する高等学校（定時制の課程又は通信制の課程）で昭和55年３月31日までに修得する見込みの者のみ提出のこと。

提出方法

入学志願者は、出願書類を取りそろえ、必ず折り込みの指定の封筒を使用し、大学入試センターへ書留扱いで直接郵送すること。

Ⅴ 志望する大学・学部等の申請

1 共通第１次学力試験の出願の際に、国立大学及び公立大学の中から志望する大学、学部・学群・類等を申請すること。（60ページ参照）

この場合、第２志望まで申請することができる。**第１志望は、必ず申請しなければならない。**

〔注〕 各大学の第２次試験の出願の時には、共通第１次学力試験の出願の際に申請した第１志望、第２志望のいずれかを選んで出願することが原則であるが、自己の勉学の進度や共通第１次学力試験の自己採点等によって、入学志願者が特に必要があると判断した場合には、第１志望、第２志望以外の大学・学部等に出願することができる。

Ⅵ 試験場の指定及び受験希望県の申請

1 試験場の指定

試験場は、大学入試センターが次により指定する。指定された試験場以外での受験は認めない。

(1) 高等学校を昭和55年３月卒業見込みの者（通信制の課程によるものを除く。）については、原則として出身高等学校が所在する都道府県内（北海道にあっては59ページ記載の「受験希望県コード表」で定める地区とする。以下同じ。）の国立大学が設定する試験場を指定する。

(2) 高等学校を卒業した者及び通信制の課程による卒業見込みの者については、入学志願者の希望により、出身高等学校が所在する都道府県内の国立大学が設定する試験場又は居住する都道府県内の国立大学が設定する試験場を指定する。

(3) 大学入学資格検定合格者等については、居住する都道府県内の国立大学が設定する試験場を指定する。

2 受験希望県の申請

(1) 高等学校を卒業した者及び通信制の課程による卒業見込みの者で、居住する都道府県内の国立大学が設定する試験場で受験を希望する者は、その都道府県を「受験希望県コード表」により申請しなければならない。

(2) 大学入学資格検定合格者等は、居住する都道府県を「受験希望県コード表」により申請しなければならない。

Ⅶ　出願に当たっての注意

1　出願書類は、出願期間以前に取りそろえ、十分に点検し、出願期間内に、はやめに提出すること。

出願期限（昭和54年10月15日当日消印有効）経過後に提出された出願書類は、いかなる理由があっても受理しない。

2　高等学校を卒業した者等は、卒業証明書等の必要な証明書を出願期間以前に、はやめに出身高等学校等に請求し入手しておくこと。

高等学校等に卒業証明書等の交付を郵便で請求する場合は、必要に応じて発行手数料等を添えて、封筒の表に「共通第１次学力試験出願用証明書請求」と朱書し、200円切手を貼付した返信用封筒（入学志願者の住所・氏名を表書きしたもの）を同封すること。

3　出願書類に次のような不備があるものは、受理しない。

(1)　志願票の記入もれ、記入誤り

(2)　検定料納付済の領収証書が貼付されていないもの

(3)　必要な証明書類が添付されていないもの

4　志願票を大学入試センターに提出した後は、いかなる理由があってもその記入事項を変更することはできない。

ただし、志願票の提出後に現住所、氏名、緊急の場合の連絡先（電話番号）に変更があった場合は、郵便はがき（「住所変更等」と朱書すること）に、高等学校等コード、出身高等学校名（高等学校出身者以外の者については出願資格）、新・旧の住所（フリガナ）及び氏名（フリガナ）、新連絡先（電話番号）等を記入して、速やかに大学入試センターに届出ること。

なお、住所変更による、試験場の指定の変更及び受験希望県の変更は認めない。

5　大学入試センターが出願を受理したときは、いかなる理由があっても検定料は返還しない。

Ⅷ　志願票記入事項の確認

1　大学入試センターは、志願票の記入事項を電算機に登録したのち、その事項を確認のため、はがきに打ち出して本人に送付する。

2　この確認のはがきは、大学入試センターが出願を受理した日から、おおよそ５日後に発送する。

Ⅸ　受験票等の送付

1　受験票、写真票、成績請求票は受験者心得とともに、11月下旬から12月上旬の間に大学入試センターから直接本人に送付する。

(1)　受験票

受験票には、受験番号、氏名、試験場、選択承認科目等が記載されている。

①　受験票の裏面に記載されている注意事項をよく読むこと。

②　受験票の写真欄に写真（試験日前３か月以内に撮影した無帽上半身タテ４cm・ヨコ３cm）をあらかじめ貼付すること。

③　写真欄の下の氏名欄に、受験者本人が氏名を黒又は青のボールペンで自筆で記入すること。この氏名記入は解答用紙の氏名記入と照合することがある。

④　受験票は、試験当日に必ず持参すること。

⑤　受験票は、各大学の第２次試験を受験する際にも必ず持参すること。

⑥　受験票は、紛失したり汚損したりすることのないように大切に保管しておくこと。

(2)　写真票

①　写真票の裏面に記載されている注意事項をよく読むこと。

②　写真票の写真欄に、受験票と同一の写真を貼付すること。

③　写真欄の右の氏名欄に、受験者本人が氏名を黒又は青のボールペンで自筆で記入すること。この氏名記入は解答用紙の氏名記入と照合することがある。

④　写真票は、試験当日に必ず持参し、提出すること。

(3)　成績請求票

①　成績請求票は、「国公立大学提出用」１枚、「公立大学提出用」２枚、「第2次

募集用」1枚の3種類計4枚である。

② 成績請求票の記載事項は次のとおりである。

受験番号 ― 試験場コード ― 発行回数
氏　　名

③ 国立大学の第2次試験に出願する際には、「国公立大学提出用」を、その大学の募集要項の指示に従い、志願票の所定欄に貼付すること。

④ 公立大学の第2次試験に出願する際には、「国公立大学提出用」又は「公立大学提出用」を、その大学の募集要項の指示に従い、志願票の所定欄に貼付すること。

⑤ 第2次募集に出願する際には、「第2次募集用」を、その大学の募集要項の指示に従い、志願票の所定欄に貼付すること。

⑥ 成績請求票は、紛失したり汚損したりすることのないように大切に保管しておくこと。

2 受験票、写真票、成績請求票等が12月10日(月)までに到着しなかった場合は、本人又は出身高等学校長は、12月15日(土)までに「速達郵便はがき」(「受験票未着」と朱書すること)に、高等学校等コード、出身高等学校名（高等学校出身者以外の者は出願資格)、住所(フリガナ)、氏名(フリガナ)、連絡先(電話番号）等参考となる事項を記入して、大学入試センターに届出ること。

X　受験票等の再発行

1 受験票等の再発行は原則として行わない。ただし、次の事由のあるときは受験票等の再発行を行う。

(1) 氏名に変更があったとき。

(2) 氏名、性別、生年月日に誤記があったとき。

(3) 受験票、写真票、成績請求票を紛失したり、汚損したりしたとき。

なお、住所の変更の場合は、大学入試センターの諸帳簿の住所表示は変更するが、受験票の住所表示の変更は行わず、旧住所表示のままで有効とするので受験票の再発行は行わない。

2 再発行申請の方法

(1) 再発行を申請する場合は、「速達郵便」(封筒の表に「受験票等再発行」と朱書すること）で、高等学校等コード、出身高等学校名（高等学校出身者以外の者は出願資格)、住所(フリガナ)、氏名(フリガナ)、連絡先(電話番号）等参考となる事項を記入し、200円切手1枚を同封のうえ、大学入試センターへ速やかに申請すること。

(2) 大学入試センターは、申請事項を審査のうえ、受験票、写真票、成績請求票を再発行する。

XI　資料の公表

1 大学入試センターは、共通第1次学力試験に関する資料を次のとおり報道機関を通じて公表する。

(1) 入学志願者の志望する大学・学部等の申請状況について、昭和54年12月中に公表する。

(2) 共通第1次学力試験の問題及びその正解・配点について、試験実施後速やかに公表する。

(3) 共通第1次学力試験の科目別全国平均点、標準偏差、最高点、最低点等について、昭和55年2月8日(金)までに公表する。

2 共通第1次学力試験の個人別成績は発表しない。

XII　身体に障害のある者に対する試験実施上の取扱い

1 身体に障害のある者に対する試験の実施に当たっては、障害の種類・程度に応じて特別の措置をする。

(1) 身体に障害のある者とは、次の表に掲げる者をいう。

区　分	心　身　の　故　障　の　程　度
盲　者	1　両眼の視力が0.1未満のもの 2　両眼の視力が0.1以上0.3未満のもの又は視力以外の視機能障害が高度のもののうち、点字による教育を必要とするもの又は将来点字による教育を必要とすることとなると認められるもの
聾　者	1　両耳の聴力損失が90デシベル以上のもの 2　両耳の聴力損失が90デシベル未満50デシベル以上のもののうち、補聴器の使用によっても通常の話声を解することが不可能又は著しく困難な程度のもの
精神薄弱者	1　精神発育の遅滞の程度が中度以上のもの 2　精神発育の遅滞の程度が軽度のもののうち、社会的適応性が特に乏しいもの
肢体不自由者	1　体幹の機能の障害が体幹を支持することが不可能又は困難な程度のもの 2　上肢の機能の障害が筆記をすることが不可能又は困難な程度のもの 3　下肢の機能の障害が歩行をすることが不可能又は困難な程度のもの 4　前3号に掲げるもののほか、肢体の機能の障害がこれらと同程度以上のもの 5　肢体の機能の障害が前各号に掲げる程度に達しないもののうち、6月以上の医学的観察指導を必要とする程度のもの
病弱者	1　慢性の胸部疾患、心臓疾患、腎臓疾患等の状態が6月以上の医療又は生活規制を必要とする程度のもの 2　身体虚弱の状態が6月以上の生活規制を必要とする程度のもの

（学校教育法施行令第22条の2の規定による）

(2)　試験実施上の措置

身体に障害のある者に対して試験実施の際に措置する事項は、次のとおりである。

①　試験教科・科目は一般の入学志願者と同様とする。ただし、点字による出題に当たっては、一般の入学志願者の試験問題を基本とする。

②　試験時間、解答方法等は障害の種類・程度に応じて次表のとおりとする。

障害の種類	障害の程度		出題方法	解答方法	試験時間	措置する事項
1 視覚障害	盲		点字による出題	点字による解答	1.5倍	・レーズライターの準備 ・点字板等の持参使用許可 ・点字用解答用紙等の準備
	弱視	ア	点字による出題	点字による解答	1.5倍	・レーズライターの準備 ・点字板等の持参使用許可 ・点字用解答用紙等の準備
		イ	点字による出題	文字による解答	1.5倍	・文字用解答用紙等の準備
		ウ	一般入学志願者と同様	文字による解答	一般入学志願者と同様	・照明器具の準備 ・窓側の明るい席を指定 ・拡大鏡等の持参使用許可 ・文字用解答用紙等の準備
		エ	一般入学志願者と同様	一般入学志願者と同様	一般入学志願者と同様	・照明器具の準備 ・窓側の明るい席を指定 ・拡大鏡等の持参使用許可

障害の種類	障害の程度		出題方法	解答方法	試験時間	措置する事項
2 聴覚障害	聾		一般入学志願者と同様	一般入学志願者と同様	一般入学志願者と同様	・必要に応じて手話通訳者を付与 ・補聴器の持参使用許可 ・必要に応じて座席を前列に設定
3 肢体不自由等	上肢不自由	ア	一般入学志願者と同様	一般入学志願者と同様	一般入学志願者と同様	・一般入学志願者と同様
		イ	一般入学志願者と同様	文字による解答	一般入学志願者と同様	・必要に応じて別室を設定 ・文字用解答用紙等の準備
	下肢不自由		一般入学志願者と同様	一般入学志願者と同様	一般入学志願者と同様	・試験室を一階に設定 ・車椅子等の使用許可 ・必要に応じて特製机の使用許可 ・必要に応じて別室を設定
	病弱等		一般入学志願者と同様	一般入学志願者と同様	一般入学志願者と同様	・必要に応じて別室を設定

③　点字による出題を希望する者の試験場は、その者が希望する都道府県内に国立大学が1か所設定する。

その他の身体に障害のある者については、必要に応じ、一般試験場において適宜措置をする。

2　身体に障害があり、志望する大学・学部等における修学上特別な配慮を必要とする入学志願者は、あらかじめ当該大学と協議（協議中を含む）のうえ出願するものとする。

3　出願書類

身体に障害のある入学志願者については、所定の出願書類のほか、次の書類を提出すること。

(1)　協議書

志望する大学・学部等において、修学上特別な配慮を必要とする者については、協議した大学から交付される協議の結果の文書又は協議中である旨の文書（様式は問わない）

(2)　身体障害者受験措置申請書(折り込みの用紙を切りはなして使用すること)

①　高等学校を昭和55年3月卒業見込みの者については、在学する高等学校長が入学志願者からの申し出によって作成したもの

②　高等学校を卒業見込みの者以外の者（高等学校を卒業した者、大学入学資格検定合格者等）については、父母等（成年に達しているときは入学志願者）が作成したもの

(3) 出願に当たって、高等学校及び盲学校、聾学校、養護学校の高等部を卒業した者は、出身学校長と相談することが望ましい。

4 身体障害者受験措置の決定通知

「身体障害者受験措置申請書」を提出した入学志願者については、大学入試センターが審査のうえ、受験上の措置を決定し通知する。

XIII 追 試 験

1 追試験の実施

(1) 追試験は、疾病・負傷及び交通機関の事故その他のやむを得ない事由により、全教科又は1日分の教科の試験を受験できない入学志願者を対象として行う。

(2) 追試験は、昭和55年1月19日(土)、20日(日)の2日間において行う。

(3) 追試験の試験時間、出題教科・科目等は本試験に準ずる。

(4) 追試験の試験場は、全国を複数の地区に分け、地区ごとに1か所設定する。なお、詳細は「受験者心得」に明示する。

(5) 追試験の受験申請は、受験票に記載された「試験実施大学」において受付ける。当該大学は、その申請に基づき、審査のうえこれを許可する。

2 追試験の受験を申請できる者

追試験の受験を申請できる者は、次のいずれかに該当する者とする。

(1) 入学志願者の疾病・負傷等により本試験の全教科をすべて受験できない者

(2) 次の事由により、全教科又は1日分の教科の試験を受験できない者

① 定期運行している交通機関の事故

② 法定伝染病の発生による隔離

③ 一部の地域における災害の発生等

3 追試験の受験申請手続

追試験の受験申請手続は次のとおりとする。

(1) 2の(1)に該当する者は、本人又は代理人が受験票、医師の診断書又は事故証明書を持参のうえ、昭和55年1月11日(金)午前9時から午後5時までに、受験票に記載された「試験実施大学」(各試験実施大学には「共通第1次学力試験実施委員会」が設置してある)に出頭して申請すること。

(2) 2の(2)に該当する者は、本人又は代理人が事故の態様等を、事故のあった当日の試験終了時(午後4時30分)までに、受験票に記載された「試験当日の電話」により試験場に連絡すること。試験場の係員の指示により「試験実施大学」に申請すること。この場合、可能な限り受験票を持参のうえ出頭して申請すること。

4 追試験の受験許可等

試験実施大学は追試験の受験申請者に対し、速やかに可否を決定し、その際追試験の受験に必要な事項を通知する。

XIV 再 試 験

天災、その他の事情により所定の期日に共通第1次学力試験を実施できなかった場合には、再試験を実施する。

また、降雪によって、所定の期日に本試験を実施できなかった場合には、昭和55年1月19日(土)、20日(日)の2日間において、本試験に準じて実施することがある。

(以下 略)

4.

昭和55年度大学入学者選抜共通第１次学力試験

志願票

〔提出用〕

高等学校記入欄												
① 高等学校等コード（「高等学校等コード表」により記入）							㉓ 整理番号（高等学校単位に一連番号を記入）				㉔ 身体障害者受験措置	
2											1 希望	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	

| | | | | | | | | | | | |

5. 共通第１次学力試験の検定料納付書・領収証書等

（縮小率67％）

納付書・領収証書

国庫金

（納入者）　№ 4064150 ※住　所 ※フリガナ 氏　名　　殿	昭和５４年度　国立学校特別会計(025)　文部省所管
※高等学校等コード	取扱庁名　大学入試センター（5530）

授業料及入学検定料	授業料及入学検定料	入学料及検定料
納付金額	7 0 0 0	

納付目的　共通第１次学力試験検定料	上記の金額を領収しました。（領収日付印）
納付期限　昭和54年10月15日限り	
納付場所　日本銀行本店、支店、代理店又は歳入代理店郵便局	

注意

1. 納付金額を納付するときは、※印のところを明りょうに記入し、納付場所に納付して下さい。なお、高等学校等コードは、受験案内に記載されている高等学校等コード表により記入して下さい。
2. 納付期限後に納付することはできません。
3. 納付したときは、必ず領収証書を受け取って下さい。

◎ この納付書は、３枚１組の複写式となっていますから、３枚とも納付場所に提出して下さい。

領　　収　　控

国庫金

（納入者）　№ 4064150 ※住　所 ※フリガナ 氏　名	昭和５４年度　国立学校特別会計(025)　文部省所管
※高等学校等コード	取扱庁名　大学入試センター（5530）

授業料及入学検定料	授業料及入学検定料	入学料及検定料
納付金額	7 0 0 0	

納付目的　共通第１次学力試験検定料	上記の金額を領収しました。（領収日付印）
納付期限　昭和54年10月15日限り	

領収済通知書

国庫金

（納入者）　№ 4064150 ※住　所 ※フリガナ 氏　名	昭和５４年度　国立学校特別会計(025)　文部省所管
※高等学校等コード	取扱庁名　大学入試センター（5530）

授業料及入学検定料	授業料及入学検定料	入学料及検定料
納付金額	7 0 0 0	

納付目的　共通第１次学力試験検定料	上記の金額を領収しました。（領収日付印）
納付期限　昭和54年10月15日限り	

あて先　郵便番号　153
所在地　東京都目黒区駒場２－19－１
所属庁名及び歳入徴収官　大学入試センター管理部会計課長

取りまとめ郵便局　〒152 東京都目黒区目黒本町１－15－16　目黒郵便局

6. 確認はがき

表

郵便はがき

東京中央局
料金後納
郵便

重要

殿

（　　－　　）

性別	男	女	生年月日（年号・年・月・日）	緊急の場合の連絡先（☎）

出願資格

高等学校卒業（卒業見込を含む）												高等学校卒業以外				
課程			学科					卒業見込・卒業の別								
全日	定時	通信	普通	農業	工業	商業	その他	見込	卒業	卒業年		外国	在外指定	指定	大検	その他

選択届出科目（数学一般・基礎理科・英語Ａ）	受験希望県	志望大学・学部等（第１志望・第２志望）	発行年月日（年・月・日）
			大学入試センター処理番号

大学入試センター　〒153 東京都目黒区駒場２－19－１

裏

共通第１次学力試験出願受理通知

1. あなたの出願を受理しました。
志願票により、はがきのおもてに記載したとおり登録しましたのでお知らせします。
2. あなたの「志願票控」とこの登録事項（「国籍」及び「身体障害者受験措置」欄は除く。）とを照合し、確認してください。
3. もし、この登録に誤りがあれば、その箇所を「赤」で修正してください。
4. 修正した場合は、このはがきを封筒に入れ、速達郵便で返送してください。
① 返送期限　おもてに記載した発行年月日以後７日以内（当日消印有効）
② 返送先　下記のとおり

〒153 東京都目黒区駒場２－19－１
大学入試センター事業部
電話 03（465）８６００

修正はがき

表

郵便はがき

東京中央局
料金後納
郵便

重要

殿

（　　－　　）

性別	男	女	生年月日（年号・年・月・日）	緊急の場合の連絡先（☎）

出願資格

高等学校卒業（卒業見込を含む）												高等学校卒業以外				
課程			学科					卒業見込・卒業の別								
全日	定時	通信	普通	農業	工業	商業	その他	見込	卒業	卒業年		外国	在外指定	指定	大検	その他

選択届出科目（数学一般・基礎理科・英語Ａ）	受験希望県	志望大学・学部等（第１志望・第２志望）	発行年月日（年・月・日）
			大学入試センター処理番号

大学入試センター　〒153 東京都目黒区駒場２－19－１

裏

共通第１次学力試験出願書類の修正について

1. あなたの志願票の記入事項に不備がありましたので、このままでは受理できません。
あなたからの回答をまって出願を受理します。
受理後あらためて通知します。
2. 志願票の不備内容は、下欄に記載したとおりです。
その不備の箇所は赤枠で囲んでありますので、その箇所を「赤」で修正してください。

○不備内容

3. 修正したはがきを封筒に入れ、速達郵便で返送してください。
① 返送期限　おもてに記載した発行年月日以後７日以内（当日消印有効）
② 返送先　下記のとおり

〒153 東京都目黒区駒場２－19－１
大学入試センター事業部
電話 03（465）８６００

7．昭和55年度共通第１次学力試験受験票

（縮小率67%）

昭和55年度　**共通第１次学力試験受験票**

受験番号	試験場コード
1001A	19901B

試験場		
試験場	試験場名	XXXXダ゛イガ゛ク ダ゛イ1 シケンシ゛ヨウ
試験場	所在地	トウキヨウト メグ゛ロク コマバ゛ 2 － 19 － 1　試験当日の電話 03-465-8600
試験場	道順	ケイオウテイト デ゛ンテツ イノカシラセン コマバ゛トウダ゛イマエ ゲ゛シヤ トホ 3プ゜ン

上履き持参	
持参	不要
＊	

発行回数	1
要措置	

100　トウキヨウト

＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊　　　　　　＊
＊　ミ　ホ　ン　＊
＊　　　　　　＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊

チヨダ゛ク
カスミガ゛セキ 3 － 2 － 2

コマバ゛ タロウ　殿

12345A ── 010001

写 真
（4 cm × 3 cm）
（あらかじめはっておくこと）

選択承認科目		
数学一般	基礎理科	英語A

S36 年 10 月 02 日生

男	＊	女	

（本人が自筆で氏名を記入すること）

試験実施大学	XXXXXXXダ゛イガ゛ク	試験当日以外の電話	03-465-8600

大学入試センター　〒153　東京都目黒区駒場２－19－１　電話 03（465）8600

55．共通第１次成績請求票
（国公立大学提出用）

1001A － 19901B － 1
コマバ゛ タロウ

55．共通第１次成績請求票
（第２次募集用）

1001A － 19901B － 1
コマバ゛ タロウ

55．共通第１次成績請求票
（公立大学提出用）

1001A － 19901B － 1
コマバ゛ タロウ

裏面を参照すること

55．共通第１次成績請求票
（公立大学提出用）

1001A － 19901B － 1
コマバ゛ タロウ

大学入試センター
〒153 東京都目黒区駒場2－19－1
電話 03（465）8 6 0 0

55．共通第１次学力試験写真票

1001A － 19901B － 1	要措置	
コマバ゛ タロウ		

写 真
（4 cm × 3 cm）
（あらかじめはっておくこと）

選択承認科目		
数学一般	基礎理科	英語A

（本人が自筆で氏名を記入すること）

男	＊	女	

S36 年 10 月 02 日生

高等学校等コード	12345A	整理番号	010001

昭和55年度共通第Ｉ次学力試験受験票裏面の「受験上の注意」

受 験 上 の 注 意

1．**この受験票及び写真票は、試験当日必ず携帯すること。**
2．この受験票の**写真欄**に、写真票の写真と同一の写真をはり、その下の欄に、あらかじめ受験者本人が氏名を黒又は青のボールペンで自筆で記入しておくこと。この氏名記入は、解答用紙の氏名記入と照合することがある。
3．試験開始時刻に遅刻した場合は、係員の指示に従うこと。自己の責となる事由により30分以上遅刻したときは、受験を認めない。
4．試験室では、机の上の受験番号が受験票の受験番号と同一であることを確認のうえ着席すること。受験票は常に机の上に置くこと。
5．机の上には、**Hの黒鉛筆、プラスチック製の消しゴム、鉛筆削り、時計（計時機能だけのもの）**以外のものを置いてはいけない。
6．**写真用シール**は、第１日目に配付する。受験票の**写真欄**に右下の図のように丁寧にはること。
7．解答用紙の所定欄に、受験番号・選択科目・氏名・試験場コードを監督者の指示に従い、必ず記入及びマークのこと。受験番号及び選択科目を正しくマークしていないものは採点せず、その科目の得点は０点とする。
8．試験室に入室してから試験終了まで退室は認めない。各教科の試験終了後に退室する際には、受験票を携帯すること。
9．「数学一般」、「基礎理科」、「英語Ａ」を解答できる者は、受験票で選択を承認された者に限る。他の科目に変更できない。
10．その他については、監督者の指示に従うこと。
11．この受験票は、各大学の第２次試験を受験する際にも携帯する必要があるので、大切に保管すること。

試験日程

区分	1月12日（土）		1月13日（日）		
	国語	理科	社会	数学	外国語
受験者入室	11：30まで	14：15まで	8：45まで	12：05まで	14：35まで
試験開始	12：00	14：30	9：00	12：20	14：50
試験終了	13：40	16：30	11：00	14：00	16：30

〔写真用シールのはり方〕

写真用シール→（試験室で配付）

「写真」

氏　名

写　真　票

1．**この写真票は、受験票とともに、試験第１日目に必ず持参すること。**
2．この写真票の**写真欄**に、あらかじめ受験票の写真と同一の写真（試験日前３か月以内に撮影した無帽上半身タテ４cm・ヨコ３cm）を、全面にのり付けをして、丁寧にはり付けておくこと。
3．**写真欄**の右の欄に、あらかじめ受験者本人が氏名を黒又は青のボールペンで自筆で記入しておくこと。この氏名記入は、解答用紙の氏名記入と照合することがある。
4．この写真票は、試験第１日目の国語の試験時間内に回収するので、受験票と切り離して、机の上の受験番号票の上に置くこと。

〈注 意〉
1．共通第１次成績請求票の記載事項は、受験番号－試験場コード－発行回数及び氏名である。
2．この成績請求票は、各国公立大学の第２次試験（共通第１次学力試験を課さない推薦入学を除く）及び第２次募集に出願する際に、志願大学の指示に従い出願書類の所定欄にはって提出すること。
3．国立大学への出願には、**国公立大学提出用**を提出すること。
4．公立大学への出願には、各公立大学の募集要項の指示に従い提出すること。
5．第２次募集実施大学に出願する際には、**第２次募集用**を提出すること。
6．この成績請求票は、国公立大学の第２次試験等に出願する際に提出しなければならないので、大切に保管しておくこと。

（全面にのり付けをして、出願書類の所定欄に、丁寧にはること。）

（全面にのり付けをして、出願書類の所定欄に、丁寧にはること。）

（全面にのり付けをして、出願書類の所定欄に、丁寧にはること。）

8．昭和55年度大学入学者選抜共通第1次学力試験

受　験　者　心　得

1．試験日程……昭和55年1月12日（土曜日）、1月13日（日曜日）

事　　項	1月12日(土)		1月13日(日)		
	国　語	理　科	社　会	数　学	外国語
受験者入室	11:30まで	14:15まで	8:45まで	12:05まで	14:35まで
試験開始	12:00	14:30	9:00	12:20	14:50
試験終了	13:40	16:30	11:00	14:00	16:30

（受験者入室後、試験開始までの間に受験上の説明、問題冊子・解答用紙の配付が行われる。）

2．試験教科・科目等

(1)　次の全教科をすべて受験すること。

国　　語……「現代国語」と「古典Ⅰ甲」をあわせて1科目として解答。

社　　会……2科目を選択解答。ただし、「地理A」及び「地理B」を2科目として選択することはできない。

数　　学……1科目を解答。ただし、「数学一般」を解答できる者は、受験票で選択を認められた者に限る。

理　　科……「物理Ⅰ」「化学Ⅰ」「生物Ⅰ」「地学Ⅰ」の4科目から2科目を選択解答。又は「基礎理科」1科目を解答。ただし、「基礎理科」を解答できる者は、受験票で選択を認められた者に限る。

外 国 語……1科目を解答。ただし、「英語A」を解答できる者は、受験票で選択を認められた者に限る。

(2)　**「数学一般」「基礎理科」「英語A」**の選択をあらかじめ志願票で届出て、受験票で選択を認められた者は、試験室で他の科目に変更して解答することはできない。

(3)　1教科でも受験しなかった場合には、共通第1次学力試験を受験したことにはならない。したがって、各国公立大学の第2次試験（共通第1次学力試験を課さない推薦入学を除く。）に出願することができない。

3．受験番号のマーク等

(1)　解答用紙の所定欄に受験番号、選択科目、氏名、試験場コードを監督者の指示に従い、必ず記入及びマークのこと。

(2)　**受験番号及び選択科目**を正しくマークしていないものは、採点せず、その科目の得点は0点とする。

4．試　験　場

(1)　**受験票で指定した試験場で必ず受験すること。**

指定した試験場以外での受験はできない。

(2)　試験場名、試験場の所在地、道順については、**受験票の試験場欄**に記載してあるので、試験前日までに試験場を確認しておくこと。

試験室の下見は原則として許さない。

(3)　各自が受験すべき試験室の位置、受験上の注意等については、掲示又は印刷物により指示するので、**早めに試験場に到着**し、確認すること。

①　試験場が大学内にある場合は、大学の入口で掲示又は印刷物により指示する。

②　試験場が高等学校等である場合は、高等学校等の入口で掲示又は印刷物により指示する。

(4)　試験開始時刻に遅刻した場合には、係員の指示に従うこと。自己の責となる事由により試験開始時刻に30分以上遅刻したときは、受験を認めない。

(5)　試験場の入口で**受験票**の提示を求めることがある。なお、受験者の付添者は、試験場構内に入構できないことがある。

(6)　試験室に入室してから試験終了まで退室は認めない。試験中の発病等やむをえない場合には、挙手をして監督者の指示に従うこと。

5．受験票及び写真票

(1)　**受験票及び写真票は、試験当日必ず携帯すること。**

(2)　試験当日、**受験票・写真票**を紛失し、又は忘れた場合には、試験場本部に出頭して、係員の指示をうけること。

試験場本部の場所は試験場の入口に掲示してある。

(3)　**受験票及び写真票の写真欄**には、同一の写真（試験日前3か月以内に撮影した無帽上半身タテ4cm、ヨコ3cm）を全面にのり付けをして、丁寧にはり付けておくこと。

(4)　**受験票の写真欄の下の欄及び写真票の写真欄の右の欄**に、あらかじめ受験者本人が氏名を黒又は青のボールペンで自筆で記入しておくこと。この氏名記入は解答用紙の氏名記入と照合することがある。

(5)　試験室においては、**机の上の受験番号が受験票の受験番号と同一であること**を確認のうえ着席すること。

試験中は、受験票を常に机の上に置くこと。写真票は第１日目の国語の試験開始後に回収する。

(6) **受験票は、各大学の第2次試験を受験する際にも携帯する必要があるので、大切に保管すること。**

6. 携　行　品

(1) 解答には、「**Hの黒鉛筆**」「**プラスチック製の消しゴム**」を使用することになっているので、あらかじめ用意しておくこと。

H以外の黒鉛筆、色鉛筆、ボールペン、シャープペンシルなどを使用した場合には、解答が読みとられなかったり、読み誤まるおそれがあるので、使用してはいけない。

(2) 机の上には、「**Hの黒鉛筆**」「**プラスチック製の消しゴム**」「**鉛筆削り**」「**時計**」(計時機能だけのもの)」以外のものを置いてはいけない。

その他の携行品の措置は監督者の指示に従うこと。

(3) 試験室内で、コート類を着用しても差しつかえない。

7. そ　の　他

(1) 自動車、バイク等で試験場構内への乗り入れを禁止する。

(2) 昼食は各自用意すること。

(3) 受験票の試験場欄で「上履き持参」と表示してある試験場については、上履きを持参すること。下履きはビニール袋等（各自が持参）に入れ携行すること。

備　　考

〔1〕**受験票、写真票、成績請求票の再発行**

1　**受験票等の再発行は原則として行わない。**ただし、次の事由のあるときは受験票等の再発行を行う。

(1) 氏名に変更があったとき。

(2) 氏名、性別、生年月日に誤記があったとき。

(3) 受験票、写真票、成績請求票を紛失したり、汚損したりしたとき。

なお、住所の変更の場合は、大学入試センターの諸帳簿の住所表示は変更するが、受験票の住所表示の変更は行わず、旧住所表示のままで有効とするので受験票の再発行は行わない。

2　**再発行申請の方法**

再発行を申請する場合は、「**速達郵便**」（封筒の表に「受験票等再発行」と朱書すること。）で、高等学校等コード、出身高等学校名（高等学校出身者以外の者は出願資格）、住所(フリガナ)、氏名(フリガナ)、連絡先(電話番号) 等参考となる事項を記入し、200円切手１枚を同封のうえ**大学入試センター**へ速やかに申請すること。

3　大学入試センターは申請事項を審査のうえ受験票、写真票、成績請求票を再発行し、受験者に直送する。共通第１次学力試験の期日が切迫している場合は、「受験者心得」5.(2)の措置を試験場でとるよう指示することがある。

4　受験票及び成績請求票の再発行を受けた場合には、**“再発行された受験票及び成績請求票”のみが有効である。**

“再発行された成績請求票”以外の成績請求票で各大学に出願した場合は、大学入試センターから、各大学に共通第１次学力試験の成績が送付されないので、失格となる。

〔2〕**身体障害者受験措置**

受験に際して**特別の措置を希望する旨の申請をした受験者**については、「**身体障害者受験措置決定通知書**」及び「**身体障害受験者心得**」を別途送付する。

〔3〕**追試験の実施**

追試験については、「昭和55年度大学入学者選抜共通第１次学力試験受験案内」22ページ「XIII 追試験」を参照すること。

追 試 験 場

地区	追試験場名	所在地	道順
北海道	北海道教育大学 札幌分校	北海道札幌市中央区南22条 西12丁目１番１ 電話　011－561－４２８１	国鉄札幌駅から地下鉄南北線「すすきの駅」下車、市電すすきのから「教育大学前」下車、徒歩２分。
東北	岩手大学	岩手県盛岡市上田三丁目18番 8号 電話　0196－23－５１８５	国鉄盛岡駅前から岩手県交通バス黒石野行き「富士見町」下車。
関東 甲信越	東京外国語大学	東京都北区西ヶ原四丁目51番 21号 電話　03－917－６１１１	国電山手線大塚駅前から都電三の輪橋方面行き「西ヶ原４丁目」下車、徒歩３分。
東海 北陸	岐阜大学 工・農学部	岐阜県各務原市那加門前町 ３の１ 電話　0583－82－１２０１	名鉄各務原線「岐阜大学前駅」下車、徒歩３分。又は、国鉄高山線「那加駅」下車、東へ徒歩10分。
近畿	神戸大学 経済・経営学部	兵庫県神戸市灘区六甲台町 ２番１号 電話　078－881－１２１２	国鉄六甲道駅前又は阪急六甲駅前から市バス36系統「神大正門前」下車。
中国 四国	岡山大学	岡山県岡山市津島中 三丁目１番１号 電話　0862－52－１１１１	国鉄岡山駅前から岡電バス妙善寺行き「岡大西門」下車、又は国鉄津山線「法界院駅」下車、北西へ徒歩10分。
九州 沖縄	長崎大学 文教地区	長崎県長崎市文教町１番14号 電話　0958－47－１１１１	国鉄長崎駅前から市電赤迫行き又は長崎バス住吉方面行き、いずれも「大学前」下車。

連 絡 先　　大学入試センター事業部事業課

〒１５３ 東京都目黒区駒場２丁目19番１号

電話　０３－４６５－８６００

9．昭和55年度共通第１次学力試験
都道府県別志願者数・受験者数・試験場数

県名	志願者数計	県内高校出身者数			県外高校出身者等数	本試験受験者数	欠席率	試験場数		
		合計	卒業見込者数	卒業者数				合計	左のうち	
									高校借用	その他
	人	人	人	人	人	人	%			
合計	349,566	321,212	224,314	224,314	96,898	333,026	4.73	268	63	5
北海道	15,439	13,385	※ 9,822	3,563	2,054	14,686	4.88	18	1	2
青森	2,992	2,969	2,589	380	23	2,794	6.62	2	1	
岩手	2,826	2,785	2,419	366	41	2,704	4.32	2		
宮城	6,945	5,521	3,374	2,147	1,424	6,646	4.31	5	1	
秋田	2,853	2,827	2,328	499	26	2,740	3.96	1		
山形	2,930	2,894	2,432	462	36	2,805	4.27	3	1	
福島	4,483	4,455	3,627	828	28	4,236	5.51	6	3	
茨城	4,995	4,890	3,493	1,397	105	4,739	5.13	4		
栃木	3,678	3,635	2,753	882	43	3,507	4.65	2		
群馬	5,157	5,053	※ 3,224	1,829	104	4,893	5.12	5	1	
埼玉	9,023	7,969	4,902	3,067	1,054	8,476	6.06	6	5	
千葉	10,308	8,874	※ 5,696	3,178	1,434	9,811	4.82	9	2	
東京	47,521	36,578	※20,239	16,339	10,943	44,400	6.57	25	8	1
神奈川	16,213	14,968	9,244	5,724	1,245	15,229	6.07	11	8	
新潟	4,740	4,696	3,629	1,067	44	4,536	4.30	4		
富山	4,234	4,200	3,537	663	34	4,126	2.55	2	1	
石川	3,532	3,429	2,681	748	103	3,414	3.34	2		
福井	2,379	2,366	2,003	363	13	2,266	4.75	1		
山梨	2,124	2,079	1,581	498	45	1,982	6.69	2		
長野	5,801	5,753	4,454	1,299	48	5,448	6.09	10	1	
岐阜	5,451	5,373	4,178	1,195	78	5,256	3.58	6	3	
静岡	7,274	7,198	5,868	1,330	76	6,992	3.88	8	2	
愛知	20,634	19,562	13,981	5,581	1,072	19,985	3.15	11	2	
三重	3,845	3,787	2,927	860	58	3,666	4.66	1		
滋賀	2,770	2,637	1,925	712	133	2,639	4.73	3		
京都	10,425	7,610	※ 4,521	3,089	2,815	9,925	4.80	8		
大阪	31,207	29,954	※18,218	11,736	1,253	29,854	4.34	26	11	
兵庫	16,155	15,655	※10,973	4,682	500	15,425	4.52	13	4	
奈良	3,489	3,209	2,255	954	280	3,293	5.56	4		
和歌山	2,933	2,897	2,138	759	36	2,776	5.35	4	2	
鳥取	2,233	2,211	1,683	528	22	2,167	2.96	3		
島根	2,306	2,282	1,933	349	24	2,214	3.99	2		

県名	志願者数計	県内高校出身者数			県外高校出身者等数	本試験受験者数	欠席率	試験場数		
		合計	卒業見込者数	卒業者数				合計	左のうち	
									高校借用	その他
岡山	人 7,282	人 7,118	人 5,853	人 1,265	人 164	人 7,019	% 3.61	1		
広島	9,150	8,550	6,337	2,213	600	8,795	3.88	11	1	
山口	5,117	5,060	3,993	1,067	57	4,919	3.87	5		
徳島	2,764	2,717	※ 2,114	603	47	2,617	5.32	1		
香川	3,390	3,316	2,604	712	74	3,264	3.72	2		
愛媛	4,863	4,781	※ 4,279	502	82	4,732	2.69	1		
高知	2,104	2,023	1,505	518	81	1,985	5.66	2		
福岡	16,732	15,158	※ 9,568	5,590	1,574	16,066	3.97	13		2
佐賀	2,431	2,400	1,829	571	31	2,333	4.03	2		
長崎	5,086	5,022	4,087	935	64	4,905	3.58	2		
熊本	5,953	5,766	3,930	1,836	187	5,739	3.59	2		
大分	4,079	4,034	3,577	457	45	3,940	3.41	2		
宮崎	3,566	3,523	3,062	461	43	3,461	2.94	4		
鹿児島	5,539	5,451	4,456	995	88	5,288	4.53	5		
沖縄	4,615	4,592	2,493	2,099	23	4,333	6.15	6	5	

（注）１．他に点字試験場は、東京１、大阪１、兵庫１、岡山１、計４会場。

２．※印を付した次の都道府県の県内高校卒業見込者に、他県所在の通信制高校卒業見込者で当該都道府県に居住し、受験する者を含めた。

北海道１人、群馬県１人、千葉県２人、東京都２人、京都府２人、大阪府５人、兵庫県１人、徳島県２人、愛媛県２人、福岡県２人、計19人

３．福岡県の県内高校出身者に、長崎県対馬壱岐地区の高校卒業見込者117人（男77、女40）、卒業者32人（男29、女３）、会計149人を含む。

10. 昭和55年度　共通第１次学力試験試験場一覧

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
北海道	北海道大学	北海道大学 農学部	10101A	人 880	札幌市北区北９条西９丁目 地下鉄南北線「北12条駅」下車、徒歩12分
		北海道大学 文・法学部	10102Y	870	札幌市北区北10条西７丁目 地下鉄南北線「北12条駅」下車、徒歩10分
		北海道大学 理学部	10103U	650	札幌市北区北10条西８丁目 地下鉄南北線「北12条駅」下車、徒歩10分
		北海道大学 工学部	10104K	890	札幌市北区北13条西８丁目 地下鉄南北線「北12条駅」下車、徒歩８分
		北海道大学 教養部A	10105C	698	札幌市北区北17条西８丁目 地下鉄南北線「北18条駅」下車、徒歩10分
		北海道大学 教養部B	10106A	2,355	札幌市北区北17条西８丁目 地下鉄南北駅「北18条駅」下車、徒歩10分
	北海道教育大学	札幌予備学院 1号館	10201U	1,000	札幌市中央区北８条西12丁目 「札幌駅」南口から西へ徒歩15分
		札幌予備学院 2号館	10202K	677	札幌市中央区北６条西13丁目 「札幌駅」南口から西へ徒歩15分
		北海道教育大学 岩見沢分校	10206X	600	岩見沢市緑が丘２丁目34－１ 岩見沢駅前から中央バスAコース「教育大学前」下車
		道立 岩見沢東高等学校	10207M	539	岩見沢市東山町112 岩見沢駅前から中央バスAコース「競技場前」下車、徒歩10分
		北海道教育大学 旭川分校	10204A	700	旭川市北門町９丁目２－４－５ 旭川駅前から旭川電気軌道バス（５番）「旭町２条10丁目」下車、徒歩５分
		北海道教育大学 函館分校	10203C	1,165	函館市八幡町１－２ 市電「新世橋」又は「宮前町」下車、北へ徒歩５分
		北海道教育大学 釧路分校	10205Z	596	釧路市城山１丁目15―55 釧路駅前から東邦交通バス武佐線、貝塚線、自衛隊線「城山十字路」下車、徒歩２分
	室蘭工業大学	室蘭工業大学	10701Y	931	室蘭市水元町27－１ 東室蘭駅東口下車、バスターミナルから道南バス新日鉄前（工大経由）行「工大前」下車
	小樽商科大学	小樽商科大学	10801K	936	小樽市緑３丁目５－21 小樽駅前から中央バス最上線「朝日通」下車、北西へ徒歩10分
	帯広畜産大学	帯広畜産大学	10901A	577	帯広市稲田町 帯広駅前から国鉄バス又は十勝バス畜大農場行「畜大正門前」下車
	旭川医科大学	旭川医科大学	11001Z	708	旭川市西神楽４線５号３－11 旭川駅前から旭川電気軌道バス緑が丘線「医大前（終点）」下車

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
北海道	北見工業大学	北見工業大学	11101M	人 667	北見市公園町165 北見駅前から市内バス柏陽高校行「工大前」下車、徒歩５分
青森	弘前大学	弘前大学	11201B	2,075	弘前市文京町１ 国鉄弘前駅前からバス松原線「弘前大学前」下車
		県立 八戸西高等学校	11202A	917	八戸市尻内町字中根市14 「八戸駅」西口下車、北へ徒歩15分
岩手	岩手大学	岩手大学 第１（農・工学部）	11301Y	1,400	盛岡市上田３丁目18－８ 盛岡駅前から岩手県交通バス、黒石野行「富士見町」下車
		岩手大学 第２（教育・人文社会科学部）	11302U	1,426	盛岡市上田３丁目18－８ 盛岡駅前から岩手県交通バス、黒石野行「富士見町」下車
宮城	東北大学	東北大学 教養部	11401K	3,180	仙台市川内 仙台駅前から市営バス宮教大行「扇坂」下車、又は交通公園行「川内郵便局前」下車
		県立 仙台南高等学校	11402C	760	仙台市根岸15－１ 仙台駅前から市営バス西の平（門前経由）行、又は羽黒台行「仙台南高校前」下車
		東北大学 理学部	11403A	510	仙台市荒巻字青葉 仙台駅前から市営バス宮教大（理学部経由）行、又は青葉台行「理学部前」下車
		東北大学 工学部	11404Z	1,400	仙台市荒巻字青葉 仙台駅前から市営バス宮教大行「工学部前」下車
	宮城教育大学	宮城教育大学	11501A	1,095	仙台市荒巻字青葉 仙台駅前から市営バス宮教大行「宮教大（終点）」下車
秋田	秋田大学	秋田大学	11601X	2,853	秋田市手形学園町１－１ 秋田駅前から市営バス大回り線（手形回り）「秋田大学前」下車
山形	山形大学	山形大学 小白川地区	11701H	1,774	山形市小白川町１丁目４－12 山形駅前からバス千歳公園（東原経由）行、又は１コース市内循環「山大前」下車
		山形大学 工学部	11702B	485	米沢市城南４丁目３－16 米沢駅前からバス白布高湯行「山大前」下車、徒歩５分
		県立 鶴岡南高等学校	11703A	671	鶴岡市若葉町26―31 「鶴岡駅」下車、南西へ徒歩25分、鶴岡公園北側
福島	福島大学	福島大学 教育学部	11801A	1,044	福島市松川町字直道２ 「金谷川駅」下車、東へ徒歩10分
		福島大学 経済学部	11802Y	857	福島市森合字西養山10－７ 福島交通線「森合駅」下車、徒歩２分
		県立 福島高等学校	11803U	994	福島市森合町５－72 福島駅前からバス市内循環線「福高前」下車
		県立 福島北高等学校	11804K	777	福島市飯坂町字後畑１ 福島交通線「医王寺駅」下車、北東へ徒歩10分

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
福島	福島大学	福島県立医科大学	30201M	人 205	福島市杉妻町5—75 「福島駅」下車、平和通り東へ徒歩15分
		県立 福島女子高等学校	30202H	606	福島市宮下町7—41 福島駅前からバス市内循環線「福島体育館前」下車、徒歩2分
茨城	茨城大学	茨城大学 本部	11901U	2,499	水戸市文京2丁目1—1 水戸駅前又は赤塚駅前から茨城交通バス茨大行「茨大前（終点）」下車
		茨城大学 工学部	11902K	647	日立市中成沢町4丁目12—1 日立駅前又は常陸多賀駅前から日立電鉄バス中央線「茨大前」下車
	筑波大学	筑波大学 体育・芸術専門学群	12101A	1,000	新治郡桜村天王台1丁目1—1 土浦駅前からバス筑波大学中央行、又は石下行「筑波大学西」下車、徒歩5分
		筑波大学 第1学群	12102Z	849	新治郡桜村天王台1丁目1—1 土浦駅前からバス筑波大学中央行、又は高エネルギー行「筑波大学中央」下車、徒歩5分
栃木	宇都宮大学	宇都宮大学 峰地区	12201X	2,950	宇都宮市峰町350 国鉄宇都宮駅前から国鉄バス・東野バス・東武バス「宇大前」下車
		宇都宮大学 石井地区	12202M	728	宇都宮市石井町2753 国鉄宇都宮駅前から国鉄バス芳賀方面行「工学部前」又は東野バス・東武バス「シンガー日鋼前」下車
群馬	群馬大学	群馬大学 教育学部	12301H	1,000	前橋市荒牧町1375 前橋駅前から東武バス渋川行、沼田行、溝呂木行「自動車教習所」下車、西へ徒歩10分
		群馬大学 教養部	12302B	631	前橋市荒牧町1375 前橋駅前から東武バス渋川行、沼田行、溝呂木行「自動車教習所」下車、西へ徒歩10分
		群馬大学 工学部	12304Y	1,169	桐生市天神町1丁目5—1 桐生駅前から東武バス天神町行、又は梅田行「群大前」下車
		県立 前橋女子高等学校	12303A	1,073	前橋市紅雲町2丁目19—1 前橋駅前から西へ徒歩10分
		高崎経済大学	30401Y	1,284	高崎市上並榎町1300 高崎駅前から群馬バス室田（本郷経由）行、又は箕郷（沖経由）行「経済大学前」下車
埼玉	埼玉大学	埼玉大学	12401A	1,790	浦和市下大久保255 国電北浦和駅西口からバス埼玉大学行「埼玉大学（終点）」下車
		県立 浦和高等学校	12402Y	1,215	浦和市領家5丁目3—3 国電「北浦和」東口下車、東へ徒歩10分
		県立 浦和第一女子高等学校	12403U	1,064	浦和市岸町3丁目8—45 国電「浦和駅」西口下車、南へ徒歩10分
		浦和市立高等学校	12404K	1,215	浦和市元町1丁目28—17 国電「北浦和駅」東口下車、東へ徒歩15分
		小松原高等学校	12405C	2,550	浦和市南浦和3—21 国電「南浦和駅」東口下車、東へ徒歩10分

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
埼玉	埼玉大学	小松原女子高等学校	12406A	人 1,189	浦和市東岸町10—36 国電「浦和駅」東口下車、東へ徒歩10分
千葉	千葉大学	千葉大学 第1(人文学部)	12501U	600	千葉市弥生町1—33 国電「西千葉駅」北口下車、徒歩6分
		千葉大学 第2(薬学部)	12502K	500	千葉市弥生町1—33 国電「西千葉駅」北口下車、徒歩6分
		千葉大学 第3(工学部)	12503C	1,100	千葉市弥生町1—33 国電「西千葉駅」北口下車、徒歩5分
		千葉大学 第4(教養部)	12504A	2,315	千葉市弥生町1—33 国電「西千葉駅」北口下車、徒歩7分
		千葉大学 第5(理学部・教養部)	12505Z	1,035	千葉市弥生町1—33 国電「西千葉駅」北口下車、徒歩7分
		千葉大学 第6(教育学部)	12506X	1,730	千葉市弥生町1—33 国電「西千葉駅」北口下車、徒歩8分
		千葉大学 園芸学部	12507M	801	松戸市松戸648 国電「松戸駅」東口下車、南へ徒歩15分
		県立 千葉高等学校	12508H	1,100	千葉市葛城1丁目5—2 国鉄「本千葉駅」下車、東へ徒歩10分
		県立 千葉東高等学校	12509B	1,127	千葉市轟町1丁目18—52 国電「西千葉駅」北口下車、東へ徒歩10分
東京	東京大学	東京大学 本郷	12601C	5,600	文京区本郷7丁目3—1 地下鉄丸の内線「本郷三丁目駅」下車、徒歩7分、又は国電お茶の水駅前からバス東大構内行
		東京大学 教養学部	12602A	5,180	目黒区駒場3丁目8—1 井の頭線「駒場東大前駅」東大口下車
		東京大学 農学部	12603Z	630	文京区弥生1丁目1—1 地下鉄千代田線「根津駅」下車、徒歩7分、又は地下鉄丸の内線「本郷三丁目駅」下車、徒歩10分
		東京大学 教育学部附属高等学校	12604X	480	中野区南台1丁目15—1 新宿駅西口から京王帝都バス永福町行、又は中野車庫行「東大附属前」下車
		都立 青山高等学校	12605M	900	渋谷区神宮前2丁目1—8 地下鉄銀座線「外苑前駅」下車、徒歩3分
		都立 戸山高等学校	12606H	1,215	新宿区戸山町1 国電山手線「高田馬場駅」下車、徒歩15分
		都立 向丘高等学校	12607B	900	文京区向丘1丁目11—8 地下鉄都営6号線「白山駅」下車、徒歩5分
		都立 竹台高等学校	12608A	810	荒川区東日暮里5丁目14—1 国電山手線・京浜東北線「鶯谷駅」下車、徒歩7分

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
東京	東京大学	都立竹早高等学校	12609Y	人 675	文京区小石川4丁目2－1 地下鉄丸の内線「茗荷谷駅」又は「後楽園駅」下車、徒歩9分
	東京医科歯科大学	代々木ゼミナール代々木校舎	12701Z	1,870	渋谷区代々木1丁目27—16 国電山手線「代々木駅」下車、徒歩2分
	東京外国語大学	東京外国語大学	12801M	2,100	北区西ケ原4丁目51—21 国電山手線大塚駅前から都電三の輪橋方面行「西ケ原4丁目」下車、徒歩3分
	東京学芸大学	東京学芸大学	12901B	3,350	小金井市貫井北町4丁目1－1 国電中央線「武蔵小金井駅」北口下車、西へ徒歩20分
	東京農工大学	東京農工大学農学部	13001A	1,678	府中市幸町3丁目5－8 国電中央線国分寺駅南口から京王バス府中駅行「晴見町」下車
		東京農工大学工学部	13002Y	1,372	小金井市中町2丁目24—16 国電中央線「東小金井駅」下車、南西へ徒歩15分
	東京芸術大学	東京芸術大学	13101U	672	台東区上野公園12—8 国電「上野駅」公園口下車、徒歩10分
	東京工業大学	東京工業大学	13201C	4,050	目黒区大岡山2丁目12—1 東急目蒲線又は大井町線「大岡山駅」南口下車、徒歩1分
		東京工業大学附属工業高等学校	13202A	750	港区芝浦3丁目3－6 国電山手線・京浜東北線「田町駅」芝浦口下車、徒歩2分
		東京都立大学目黒校舎	30501K	1,870	目黒区八雲1丁目1－1 東急東横線「都立大学駅」下車、徒歩5分
		東京都立大学附属高等学校	30502C	809	目黒区八雲1丁目1－2 東急東横線「都立大学駅」下車、徒歩7分
	東京商船大学	東京商船大学	13301Z	1,088	江東区越中島2丁目1－6 地下鉄東西線「門前仲町駅」下車、月島方面へ徒歩10分
	東京水産大学	東京水産大学	13401M	1,300	港区港南4丁目5－7 国電山手線・京浜東北線「品川駅」港南口下車、東へ徒歩6分
	お茶の水女子大学	お茶の水女子大学	13501B	2,820	文京区大塚2丁目1－1 地下鉄丸の内線「茗荷谷駅」又は有楽町線「護国寺駅」下車、徒歩5分
	電気通信大学	電気通信大学	13601Y	3,100	調布市調布ケ丘1丁目5－1 京王線「調布駅」北口下車、徒歩7分
	一橋大学	一橋大学国立本校	13701K	1,925	国立市中2－1 国電中央線「国立駅」南口下車、南へ徒歩10分
		一橋大学小平分校	13702C	2,370	小平市学園西町1丁目29—1 西武多摩湖線「一橋学園駅」下車、西へ徒歩10分
神奈川	横浜国立大学	横浜国立大学教育学部	13801A	1,380	横浜市保土ケ谷区常盤台156 相模鉄道「和田町駅」下車、北へ徒歩20分

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
神奈川	横浜国立大学	横浜国立大学経済・経営・工学部	13802Z	人 2,623	横浜市保土ケ谷区常盤台156 相模鉄道「和田町駅」下車、北へ徒歩20分
		横浜市立桜丘高等学校	13803X	1,350	横浜市保土ケ谷区桜ケ丘312 横須賀線保土ケ谷駅西口から、市バス横浜駅西口行「桜丘高校前」下車
		横浜市立戸塚高等学校	13804M	1,215	横浜市戸塚区汲沢町1706 横須賀線戸塚駅下車、西口神奈中バス立場行、又は中田行「踊場」下車、徒歩10分
		県立富岡高等学校	13805H	1,260	横浜市金沢区富岡町126—50 京浜急行「京浜富岡駅」下車、東へ徒歩10分
		県立松陽高等学校	13806B	1,215	横浜市戸塚区和泉町7713 相模鉄道「いずみ野駅」下車、北へ徒歩15分
		県立市ケ尾高等学校	13807A	1,620	横浜市緑区市ケ尾1854 田園都市線「市ケ尾駅」下車、西へ徒歩15分
		県立横浜日野高等学校	13808Y	1,035	横浜市港南区日野町1913 根岸線「洋光台駅」下車、北へ徒歩20分、又は市バス上大岡行「洋光台北口」下車
		県立瀬谷高等学校	13809U	1,350	横浜市瀬谷区瀬谷町5396 相模鉄道「三ツ境駅」下車、北へ徒歩15分
		横浜市立大学	30601A	1,950	横浜市金沢区瀬戸22—2 京浜急行「金沢八景駅」下車、徒歩5分
		横浜市立金沢高等学校	30602Z	1,215	横浜市金沢区瀬戸22—1 京浜急行「金沢八景駅」下車、徒歩5分
新潟	新潟大学	新潟大学五十嵐地区	13901X	3,024	新潟市五十嵐2の町8050 新潟駅前からバス新潟大学前行「新大正門」下車、徒歩5分
		新潟大学教育学部長岡分校	13902M	410	長岡市学校町1丁目1－1 「長岡駅」下車、東へ徒歩20分
		新潟大学教育学部高田分校	13903H	591	上越市西城町1丁目7－2 「高田駅」下車、東へ徒歩20分
	長岡技術科学大学	長岡技術科学大学	14001M	715	長岡市上富岡町字長峰1603—1 長岡駅前からバス（2番線）才津経由、親沢、塚山、来迎寺、小国行「富岡」下車、西へ徒歩10分
富山	富山大学	富山大学	14101B	3,440	富山市五福3190 富山駅前からバス高岡行「大学前」下車、又は市内電車大学前行「大学前（終点）」下車
	富山医科薬科大学	県立富山中部高等学校	14201Y	794	富山市芝園町3丁目1—26 富山駅前から南西へ徒歩15分、又は市内電車富山大学行「安野屋」下車、徒歩5分
石川	金沢大学	金沢大学丸の内(城内)	14301K	2,550	金沢市丸の内1—1 金沢駅前から北鉄バス錦町行、湯涌温泉行「公園下」下車、徒歩5分
		金沢大学工学部	14302C	982	金沢市小立野2丁目40—20 金沢駅前から北鉄バス錦町行、湯涌温泉行「工学部前」下車

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
福井	福井大学	福井大学	14401 A	2,379	福井市文京３丁目９－１ 福井駅前から市内バス（４番）福井大学行、又は経田町行「福井大学前」下車
山梨	山梨大学	山梨大学	14601 H	1,803	甲府市武田４丁目４－37 甲府駅北口から北へ徒歩20分、又はバス武田神社行、積翠寺行「大学前」下車
		都留文科大学	30801 H	321	都留市田原３丁目８－１ 富士急行線「谷村町駅」下車、南西へ徒歩20分
長野	信州大学	信州大学人文学部	14801 U	200	松本市旭３丁目１－１ 松本駅前から松本電鉄バス浅間温泉（信大病院経由）行「大学北」下車
		信州大学理学部	14802 K	350	松本市旭３丁目１－１ 松本駅前から松本電鉄バス浅間温泉（信大病院経由）行「大学前」下車
		信州大学経済学部	14803 C	200	松本市旭３丁目１－１ 松本駅前から松本電鉄バス浅間温泉（信大病院経由）行「大学北」下車
		信州大学教養部	14804 A	620	松本市旭３丁目１－１ 松本駅前から松本電鉄バス浅間温泉（信大病院経由）行「大学前」下車
		信州大学医療技術短期大学部	14805 Z	450	松本市旭３丁目１－１ 松本駅前から松本電鉄バス浅間温泉（信大病院経由）行「大学前」下車
		信州大学教育学部	14806 X	1,007	長野市西長野６ノロ 「長野駅」中央口下車、北へ徒歩20分
		信州大学工学部	14807 M	1,100	長野市若里500 「長野駅」東口下車、南へ徒歩15分
		信州大学繊維学部	14808 H	817	上田市常田３丁目15－１ 「上田駅」下車、南へ徒歩15分
		県立上田高等学校	14809 B	313	上田市大手１丁目４－32 「上田駅」下車、東へ徒歩５分
		信州大学農学部	14810 M	744	上伊那郡南箕輪村8304 伊那市駅前バスターミナルから羽広行、又は与地行「大学前」下車
岐阜	岐阜大学	岐阜大学教育学部・教養部	14901 C	1,160	岐阜市長良城之内1466 岐阜駅前、又は新岐阜駅前から岐阜バス長良岐大行、又はおぶさ行「長良岐大前」下車、徒歩２分
		岐阜大学工・農学部	14902 A	1,050	各務原市那加門前町３－１ 名鉄各務原線「岐阜大前駅」下車、徒歩３分、又は国鉄高山線「那加駅」下車、東へ徒歩10分
		県立長良高等学校	14903 Z	1,050	岐阜市長良西後町1716－１ 岐阜駅前、又は新岐阜駅前から岐阜バス長良岐大行、又はおぶさ行「長良高校前」下車、徒歩２分
		県立岐山高等学校	14904 X	550	岐阜市長良小山田2587 岐阜駅前、又は新岐阜駅前から名鉄バス高富行「高見」下車、東へ徒歩８分
		県立加納高等学校	14905 M	1,050	岐阜市加納南陽町３ 岐阜駅前、又は新岐阜駅前から市営バス県庁行（２番）茜部車庫行（６番）「加納高校前」下車

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
岐阜	岐阜大学	岐阜薬科大学	30901 A	人 591	岐阜市三田洞東５丁目６－１ 岐阜駅前、又は新岐阜駅前から岐阜バス、又は市営バス三田洞団地行「薬大前」下車
静岡	静岡大学	静岡大学教養部	15001 A	2,100	静岡市大谷836 新静岡センターからバス小鹿大谷線静大前行「静大前（終点）」下車
		静岡大学教育学部	15002 Z	800	静岡市大谷836 新静岡センターからバス小鹿大谷線静大前行「静大前（終点）」下車
		県立静岡高等学校	15003 X	1,060	静岡市長谷町66 新静岡センターからバス麻機線麻機行「長谷通」下車、徒歩３分
		静岡大学工学部	15004 M	650	浜松市城北３丁目５－１ 浜松駅北口から遠鉄バス（８番ポール）曳馬野行、又は気賀行、いずれも「工学部前」下車
		静岡薬科大学	31101 K	459	静岡市小鹿２丁目２－１ 新静岡センターからバス小鹿線競輪場行「薬大前」下車
		静岡女子大学	31001 Y	655	静岡市谷田409 新静岡センターから静鉄電車「草薙駅」下車、南へ徒歩15分
	浜松医科大学	浜松医科大学	15101 X	500	浜松市半田町3600 浜松駅北口から遠鉄バス医大循環又は市営バス山の手線、いずれも「医科大学」下車
		県立浜松北高等学校	15102 M	1,050	浜松市広沢１丁目30－１ 浜松駅北口から遠鉄バス（８番ポール）曳馬野行、又は気賀行、いずれも「浜松北高前」下車
愛知	愛知教育大学	愛知教育大学	15301 A	2,924	刈谷市井ケ谷町広沢１ 名鉄名古屋本線知立駅前から名鉄バス愛知教育大学前行「大学前」下車
	名古屋大学	名古屋大学東山地区	15201 H	7,300	名古屋市千種区不老町 地下鉄東山線本山駅下車、市バス八事方面行「名古屋大学前」下車
		名古屋市立菊里高等学校	15202 B	1,000	名古屋市千種区田代町瓶杁１－８ 地下鉄東山線「星ケ丘駅」下車、南へ徒歩３分
		愛知県立芸術大学	31301 X	353	愛知郡長久手町大字岩作字三ケ峰１－１ 地下鉄東山線、藤ケ丘駅下車、名鉄バス農業試験場行「県立芸大前」下車
		名古屋市立大学山の畑地区	31401 H	1,473	名古屋市瑞穂区字山の畑１ 名鉄金山橋駅前から市バス山下通行「滝子」下車、南へ徒歩５分
		名古屋市立大学田辺通地区	31402 B	480	名古屋市瑞穂区田辺通３－１ 名鉄金山橋駅前から市バス山下通行「市大薬学部」下車
	名古屋工業大学	名古屋工業大学第１	15401 U	2,960	名古屋市昭和区御器所町 国鉄・地下鉄とも「舞鶴駅」下車、東へ徒歩10分、又は市バス「病院正門前」下車、東へ徒歩３分
		名古屋工業大学第２	15402 K	940	名古屋市昭和区御器所町 国鉄・地下鉄とも「舞鶴駅」下車、東へ徒歩10分、又は市バス「病院正門前」下車、東へ徒歩３分
		愛知県立大学	31201 A	1,400	名古屋市瑞穂区高田町３－28 市バス「滝子」からは南へ、「雁道」からは東へ、「博物館」からは西へ、「大喜」からは北へ、いずれも徒歩10分

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
愛知	豊橋技術科学大学	豊橋技術科学大学	15501C	人 930	豊橋市天伯町字雲雀ケ丘1－1 豊橋バスターミナル（豊橋駅から東へ徒歩5分）から豊鉄バス細谷線「技科大前」下車
		県立時習館高等学校	15502A	875	豊橋市富本町 豊鉄渥美線「南栄駅」下車、北へ徒歩5分
三重	三重大学	三重大学	15601Z	3,845	津市上浜町1515 近鉄「江戸橋駅」下車、北へ徒歩15分、又は津駅東口からバス（4番）「大学前」下車、徒歩5分
滋賀	滋賀大学	滋賀大学経済学部	15701M	1,439	彦根市馬場1丁目1－1 彦根駅前から近江バス大薮行、長浜駅行「栄町」下車、徒歩5分
		滋賀大学教育学部	15702H	945	大津市平津2丁目5－1 石山駅前から京阪バス大石行「滋賀大学前」下車、徒歩5分
	滋賀医科大学	滋賀医科大学	15801B	386	大津市瀬田月輪町 瀬田駅前からバス滋賀医大行「滋賀医大西門」下車
京都	京都大学	京都大学第1（北部構内）	15901Y	1,150	京都市左京区北白川追分町 市バス「百万遍」下車、東へ徒歩5分、又は「農学部前」下車、西へ徒歩2分、北部構内
		京都大学第2（医・薬学部構内）	15902U	750	京都市左京区吉田近衛町 市バス「近衛通」下車、西へ徒歩5分、医学部・薬学部構内
		京都大学第3（本部・教養部構内）	15903K	4,679	京都市左京区吉田本町 市バス「東一条」下車、東へ徒歩3分、本部・教養部構内
		京都府立医科大学	31701C	300	京都市上京区河原町通り広小路上ル梶井町465 市バス「府立医大・病院前」下車、南へ徒歩3分
	京都教育大学	京都教育大学	16001U	1,099	京都市伏見区深草藤森町1 京阪電鉄「墨染駅」又は「藤森駅」下車、東へ徒歩10分
		京都府立大学	31601U	649	京都市左京区下鴨半木町1 市バス「府立大学前」下車、北へ徒歩8分、又は京都バス「北園町」下車
	京都工芸繊維大学	京都工芸繊維大学	16101C	1,400	京都市左京区松ケ崎橋上町 京都駅前から市バス14号系統「工芸繊維大学前」下車
		京都市立芸術大学美術学部	31501A	398	京都市東山区今熊野日吉町50 市バス「東山七条」下車、東山通りを南へ約100m東入る
大阪	大阪大学	大阪大学文科系（文・法・経済）学部	16201Z	980	豊中市待兼山町1－1 阪急宝塚線「石橋駅」下車、東へ徒歩20分
		大阪大学理学部	16202X	1,000	豊中市待兼山町1－1 阪急宝塚線「石橋駅」下車、東へ徒歩20分
		大阪大学基礎工学部	16203M	1,300	豊中市待兼山町1－1 阪急宝塚線「石橋駅」下車、東へ徒歩20分
		大阪大学教養部	16207Y	1,300	豊中市待兼山町1－1 阪急宝塚線「石橋駅」下車、東へ徒歩20分

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
大阪	大阪大学	大阪大学工学部	16206A	人 2,070	吹田市大字山田上 阪急千里線「北千里駅」下車、北東へ徒歩15分
		大阪大学人間科学部	16204H	600	吹田市大字山田小川286－1 阪急千里線「北千里駅」下車、南東へ徒歩30分
		大阪大学薬学部	16205B	400	吹田市大字山田上133－1 阪急千里線「北千里駅」下車、南東へ徒歩25分
		府立豊島高等学校	16208U	1,000	豊中市緑丘5 北大阪急行線「千里中央駅」下車、北西へ徒歩15分
		府立千里高等学校	16209K	1,000	吹田市高野台2丁目17－1 阪急千里線「山田駅」下車、南へ徒歩10分、又は「南千里駅」下車、北東へ徒歩10分
		大阪市立東高等学校	16210Y	1,000	大阪市都島区東野田町4丁目15－14 環状線・京阪とも「京橋駅」下車、北西へ徒歩10分
		府立清水谷高等学校	16211U	1,000	大阪市天王寺区清水谷町3－1 環状線「玉造駅」下車、西へ徒歩15分、又は地下鉄谷町線「谷町6丁目駅」下車、東へ徒歩13分
		府立茨木高等学校	16212K	1,000	茨木市新庄町12－1 阪急京都線「茨木市駅」下車、西へ徒歩10分、又は東海道線「茨木駅」下車、徒歩10分
		大阪市立大学第1（本館）	31901M	1,107	大阪市住吉区杉本町459 国鉄阪和線「杉本町駅」下車、東へ徒歩2分
		大阪市立大学第2（教養2号館）	31902H	988	大阪市住吉区杉本町459 国鉄阪和線「杉本町駅」下車、東へ徒歩4分
		大阪市立大学第3（教養3号館）	31903B	1,181	大阪市住吉区杉本町459 国鉄阪和線「杉本町駅」下車、東へ徒歩4分
		大阪市立住吉商業高等学校	31904A	1,067	大阪市住之江区御崎7丁目12－55 南海本線「住之江駅」下車、南西へ徒歩5分
		府立阿倍野高等学校	31905Y	1,080	大阪市阿倍野区阪南町1丁目30－34 地下鉄御堂筋線「昭和町駅」下車、北西へ徒歩4分
		府立住吉高等学校	31906U	1,122	大阪市阿倍野区北畠2丁目4－1 南海上町線「北畠駅」下車、西へ徒歩2分
	大阪外国語大学	大阪外国語大学	16301M	700	箕面市粟生間谷2734 北大阪急行線千里中央駅から阪急バス大阪外大前行「大阪外大前（終点）」下車
		府立東豊中高等学校	16302H	1,399	豊中市新千里南町1丁目5－1 北大阪急行線「千里中央駅」下車、南西へ徒歩15分
		大阪府立大学	32001H	4,527	堺市百舌鳥梅町4丁目804 南海電鉄高野線「白鷺駅」下車、南西へ徒歩10分
	大阪教育大学	大阪教育大学天王寺分校	16401B	1,394	大阪市天王寺区南河堀町43 環状線「寺田町駅」下車、西へ徒歩5分、又は「天王寺駅」下車、東へ徒歩10分

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
大阪	大阪教育大学	大阪教育大学 池田分校	16402A	人 1,300	池田市城南3丁目1－1 阪急宝塚線「池田駅」下車、東へ徒歩10分
		府立 大和川高等学校	16403Y	1,491	大阪市住吉区苅田町4－34 地下鉄御堂筋線「我孫子駅」下車、北東へ徒歩15分
		大阪教育大学 附属高等学校池田校舎	16404U	500	池田市緑丘1丁目5－1 阪急宝塚線「池田駅」下車、東へ徒歩20分
		大阪女子大学	31801Z	700	堺市大仙町 阪和線「百舌鳥駅」下車、西へ徒歩15分
兵庫	神戸大学	神戸大学 文・理学部	16501Y	900	神戸市灘区六甲台町1－1 国鉄六甲道駅前、又は阪急六甲駅前から市バス(36系統)「神大文理農学部前」下車
		神戸大学 教育学部	16502U	800	神戸市灘区鶴甲3丁目11 国鉄六甲道駅前、又は阪急六甲駅前から市バス(36系統)「神大教育学部前」下車
		神戸大学 法・経済・経営学部	16503K	860	神戸市灘区六甲台町2－1 国鉄六甲道駅前、又は阪急六甲駅前から市バス(36系統)「神大正門前」下車
		神戸大学 工学部	16504C	1,100	神戸市灘区六甲台町1－1 国鉄六甲道駅前、又は阪急六甲駅前から市バス(36系統)「神大本部工学部前」下車
		神戸大学 教養部	16505A	2,350	神戸市灘区鶴甲1丁目2－1 国鉄六甲道駅前、又は阪急六甲駅前から市バス(16系統)「神大教養部前」下車
		県立 神戸高等学校	16506Z	800	神戸市灘区城の下通1丁目5－1 阪急六甲駅前、又は三宮駅前から市バス(2系統)「神戸高校前」下車
		神戸市立 葺合高等学校	16507X	1,140	神戸市葺合区野崎通1丁目1－1 国鉄「灘駅」又は阪急「西灘駅」下車、北西へ徒歩15分
		県立 兵庫高等学校	16508M	1,250	神戸市長田区寺池町1丁目 国鉄「兵庫駅」から北西へ徒歩25分、又は神戸高速鉄道「長田駅」から北東へ徒歩15分
		神戸商科大学	32201U	1,598	神戸市垂水区星陵台4丁目3－3 国鉄、又は山陽電鉄垂水駅前から山陽バス「商大前」下車
		姫路工業大学	32301C	1,250	姫路市書写2167 国鉄姫路駅前から神姫バス、書写住宅行「書写西住宅口（姫路工大前）」下車、徒歩5分
		県立 姫路西高等学校	32302A	1,487	姫路市北八代2丁目1－33 国鉄姫路駅前から神姫バス、西高行「西高前」下車、徒歩2分
	神戸商船大学	神戸商船大学	16601K	1,150	神戸市東灘区深江南町5丁目1－1 阪神「深江駅」下車、南へ200m下り国道43号線南側西へ350m、徒歩10分
		神戸市外国語大学	32101A	1,468	神戸市灘区土山町6－1 国鉄六甲道駅前、又は阪急六甲駅前から市バス六甲ケーブル下行「外大前」下車、徒歩5分
奈良	奈良教育大学	奈良教育大学 教育学部	16701A	1,230	奈良市高畑町 国鉄・近鉄とも奈良駅前から市内循環バス「高畑町」下車

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
奈良	奈良女子大学	奈良女子大学 第1	16801X	人 826	奈良市北魚屋西町 近鉄「奈良駅」下車、北へ徒歩5分
		奈良女子大学 第2	16802M	877	奈良市北魚屋西町 近鉄「奈良駅」下車、北へ徒歩5分
		奈良県立医科大学	32401Z	554	橿原市四条町840 近鉄橿原線「八木西口駅」下車、南へ徒歩8分、又は国鉄「畝傍駅」下車、南へ徒歩10分
和歌山	和歌山大学	和歌山大学 教育学部	16901H	660	和歌山市真砂町1丁目1 和歌山バス「県庁前」下車、南へ徒歩5分
		和歌山大学 経済学部	16902B	670	和歌山市西高松1丁目7－1 和歌山バス「車庫前」下車、西へ徒歩5分
		県立 和歌山商業高等学校	16903A	890	和歌山市砂山南3丁目3－94 和歌山バス「小松原5丁目」下車、西へ徒歩10分
		県立 桐蔭高等学校	32501M	713	和歌山市豊原町1丁目1 和歌山バス「小松原5丁目」下車、東へ徒歩10分
鳥取	鳥取大学	鳥取大学 (鳥取地区)	17001B	1,559	鳥取市湖山町南4－101 鳥取駅前からバス鳥取大学行「大学前（終点）」下車
		鳥取大学 医学部	17002A	417	米子市西町86 米子駅から駅前通り西へ徒歩20分
		鳥取大学 医療技術短期大学部	17003Y	257	米子市西町133－2 米子駅から駅前通り西へ徒歩25分
島根	島根大学	島根大学	17101Y	1,758	松江市西川津町1060 松江駅前から市営バス大学・川津行「大学前」下車
	島根医科大学	島根医科大学	17201K	548	出雲市塩冶町89－1 出雲市駅前から一畑バス島根医大線、又は須佐方面「島根医大前」又は「島根医大入口」下車
岡山	岡山大学	岡山大学	17301A	7,281	岡山市津島中3丁目1－1 岡山駅前から岡電バス妙善寺行「岡大西門」、又は国鉄「法界院駅」下車、北西へ徒歩10分
広島	広島大学	広島大学 教育学部福山分校	17401X	775	福山市緑町2－17 福山駅前から中国バス、川口（広大経由）行・車庫行・箕島行「広大前」下車
		広島大学 生物生産学部	17402M	445	福山市緑町2－17 福山駅前から中国バス、川口（広大経由）行・車庫行・箕島行「広大前」下車
		広島大学 総合科学部	17404B	1,500	広島市東千田町1丁目1－89 広島駅前から市内電車・バス、宇品（紙屋町経由）行「広大前」下車
		広島大学 文学部	17405A	700	広島市東千田町1丁目1－89 広島駅前から市内電車・バス、宇品（紙屋町経由）行「広大前」下車
		広島大学 教育学部	17406Y	500	広島市東千田町1丁目1－89 広島駅前から市内電車・バス、宇品（紙屋町経由）行「広大前」下車

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
広島	広島大学	広島大学 法・経済学部	17407U	人 400	広島市東千田町1丁目1—89 広島駅前から市内電車・バス、宇品(紙屋町経由)行「広大前」下車
		広島大学 理学部	17408K	1,100	広島市東千田町1丁目1—89 広島駅前から市内電車・バス、宇品(紙屋町経由)行「広大前」下車
		広島大学 学校教育学部	17409C	1,000	広島市東雲3丁目1—33 広島駅前からバス、仁保車庫行「東本浦」下車、徒歩3分
		広島大学 工学部	17410U	1,400	広島市千田町3丁目8—2 広島駅前から市内電車・バス、宇品(紙屋町経由)行「広電本社前」下車
		広島大学 附属中・高等学校	17411K	640	広島市皆実町3丁目1036 広島駅前から市内電車、宇品行「附属学校前」下車、徒歩3分
		広島女子大学	32601B	690	広島市宇品東1丁目1—71 広島駅前から市内電車、宇品行「県病院前」下車、東へ徒歩6分
山口	山口大学	山口大学 本部	17501H	2,079	山口市大字吉田1677—1 「湯田温泉駅」下車、南へ徒歩20分
		山口大学 医学部	17502B	500	宇部市大字小串1144 「宇部新川駅」下車、徒歩5分
		山口大学 工学部	17503A	517	宇部市常磐台2557 宇部新川駅前から市営バス風呂ケ迫行、高専グランド行「工学部前」下車
		下関市立大学	32701Y	1,182	下関市大学町2丁目1—1 下関駅前からバス北浦線「山の田」下車、徒歩5分
		山口女子大学	32801K	839	山口市桜畠3丁目2—1 「宮野駅」下車、徒歩5分
徳島	徳島大学	徳島大学 常三島地区	17601A	2,764	徳島市南常三島町1—1 徳島駅前から市バス吉野川橋行「助任橋」下車、徒歩5分
香川	香川大学	香川大学 教育学部	17701U	2,290	高松市幸町1—1 高松駅前から市内バス宮脇線(西回り)「幸町」下車
		香川大学 経済学部	17702K	1,100	高松市幸町2—1 高松駅前から市内バス宮脇線(西回り)「宮脇町」下車
愛媛	愛媛大学	愛媛大学	17901Z	4,863	松山市文京町3 市内電車環状線「日赤病院前」下車、北へ徒歩3分
高知	高知大学	高知大学	18001X	1,970	高知市曙町2丁目5—1 「朝倉駅」から徒歩5分
	高知医科大学	高知医科大学	18101H	134	南国市岡豊町小蓮 高知駅前から県交バス奈路行・領石行「蒲原分岐」下車、徒歩5分、又は医大蒲原行「医大西門」下車
福岡	福岡教育大学	福岡教育大学	18201A	2,027	宗像郡宗像町赤間729 赤間駅前からバス赤間行「西鉄赤間営業所」下車、徒歩7分

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
福岡	九州大学	九州大学 文科系学部	18301U	人 863	福岡市東区箱崎6丁目19—1 博多駅前、又は天神から西鉄バス貝塚行「九大北門」下車
		九州大学 理学部	18302K	634	福岡市東区箱崎6丁目10—1 博多駅前、又は天神から西鉄バス貝塚行「九大北門」下車
		九州大学 工学部	18303C	1,700	福岡市東区箱崎6丁目10—1 博多駅前、又は天神から西鉄バス九大前行「九大前」下車
		九州大学 農学部	18304A	748	福岡市東区箱崎6丁目10—1 博多駅前、又は天神から西鉄バス貝塚行「九大北門」、又は「貝塚」下車
		九州大学 病院地区	18305Z	621	福岡市東区馬出3丁目1—1 博多駅前、又は天神から西鉄バス九大前行「九大病院前」下車
		九州大学 教養部	18306X	1,675	福岡市中央区六本松4丁目2—1 博多駅前から西鉄バス(10・15・16・17・18・201・203・204系統)「六本松」下車
		水城学園	18307M	1,812	福岡市中央区長浜1丁目3—1 博多駅前から西鉄バス福浜行(68番)「英数学館前」下車
		福岡女子大学	33201B	500	福岡市東区香住ケ丘1丁目1—1 国鉄「香椎駅」下車、北へ徒歩15分、又は西鉄バス(21・23・26系統)「女子大前」下車
	九州芸術工科大学	九州英数学館	18401C	1,039	福岡市中央区舞鶴1丁目5—30 西鉄「福岡駅」下車、北西へ徒歩10分
	九州工業大学	九州工業大学	18501Z	2,350	北九州市戸畑区仙水町1—1 「新中原駅」下車、南へ徒歩5分
		北九州大学	33001Z	1,950	北九州市小倉南区北方4丁目2—1 西鉄北方線「北方(終点)」下車
		九州歯科大学 進学課程	33101M	812	北九州市小倉北区清水5丁目20—1 小倉駅前から西鉄電車「歯科大前」下車、南南東へ徒歩20分
佐賀	佐賀大学	佐賀大学	18601M	2,200	佐賀市本庄町1 佐賀駅バスセンターから市営バス東与賀線・相応線・市内循環線「佐大前」下車
	佐賀医科大学	佐賀医科大学	18701B	231	佐賀市鍋島町大字鍋島三本杉 佐賀駅南口から昭和バス小城(北部バイパス経由)行「東新庄」下車、北へ徒歩20分
長崎	長崎大学	長崎大学 文教地区	18801Y	3,809	長崎市文教町1—14 長崎駅前から私電赤迫行、又は長崎バス住吉方面行、いずれも「大学前」下車
		長崎県立 国際経済大学	33301Y	1,278	佐世保市川下町123 佐世保駅前からバス相浦(日野経由)行「国際経済大学前」下車
熊本	熊本大学	熊本大学 黒髪地区	18901K	5,323	熊本市黒髪2丁目40—1 熊本駅前から市営バス楠団地行、又は産交バス大津行、いずれも「熊大前」下車
		熊本女子大学	33401K	630	熊本市大江2丁目7—1 熊本駅前から市営バス第1環状線「大江渡鹿」下車、徒歩5分

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
大分	大分大学	大分大学	19001C	人 3,799	大分市大字旦野原700 大分市中央通り、トキハデパート前から大分バス旦野原行「大分大学」下車
	大分医科大学	大分医科大学	19101Z	280	大分郡挾間町医大ケ丘1—1506 大分駅前、又はトキハデパート前から大分バス向の原（医科大学経由）行「医科大学前」下車
宮崎	宮崎大学	宮崎大学教育学部	19201M	1,360	宮崎市船塚1—1 宮崎交通バス平和台線（8番）「花殿町」下車、東へ徒歩5分
		宮崎大学工学部	19202H	850	宮崎市霧島1丁目1—1 宮崎交通バス平和台線（8番）「花殿町」下車、北へ徒歩3分
		宮崎大学農学部	19203B	900	宮崎市船塚3—210 宮崎交通バス神宮線（1番）「神宮前」下車、西へ徒歩5分
	宮崎医科大学	宮崎医科大学	19301B	456	宮崎郡清武町大字木原5200 南宮崎駅前宮交シティからバス大学病院行「大学病院前」下車
鹿児島	鹿児島大学	鹿児島大学教養部	19401Y	1,800	鹿児島市郡元1丁目21—30 西鹿児島駅前から市営バス鶴ケ崎行（10番）・三和町行（11番）「法文学部前」下車
		鹿児島大学理学部	19402U	800	鹿児島市郡元1丁目21—35 西鹿児島駅前から市営バス鶴ケ崎行（10番）・三和町行（11番）「法文学部前」下車
		鹿児島大学工学部	19403K	1,000	鹿児島市郡元1丁目21—40 西鹿児島駅前から市電郡元行「工学部前」下車
		鹿児島大学農学部	19404C	900	鹿児島市郡元1丁目21—24 西鹿児島駅前から市営バス鶴ケ崎行（10番）・三和町行（11番）「農学部前」下車
		鹿児島大学教育学部	19405A	1,039	鹿児島市郡元1丁目20—6 西鹿児島駅前から市電郡元行「工学部前」下車、徒歩4分
沖縄	琉球大学	琉球大学	19501K	1,096	那覇市首里当蔵町3—1 バス市内線（石嶺線、金城回り）「琉大入口」又は（牧志線）「当蔵」下車、徒歩10分
		県立那覇高等学校	19502C	1,275	那覇市字二中前楚辺原1 バス市内線（石嶺線、開南回り）又は市外線（糸満線）「那覇高校前」下車
		県立浦添高等学校	19503A	990	浦添市字内間大嶺原130 バス市外線（浦添線）「沢岻入口」下車、徒歩3分
		県立小禄高等学校	19504Z	1,013	那覇市鏡原町22—1 バス市内線（小禄線、宇栄原回り）「小禄入口」下車、徒歩5分
		県立宮古高等学校	19505X	175	宮古平良市西里718 バス城返線・上野線・下地線「終点」下車、徒歩10分
		県立八重山高等学校	19506M	68	石垣市字登野城275 バス川平線又は西回り1周線「登野城小学校前」下車、徒歩2分

（注） 北海道地区の試験場は、次の区分による。
石狩支庁地区……北海道大学・北海道教育大学（札幌予備学院） 空知支庁地区……北海道教育大学岩見沢分校・岩見沢東高等学校 上川・宗谷・留萌支庁地区……北海道教育大学旭川分校・旭川医科大学 後志支庁地区……小樽商科大学 檜山・渡島支庁地区……北海道教育大学函館分校 胆振・日高支庁地区……室蘭工業大学 十勝支庁地区……帯広畜産大学 根室・釧路支庁地区……北海道教育大学釧路分校 網走支庁地区……北見工業大学

（点字問題受験者用試験場）

都道府県名	試験実施大学名	試験場名	試験場コード	受験者数	所在地 道順
東京	東京医科歯科大学	都立文京盲学校	12750X	人 6	文京区後楽1丁目7—6 国電・地下鉄（東西線又は有楽町線）「飯田橋駅」、地下鉄（丸の内線）「後楽園駅」下車、徒歩5分
大阪	大阪大学	大阪大学言語文化部	16250X	1	豊中市待兼山町1—1 阪急宝塚線「石橋駅」下車、東へ徒歩20分
兵庫	神戸大学	神戸市立盲学校	16550U	2	神戸市兵庫区大開通4丁目1—39 神戸高速鉄道「新開地駅」下車、西へ徒歩5分
岡山	岡山大学	岡山大学附属図書館	17350Z	1	岡山市津島中3丁目1—1 岡山駅前から岡電バス妙善寺行「岡大西門」、又は国鉄「法界院駅」下車、北西へ徒歩10分

（追試験場）

地区	試験実施大学名	試験場名	受験者数	所在地 道順
北海道	北海道教育大学	北海道教育大学札幌分校	人 10	札幌市中央区南22条西12丁目1—1 国鉄札幌駅から地下鉄南北線すすきの駅下車、市電すすきのから「教育大学前」下車、徒歩2分
東北	岩手大学	岩手大学	5	盛岡市上田3丁目18—8 国鉄盛岡駅前から岩手県交通バス黒石野行「富士見町」下車
関東甲信越	東京外国語大学	東京外国語大学	90	東京都北区西ケ原4丁目51—21 国電山手線大塚駅前から都電三の輪橋方面行「西ケ原4丁目」下車、徒歩3分
東海北陸	岐阜大学	岐阜大学工・農学部	20	各務原市那加門前町3—1 名鉄各務原線「岐阜大学前駅」下車、徒歩3分、又は国鉄高山線「那加駅」下車、東へ徒歩10分
近畿	神戸大学	神戸大学経済・経営学部	51	神戸市灘区六甲台町2—1 国鉄六甲道駅前又は阪急六甲駅前から市バス（36系統）「神大正門前」下車
中国四国	岡山大学	岡山大学	18	岡山市津島中3丁目1—1 国鉄岡山駅前から岡電バス妙善寺行「岡大西門」下車、又は国鉄津山線「法界院駅」下車、北西へ徒歩10分
九州沖縄	長崎大学	長崎大学文教地区	9	長崎市文教町1—14 国鉄長崎駅前から私電赤迫行、又は長崎バス住吉方面行、いずれも「大学前」下車

11. 昭和55年度共通第１次学力試験国・公立大学別志望状況

54. 12. 10

大学・学部等名	55年度入学定員	第１志望 計	第１志望 男	第１志望 女	第１志望 倍率	第２志望 計	第２志望 男	第２志望 女	第２志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
総合計	94,506	349,566	266,896	82,670	3.7	297,754	235,376	62,378	3.2	3.7	3.4	3.5 (3.7)
国立大学合計	84,501	308,011	237,168	70,843	3.6	240,923	194,506	46,417	2.9	3.6	3.0	3.0 (3.3)
北海道大学	2,195	8,805	7,790	1,015	4.0	4,233	3,851	382	1.9	4.3	1.9	2.4
文１系	135	1,216	889	327	9.0	642	529	113	4.8	11.7	5.1	4.2
文２系	210	1,157	1,038	119	5.5	520	485	35	2.5	5.5	2.6	3.1
文３系	220	1,561	1,442	119	7.1	836	786	50	3.8	5.9	3.1	3.7
理１系	602	2,032	1,968	64	3.4	825	801	24	1.4	3.6	1.3	1.6
理２系	372	859	678	181	2.3	460	385	75	1.2	2.8	1.4	2.5
理３系	241	672	552	120	2.8	278	226	52	1.2	2.7	1.0	1.9
医学進学課程	120	839	791	48	7.0	296	285	11	2.5	8.2	2.6	2.6
歯学進学課程	80	261	241	20	3.3	183	170	13	2.3	4.5	3.1	3.3
水産系	215	208	191	17	1.0	193	184	9	0.9	1.2	1.0	1.7
北海道教育大学	1,330	4,430	2,783	1,647	3.3	5,590	3,743	1,847	4.2	3.3	4.2	3.7
札幌分校	300	1,892	1,141	751	6.3	1,668	1,123	545	5.6	5.2	5.0	3.3
函館分校	305	759	455	304	2.5	1,218	782	436	4.0	2.9	4.2	3.6
旭川分校	315	858	522	336	2.7	856	550	306	2.7	2.7	2.2	2.9
釧路分校	225	515	376	139	2.3	1,047	771	276	4.7	2.6	5.2	5.7
岩見沢分校	185	406	289	117	2.2	801	517	284	4.3	3.1	5.2	3.4
室蘭工業大学	560	1,609	1,585	24	2.9	1,296	1,279	17	2.3	3.5	3.2	2.8
工学部第１部	480	1,515	1,491	24	3.2	1,123	1,106	17	2.3	3.8	3.3	2.9
工学部第２部	80	94	94	0	1.2	173	173	0	2.2	1.7	2.3	1.9
◎小樽商科大学(商)	385	842	762	80	2.2	860	775	85	2.2	2.6	2.5	4.2
帯広畜産大学(畜産)	260	1,117	927	190	4.3	858	686	172	3.3	5.1	3.9	4.1
旭川医科大学(医)	120	354	325	29	3.0	497	468	29	4.1	2.2	3.6	2.4
北見工業大学(工)	320	590	582	8	1.8	1,278	1,269	9	4.0	2.6	5.3	2.5

大学・学部等名	55年度入学定員	第１志望 計	第１志望 男	第１志望 女	第１志望 倍率	第２志望 計	第２志望 男	第２志望 女	第２志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
弘前大学	1,070	3,226	2,250	976	3.0	4,009	2,998	1,011	3.7	3.4	4.6	3.1
人文学部	285	748	568	180	2.6	941	784	157	3.3	3.6	4.8	2.4
教育学部	370	1,266	602	664	3.4	1,640	927	713	4.4	3.8	4.9	4.1
理学部	160	425	383	42	2.7	548	486	62	3.4	3.1	4.6	2.6
医学部	120	521	465	56	4.3	454	421	33	3.8	3.2	3.8	2.2
農学部	135	266	232	34	2.0	426	380	46	3.2	2.6	4.4	3.3
岩手大学	1,160	2,751	2,022	729	2.4	2,434	1,949	485	2.1	2.8	2.9	2.6
人文社会科学部	200	488	384	104	2.4	587	476	111	2.9	2.9	3.7	3.2
教育学部	350	1,014	509	505	2.9	656	383	273	1.9	2.8	2.3	2.9
工学部	400	628	617	11	1.6	611	603	8	1.5	2.0	2.1	1.7
農学部	210	621	512	109	3.0	580	487	93	2.8	3.9	4.4	3.4
東北大学	2,204	10,657	9,696	961	4.8	5,450	5,041	409	2.5	4.4	2.3	2.6
文学部	160	1,006	734	272	6.3	478	391	87	3.0	5.9	2.8	2.6
教育学部	70	240	171	69	3.4	158	118	40	2.3	3.2	2.0	3.2
法学部	230	2,104	1,992	112	9.1	1,058	1,012	46	4.6	8.0	4.3	3.2
経済学部	240	1,202	1,163	39	5.0	702	684	18	2.9	5.0	2.9	4.2
理学部	284	1,881	1,747	134	6.6	972	929	43	3.4	5.6	3.1	3.4
医学部	120	1,101	993	108	9.2	382	339	43	3.2	7.0	2.1	2.6
歯学部	80	405	346	59	5.1	242	206	36	3.0	4.9	3.6	3.6
薬学部	80	289	175	114	3.6	129	88	41	1.6	3.5	1.8	2.3
工学部	790	2,120	2,105	15	2.7	1,090	1,076	14	1.4	2.7	1.3	1.8
農学部	150	309	270	39	2.1	239	198	41	1.6	2.0	1.6	1.9
宮城教育大学(教育)	425	1,757	866	891	4.1	1,640	954	686	3.9	3.4	2.9	5.1
秋田大学	800	1,722	1,102	620	2.2	1,581	1,283	298	2.0	2.3	2.4	3.4
教育学部	320	1,120	553	567	3.5	724	463	261	2.3	3.5	3.0	4.3
医学部	100	323	275	48	3.2	370	338	32	3.7	4.2	5.3	5.9
◎鉱山学部	380	279	274	5	0.7	487	482	5	1.3	0.8	1.3	1.9
山形大学	1,475	3,317	2,428	889	2.2	4,678	3,889	789	3.2	2.2	3.3	2.4
人文学部	235	716	557	159	3.0	860	700	160	3.7	3.7	5.3	2.0
教育学部	320	1,111	520	591	3.5	1,069	625	444	3.3	3.0	3.2	2.9
理学部	165	389	329	60	2.4	592	524	68	3.6	2.2	3.9	2.9
医学部	120	269	227	42	2.2	465	405	60	3.9	2.3	4.1	4.1
◎工学部	480	587	579	8	1.2	1,289	1,274	15	2.7	1.0	1.7	1.4
農学部	155	245	216	29	1.6	403	361	42	2.6	2.7	5.1	3.6

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
福島大学	870	2,396	1,665	731	2.8	2,661	2,011	650	3.1	3.2	4.2	4.1
教育学部	450	1,426	748	678	3.2	1,663	1,057	606	3.7	3.8	5.6	5.0
経済学部(昼)	240	880	836	44	3.7	856	816	40	3.6	} 2.6	} 2.8	4.1
○経済学部(夜)	180	90	81	9	0.5	142	138	4	0.8			1.8
茨城大学	1,350	4,333	3,055	1,278	3.2	5,415	4,294	1,121	4.0	3.7	5.2	4.7
人文学部	315	872	654	218	2.8	1,073	846	227	3.4	3.5	5.6	5.1
教育学部	415	1,791	888	903	4.3	1,731	1,085	646	4.2	5.1	5.1	5.4
◎理学部	165	552	455	97	3.3	900	758	142	5.5	2.3	4.0	2.6
工学部	340	811	792	19	2.4	1,189	1,154	35	3.5	2.8	4.7	3.6
農学部	115	307	266	41	2.7	522	451	71	4.5	4.3	8.0	6.7
図書館情報大学(図書館情報)	120	431	158	273	3.6	435	267	168	3.6	—	—	—
筑波大学	1,570	6,690	5,349	1,341	4.3	4,296	3,524	772	2.7	4.8	3.0	3.1
第1学群	400	2,168	1,755	413	5.4	1,470	1,235	235	3.7	6.1	4.3	3.5
第2学群	400	1,134	772	362	2.8	690	515	175	1.7	3.3	2.0	3.1
第3学群	360	963	912	51	2.7	681	650	31	1.9	3.1	2.0	2.3
医学専門学群	100	1,013	795	218	10.1	554	461	93	5.5	11.5	6.7	3.5
体育専門学群	240	1,139	973	166	4.7	536	449	87	2.2	5.3	2.1	3.5
芸術専門学群	70	273	142	131	3.9	365	214	151	5.2	3.9	4.9	3.1
宇都宮大学	890	2,934	2,203	731	3.3	3,371	2,819	552	3.8	3.9	5.4	3.4
教育学部	310	1,334	696	638	4.3	1,184	735	449	3.8	4.4	5.1	3.6
工学部	335	1,190	1,131	59	3.6	1,666	1,609	57	5.0	4.7	7.5	4.0
農学部	245	410	376	34	1.7	521	475	46	2.1	2.1	3.0	2.4
群馬大学	850	3,076	2,256	820	3.6	2,811	2,386	425	3.3	4.1	4.5	4.5
教育学部	310	1,620	920	700	5.2	1,085	766	319	3.5	5.8	4.8	6.3
医学部	100	457	372	85	4.6	413	345	68	4.1	4.7	4.5	3.5
工学部	440	999	964	35	2.3	1,313	1,275	38	3.0	2.7	4.3	3.5
埼玉大学	1,410	5,713	4,446	1,267	4.1	6,625	5,355	1,270	4.7	4.4	5.4	5.2
教養学部	130	902	620	282	6.9	917	636	281	7.1	8.0	8.7	7.6
教育学部	580	1,786	965	821	3.1	1,911	1,097	814	3.3	2.8	3.2	3.9
経済学部	200	904	869	35	4.5	1,092	1,056	36	5.5	5.9	7.9	4.9
理学部	180	790	679	111	4.4	939	823	116	5.2	4.6	5.5	5.8
工学部	320	1,331	1,313	18	4.2	1,766	1,743	23	5.5	5.1	6.7	6.5

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
千葉大学	2,210	12,129	9,260	2,869	5.5	8,701	6,919	1,782	3.9	4.8	3.3	2.4
人文学部	320	1,557	1,233	324	4.9	1,327	1,112	215	4.1	5.3	4.9	2.5
教育学部	600	2,462	1,325	1,137	4.1	2,278	1,327	951	3.8	2.6	2.5	2.2
理学部	160	1,905	1,602	303	11.9	1,423	1,200	223	8.9	9.9	7.3	4.1
医学部	120	1,194	1,072	122	10.0	696	633	63	5.8	8.4	4.6	2.6
薬学部	80	869	364	505	10.9	331	191	140	4.1	10.5	3.9	4.2
看護学部	60	336	6	330	5.6	79	3	76	1.3	6.2	2.0	3.6
工学部(A)	470	3,238	3,157	81	6.9	2,084	2,039	45	4.4	} 4.5	} 2.8	2.4
○工学部(B)	200	165	159	6	0.8	192	184	8	1.0			1.4
園芸学部	200	403	342	61	2.0	291	230	61	1.5	2.0	1.2	1.3
東京大学	3,063	15,052	14,079	973	4.9	4,827	4,570	257	1.6	4.3	1.2	2.5
文科1類	630	4,517	4,347	170	7.2	584	567	17	0.9	5.7	0.7	2.6
文科2類	370	1,531	1,496	35	4.1	1,199	1,169	30	3.2	4.2	2.2	3.0
文科3類	370	2,210	1,803	407	6.0	840	758	82	2.3	5.3	1.8	3.2
理科1類	1,092	4,078	3,973	105	3.7	800	770	30	0.7	3.4	0.6	2.1
理科2類	511	1,242	1,064	178	2.4	945	872	73	1.8	2.7	1.6	2.4
理科3類	90	1,474	1,396	78	16.4	459	434	25	5.1	10.0	2.9	3.1
東京医科歯科大学	160	1,748	1,528	220	10.9	1,148	1,038	110	7.2	7.3	5.3	2.9
医学部	80	1,195	1,057	138	14.9	877	798	79	11.0	8.5	7.1	3.0
歯学部	80	553	471	82	6.9	271	240	31	3.4	6.0	3.4	2.8
東京外語大学(外語)	570	3,388	2,009	1,379	5.9	1,095	806	289	1.9	4.9	1.8	3.3
東京学芸大学(教育)	1,215	7,050	4,022	3,028	5.8	4,822	2,755	2,067	4.0	4.8	3.7	4.4
東京農工大学	760	2,969	2,491	478	3.9	2,623	2,385	238	3.5	4.0	4.0	3.6
農学部	315	1,752	1,322	430	5.6	944	767	177	3.0	5.3	3.5	3.1
工学部	445	1,217	1,169	48	2.7	1,679	1,618	61	3.8	3.0	4.3	4.0
東京芸術大学	437	6,578	3,448	3,130	15.1	668	418	250	1.5	14.7	1.4	13.6
美術学部	210	5,263	2,959	2,304	25.1	552	364	188	2.6	24.3	2.2	23.4
音楽学部	227	1,315	489	826	5.8	116	54	62	0.6	5.7	0.6	4.6

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 第3志望
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
東京工業大学	774	3,800	3,697	103	4.9	2,141	2,084	57	2.8	4.3	2.4	3.0
第1類	153	932	880	52	6.1	776	742	34	5.1	4.6	4.1	3.2
第2類	74	84	80	4	1.1	64	62	2	0.9	1.3	0.8	2.7
第3類	118	197	192	5	1,7	115	109	6	1.0	1.6	0.8	1.8
第4類	170	573	567	6	3.4	263	260	3	1.5	3.7	1.5	3.0
第5類	146	1,283	1,271	12	8.8	610	606	4	4.2	7.3	3.6	3.4
第6類	113	731	707	24	6.5	313	305	8	2.8	5.4	2.9	3.7
東京商船大学(商船)	160	501	494	7	3.1	256	245	11	1.6	3.4	2.2	3.0
東京水産大学(水産)	280	722	667	55	2.6	400	364	36	1.4	3.2	1.8	2.8
お茶の水女子大学	407	1,457	0	1,457	3.6	731	0	731	1.8	3.8	2.0	3.3
文教育学部	197	780	0	780	4.0	415	0	415	2.1	4.1	2.2	3.4
理学部	85	351	0	351	4.1	181	0	181	2.1	5.0	2.6	3.8
家政学部	125	326	0	326	2.6	135	0	135	1.1	2.3	1.1	2.7
電気通信大学(電通)	620	1,745	1,696	49	2.8	1,650	1,607	43	2.7	2.7	2.5	3.2
一橋大学	920	5,476	5,216	260	6.0	3,768	3,588	180	4.1	6.3	4.4	3.6
法学部	210	2,071	1,955	116	9.9	1,646	1,566	80	7.8	10.3	9.2	3.3
社会学部	210	782	691	91	3.7	580	520	60	2.8	5.3	3.4	4.6
経済学部	250	1,462	1,437	25	5.8	1,020	993	27	4.1	5.3	3.9	2.6
商学部	250	1,161	1,133	28	4.6	522	509	13	2.1	5.4	2.1	4.2
横浜国立大学	1,665	7,675	6,361	1,314	4.6	6,592	5,670	922	4.0	3.8	3.7	4.0
教育学部	530	2,357	1,229	1,128	4.4	1,927	1,139	788	3.6	3.9	3.7	5.7
経済学部	230	1,298	1,235	63	5.6	1,493	1,453	40	6.5	4.2	5.5	2.7
経営学部第1部	190	1,017	971	46	5.4	841	798	43	4.4	5.3	4.3	4.8
経営学部第2部	80	141	136	5	1.8	177	170	7	2.2	2.2	2.4	3.7
工学部第1部	575	2,781	2,710	71	4.8	2,009	1,967	42	3.5	3.5	3.0	2.9
工学部第2部	60	81	80	1	1.4	145	143	2	2.4	1.2	2.9	2.2

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 第3志望
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
新潟大学	1,915	5,920	4,743	1,177	3.1	4,754	3,880	874	2.5	3.4	2.9	2.7
人文学部	150											
法学部	200	1,654	1,417	237	3.0	1,398	1,236	162	2.5	5.7	4.4	3.0
経済学部	200											
教育学部	485	1,308	639	669	2.7	1,050	542	508	2.2	2.2	2.1	2.8
理学部	145	516	460	56	3.6	482	421	61	3.3	3.9	3.7	3.0
医学部	120	601	529	72	5.0	426	390	36	3.6	6.4	4.2	4.7
歯学部	80	767	659	108	9.6	526	455	71	6.6	11.5	12.0	4.0
工学部	380	859	847	12	2.3	662	648	14	1.7	2.2	1.7	1.8
農学部	155	215	192	23	1.4	210	188	22	1.4	1.5	1.4	1.6
長岡技術科学大学(工)	60	214	212	2	3.6	381	375	6	6.4	3.5	5.5	3.5
富山大学	1,185	2,737	1,767	970	2.3	3,258	2,514	744	2.7	2.5	3.2	2.6
人文学部	160	413	193	220	2.6	573	348	225	3.6	3.1	4.2	3.8
教育学部	240	805	213	592	3.4	634	280	354	2.6	2.8	2.6	2.8
経済学部	300	546	493	53	1.8	708	657	51	2.4	2.3	2.8	2.2
理学部	180	387	288	99	2.2	566	465	101	3.1	3.1	5.0	3.5
工学部	305	586	580	6	1.9	777	764	13	2.5	1.7	2.3	1.7
富山医科薬科大学	205	500	339	161	2.4	667	453	214	3.3	4.6	5.3	7.3
医学部	100	165	143	22	1.7	223	211	12	2.2	4.6	5.6	10.7
◎薬学部	105	335	196	139	3.2	444	242	202	4.2	4.5	5.0	4.0
金沢大学	1,555	5,793	4,621	1,172	3.7	4,128	3,557	571	2.7	4.9	3.4	2.9
文学部	135											
法学部	180	2,467	2,136	331	5.0	1,817	1,637	180	3.7	9.2	6.9	4.6
経済学部	180											
教育学部	295	1,043	491	552	3.5	578	332	246	2.0	3.3	1.9	2.6
理学部	130	472	410	62	3.6	431	394	37	3.3	4.1	3.4	2.2
医学部	120	582	521	61	4.9	329	299	30	2.7	5.5	2.7	4.0
薬学部	80	300	142	158	3.8	186	115	71	2.3	5.3	3.0	2.8
工学部	435	929	921	8	2.1	787	780	7	1.8	3.0	2.2	2.0
福井大学	650	1,403	1,048	355	2.2	1,231	1,098	133	1.9	2.9	3.5	3.6
教育学部	200	604	266	338	3.0	337	217	120	1.7	3.2	2.2	3.1
工学部	450	799	782	17	1.8	894	881	13	2.0	2.8	4.0	3.8
福井医科大学(医)	100	350	316	34	3.5	498	437	61	5.0	—	—	—

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
山梨大学	740	1,751	1,270	481	2.4	2,610	2,065	545	3.5	3.4	5.8	6.1
教育学部	230	1,034	592	442	4.5	1,561	1,037	524	6.8	6.3	10.2	9.6
◎工学部	510	717	678	39	1.4	1,049	1,028	21	2.1	2.1	3.8	4.3
山梨医科大学(医)	100	399	366	33	4.0	557	514	43	5.6	—	—	—
信州大学	1,710	5,965	4,841	1,124	3.5	6,395	5,563	832	3.7	3.7	4.1	3.2
人文学部	120	463	323	140	3.9	619	476	143	5.2	7.4	8.9	3.6
教育学部	320	1,993	1,255	738	6.2	1,649	1,184	465	5.2	6.5	5.8	4.9
経済学部	180	825	783	42	4.6	780	757	23	4.3	4.7	5.6	3.3
理学部	170	375	337	38	2.2	496	452	44	2.9	2.3	3.4	1.9
医学部	100	451	390	61	4.5	438	405	33	4.4	2.5	2.0	2.6
工学部	380	1,274	1,252	22	3.4	1,695	1,679	16	4.5	2.6	3.4	1.8
農学部	185	420	362	58	2.3	467	397	70	2.5	3.0	3.1	2.2
繊維学部	255	164	139	25	0.6	251	213	38	1.0	1.5	2.0	4.5
岐阜大学	950	2,645	1,994	651	2.8	2,799	2,288	511	2.9	3.5	3.5	3.2
教育学部	340	987	497	490	2.9	878	515	363	2.6	3.2	3.0	3.3
医学部	80	139	122	17	1.7	198	178	20	2.5	4.2	5.0	3.0
工学部	320	893	890	3	2.8	1,116	1,110	6	3.5	4.0	3.9	3.4
農学部	210	626	485	141	3.0	607	485	122	2.9	3.2	3.0	2.9
静岡大学	1,625	4,452	3,388	1,064	2.7	4,235	3,543	692	2.6	2.5	2.4	2.3
人文学部	325	1,174	970	204	3.6	1,275	1,088	187	3.9	3.4	4.4	3.2
教育学部	510	1,403	648	755	2.8	910	544	366	1.8	2.3	1.4	2.4
理学部	185	519	469	50	2.8	618	561	57	3.3	1.8	2.4	1.8
工学部	455	1,041	1,032	9	2.3	1,035	1,022	13	2.3	2.5	2.3	2.0
農学部	150	315	269	46	2.1	397	328	69	2.6	1.5	1.6	1.5
浜松医科大学(医)	100	443	376	67	4.4	492	407	85	4.9	4.4	6.2	3.4

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
名古屋大学	1,660	6,206	5,552	654	3.7	3,203	2,980	223	1.9	3.6	1.8	2.7
文学部	130	527	280	247	4.1	206	155	51	1.6	4.0	1.6	2.1
教育学部	60	233	151	82	3.9	149	109	40	2.5	2.5	1.6	3.4
法学部	160	709	674	35	4.4	436	419	17	2.7	3.9	2.3	2.0
経済学部	210	746	715	31	3.6	330	324	6	1.6	3.8	1.8	4.1
理学部	220	851	766	85	3.9	618	570	48	2.8	3.9	2.5	2.7
医学部	100	802	713	89	8.0	319	305	14	3.2	6.3	2.1	5.1
工学部	610	2,085	2,052	33	3.4	965	952	13	1.6	3.5	1.6	2.4
農学部	170	253	201	52	1.5	180	146	34	1.1	2.0	1.2	1.8
愛知教育大学(教育)	1,035	4,394	2,258	2,136	4.2	2,152	1,231	921	2.1	3.9	2.3	3.7
名古屋工業大学	1,040	2,610	2,570	40	2.5	2,164	2,143	21	2.1	1.5	1.3	1.7
◎工学部第1部	840	2,393	2,354	39	2.8	1,928	1,908	20	2.3	1.6	1.3	1.6
工学部第2部	200	217	216	1	1.1	236	235	1	1.2	1.3	1.1	2.2
豊橋技術科学大学(工)	60	259	255	4	4.3	374	366	8	6.2	4.7	6.2	4.1
三重大学	960	2,370	1,847	523	2.5	2,420	2,062	358	2.5	2.7	2.6	2.5
教育学部	330	840	397	443	2.5	633	368	265	1.9	2.3	1.9	2.5
医学部	100	437	396	41	4.4	344	311	33	3.4	5.7	5.1	4.6
工学部	280	541	539	2	1.9	727	724	3	2.6	2.2	2.7	1.9
◎農学部	190	354	325	29	1.9	475	431	44	2.5	1.5	1.5	1.9
水産学部	60	198	190	8	3.3	241	228	13	4.0	4.7	5.2	3.4
滋賀大学	620	1,679	1,222	457	2.7	2,043	1,637	406	3.3	3.0	3.5	2.9
教育学部	260	867	431	436	3.3	992	610	382	3.8	4.1	5.1	4.8
◎経済学部	360	812	791	21	2.3	1,051	1,027	24	2.9	2.2	2.2	1.6
滋賀医科大学(医)	100	350	313	37	3.5	410	373	37	4.1	4.4	6.1	5.0

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
京都大学	2,506	11,725	10,784	941	4.7	5,267	4,932	335	2.1	4.1	1.9	2.6
文学部	200	1,486	1,154	332	7.4	707	605	102	3.5	6.7	3.3	3.7
教育学部	50	274	212	62	5.5	213	168	45	4.3	5.3	3.2	5.4
法学部	330	2,261	2,151	110	6.9	1,103	1,066	37	3.3	5.4	2.7	3.3
経済学部	200	964	943	21	4.8	468	457	11	2.3	4.1	2.3	3.4
理学部	281	2,006	1,871	135	7.1	907	877	30	3.2	5.8	2.9	3.5
医学部	120	1,026	964	62	8.6	485	466	19	4.0	7.1	2.9	3.4
薬学部	80	286	146	140	3.6	106	69	37	1.3	2.6	0.8	1.7
工学部	945	2,813	2,783	30	3.0	957	938	19	1.0	2.9	1.0	1.8
農学部	300	690	560	49	2.0	321	286	35	1.1	2.3	1.2	1.8
京都教育大学(教育)	420	3,085	1,737	1,348	7.3	3,119	1,693	1,426	7.4	5.6	6.7	4.0
京都工芸繊維大学	520	1,438	1,318	120	2.8	1,126	1,036	90	2.2	2.8	2.1	3.5
工芸学部	390	1,296	1,199	97	3.3	961	899	62	2.5	3.4	2.4	3.4
繊維学部	130	142	119	23	1.1	165	137	28	1.3	1.0	1.4	3.9
大阪大学	2,115	9,379	8,252	1,127	4.4	5,648	5,116	532	2.7	3.9	2.3	2.3
文学部	110	942	596	346	8.6	489	334	155	4.4	6.8	4.2	2.9
人間科学部	100	536	377	159	5.4	286	229	57	2.9	5.0	2.7	2.8
法学部	160	1,178	1,088	90	7.4	989	926	63	6.2	5.8	5.1	2.2
経済学部	200	819	788	31	4.1	557	542	15	2.8	3.7	2.3	2.0
理学部	190	837	763	74	4.4	574	533	41	3.0	3.6	2.6	1.9
医学部	100	865	803	62	8.7	461	434	27	4.6	6.8	3.4	3.4
歯学部	60	401	348	53	6.7	182	159	23	3.0	7.2	3.0	5.1
薬学部	80	403	150	253	5.0	208	89	119	2.6	5.5	2.4	3.2
工学部	745	2,653	2,612	41	3.6	1,457	1,441	16	2.0	3.0	1.7	1.8
基礎工学部	370	745	727	18	2.0	445	429	16	1.2	2.1	1.1	2.1
大阪外国語大学	720	2,253	1,333	920	3.1	1,486	978	508	2.1	2.6	1.9	2.7
外国語学部第1部	500	2,095	1,205	890	4.2	1,290	818	472	2.6	3.4	2.2	3.1
外国語学部第2部	220	158	128	30	0.7	196	160	36	0.9	0.9	1.2	1.9
大阪教育大学	1,030	5,324	2,748	2,576	5.2	4,061	2,236	1,825	3.9	4.7	4.1	4.1
教育学部第1部	980	5,102	2,585	2,517	5.2	3,627	1,914	1,713	3.7	4.7	3.9	3.9
教育学部第2部	50	222	163	59	4.4	434	322	112	8.7	4.8	8.5	7.7

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
神戸大学	2,280	9,632	7,942	1,690	4.2	6,180	5,388	792	2.7	4.2	2.6	2.7
文学部	100	670	293	377	6.7	431	252	179	4.3	5.6	4.0	2.6
教育学部	420	1,541	724	817	3.7	568	299	269	1.4	2.8	1.0	1.9
法学部第1課程	200	1,276	1,166	110	6.4	1,062	984	78	5.3	7.3	5.2	4.3
法学部第2課程	60	185	170	15	3.1	112	99	13	1.9	2.5	2.0	2.9
経済学部第1課程	240	1,470	1,436	34	6.1	843	826	17	3.5	5.6	3.3	2.8
経済学部第2課程	60	106	106	0	1.8	116	108	8	1.9	1.6	1.6	2.7
経営学部第1課程	240	1,036	983	53	4.3	499	471	28	2.1	4.6	1.8	3.5
経営学部第2課程	70	90	80	10	1.3	62	58	4	0.9	1.0	1.2	3.3
理学部	120	514	424	90	4.3	446	368	78	3.7	4.5	3.4	2.0
医学部	120	701	604	97	5.8	473	423	50	3.9	6.6	3.6	2.5
工学部	490	1,779	1,742	37	3.6	1,359	1,328	31	2.8	4.3	2.8	2.7
農学部	160	264	214	50	1.7	209	172	37	1.3	1.9	1.7	2.1
神戸商船大学(商船)	200	288	288	0	1.4	372	372	0	1.9	1.9	2.0	2.1
奈良教育大学(教育)	295	1,545	850	695	5.2	2,477	1,334	1,143	8.4	7.9	12.2	6.4
奈良女子大学	385	1,027	0	1,027	2.7	822	0	822	2.1	3.0	2.1	2.2
文学部	145	521	0	521	3.6	405	0	405	2.8	4.6	3.1	2.6
理学部	115	240	0	240	2.1	183	0	183	1.6	2.4	1.7	2.1
家政学部	125	266	0	266	2.1	234	0	234	1.9	1.7	1.3	1.7
和歌山大学	590	1,456	985	471	2.5	1,893	1,508	385	3.2	2.6	3.2	3.8
教育学部	270	874	418	456	3.2	920	590	330	3.4	3.2	3.1	4.0
経済学部	320	582	567	15	1.8	973	918	55	3.0	2.2	3.4	3.7
鳥取大学	855	1,791	1,385	406	2.1	2,000	1,628	372	2.3	1.8	2.0	1.9
教育学部	180	703	389	314	3.9	653	360	293	3.6	2.7	2.8	2.7
医学部	120	233	208	25	1.9	237	221	16	2.0	2.5	2.5	1.9
工学部	320	411	407	4	1.3	631	626	5	2.0	1.0	1.4	1.5
農学部	235	444	381	63	1.9	479	421	58	2.0	1.9	1.9	1.8
島根大学	870	1,976	1,348	628	2.3	2,694	2,049	645	3.1	2.7	3.5	3.2
法文学部	210	510	440	70	2.4	888	781	107	4.2	3.5	5.8	3.9
教育学部	300	848	362	486	2.8	887	446	441	3.0	2.8	2.8	2.8
理学部	180	324	276	48	1.8	475	414	61	2.6	1.9	2.8	2.9
農学部	180	294	270	24	1.6	444	408	36	2.5	2.2	2.7	3.5

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
島根医科大学(医)	100	160	141	19	1.6	209	182	27	2.1	2.8	3.3	4.3
岡山大学	1,930	6,993	5,009	1,984	3.6	4,551	3,750	801	2.4	3.7	2.4	2.4
文学部	145											
法学部第1部	190	2,042	1,651	391	3.9	1,446	1,224	222	2.8	5.2	3.9	2.9
経済学部第1部	190											
法学部第2部	60	141	130	11	1.2	140	126	14	1.2	1.1	1.0	2.2
経済学部第2部	60											
教育学部	420	1,799	644	1,155	4.3	704	383	321	1.7	3.9	1.4	2.9
理学部	120	430	364	66	3.6	419	372	47	3.5	4.0	3.6	2.6
医学部	120	566	523	43	4.7	293	269	24	2.4	4.2	2.3	1.9
歯学部	80	324	282	42	4.1	385	351	34	4.8	—	—	—
薬学部	80	382	158	224	4.8	239	130	109	3.0	4.3	2.6	2.3
工学部	335	1,017	1,015	2	3.0	702	699	3	2.1	2.6	1.9	1.3
農学部	130	292	242	50	2.2	223	196	27	1.7	2.8	2.4	2.6
広島大学	2,485	9,334	7,100	2,234	3.8	5,762	4,691	1,071	2.3	3.4	2.0	2.3
総合科学部	120	540	406	134	4.5	352	258	94	2.9	5.2	2.6	4.0
文学部	150	731	360	371	4.9	474	297	177	3.2	4.4	2.7	2.2
教育学部	295	1,378	901	477	4.7	693	455	238	2.3	3.8	1.9	2.3
学校教育学部	350	1,566	810	756	4.5	614	346	268	1.8	3.0	1.0	2.1
法学部第1部	150	644	599	45	4.3	604	575	29	4.0	4.3	3.8	2.6
◎法学部第2部	90	84	76	8	0.9	119	109	10	1.3	1.0	1.4	2.7
経済学部第1部	150	730	706	24	4.9	501	483	18	3.3	4.5	3.1	2.9
経済学部第2部	90	146	132	14	1.6	145	136	9	1.6	1.6	1.7	2.3
理学部	220	905	791	114	4.1	608	540	68	2.8	3.9	2.6	2.7
医学部	180	741	501	240	4.1	357	255	102	2.0	3.4	1.7	2.3
歯学部	80	321	293	28	4.0	285	254	31	3.6	4.1	3.6	3.1
工学部	500	1,423	1,414	9	2.8	881	874	7	1.8	2.7	1.5	1.7
生物生産学部	110	125	111	14	1.1	129	109	20	1.2	1.5	1.5	1.4
山口大学	1,605	3,892	2,880	1,012	2.4	4,931	3,885	1,046	3.1	2.7	3.3	2.7
人文学部	180	463	245	218	2.6	599	357	242	3.3	2.7	3.4	3.0
教育学部	310	1,117	512	605	3.6	1,230	656	574	4.0	4.0	3.8	3.8
経済学部	355	745	725	20	2.1	857	825	32	2.4	2.5	2.7	2.0
理学部	180	260	220	40	1.4	509	438	71	2.8	1.3	2.8	2.1
医学部	120	332	280	52	2.8	392	349	43	3.3	2.2	3.3	2.8
工学部	350	659	654	5	1.9	1,039	1 033	6	3.0	2.5	3.9	2.7
農学部	110	316	244	72	2.9	305	227	78	2.8	3.1	3.1	1.9

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	人	人	人	人
徳島大学	945	2,991	1,981	1,010	3.2	2,246	1,722	524	2.4	3.9	3.3	3.1
教育学部	250	943	300	643	3.8	403	179	224	1.6	3.7	2.1	2.4
医学部	170	442	353	89	2.6	348	273	75	2.0	4.0	3.3	3.5
歯学部	60	313	292	21	5.2	368	347	21	6.1	6.1	7.2	4.6
薬学部	80	452	208	244	5.7	395	205	190	4.9	7.3	6.1	5.3
工学部	385	841	828	13	2.2	732	718	14	1.9	2.9	2.9	2.7
香川大学	860	1,763	1,156	607	2.1	2,194	1,528	666	2.6	1.7	1.8	2.3
教育学部	290	778	259	519	2.7	867	305	562	3.0	2.6	2.3	2.9
◎経済学部	400	813	756	57	2.0	1,030	956	74	2.6	1.1	1.2	1.6
農学部	170	172	141	31	1.0	297	267	30	1.7	1.5	2.6	2.9
香川医科大学(医)	100	607	546	61	6.1	728	649	79	7.3	—	—	—
愛媛大学	1,500	3,270	2,247	1,023	2.2	3,601	2,939	662	2.4	1.7	1.7	1.9
法文学部(昼)	220	524	373	151	2.4	665	538	127	3.0	1.1	1.2	1.1
○法文学部(夜)	80	31	25	6	0.4	48	44	4	0.6			2.4
教育学部	355	1,170	404	766	3.3	811	424	387	2.3	3.0	1.9	2.4
理学部	165	334	280	54	2.0	461	391	70	2.8	1.7	2.2	2.0
医学部	120	215	190	25	1.8	237	212	25	2.0	1.5	2.0	3.0
工学部	390	756	752	4	1.9	1,049	1,037	12	2.7	1.1	1.6	1.3
農学部	170	240	223	17	1.4	330	293	37	1.9	1.2	1.4	1.9
高知大学	810	1,634	1,114	520	2.0	2,525	1,827	698	3.1	2.5	3.6	3.8
人文学部	210	619	448	171	2.9	755	586	169	3.6	4.5	5.2	4.2
教育学部	250	570	277	293	2.3	885	443	442	3.5	2.1	4.0	5.5
理学部	180	262	216	46	1.5	473	412	61	2.6	1.5	2.6	2.0
農学部	170	183	173	10	1.1	412	386	26	2.4	1.5	2.1	2.6
高地医科大学(医)	100	396	352	44	4.0	496	452	44	5.0	4.0	6.0	3.7
福岡教育大学(教育)	710	3,588	1,897	1,691	5.1	3,030	1,620	1,410	4.3	5.5	5.2	4.4

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
九州大学	2,150	6,891	6,009	882	3.2	3,119	2,761	358	1.5	3.1	1.2	1.8
文学部	140	645	362	283	4.6	235	135	100	1.7	4.1	1.3	2.1
教育学部	40	147	90	57	3.7	90	67	23	2.3	3.7	2.2	2.7
法学部	240	1,108	1,025	83	4.6	499	477	22	2.1	4.0	1.6	1.8
経済学部	240	768	740	28	3.2	357	342	15	1.5	3.6	1.3	2.7
理学部	255	674	583	91	2.6	381	338	43	1.5	2.4	1.3	1.5
医学部	120	766	716	50	6.4	250	232	18	2.1	5.8	1.6	2.1
歯学部	80	334	304	30	4.2	188	160	28	2.4	4.2	2.6	1.7
薬学部	80	287	114	173	3.6	113	59	54	1.4	3.9	1.3	1.9
工学部	720	1,773	1,747	26	2.5	765	750	15	1.1	2.5	0.9	1.5
農学部	235	389	328	61	1.7	241	201	40	1.0	1.6	0.9	1.8
九州芸術工科大学(芸工)	120	567	517	50	4.7	346	331	15	2.9	4.8	2.9	3.3
◎九州工業大学	605	978	956	22	1.6	1,086	1,071	15	1.8	1.4	1.3	1.5
工学部第1部	475	882	860	22	1.9	961	948	13	2.0	1.5	1.4	1.4
工学部第2部	130	96	96	0	0.7	125	123	2	1.0	0.8	1.1	1.9
佐賀大学	965	2,145	1,610	535	2.2	3,394	2,563	831	3.5	2.7	3.7	3.6
教育学部	240	895	422	473	3.7	1,512	793	719	6.3	3.3	4.8	4.0
経済学部	230	505	486	19	2.2	650	619	31	2.8	4.2	4.5	3.1
理工学部	350	574	552	22	1.6	935	890	45	2.7	1.9	2.9	3.2
農学部	145	171	150	21	1.2	297	261	36	2.0	2.2	2.8	4.3
佐賀医科大学(医)	100	641	536	105	6.4	684	590	94	6.8	6.4	7.4	3.6
長崎大学	1,365	4,397	3,160	1,237	3.2	3,299	2,624	675	2.4	2.6	1.5	1.8
教育学部	370	1,413	663	750	3.8	824	466	358	2.2	2.1	0.9	1.7
経済学部	285	784	738	46	2.8	615	579	36	2.2	1.7	1.0	1.1
医学部	120	411	375	36	3.4	173	161	12	1.4	3.2	1.2	2.7
歯学部	80	239	206	33	3.0	374	338	36	4.7	—	—	—
薬学部	80	670	310	360	8.4	415	208	207	5.2	9.5	6.3	5.6
工学部	320	635	629	6	2.0	584	576	8	1.8	2.0	1.6	1.4
水産学部	110	245	239	6	2.2	314	296	18	2.9	1.8	1.3	1.9

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
熊本大学	1,610	5,154	3,942	1,212	3.2	3,193	2,678	515	2.0	3.3	2.1	2.2
文学部	160	709	427	282	4.4	414	265	149	2.6	6.4	4.2	2.0
教育学部	390	1,250	688	562	3.2	493	324	169	1.3	2.6	1.0	2.0
法学部	240	1,066	994	72	4.4	751	699	52	3.1	6.4	4.2	3.6
理学部	120	303	267	36	2.5	257	231	26	2.1	3.1	2.1	2.0
医学部	120	503	466	37	4.2	295	273	22	2.5	4.2	2.4	2.9
薬学部	90	326	126	200	3.6	175	95	80	1.9	2.7	1.7	2.3
工学部	490	997	974	23	2.0	808	791	17	1.6	2.1	1.8	1.7
大分大学	880	2,074	1,436	638	2.4	2,016	1,635	381	2.3	2.3	2.6	2.5
教育学部	290	1,021	421	600	3.5	784	448	336	2.7	2.6	1.8	2.6
経済学部	310	539	504	35	1.7	532	496	36	1.7	1.4	1.4	1.3
工学部	280	514	511	3	1.8	700	691	9	2.5	2.9	4.9	3.8
大分医科大学(医)	100	270	233	37	2.7	369	334	35	3.7	2.8	4.4	4.4
宮崎大学	755	1,876	1,237	639	2.5	2,000	1,555	445	2.6	2.1	2.2	2.1
教育学部	280	887	339	548	3.2	732	399	333	2.6	2.2	1.6	2.4
工学部	210	344	340	4	1.6	551	546	5	2.6	2.3	3.3	2.6
農学部	265	645	558	87	2.4	717	610	107	2.7	1.9	2.0	1.5
宮崎医科大学(医)	100	203	184	19	2.0	323	299	24	3.2	1.7	2.9	3.0
鹿児島大学	1,785	5,025	4,071	954	2.8	5,133	4,297	836	2.9	2.8	3.2	2.6
法文学部	330	1,036	824	212	3.1	1,119	912	207	3.4	3.3	3.9	1.6
教育学部	360	1,105	604	501	3.1	1,031	633	398	2.9	3.1	3.1	4.2
理学部	165	473	398	75	2.9	491	417	74	3.0	3.1	3.3	3.0
医学部	120	415	378	37	3.5	351	336	15	2.9	2.3	2.0	2.1
歯学部	80	209	187	22	2.6	267	251	16	3.3	3.5	5.6	4.1
工学部	355	1,002	987	15	2.8	900	877	23	2.5	1.7	1.9	1.2
農学部	235	557	473	84	2.4	594	502	92	2.5	3.3	3.4	2.6
水産学部	140	228	220	8	1.6	380	369	11	2.7	2.7	4.3	3.8

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
琉球大学	1,060	4,763	3,368	1,395	4.5	4,332	3,477	855	4.1	4.7	4.4	4.3
法文学部	290	1,799	1,285	514	6.2	1,017	799	218	3.5	7.2	4.2	5.5
教育学部	220	1,138	515	623	5.2	1,470	1,015	455	6.7	4.2	6.1	4.8
理学部	160	538	470	68	3.4	518	463	55	3.2	3.8	3.1	2.9
保健学部	60	250	85	165	4.2	210	127	83	3.5	3.9	3.6	3.4
工学部	200	747	745	2	3.7	578	575	3	2.9	3.8	3.1	3.5
農学部	130	291	268	23	2.2	539	498	41	4.1	2.9	5.4	3.6
公立大学合計	10,005	41,555	29,728	11,827	4.2	56,831	40,870	15,961	5.7	4.7	6.9	7.0 (7.1) 〔5.0〕
札幌医科大学(医)	100	503	458	45	5.0	522	479	43	5.2	6.3	6.4	4.8
福島県立医科大学(医)	80	425	363	62	5.3	416	369	47	5.2	5.3	7.1	5.9
*高崎経済大学(経済)	400	427	386	41	1.1	1,945	1,791	154	4.9	1.0	5.1	6.2
東京都立大学	765	7,773	6,471	1,302	10.2	8,464	7,254	1,210	11.1	12.3	14.8	7.5
人文学部1部	80	1,534	803	731	19.2	1,356	749	607	17.0	21.4	22.3	8.0
人文学部2部	25	136	99	37	5.4	199	133	66	8.0	5.9	9.6	10.2
法学部1部	100	1,711	1,524	187	17.1	1,769	1,594	175	17.7	20.2	22.2	10.3
法学部2部	30	148	135	13	4.9	192	168	24	6.4	6.3	8.1	8.2
経済学部1部	110	1,245	1,156	89	11.3	1,203	1,142	61	10.9	15.7	16.9	9.0
経済学部2部	20	77	70	7	3.9	161	157	4	8.1	4.6	12.6	6.2
理学部1部	111	1,043	850	193	9.4	1,139	947	192	10.3	10.9	13.9	7.1
理学部2部	39	130	116	14	3.3	151	128	23	3.9	3.7	5.2	5.6
工学部1部	200	1,633	1,603	30	8.2	2,070	2,014	56	10.4	10.0	13.6	6.3
工学部2部	50	116	115	1	2.3	224	222	2	4.5	3.1	5.0	4.1
横浜市立大学	420	3,299	2,580	719	7.9	4,449	3,589	860	10.6	6.9	9.8	6.1
文理学部	160	1,472	956	516	9.2	2,177	1,477	700	13.6	8.2	14.1	7.9
商学部	200	1,158	1,084	74	5.8	1,633	1,554	79	8.2	3.3	5.3	4.1
医学部	60	669	540	129	11.2	639	558	81	10.7	15.2	13.7	7.7
金沢美術工芸大学(美工)	130	493	285	208	3.8	661	381	280	5.1	4.0	6.5	4.4
*都留文科大学(文)	400	333	169	164	0.8	2,588	1,275	1,313	6.5	0.7	5.7	12.7

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
*岐阜薬科大学(薬)	120	180	87	93	1.5	645	314	331	5.4	1.4	5.8	*16.6
静岡女子大学	140	269	0	269	1.9	673	0	673	4.8	2.6	6.1	4.1
文学部	80	185	0	185	2.3	491	0	491	6.1	3.1	8.0	5.2
家政学部	60	84	0	84	1.4	182	0	182	3.0	2.0	3.5	2.7
*静岡薬科大学(薬)	120	448	183	265	3.7	1,061	531	530	8.8	6.1	15.6	*35.6
愛知県立大学	360	1,407	540	867	3.9	1,936	766	1,170	5.4	4.0	5.3	3.4
文学部	160	820	219	601	5.1	1,195	355	840	7.5	5.2	7.2	3.5
外国語学部	120	519	268	251	4.3	651	350	301	5.4	4.5	5.5	3.8
外国語学部第2部	80	68	53	15	0.9	90	61	29	1.1	1.0	1.2	2.6
愛知県立芸術大学	150	766	361	405	5.1	1,642	1,045	597	10.9	5.9	9.8	7.4
美術学部	80	568	336	232	7.1	1,476	993	483	18.5	8.7	15.7	11.5
*音楽学部	70	198	25	173	2.8	166	52	114	2.4	2.8	2.9	2.7
名古屋市立大学	380	1,587	1,202	385	4.2	1,472	1,204	268	3.9	3.6	3.5	2.7
経済学部	200	764	703	61	3.8	748	688	60	3.7	3.2	3.6	2.8
医学部	80	403	338	65	5.0	485	409	76	6.1	3.8	4.3	2.2
薬学部	100	420	161	259	4.2	239	107	132	2.4	4.5	2.7	2.9
京都市立芸術大学	185	1,401	631	770	7.6	1,040	609	431	5.6	8.0	6.5	6.5
美術学部	125	1,141	555	586	9.1	858	534	324	6.9	9.4	7.8	7.7
音楽学部	60	260	76	184	4.3	182	75	107	3.0	4.9	3.8	4.0
京都府立大学	240	1,181	689	497	4.9	1,407	864	543	5.9	7.1	8.9	4.8
文学部	90	671	337	342	7.5	875	494	381	9.7	11.2	14.6	7.5
生活科学部	40	140	36	104	3.5	156		110	3.9	5.1	5.9	3.6
農学部	110	367	316	51	3.3	376	324	52	3.4	4.4	5.3	3.0
京都府立医科大学(医)	100	830	716	114	8.3	678	616	62	6.8	11.2	10.3	3.8
大阪女子大学(学芸)	160	468	0	468	2.9	749	0	749	4.7	3.5	5.7	5.5

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 第3志望
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
大阪市立大学	1,335	7,934	6,557	1,377	5.9	7,457	6,339	1,118	5.6	7.0	6.8	5.3
文学部1部	120	1,267	634	633	10.6	964	515	449	8.0	14.1	11.8	9.6
文学部2部	40	110	79	31	2.8	165	113	52	4.1	3.9	5.8	6.2
法学部1部	150	1,922	1,764	158	12.8	1,495	1,378	117	10.0	14.8	12.7	8.3
法学部2部	60	164	145	19	2.7	195	186	9	3.3	2.7	4.0	5.7
経済学部1部	170	1,024	985	39	6.0	1,042	999	43	6.1	5.9	6.6	3.0
経済学部2部	60	93	93	0	1.6	166	163	3	2.8	1.8	2.7	1.6
商学部1部	170	501	463	38	2.9	506	485	21	3.0	3.4	3.4	4.6
商学部2部	60	54	52	2	0.9	84	80	4	1.4	1.1	2.0	2.0
理学部	100	516	443	73	5.2	545	471	74	5.5	6.1	7.7	4.3
医学部	80	432	363	69	5.4	486	434	52	6.1	6.5	7.0	6.4
生活科学部	110	345	52	293	3.1	308	33	275	2.8	3.7	2.8	2.7
工学部	250	1,506	1,484	22	7.0	1,501	1,482	19	7.0	8.2	7.9	5.9
大阪府立大学	910	3,116	2,831	285	3.4	5,305	4,962	343	5.8	3.3	7.2	*11.9 〔3.2〕
総合科学部	60	336	234	102	5.6	560	405	155	9.3	4.0	8.1	5.8
経済学部	250	1,068	1,036	32	4.3	1,582	1,515	67	6.3	4.4	7.1	2.9
*工学部	435	1,118	1,107	11	2.6	2,673	2,634	39	6.1	2.7	8.8	*21.4
農学部	165	594	454	140	3.6	490	408	82	3.0	3.1	2.6	2.7
神戸市外国語大学	360	1,604	734	870	4.5	1,651	916	735	4.6	4.8	4.9	5.0
外国語学部第1部	240	1,516	675	841	6.3	1,493	805	688	6.2	6.8	6.5	6.4
外国語学部第2部	120	88	59	29	0.7	158	111	47	1.3	0.8	1.6	2.1
神戸商科大学(商経)	430	867	799	68	2.0	1,096	1,047	49	2.5	2.6	3.8	4.7
姫路工業大学(工)	300	828	825	3	2.8	1,149	1,139	10	3.8	2.9	4.7	3.5
奈良県立医科大学(医)	100	481	399	82	4.8	625	523	102	6.3	8.4	10.1	8.6
和歌山県立医科大学(医)	60	316	268	48	5.3	355	298	57	5.9	9.1	9.9	8.8
広島女子大学	230	529	0	529	2.3	826	0	826	3.6	2.8	3.8	4.0
文学部	90	247	0	247	2.7	394	0	394	4.4	3.4	5.0	4.4
家政学部	140	282	0	282	2.0	432	0	432	3.1	2.4	3.0	3.7
*下関市立大学(経済)	200	112	105	7	0.6	683	639	44	3.4	0.7	6.0	*11.3

大学・学部等名	55年度入学定員	第1志望 計	第1志望 男	第1志望 女	第1志望 倍率	第2志望 計	第2志望 男	第2志望 女	第2志望 倍率	54年度倍率 第1志望	54年度倍率 第2志望	54年度倍率 2次試験
	人	人	人	人	倍	人	人	人	倍	倍	倍	倍
山口女子大学	160	186	0	186	1.2	531	0	531	3.3	0.8	6.5	*11.5
文学部	80	92	0	92	1.2	359	0	359	4.5	0.8	9.2	*17.4
家政学部	80	94	0	94	1.2	172	0	172	2.2	0.8	3.8	* 5.6
高知女子大学	160	393	0	393	2.5	820	0	820	5.1	3.1	6.3	6.6
文学部	80	182	0	182	2.3	522	0	522	6.5	2.8	7.8	8.1
家政学部	80	211	0	211	2.6	298	0	298	3.7	3.3	4.8	5.1
北九州大学	840	2,127	1,567	560	2.5	3,506	2,680	826	4.2	2.6	4.2	4.0
文学部	160	452	202	250	2.8	813	377	436	5.1	2.8	4.8	5.2
外国語学部第1部	120	494	278	216	4.1	669	397	272	5.6	3.6	4.5	3.7
◎外国語学部第2部	120	58	46	12	0.5	87	76	11	0.7	0.5	0.6	1.1
法学部	140	395	366	29	2.8	813	762	51	5.8	3.7	8.1	6.5
商学部	300	728	675	53	2.4	1,124	1,068	56	3.7	2.4	3.4	3.4
九州歯科大学(歯)	120	454	388	66	3.8	517	463	54	4.3	6.9	6.5	7.8
福岡女子大学	150	330	0	330	2.2	437	0	437	2.9	2.1	2.7	2.3
文学部	90	242	0	242	2.7	309	0	309	3.4	2.6	3.3	2.7
家政学部	60	88	0	88	1.5	128	0	128	2.1	1.3	1.8	1.7
*長崎県立国際経済大学(経済)	200	141	134	7	0.7	843	777	66	4.2	1.3	7.2	*15.5
熊本女子大学												
文学部	200	342	0	342	1.7	682	0	682	3.4	2.5	5.7	6.3
生活科学部	120											
未記入		0				51,812	31,520	20,292				

(注) 1 「国立大学の55年度入学定員」は、国立学校設置法の改正により、昭和55年度から学生を入学させる福井医科大学、山梨医科大学、香川医科大学及び図書館情報大学の入学定員、岡山大学及び長崎大学の歯学部の入学定員を54年度定員に加えたもの。

2 ◎印は、入学定員の一部を留保して第2次募集を行う大学・学部を示す。

3 ○印は、主として夜間に授業を行うコースを示す。

4 「54年度倍率の2次試験」は、当初募集の志願倍率で（志願者数／入学定員）、カッコ内は第2次募集を含む志願倍率を示す。

5 公立大学の＊印は、国立大学と試験期日の異なる大学・学部を示す。

6 公立大学の「54年度倍率の2次試験」において、＊印は国立大学と試験期日の異なる大学・学部の志願倍率、〔 〕は国立大学と同一試験期日の大学・学部（大阪府立大学は、工学部を除く全学部）の当初募集の志願倍率を示す。

12. 昭和55年度国公立大学の入学者選抜実施状況

1．共通第１次学力試験

志願者数、受験者数等

区　分	55年度入学定員	入学志願者数（第１志望）	倍　率	受験者数	欠席者数	欠席率
	人	人	倍	人	人	%
国立大学	(82,926)	(294,962)	(3.6)	—	—	—
	84,501	308,011	3.6			
公立大学	(9,898)	(46,912)	(4.7)	—	—	—
	10,005	41,555	4.2			
計	(92,824)	(341,875)	(3.7)	(327,427)	(14,448)	(4.2)
	94,506	349,566	3.7	333,212	16,354	4.7

（注）１．（ ）は前年度である。(以下、各表において同じ。)
２．前年度の入学志願者数（第１志望）のうち、１人は志望大学が不明。

2．第２次試験

(1) 実施方法の概要

区　分	学力検査科目数	推薦入学				学力検査を課さない		実技検査を課す		面接を課す		小論文を課す	
		共通一次を課す		共通一次をも免除									
	科目	大学	学部	大学	学部	大学	学部	大学	学部	大学	学部	大学	学部
国立大学	(2.9)	(46)	(75)	(21)	(29)	(44)	(66)	(52)	(56)	(27)	(33)	(48)	(77)
	2.8	49	81	24	33	44	67	52	56	31	44	54	90
公立大学	(2.4)	(6)	(8)	(5)	(6)	(10)	(13)	(4)	(6)	(10)	(11)	(17)	(22)
	2.5	9	11	5	6	10	13	4	6	9	10	18	23

(2) 志願者数、受験者数、合格者数等

区　分	入学定員	入学志願者数	倍　率	受験者数	合格者数	入学者数
	人	人	倍	人	人	人
国立大学	(82,926)	(270,394)	(3.3)	(254,605)	(88,301)	(82,448)
	84,501	254,424	3.0	240,261	91,359	84,561
公立大学	(9,898)	(69,862)	(7.1)	(50,418)	(13,345)	(10,673)
	10,005	63,800	6.4	52,922	14,464	10,776
計	(92,824)	(340,256)	(3.7)	(305,023)	(101,646)	(93,121)
	94,506	318,224	3.4	293,183	105,823	95,337

（注）１．第２次募集及び推薦入学によるものを含む。
２．東京外国語大学外国語学部日本語学科及び新設の群馬県立女子大学を除く。
３．受験者数は第２次試験のすべてを受験した者の数である。

（備考）　２段階選抜

区　分	実施予告大学数	実施予告学部数	実施大学数	実施学部数	入学定員	入学志願者数	倍　率	第１段階選抜合格者数
	大学	学部	大学	学部	人	人	倍	人
国立大学	(38)	(112)	(12)	(28)	(4,241)	(15,684)	(3.7)	(12,734)
	34	96	11	27	6,609	24,337	3.7	19,464
公立大学	(14)	(26)	(7)	(12)	(1,445)	(22,532)	(15.6)	(12,534)
	14	23	6	6	1,080	11,872	11.0	10,304
計	(52)	(138)	(19)	(40)	5,686)	(38,216)	(6.7)	(25,268)
	48	119	17	33	7,689	36,209	4.7	29,768

(3) 第２次募集

区　分		実施大学数	実施学部数	募集人員	入学志願者数	受験者数	合格者数
		校	学部	人	人	人	人
国立大学	定員留保	(4)	(5)	(約　264)	(3,846)	(3,715)	(382)
		12	13	約　738	7,100	6,664	1,100
	欠員補充	(11)	(16)	(約　759)	(14,711)	(13,884)	(1,075)
		7	7	約　114	1,851	1,767	184
	計	(15)	(21)	(約 1,023)	(18,557)	(17,599)	(1,457)
		18	20	約　852	8,951	8,431	1,284
公立大学	定員留保	(—)	(—)	(————)	(————)	(————)	(————)
		1	1	60	153	139	71
	欠員補充	(1)	(1)	(　26)	(　121)	(　113)	(　44)
		1	1	————	209	188	7
	計	(1)	(1)	(　26)	(　121)	(　113)	(　44)
		2	2	60	362	327	78
計	定員留保	(4)	(5)	(約　264)	(3,846)	(3,715)	(382)
		13	14	総　798	7,253	6,803	1,171
	欠員補充	(12)	(17)	(約　785)	(14,832)	(13,997)	(1,119)
		8	8	約　114	2,060	1,955	191
	計	(16)	(22)	(約 1,049)	(18,678)	(17,712)	(1,501)
		20	22	約　912	9,313	8,758	1,362

（注）１．実施大学数のうち１校は、「定員留保」と「欠員補充」との両方に重複して数えてある。
２．募集人員を若干名としているものについては、募集人員欄では除いて算出した。

(4) 推薦入学

区分		55年度 実施大学数	55年度 実施学部数	55年度 入学志願者数	55年度 合格者数	54年度 実施大学数	54年度 実施学部数	54年度 入学志願者数	54年度 合格者数
		校	学部	人	人	校	学部	人	人
国立大学	共通第1次を課す	38	51	1,083	534	37	47	1,168	475
	共通第1次をも免除	〔13〕 11	〔 3〕 30	3,909	1,076	〔12〕 9	〔 1〕 28	3,772	979
	計	49	81	4,992	1,610	46	75	4,940	1,454
公立大学	共通第1次を課す	4	5	174	92	1	2	58	35
	共通第1次をも免除	5	6	1,327	319	5	6	1,337	305
	計	9	11	1,501	411	6	8	1,395	340
計	共通第1次を課す	42	56	1,257	626	38	49	1,226	510
	共通第1次をも免除	〔13〕 16	〔 3〕 36	5,236	1,395	〔12〕 14	〔 1〕 34	5,109	1,284
	計	58	92	6,493	2,021	52	83	6,335	1,794

（注） 実施大学数、実施学部数欄の〔 〕は、「共通第1次を課す」と重複しているもので外数である。

大学入試センター年報　（昭和54年度）

発 行 日　　昭和55年11月

発　　行　　大学入試センター

（〒153）　東京都目黒区駒場２―19―１

電　話　03（465）３９４６―９